

2022シラバス 多摩大学 経営情報学部

現代の志塾

多摩大学は「今を生きる時代についての認識を深め、課題解決能力を高める」ため、教育理念を「現代の志塾」と定め、教育・研究・社会貢献の全分野の共通理念としています。「現代の志塾」とは「アジアユーラシアダイナミズム」の「現代」、社会の不条理の解決のために自らの職業や仕事を通じて貢献をする「志」、人間的な触れ合いによる少人数制ゼミを中心とした「手作り教育」の「塾」を意味しています。実社会の問題解決の最前線に立つ「志」人材の育成に尽力するため、個性と特色にあふれた「ゼミ力の多摩大」を形成しています。

学年暦

・補講は原則土曜日に実施します。

	日	月	火	水	木	金	土
3 ・ 4 月	20	21	22	23	24	25	26
		春分の日					
	27	28	29	30	31	1	2
						オリエン テーションⅠ	
	3	4	5	6	7	8	9
		オリエン テーションⅡ	入学式	オリエン テーションⅢ	①		①
	10	11	12	13	14	15	16
		①	①	①	②	①	②
	17	18	19	20	21	22	23
		②	②	②	③	②	③
24	25	26	27	28	29	30	
	③	③	③	④	③ 昭和の日		

	日	月	火	水	木	金	土
5 月	1	2	3	4	5	6	7
			憲法記念日	みどりの日	こどもの日	④	④
	8	9	10	11	12	13	14
		④	④	④	⑤	⑤	⑤
	15	16	17	18	19	20	21
		⑤	⑤	⑤	⑥	⑥	⑥
	22	23	24	25	26	27	28
	⑥	⑥	⑥	⑦	⑦	⑦	

	日	月	火	水	木	金	土
6 月	5月29日	5月30日	5月31日	1	2	3	4
		⑦	⑦	⑦	⑧	⑧	⑧
	5	6	7	8	9	10	11
		⑧	⑧	⑧	⑨	⑨	⑨
	12	13	14	15	16	17	18
		⑨	⑨	⑨	⑩	⑩	⑩
	19	20	21	22	23	24	25
		⑩	⑩	⑩	⑪	⑪	⑪
26	27	28	29	30			
	⑪	⑪	⑪	⑫			

	日	月	火	水	木	金	土
7月						1	2
						⑫	⑫
	3	4	5	6	7	8	9
		⑫	⑫	⑫	⑬	⑬	⑬
	10	11	12	13	14	15	16
		⑬	⑬	⑬	⑭	⑭	⑭
	17	18	19	20	21	22	23
		⑭海の日	⑭	⑭	⑮	⑮	⑮
24	25	26	27	28	29	30	
	⑮	⑮	⑮	定期試験 I	定期試験 II		

	日	月	火	水	木	金	土
8月	7月31日	1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
					山の日		
	14	15	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31				

	日	月	火	水	木	金	土
9月					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
		敬老の日			①	①秋分の日	①
25	26	27	28	29	30		
	①	①	①	②	②		

	日	月	火	水	木	金	土
10月							1
							②
	2	3	4	5	6	7	8
		②	②	②	③	③	③
	9	10	11	12	13	14	15
		③スポーツの日	③	③	④	④	④
	16	17	18	19	20	21	22
		④	④	④	⑤	⑤	⑤
23	24	25	26	27	28	29	
	⑤	⑤	⑤	⑥	⑥	⑥	

	日	月	火	水	木	金	土
11月	10月30日	10月31日	1	2	3	4	5
		⑥	⑥	⑥	文化の日	⑦	⑦
	6	7	8	9	10	11	12
		⑦	⑦	⑦	⑦	多摩祭準備	多摩祭
	13	14	15	16	17	18	19
	多摩祭	多摩祭片付け	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	20	21	22	23	24	25	26
		⑧	⑨	⑨勤労感謝の日	⑨	⑨	⑨
27	28	29	30				
	⑨	⑩	⑩				

	日	月	火	水	木	金	土
12月					1	2	3
					⑩	⑩	⑩
	4	5	6	7	8	9	10
		⑩	⑪	⑪	⑪	⑪	AL祭
	11	12	13	14	15	16	17
		⑪	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫
	18	19	20	21	22	23	24
		⑫	⑬	⑬	⑬	⑬	⑬
25	26	27	28	29	30	31	
	⑬						

	日	月	火	水	木	金	土
1月	1	2	3	4	5	6	7
	元旦	振替休日				⑭	⑭
	8	9	10	11	12	13	14
		成人の日	⑭	⑭	⑭	大学入学 共通テスト準備	大学入学 共通テスト
	15	16	17	18	19	20	21
	大学入学 共通テスト	⑭	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮
	22	23	24	25	26	27	28
		⑮	定期試験Ⅰ	定期試験Ⅱ			
	29	30	31				

	日	月	火	水	木	金	土
2月				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
				2月集中講義①	2月集中講義②	2月集中講義③	建国記念の日
	12	13	14	15	16	17	18
			2月集中講義④	2月集中講義⑤	2月集中講義⑥	2月集中講義⑦	
	19	20	21	22	23	24	25
		2月集中講義⑧	2月集中講義⑨		天皇誕生日		
	26	27	28				

	日	月	火	水	木	金	土
3月				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
			春分の日 卒業のつどい				

Contents

1. 基本理念	1
2. 経営情報学部ディプロマポリシー・経営情報学科ディプロマポリシー・事業構想学科ディプロマポリシー	2
3. 経営情報学部カリキュラムポリシー・経営情報学科カリキュラムポリシー・事業構想学科カリキュラムポリシー	4
4. 学生生活	6
5. 授業	7
6. 初年次教育科目の指定について	9
7. 履修登録・確認・削除	10
8. 学期末試験	12
9. 成績	15
10. 学科選択	18
11. 進級・卒業要件、履修上限、認定科目	19
12. 教職課程	22
13. オフィスアワー制度について	26
14. 授業評価アンケート(VOICE)について	27
15. 単位互換科目について	27
16. アセスメント	28
17. TOEIC 試験補助について	28
18. 多摩大学学則(抜粋)	29
19. 多摩大学学生懲戒規程(抜粋)	36
20. 多摩大学履修規程(抜粋)	38
21. 多摩大学経営情報学部履修細則	39
22. 多摩大学早期卒業規程(抜粋)	43
23. 多摩大学経営情報学部早期卒業細則(抜粋)	44
24. 多摩大学成績評価規程(抜粋)	45
25. 多摩大学奨学金規程(抜粋)	46
26. 前提科目一覧	48
27. カリキュラム表(科目一覧)・カリキュラムマップ・カリキュラムマトリックス	49
28. 2022年度 経営情報学部 実務経験のある教員等による授業科目一覧	60
29. シラバス	63

1. 基本理念

多摩大学の設立母体である学校法人田村学園建学の精神である「質実清楚・明朗進取・感謝奉仕」を礎とした本学の基本理念は「国際性・学際性・実際性」の3つのキーワードで表現されます。

<国際性>

グローバル社会の一員として、積極的な役割を果たす人材を育成する。

<学際性>

行き過ぎた専門化の弊害を是正するため、学際的な研究・教育への取組みを重視する。

<実際性>

大学に対する「象牙の塔」批判を克服すべく、「社会に通用する大学」を標榜する。

2. 経営情報学部ディプロマポリシー・経営情報学科ディプロマポリシー・事業構想学科ディプロマポリシー

【経営情報学部 ディプロマポリシー】

1 育成する人材

本学は「現代の志塾」を教育理念とし、グローバル化、情報化社会の進展に即応して、世界の中で大きな役割を担うことで日本の将来を背負うという自覚に基づいた強い実行力と、それぞれの地域社会の可能性に対しての広い視野を持ち、自らを厳しく律することができる高い倫理観を備えた「志」の高い「多摩グローバル人材(多摩のローカリティを究めることにより、グローバルに目を開く“グローバルティ”という思想を持つ、多摩地域の活性化をリードするグローバル人材)」を育成する。

経営情報学部では、「多摩グローバル人材」の具体像として、企業経営、情報科学に関する学術と応用を教育研究し、高度の経営情報知識と、これを支える豊かな教養とを合わせ備えた創造的、実践的な問題解決能力を有する人材を育成する。

2 学位授与方針

経営情報学部の教育課程においては、以下の学修成果目標を達成し「志」を実現できる力すなわち「学士力」を備え、学則に定める単位数などの卒業要件を満たした者に卒業を認定し、学位を授与する。

(学修成果目標)

(1) 知識と理解【グローバル社会に対する理解】

基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

(2) 思考と判断【考え抜く力】

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

(3) 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】

物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって周囲の人を動かしていける巻き込み力、失敗を恐れずに粘り強く行動していける実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようになる。

(4) 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】

自分の意思をわかりやすく伝えることができる発信力や、聞き上手になって積極的に相手の意見を受け止められるようになる傾聴力、組織の中で自分がどのような役割を果たすべきなのかが理解できる状況把握力や協調性を身につけることで、コミュニケーション能力を高め、所属する組織や社会の活動に貢献できるようになる。

(5) 高い志【環境対応能力と先進性】

社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができる多様性や、社会のルールや約束を守ることができる規律性を身につけ、社会の発展に積極的に関与していくという高い志を確立する。

【経営情報学科 ディプロマポリシー】

1 育成する人材

経営情報学科では、「多摩グローバル人材」の具体像として、情報科学に関する学術と応用を教育研究し、高度の経営情報知識と、これを支える豊かな教養とを合わせ備えた創造的、実践的な問題解決能力を有する人材を育成する。

2 学位授与方針

経営情報学科では、以下の能力を身に付け、「志」を実現できる力すなわち「学士力」を備え、学則に定める単位数などの卒業要件を満たした者に卒業を認定し、学位を授与する。

- (1) 情報技術を活用し、専門知識を生かして課題を発見し解決できる能力
- (2) 複雑で多様な情報を効率的に収集・処理し、分析の結果から課題を解決できる能力
- (3) 経営学の考え方や概念および専門的知識を理解し説明する能力
- (4) 高いレベルのコミュニケーション能力を身につけ、国内外のビジネスの場で発言できる能力

【事業構想学科 ディプロマポリシー】

1 育成する人材

事業構想学科では、「多摩グローバル人材」の具体像として、企業経営に関する学術と応用を教育研究し、高度の経営情報知識と、これを支える豊かな教養とを合わせ備えた創造的、実践的な問題解決能力を有する人材を育成する。

2 学位授与方針

事業構想学科では、以下の能力を身に付け、「志」を実現できる力すなわち「学士力」を備え、学則に定める単位数などの卒業要件を満たした者に卒業を認定し、学位を授与する。

- (1) グローバルとローカルという2つの地域的視点で組織のマネジメントができる能力
- (2) 社会科学を基軸とした幅広い教養を深めるとともに、経済学の知識で社会の発展に貢献できる能力
- (3) 経営学の考え方や概念および専門的知識を理解し説明する能力
- (4) 高いレベルのコミュニケーション能力を身につけ、国内外のビジネスの場で発言できる能力

3.経営情報学部カリキュラムポリシー・経営情報学科カリキュラムポリシー・事業構想学科カリキュラムポリシー

【経営情報学部 カリキュラムポリシー】

経営情報学部では、「志」の高い「多摩グローバル人材」を育成するため、ディプロマポリシーで掲げた5つの学修成果目標を以下の2つの柱で構成されたカリキュラムに反映させて、学生自身が各自の「志」を実現できる「学士力」を身につけ、人間的成長を促すための教育を体系化された教育課程で実現する。

講義の成績は、一般講義科目に関してはシラバスに記載された到達目標への達成度により絶対評価で評価する。ゼミなどの演習科目に関しては、ディプロマポリシーで掲げた5つの学修成果目標を評価の視点として、ゼミ活動によりどれだけ成長できたのかを総合的に判断し評価する。

(1)ゼミ中心教育カリキュラム

双方向型少人数教育をゼミの形でを行い、産業社会や地域社会の中で直面する問題を探り上げ、それらを分析し解決策を提案・実施する活動を通じて、問題解決の実践力を養う実学教育プログラムを展開する。

まず入学直後の1年次には、「プレゼミ」を履修する。「プレゼミ」は、今後のキャリア形成を見据えて自らの「志」を確立することと、ゼミ活動を通じて主体的学びの態度を習得することで、自らが学修計画を立てる大学での学びへのソフトランディングを図ることを目的としている。

2年次から4年次までの3年間は、担当教員の指導の下、特定の専門分野を深掘りするための演習を行う「ホームゼミ」を履修し、問題解決能力に磨きをかけると共に、社会に対する関心を広げ、グループワークを通じてコミュニケーション能力を高める。

「プレゼミ」と「ホームゼミ」により、卒業まで連続した4年間ゼミを実施する。

(2)実践的知識獲得のための講義カリキュラム

問題の分析・解決策提案・実践に必要な考え方や知識を幅広く学ぶため、学際性、国際性、実際性を考慮した科目群を配置する。講義内容は、知識断片の記憶を排し、どのような手法や知識がどのような問題解決に役立つかを中心に教える実学教育プログラムを展開する。

経営情報学部のカリキュラムは、豊かな人格形成の基礎となる教養と産業社会に関する基礎的な理解を得ることを目的とする「産業社会科目群」と、特定の専門領域に関する問題を探求する「問題解決学科科目群」によって構成している。

1年次の段階では、基礎的な知識の習得と自らの可能性と向き合って将来の方向性を発見し「志」を固めていくことを目標に「産業社会科目群」を中心に履修し、2年次以降に所属する学科とホームゼミの選択を通じて、集中的に学んでいく専門領域を確定させる。

2年次からは、「経営情報学科」と「事業構想学科」に分かれ、それぞれの学科の「問題解決学科科目群」の科目を中心に、ホームゼミ担当教員の指導の下、体系的に専門教育を実施する。

また、「多摩グローバル人材」となるためには、実体験に基づく実社会に対する深い理解が重要なことから、一般講義科目のほか、インターンシップなどのキャリア教育科目、および課外活動や留学などの特別教育プログラムを幅広く実施する。特別教育プログラムでの学修成果については、国内のものは「アクティブラーニング実践」で、海外のものは「Study Abroad」で単位の認定を行う。

【経営情報学科 カリキュラムポリシー】

経営情報学科では、必修科目である経営情報論を中心に、「情報デザイン」「データサイエンス」科目群の選択必修科目を履修することで、情報技術や情報処理の知識や技術を学び、実践的な活用能力を身に付ける。また、学部共通として、経営理論、経営管理、マーケティング、会計、キャリアデザイン、コミュニケーションスキルに関する科目を設置している。さらに、学生の問題意識や興味に合わせて、選択科目として「グローバル」「ローカル」に関する科目群を設置している。

【事業構想学科 カリキュラムポリシー】

事業構想学科では、必修科目である事業構想論を中心に、「グローバル」「ローカル」科目群の選択必修科目を履修することで、組織マネジメント、国際経済や国際ビジネス、地域経済や地域ビジネスについて学び、事業を構想する力(創造的問題解決力)を身に付ける。また、学部共通として、経営理論、経営管理、マーケティング、会計、キャリアデザイン、コミュニケーションスキルに関する科目を設置している。さらに、学生の問題意識や興味に合わせて、選択科目として「情報デザイン」「データサイエンス」に関する科目群を設置している。

<学科教育の特徴>

- (1) 1年次に「教養基礎科目」「専門基礎科目」を履修することで、学部学科の基礎知識を習得した上で、2年次から学科に所属する。
- (2) 学科間の垣根は低く、他学科の科目を履修できるなど、ゆるやかな学科制を採用することで、複眼的思考に優れた人材の育成を図る。
- (3) 2年次より「専門コア科目」を履修することで、学科の専門知識を中心に学ぶ。
- (4) 学生が自身の問題意識や興味に合わせて、自主的に学びを深められるよう、「特別選択科目」科目群を設置している。

4. 学生生活

(1) 学生証

学生証は本学学生の身分を証明する重要なものです。請求のあったときにはいつでも提示できるよう、常に携帯してください。

《提示が必要なとき》

- ・授業で出席登録を行うとき
- ・通学定期を購入するとき
- ・多摩大学所定の学期末試験を受けるとき
- ・各種証明書の発行を受けるとき
- ・学割証の発行を受けるとき
- ・その他、本学教職員から請求があったとき

《学生証に関する注意》

- ・他人に貸与又は譲渡してはいけません。
- ・紛失や盗難にあった場合は、直ちに学生課に届け出て、再発行(有料)の申請をするとともに、必ず最寄りの警察に届け出てください。(再発行の手続は学生課にて行ってください。)
- ・破損・汚損した場合や記載事項に変更のある場合は、学生課に届け出てください。
- ・卒業、退学等により学籍を離れるときは、直ちに学生課に返却してください。

(2) 事務局窓口受付時間

平日 8:50~17:00

土曜日 8:50~12:30

(日曜日、祝祭日、その他大学所定の休日は休業)

(3) T-NEXT(多摩大学学生ポータル)

T-NEXTは多摩大学の学生と教職員だけが閲覧できる学内システムです。ウェブシラバス、履修登録、学科選択、掲示板、講義サポート(講義資料掲示等)といった大学での重要な申請や通知を行います。T-NEXTへのログインの方法や個人のパスワード等については、入学時のオリエンテーション等にて説明を実施しています。不明な場合はメディア・サービス(ALC)に問い合わせてください。

(4) 学生生活におけるルール、諸事項の確認方法について

学生の皆さんに対する伝達、連絡等は、原則としてT-NEXTのみでお知らせします。掲示した事項については、周知されたものとして取扱います。大変重要な掲示をT-NEXTで行いますので**必ず毎日確認**してください。また、多摩大学での学生生活に関する最新情報は、以下のサイトにて発信していますので、確認してください。

サイト名	掲載内容	URL(サイトアクセス方法)
学修支援情報サイト@教務課	授業・履修・成績・試験・教職課程等	T-NEXT内Link 多摩キャンパス学修支援情報サイト
たまゆに。	学籍管理(氏名・住所など)奨学金、保険、落とし物、保健室等	https://tamauniv.jp/

(5) 伝言・照会

電話による伝言依頼、住所、電話番号の照会等は受け付けておりません。教員と連絡が取りたい場合は、T-NEXT(掲示)や学修支援情報サイト@教務課(オフィスアワー(教員連絡先))に掲載されている教員のメールアドレス宛に連絡してください。

5. 授 業

(1) セメスター制

1年を春学期と秋学期の2学期に分けて授業を行います。そして、本学では1学期毎に授業が完結するセメスター制を導入し、半期に集中して授業を行うことにより学修効果を高めています。

学期毎に15回の授業を実施します。週2回授業を行う科目もあります。授業は学年暦に従って行われ、祝日に授業を行うこともあります。

春学期 4月1日(金)から9月21日(水)まで

秋学期 9月22日(木)から翌年3月31日(金)まで

(2) 単位制

科目の履修には単位制が採用されています。単位制とは、科目毎に一定の基準により単位数が決められ、その科目を履修し、試験等に合格して単位を修得する制度です。その修得した単位数が卒業の要件として定められた基準を満たした場合に、卒業が認められます。

(3) 授業時間

授業時間は1時限90分で行います。

時 限	授 業 時 間
1時限	9時00分 ～ 10時30分
2時限	10時40分 ～ 12時10分
昼休み	12時10分 ～ 13時00分
3時限	13時00分 ～ 14時30分
4時限	14時40分 ～ 16時10分
5時限	16時20分 ～ 17時50分
6時限	18時00分 ～ 19時30分

(4) 休講

①教員の届出による休講

担当教員が病気や学会出張等止むを得ない理由により出講できない場合には、補講・代講等の講義又は課題等への振替を行います。

②交通機関の運休による休講

交通機関の事故・ストライキ、台風・地震等自然災害による交通機関の運休が発生した場合、休講の措置を取ります。この場合は、T-NEXT又は本学ホームページにてその旨を掲示します。

③台風および大雪にともなう休講

台風や大雪等により警報が発せられた場合、休講措置をとります。この場合は、T-NEXT又は本学ホームページにてその旨を掲示します。

(5) 補講

補講は休講等に対する措置として、平常授業を補うために行うものです。補講日は原則土曜日に設定されていますので、土曜日に授業を行うことがあります。補講が行われる科目や日時についてはT-NEXTの掲示にて連絡します。

(6) 欠席届の手続き

止むを得ない理由で欠席をする(した)場合は、担当教員に欠席届(書式は自由)を提出してください。但し、欠席届を考慮するかしないかは、担当教員の判断に任されています。

(7) 授業中のマナー

本学は、学生の皆さんが安心して勉学に励むことができるよう、快適で安全な環境づくりを心がけています。学生の皆さんが快適で楽しいキャンパスライフを送ることができるよう、下記のとおり授業中のマナー向上にご協力をお願い致します。

- ・私語
 - *授業中は控えてください。
- ・教室の入退室
 - *遅刻はしないでください。
 - *授業担当教員の断りなく途中退出はしないでください。
- ・出席
 - *代返等、出席に関する不正行為はやめましょう。
 - 代返：学校で出欠をとる際、出席しない者に代わって出席をよそおって返事をする事。
出典 三省堂大辞林
- ・携帯電話・スマートフォン端末等の使用
 - *授業担当教員の指示・許可を得て授業のために使用する場合を除き、これらの機器の使用を禁止します。
 - *授業中は必ず電源を切るかマナーモードに設定してください。
 - *授業に関係のないイヤホンの使用は禁止します。
- ・飲食
 - *原則できませんが、授業担当教員の指示に従ってください。
- ・ゴミの放置
 - *授業中や休み時間に出たゴミは、教室に放置せずゴミ箱へ入れ、教室美化に努めましょう。

(8) アクティブ・ラーニング(以下「AL」)

学生を中心とした効果的な学修を目指し、主体的な深い学びを得るため、下記のAL手法を取り入れた授業を行います。

AL手法の概要

【授業形態】

- 講義：知識伝達・習得を目標とする授業
- 演習：既習知識の応用を目標とする授業

6.初年次教育科目の指定について

(1) 初年次教育科目について

大学での学修は、自ら資料・情報を収集し、自ら考えをまとめていく側面が強くなります。また、皆さんは「経営情報学」等の専門分野を学ぶこととなります。よって、1年生のときに、大学での学修の基礎的能力を皆さんに養ってもらいたいと思います。

このような観点から、多摩大学経営情報学部では「初年次教育科目」を指定しています。

カリキュラム上、必修科目ではない科目もありますが、「初年次教育科目」のうち★のついた科目は、1年生のうちに原則必ず履修することになります。

※初年次教育(First Year Experience)とは

主に大学新生を対象にした、高校からの“円滑な移行”をはかり、学習及び人格的な成長の実現にむけて、大学での学習と生活を“成功”させるべく、総合的につくられた教育プログラム(2006,中央教育審議会大学分科会大学教育部会)

(2) 初年次教育の内容と科目の指定について(全員履修科目13科目)

内容 (中央教育審議会大学分科会大学教育部会)	科目 ★：全員履修科目
①大学生活への適応(大学生活、学修、対人関係等)	★プレゼミⅠ ★プレゼミⅡ
②大学で必要な学修技術の獲得(読み、書き、批判的思考力、調査、タイムマネジメント)	★スタディースキル入門 ★ビジネススキル入門 ★ビジネス数学基礎
③当該大学への適応	★多摩学Ⅰ(④⑥を兼ねる。) 多摩学Ⅱ(④⑥を兼ねる。)
④自己分析	★多摩学Ⅰ(③⑥を兼ねる。) 多摩学Ⅱ(③⑥を兼ねる。)
⑤ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入	ライフ・デザイン ★キャリア・デザイン入門
⑥学修目標・学修動機の獲得	★多摩学Ⅰ(③④を兼ねる。) 多摩学Ⅱ(③④を兼ねる。)
⑦専門領域への導入	★地域ビジネス入門 ★グローバルビジネス入門 ★ITビジネス入門 ★グローバルヒストリーⅠ グローバルヒストリーⅡ ★IT活用法Ⅰ ★経営学入門 マクロ経済学 ミクロ経済学

7.履修登録・確認・削除

(1)履修登録とは

履修登録とは、授業を受けて単位を修得するために、毎学期の始めに、各自の履修計画に基づき、シラバス、カリキュラム表、その学期の時間割表等から履修授業を決定して、履修授業の登録をする手続きのことです。履修登録を怠ったり、登録漏れや間違いがあったりした場合は、たとえ授業に出席し試験を受けたとしても単位は修得できません。従って、この手続きは、最も重要な手続きであることを認識してください。また履修系統図をホームページに記載しており、卒業までに身につけることができる知識・能力が、どのように授業に対応しているのかを図に示してあります。履修する授業を選択する際の参考にしてください。

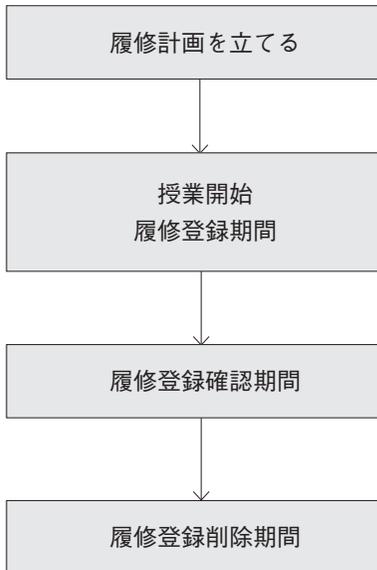
(2)登録・確認方法

T-NEXT上から授業を登録・確認する方法により行います。なお、T-NEXTの利用に当たっては、多摩大学共通アカウント及び共通パスワードが必要です。

(3)履修登録・確認上の注意

- ・履修登録及び確認は、パソコン及びスマートフォン等から行ってください。なおパソコン教室等学内のパソコンも使用可能です。
- ・履修登録・確認期間中（特に最終日）は学内のパソコン及び学内ネットワークの利用が混雑したり、パソコンの動作が遅くなったりすることが予想されます。登録に当たってはあらかじめ履修授業を決定した上で、十分に時間的な余裕を持って行ってください。
- ・履修登録・確認の方法は、T-NEXT等で別途ご案内します。

(4)履修登録・確認・削除の流れ



前学期の成績結果、シラバス、カリキュラム表、時間割等から、履修する授業を決定してください。

授業開始

春学期：4月7日(木)

秋学期：9月22日(木)

履修登録・履修確認・履修削除期間

・各期間の詳細についてはT-NEXT等で別途ご案内します。

※新型コロナウイルスの対応等により、履修登録のスケジュールや方法が変更となる可能性があります。必ずT-NEXT等での案内を確認してください。

履修登録に際しての注意事項

- ・クラス分けされている科目があるので注意してください。
- ・履修について、卒業要件や進級要件で不明なことや確認したいことがある場合、提供されている資料を確認した後、教務課窓口まで相談に来てください。
- ・登録は、T-NEXT 上から行います。T-NEXT 利用に当たっては、多摩大学共通アカウント及び共通パスワードが必要です。不明な場合は、メディア・サービス(ALC)で再発行手続きをしてください。
- ・ネットワークの混雑を考え、登録は余裕を持って行ってください。

8. 学期末試験

(1) 学期末試験の種類

① 定期試験

各学期末の試験期間中に実施する試験であり、春学期定期試験と秋学期定期試験の年2回実施します。

○ 試験期間

春学期定期試験：7月28日（木）、7月29日（金）

秋学期定期試験：1月24日（火）、1月25日（水）

○ 試験時間

試験時間は1時限60分間です。

時 限	試験時間	遅刻限度時間	途中退席可能時間
1 限	9:20～10:20	9:40	10:00
2 限	10:50～11:50	11:10	11:30
昼休み	11:50～12:30		
3 限	12:30～13:30	12:50	13:10
4 限	14:00～15:00	14:20	14:40
5 限	15:30～16:30	15:50	16:10
6 限	17:00～18:00	17:20	17:40

※平常講義の時間割と時間帯・教室・曜日が異なりますので発表された時間割に注意してください。

※試験開始後、20分以上遅刻した場合、受験を認めません。

※試験開始から40分経過以降、途中退席を認めず。

○受験には学生証を必要としますが、試験当日持参しなかった場合、教務課にて仮学生証の交付を行います。その際には、手数料として、100円を徴収します。

・仮学生証の有効期限は当該試験期間内に限ります。

・一旦納入された手数料は、如何なる理由があっても返金しません。

② 授業内試験

○各担当教員の判断により、講義時間中等に必要に応じて随時実施する試験をいいます。

○仮学生証の発行は行いません。試験当日に学生証を持参しなかった場合には、各担当教員によって取扱いが異なります。

③ 定期試験の追試験

定期試験中に病気又は止むを得ない理由により、試験を受験できなかった者には、審査の上で追試験を許可することがあります。

○ 手続き期間

教務課窓口への事前届出を原則としますが、事後となった場合は、当該科目の試験当日を含む3日以内とします。なお、3日目が休日の場合は、その翌業務日までとします。（期間の過ぎた申請は、一切受け付けません。）

○**手続きの際に必要な書類**

1. 追試験受験願（教務課に備付）
2. 理由を証明する添付書類
 - 病気・ケガ・・・・・・・・医師の診断書
 - 交通機関の遅延等・・遅延証明書等
 - 忌引・・・・・・・・・・会葬礼状等
 - その他・・・・・・・・理由を詳細に記載した書類等

○**追試験受験料（1科目につき1,000円。但し、1親等以内の忌引の場合は免除します。）**

○**試験日**

- 春学期試験の追試験・・・・8月2日(火)
- 秋学期試験の追試験・・・・1月30日(月)

④**再試験**

卒業年次の学生は、その年度の春学期又は秋学期に履修登録して不合格になっている場合に限り、多摩大学履修規程第5条に基づき、再試験を受験できる可能性があります。

再試験を実施する科目は制限がありますので十分注意してください。

○**多摩大学経営情報学部再試験実施要領**

この要領は、多摩大学履修規程第5条に基づき、再試験の実施に関する事項を定める。

- ① 再試験を実施する科目は、卒業年次に履修登録を実施している演習科目以外の科目を原則とする。
- ② 再試験は次の要件をすべて満たした者に受験を許可する。
 - ・再試験対象の科目が不合格となり卒業に必要な単位が不足してしまった場合
 - ・再試験対象の科目において、指定された課題を提出、又定められた試験を受験している場合
 - ・不足単位が3科目以内の場合
 - ・再試験を受験し合格(単位修得)することにより不足単位が満たされ「卒業」が可能となる場合
 - ・授業科目担当者が再試験受験を許可した場合
- ③ 再試験を受験できる科目数は、不足単位の科目数とする。
- ④ 再試験の受験が許可された者は、指定の期間内(発表日を含め3日以内、なお、3日目が休日の場合は、その翌業務日まで)に再試験料を納入し、受験手続を完了しなければならない。
- ⑤ 再試験の合格評価は、履修規程第9条に定める合格最低評価をもって行う。

※詳細に関しては、別途T-NEXTの掲示等にて告知します。

○**手続きの際に必要な書類**

- 再試験受験申請書（教務課に備付）

○**再試験受験料（1科目につき3,000円。但し、1親等以内の忌引の場合は免除します。）**

○**試験日**

- 別途連絡します。

(2) 試験実施上の注意事項

受験できる科目は、「履修登録」をして許可を受けた科目に限ります。受験に際して次のことに留意してください。

- 1 試験会場は、講義が行われる講義室とは異なることがあるので注意すること。
- 2 科目によっては、講義が行われる曜日・時限とは異なるので注意すること。
- 3 受験の際は、学生証を必ず持参し、試験中は机上の右上に置くこと。
- 4 学生証を持参しない場合は受験することはできない。但し仮学生証の交付を受けた場合は受験を認める。
- 5 答案には学部、学科、学籍番号、氏名を明瞭に記入すること。記入してない答案は無効となる。
- 6 受験中、机上におくことのできる物品は、学生証のほかには次のとおり。
 - (1) 筆記用具(ボールペン、シャープペン、万年筆、鉛筆、鉛筆削り、消しゴム)
 - (2) 時計(ただし電算機、辞書機能付きは除く)
 - (3) マスク・目薬・ティッシュペーパー
 - (4) 当該科目の持込許可条件で許可されたもの
- 7 携帯電話・スマートフォンは電源を必ず切りカバンの中にしまうこと。
- 8 荷物は床もしくは隣のイスの上に置くこと(机の中には入れないこと)。本やノート等は必ずカバンの中にしまうこと。
- 9 遅刻は試験開始後20分までであれば、受験を認める。この際、遅刻した学生の席については監督者の指示に従うこと。
- 10 その他、監督者の指示に従うこと。
- 11 試験期間中に※不正行為をした者は、事実を確認の上多摩大学学則、多摩大学履修規程第8条及び多摩大学学生懲戒規程により処罰される。

不正行為とは

- ① 替え玉受験すること(依頼すること、引き受けること)。
- ② 他人の答案や他人が所持する持込可能指定物を交換すること(双方)。
- ③ カンニングペーパー(器具)を使用すること。
(机上・机の中・衣服の中にあって例え使用していなくても不正行為とする)。
- ④ 机、その他(壁、床、手など)に記入し、これを利用しようとする事。
- ⑤ 他人の答案や他人が所持する持込可能指定物を見て写すこと及び故意に他人に見せること。
- ⑥ 試験中に携帯で話すこと。試験時間中に電話が鳴動した場合、理由に関らず、不正行為とみなす。
- ⑦ 「解答はじめ。」の指示の前に問題冊子を開き解答を始めること。
- ⑧ 「解答やめ。筆記用具を置いて下さい。」の指示に従わず、筆記用具を持ち解答を続けること。
- ⑨ その他上記①～⑧に類似する行為。
- ⑩ 監督者の指示に理由なく従わないこと。

9. 成績

(1) 成績評価

成績評価は、学期末試験(定期試験・授業内試験)、レポート及び平常点等を総合的に考慮して絶対評価で判定します。

	一般講義科目			演習科目	
	配分基準	成績通知書	成績証明書	成績通知書	成績証明書
合格	100点～90点	A+	A+	P	P
	89点～80点	A	A		
	79点～70点	B	B		
	69点～60点	C	C		
不合格	59点以下	F	表示しない	F	表示しない
認定※	—	N	N	N	N

※認定科目の単位認定、又編入学における単位認定等の場合のみ付与します。

認定科目 ※2019年度入学以降の学生の場合		
インターンシップ I・II	AP数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	単位互換科目	キャリア・デザインIV

(2) 成績発表

成績は、T-NEXTで発表します。

なお、保証人宛に「成績通知書」を送送します。

春学期「成績通知書」発送予定・・・9月中旬頃

秋学期「成績通知書」発送予定・・・3月中旬頃

(3) 成績評価に関する問合せ(成績照会)

当該学期の成績評価について確認をしたい場合は、次学期授業開始日より14日間以内に、教務課窓口(受付時間内)に申し出てください。

(4) 評定平均(GPA)

成績評価方法の一種として授業科目毎の成績評価を5段階 (A+ 又は P、A、B、C、F) で評価し、それぞれに対して4.0、3.0、2.0、1.0、0のグレードポイントを付与し、この単位当たり平均(GPA、グレード・ポイント・アベレージ)を出します。認定(N)はGPA計算に算入しません。

GPAは成績優秀者奨学金や、早期卒業、退学勧告、学科選択の学生選考、ホームゼミ選抜、教職課程の履修許可など幅広く活用されます。

GPA 除外科目 ※2019年度入学以降の学生の場合		
インターンシップ I・II	AP 数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	キャリア・デザイン IV	教職に関する科目
単位互換科目		

(5) 褒賞制度

本学では学業や社会活動において優れた業績を挙げた学生を褒賞する制度を設けています。

褒賞名	褒賞内容
最優秀学生賞 (Best Academic Achievement Award)	大学在学中4年間を通じて総合的に最も優秀な成績を収めた卒業予定者5名及び本学学生として模範的行為のあった者若干名
成績優秀学生賞 (Academic Achievement Award of the semester)	成績優秀者奨学金受給学生に該当する者
優秀学生賞 (Academic Achievement Award)	各講義科目において顕著に優れた成績を収めた学生 学業に対する取組が真摯で他の模範となる者
社会・研究活動賞 (Outstanding Achievement Award in Research and Social Activities)	課外活動・研究活動で顕著な成績をおさめた者または団体
学長賞及び学部長賞 (President's Award, Dean's Award)	本学学生として模範的行為のあった者又は団体

(6) 成績優秀者奨学金制度

成績優秀者奨学金は、特に学力が優れている者に対する奨励を目的としています。各学期の評定平均(GPA)上位者20名に対して奨学金を支給します。

- ・ 区分1・・・各学期分の授業料相当額
- ・ 区分2・・・5万円

① 評定平均算出方法

$$\frac{4.0 \times (\text{[A+] と [P] の修得単位数}) + 3.0 \times (\text{[A] の修得単位数}) + 2.0 \times (\text{[B] の修得単位数}) + 1.0 \times (\text{[C] の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数 ([F] の単位数を含む)}}$$

② 選定要領

- 入試合格時に選定され奨学金を支給されている者(1年次生)及び、支給日当日に在籍していない者は対象外とする。
- 区分1の奨学生候補者数の選定
 - ア、教職に関する授業科目を除く5科目以上を履修していて評定平均が3.2以上の者とする。
 - イ、複数名が対象となった場合は、評定平均最上位の者とする。
 - ウ、評定平均最上位の者が複数名の場合は、修得単位の多い者、修得単位数が同一の場合は、その者全員を区分1とし、奨学金は、区分1の定員(1名)を超える人数分については区分2の支給額を加え、均等に分配することとする。なお、均等に分配できない場合は、小数点を切り捨てる。
- 区分2の奨学生候補者数は、教職に関する授業科目を除く5科目以上を履修している者とし、区分1と併せて各学期20名以内とする。

(7)成績不良者

下記のとおり「望ましい学年・学期別の単位修得目安(累積)※2022年度入学生適用分」を定めています。よって、本目安に到達できなかった場合は、成績不良者として保証人にご報告します。

年次	学期	各学期修得単位数	望ましい学年・学期別の単位修得目安(累積)	成績不良者の基準
1年次生	春学期	各学期16単位から20単位修得してください。 なお、各学期20単位(前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位)まで履修登録することができます。	16単位～20単位	16単位未満
	秋学期		32単位～40単位	32単位未満
2年次生	春学期		48単位～60単位	48単位未満
	秋学期		64単位～80単位	64単位未満
3年次生	春学期		80単位～100単位	—
	秋学期		96単位～120単位以上	—
4年次生	春学期	112単位～124単位以上	—	
	秋学期	124単位以上	—	

(8)成績不振者

「各学期の修得単位数が4単位未満の学生」を成績不振者として定義しています。

成績不振者は教員と今後の就学に関して面談を実施する場合があります。

(例)

- 1つの学期で3単位修得→成績不振者として面談実施の可能性がります。
- 1つの学期で4単位修得→成績不振者として面談は実施しません。

(9)退学勧告について

多摩大学成績評価規程により、在籍期間やGPA、修得単位数、修学的意思に応じて退学勧告を行っています。

10. 学科選択

(1) 学科選択とは

経営情報学部において入学後の1年間は、学生は学科には所属せず経営情報学部の学生として広く経営情報の素養を身につけることが期待されます。学生の皆さんは、2年進級時に経営情報学科もしくは事業構想学科に所属する事になり、これを学科選択と言います。学科選択においては学生の志望が優先されますが、志望者数が定員を超えた場合は、GPAによる選抜が行われます。

(2) 選抜方法

基本的に1年次の成績（1年間の※評定平均（GPA））をもとに選抜を行います。不本意な結果を招かないために、1年次に努力を払うようにしてください。

※評定平均(GPA)算出方法

$$\frac{4.0 \times ([A+] \text{と} [P] \text{の修得単位数}) + 3.0 \times ([A] \text{の修得単位数}) + 2.0 \times ([B] \text{の修得単位数}) + 1.0 \times ([C] \text{の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数}([F] \text{の単位数を含む})}$$

(3) 申請手続きの流れ

仮選択

プレゼミ I で詳細を連絡します。

学科説明会

プレゼミ II で詳細を連絡します。

申請期間

プレゼミ II で詳細を連絡します。

所属学科発表

2023年3月にT-NEXTにて通知します。

11.進級・卒業要件、履修上限、認定科目

(1)平成31(2019)年度以降入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択必修 ^{※1}	選択必修 ^{※1}		選択	合計
産業社会	教養	6	2	10	(語学) 4	60	124
	ビジネス			6			
問題解決学	学科専門	4		16 ^{※2}			
	演習 ^{※3}	16					
合計		26	2	36		60	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて修得した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を修得した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期20単位まで履修登録することができます。ただし、前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	A P 数学	Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目	立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目	ホームゼミⅠ～Ⅷ

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ・ホームゼミⅠ～Ⅷ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	A P 数学	Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	単位互換科目	キャリア・デザインⅣ

(2)平成30(2018)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択必修 ^{※1}	選択必修 ^{※1}		選択	合計
産業社会	教養	6	2	10	(語学) 4	72	124
	ビジネス						
問題解決学	学科専門	4		16 ^{※2}			
	演習 ^{※3}	6		4			
合計		16	2	34		72	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて修得した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を修得した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	A P 数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	A P 数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	単位互換科目

(3)平成28(2016)年度・平成29(2017)年度入学生**1.『進級要件』**

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択必修 ^{*1}	選択必修 ^{*1}		選択	合計
産業社会	教養	4	2	10	(語学) 4	74	124
	ビジネス						
問題解決学	学科専門	4		16 ^{*2}			
	演習 ^{*3}	6		4			
合計		14	2	34		74	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて修得した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を修得した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	A P 数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	A P 数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	単位互換科目

12. 教職課程

教員の免許状を取得したい学生は、教職課程を履修して必要な単位を修得してください。

(1) 多摩大学経営情報学部にて取得可能な免許状

学部	学科	種類	教科
経営情報学部	※1) 経営情報学科	高等学校教諭(一種)	情報・※2) 数学

※1) 事業構想学科を学科選択した学生は、多摩大学では高等学校教諭(一種)情報の教職免許を取得することはできません。

※2) 明星大学での数学科教員免許取得について

高等学校教諭(一種)数学の教員免許は、明星大学通信教育部の科目等履修生として取得することができますが、多摩大学で高等学校教諭(一種)情報の教員免許を取得することが必須条件になります。数学科教員免許取得を希望する学生は、1年生の秋学期授業終了までに教務課へお問い合わせください。基本的には2~4年生で科目履修をすることとなります。

(2) 最低修得単位数(教育職員免許法で定められている最低単位数)

大学において修得することを必要とする科目の最低単位数				
教育職員免許法 施行規則 第66条の6に 定める科目	教科の基礎的理解に 関する科目	道徳、総合的な学習 の時間等の指導法 及び生徒指導、 教育相談等に 関する科目	教育実践に 関する科目	教科及び 教科の指導法に 関する科目
8	10	8	5	24

(3) 教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目(基礎教育科目)

(◎：必修科目、○：選択必修科目)

免許法施行規則に定める科目及び単位数		左記に対応する開設授業科目
科目	単位数	科目
日本国憲法	2	◎法学(憲法)
※1) 体育	2	○スポーツⅠ
		○スポーツⅡ
※2) 外国語コミュニケーション	2	○English Expression Ⅱ
		○韓国語Ⅱ
		○中国語Ⅱ
情報機器の操作	2	◎IT活用Ⅱ

※1) スポーツⅠまたはスポーツⅡより1科目選択必修

※2) English Expression Ⅱ、韓国語Ⅱ、中国語Ⅱの3科目より1科目選択必修

(4)教職に関する科目

<2021年度以降入学生>

(◎：必修科目)

免許法施行規則に定める科目区分	本学で開講している科目名	配当年次・開講学期	単位数
教育の基礎的理解に関する科目	◎教育原理	1-秋	2
	◎教職概論	1-秋	2
	◎教育制度論	2-春	2
	◎教育心理学	3-春	2
	◎特別支援教育概論	2-春	1
	◎教育課程総論	2-春	1
道徳、総合的な学習の時間の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	◎特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2-秋	2
	◎教育方法(ICTを活用した教育の理論及び方法含む)	2-秋	2
	◎生徒指導・進路指導論	2-秋	2
	◎教育相談	3-秋	2
教育実践に関する科目	◎教育実習	4-集中(春秋学期)	3
	◎教職実践演習	4-集中(秋学期)	2
合 計			23

<2020年度以前入学生>

(◎：必修科目)

免許法施行規則に定める科目区分	本学で開講している科目名	配当年次・開講学期	単位数
教育の基礎的理解に関する科目	◎教育原理	1-秋	2
	◎教職概論	1-秋	2
	◎教育制度論	2-春	2
	◎教育心理学	3-春	2
	◎特別支援教育概論	2-春	1
	◎教育課程総論	2-春	1
道徳、総合的な学習の時間の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	◎特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2-秋	2
	◎教育方法	2-秋	2
	◎生徒指導・進路指導論	2-秋	2
	◎教育相談	3-秋	2
教育実践に関する科目	◎教育実習	4-集中(春秋学期)	3
	◎教育実践演習	4-集中(秋学期)	2
合 計			23

※ 教職に関する科目及び教科に関する科目のうち「情報科教育法Ⅰ・Ⅱ」は、卒業要件単位に含まれません。(教育心理学、教育相談を除く。)

※ P.24(5)教科に関する科目を確認してください。

(5) 教科に関する科目

[◎印は必修科目、○印は選択必修科目]

免許法施行規則に定める科目区分	2017年度開講科目	単位	2018年度開講科目	単位	2019年度開講科目	単位	配当年次	2020年度開講科目	単位	配当年次	2021年度開講科目	単位	配当年次	2022年度開講科目	単位	配当年次
基礎教育科目 (66条の6に定める科目)	◎スポーツⅠ } ◎スポーツⅡ } ※上記何れか1科目選択すること	2	◎スポーツⅠ } ◎スポーツⅡ } ※上記何れか1科目選択すること	2	◎スポーツⅠ } ◎スポーツⅡ } ※上記何れか1科目選択すること	2	1-春 1-秋	◎スポーツⅠ } ◎スポーツⅡ } ※上記何れか1科目選択すること	2	1-春 1-秋	◎スポーツⅠ } ◎スポーツⅡ } ※上記何れか1科目選択すること	2	1-秋 2-春	◎スポーツⅠ } ◎スポーツⅡ } ※上記何れか1科目選択すること	2	1-秋 2-春
	◎English ExpressionⅡ } ◎韓国語Ⅱ } ◎中国語Ⅱ } ※上記何れか1科目選択すること	2	◎English ExpressionⅡ } ◎韓国語Ⅱ } ◎中国語Ⅱ } ※上記何れか1科目選択すること	2	◎English ExpressionⅡ } ◎韓国語Ⅱ } ◎中国語Ⅱ } ※上記何れか1科目選択すること	2	1-秋	◎English ExpressionⅡ } ◎韓国語Ⅱ } ◎中国語Ⅱ } ※上記何れか1科目選択すること	2	1-秋	◎English ExpressionⅡ } ◎韓国語Ⅱ } ◎中国語Ⅱ } ※上記何れか1科目選択すること	2	1-秋	◎English ExpressionⅡ } ◎韓国語Ⅱ } ◎中国語Ⅱ } ※上記何れか1科目選択すること	2	1-秋
	◎法学(憲法)	2	◎法学(憲法)	2	◎法学(憲法)	2	1-秋	◎法学(憲法)	2	1-秋	◎法学(憲法)	2	1-秋	◎法学(憲法)	2	1-秋
	(◎ビジネス最前線研究) } ◎IT活用法Ⅱ } ※1	2	(◎業界研究Ⅰ) } ◎IT活用法Ⅱ } ※1	2	(◎業界研究Ⅰ) } ◎IT活用法Ⅱ } ※1	2	2-春 2-春	(◎業界研究Ⅰ) } ◎IT活用法Ⅱ } ※1	2	2-春 2-春	(◎業界研究Ⅰ) } ◎IT活用法Ⅱ } ※1	2	2-春 2-春	(◎業界研究Ⅰ) } ◎IT活用法Ⅱ } ※1	2	2-春 2-春
	◎情報倫理	2	◎情報倫理	2	◎情報倫理	2	2-春	◎情報倫理	2	2-春	◎情報倫理	2	2-春	◎情報倫理	2	2-春
	◎情報法	2	◎情報法	2	◎情報法	2	2-春	◎情報法	2	2-春	◎情報倫理	2	2-秋	◎情報倫理	2	2-秋
	◎経営とセキュリティ	2	◎経営とセキュリティ	2	◎経営とセキュリティ	2	3-秋	◎経営とセキュリティ	2	3-秋	◎経営とセキュリティ	2	3-秋	◎経営とセキュリティ	2	3-秋
	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	1-春	◎ビジネス数学基礎	2	1-春	◎ビジネス数学基礎	2	1-春	◎ビジネス数学基礎	2	1-春
	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	1-秋	◎コンピュータ概論	2	1-秋	◎コンピュータ概論	2	1-秋	◎コンピュータ概論	2	1-秋
	◎プログラミング入門Ⅰ } ◎Webプログラミング } ◎Webサービス開発 }	2	◎プログラミング入門Ⅰ } ◎Webプログラミング } ◎Webサービス開発 }	2	◎プログラミング入門Ⅰ } ◎Webプログラミング } ◎Webサービス開発 }	2	2-春 3-春 3-秋	◎プログラミング入門Ⅰ } ◎Webプログラミング } ◎Webサービス開発 }	2	2-春 3-春 3-秋	◎プログラミング入門Ⅰ } ◎Webプログラミング } ◎Webサービス開発 }	2	2-春 3-春 3-秋	◎プログラミング入門Ⅰ } ◎Webプログラミング } ◎Webサービス開発 }	2	2-春 3-春 3-秋
◎データベースⅠ } ◎データベースⅡ }	2	◎データベースⅠ } ◎データベースⅡ }	2	◎データベースⅠ } ◎データベースⅡ }	2	2-春 2-秋										
◎情報工学概論	2	◎情報工学概論	2	◎情報工学概論	2	3-秋										
情報通信ネットワーク (実習を含む)	◎コンピュータネットワーク活用	2	◎コンピュータネットワーク活用	2	◎コンピュータネットワーク活用	2	3-春	◎コンピュータネットワーク活用	2	3-春	◎コンピュータネットワーク活用	2	3-春	◎コンピュータネットワーク活用	2	3-春
	◎情報ネットワーク	2	◎情報ネットワーク	2	◎情報ネットワーク	2	3-春	◎情報ネットワーク	2	3-春	◎情報ネットワーク	2	3-春	◎情報ネットワーク	2	3-秋
	◎クリエイティブデザインⅡ	2	◎クリエイティブデザインⅡ	2	◎クリエイティブデザインⅡ	2	2-秋	◎クリエイティブデザインⅡ	2	2-秋	◎クリエイティブデザインⅡ	2	2-秋	◎クリエイティブデザインⅡ	2	2-秋
マルチメディア表現 及び技術 (実習を含む)	◎クリエイティブデザインⅠ	2	◎クリエイティブデザインⅠ	2	◎クリエイティブデザインⅠ	2	2-春	◎クリエイティブデザインⅠ	2	2-春	◎クリエイティブデザインⅠ	2	2-春	◎クリエイティブデザインⅠ	2	2-春
	◎WebデザインⅠ } ◎WebデザインⅡ }	2	◎WebデザインⅠ } ◎WebデザインⅡ }	2	◎WebデザインⅠ } ◎WebデザインⅡ }	2	2-春 2-秋	◎WebデザインⅠ } ◎WebデザインⅡ }	2	2-春 2-秋	◎WebデザインⅠ } ◎WebデザインⅡ }	2	2-春 2-秋	◎WebデザインⅠ } ◎WebデザインⅡ }	2	2-春 2-秋
	◎経営情報論Ⅰ } ◎情報と職業 }	2	◎経営情報論Ⅰ } ◎情報と職業 }	2	◎経営情報論Ⅰ } ◎情報と職業 }	2	2-春 3-春	◎経営情報論Ⅰ } ◎情報と職業 }	2	2-春 3-春	◎経営情報論Ⅰ } ◎情報と職業 }	2	2-春 3-春	◎経営情報論Ⅰ } ◎情報と職業 }	2	2-春 3-春
各教科の指導法 情報職課程(教材の活用含む)					◎情報科教育法Ⅰ } ◎情報科教育法Ⅱ } ※2	2	3-春 3-秋	◎情報科教育法Ⅰ } ◎情報科教育法Ⅱ } ※2	2	3-春 3-秋	◎情報科教育法Ⅰ } ◎情報科教育法Ⅱ } ※2	2	3-春 3-秋	◎情報科教育法Ⅰ } ◎情報科教育法Ⅱ } ※2	2	3-春 3-秋

・ 選択必修科目のうち14単位以上修得すること。

※1 2016年度以降入学生は、「IT活用法Ⅱ」を履修してください。「業界研究Ⅰ」は2014・2015年度入学生用のため、教科に関する科目としてカウントされません。

※2 2018年度以前入学生は、「教職に関する科目」に「情報科教育法Ⅰ・Ⅱ」が含まれています。

(6) 教科に関する科目における新旧対照表

変更科目一覧	2017年度開講科目	2018年度開講科目	2019年度開講科目	2020年度開講科目	2021年度開講科目	2022年度開講科目	備考
	ビジネス最前線研究	→ 業界研究Ⅰ					

(7) 教職課程の履修許可について

- ①教職課程の履修要件は原則として、教員採用試験の受験を1年次で希望していること。
 - ②教職課程の履修が認められる者
 - 1年次終了時
 - ・2年次に進級する際に、原則として1年次中に取得した単位が32単位以上で、かつその成績の評定平均が2.1以上に達した者。
- <評定平均の算出方法>
- $$\frac{4.0 \times (\text{「A+」と「P」の修得単位数}) + 3.0 \times (\text{「A」の修得単位数}) + 2.0 \times (\text{「B」の修得単位数}) + 1.0 \times (\text{「C」の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数(「F」の単位数を含む)}}$$
- 2年次終了時
 - ・64単位以上（教職に関する科目は除く）修得していること。
 - 3年次終了時
 - ・94単位以上（教職に関する科目は除く）修得していること。
 - ・原則として、教職に関する科目の必修科目（教育実習と教職実践演習を除く）をすべて修得していること。
 - ・原則として、必修科目34単位すべてと、選択必修科目の内、14単位以上修得していること。
- ③「教育実習」3単位のうち、1単位は「事前・事後指導」とし、これに出席しなければ教育実習の単位は認定されない。

(8) 教育実習について

- ①教育実習の目的

教育実習は、学校教育の実状や教員の実務を理解し、これまで大学で身につけた知識や理論を基に実習校において教育職員として必要な現場の知識や技術、態度等を見につけるための実地修練の場です。
- ②教育実習の実施時期

教育実習の実施時期は4年次の5・6月を原則としますが、実習校（基本的に母校実習）の都合により、他の時期に行くこともあります。
- ③教育実習事前事後指導

4年次の教育実習履修有資格者を対象に、教育実習事前説明会を実施し、教育実習申込書、教育実習日誌等を配布します。
- ④教育実習手数料

教育実習手数料(20,000円)は、教育実習申込みの際に教務課にて納入してください。
- ⑤実習校との事前打ち合わせ

教育実習開始前に、教育実習についての打ち合わせが実習校で行われます。実習に際しての指導を受けたり、実習生の準備状況の報告を行ったりするもので、実習に欠かせない重要なものです。必ず出席してください。日時は、実習校の教員と調整をして決定します。(2年終了頃～3年次)
- ⑥教育実習報告会((7)③に相当する。)

教育実習終了後に教育実習報告会を開催します。教育実習を終えた4年生は、教育実習での成果を発表してもらいます。

(9) 教員免許状の申請について

大学から東京都教育庁へ教員免許状の一括申請を行います。

教員免許状申請料は、案内が教務課から届きますので、それに従って所定の料金(3,700円)を教務課窓口へ納入してください。(4年次1月～2月頃)

13. オフィスアワー制度について

【オフィスアワーとは】

多摩大学経営情報学部では、オフィスアワーを実施しています。オフィスアワーとは、本学の経営情報学部の学生が受講する授業科目に関し、担当の教員に直接質問等をし、教員が返答するために行う面談の時間のことです。1週間の中に必ず90分以上設定し、公表した上で、学生からの相談を受けられるように待機しています。予約は不要です。

※担当授業科目には、ホームゼミを含みます。

※上記「学生」とは、経営情報学部生に加え、経営情報学部の科目を受講している科目等履修生と聴講生を含みます。

※非常勤教員については、授業後の時間及び随時電子メールで質問を受け付けています。詳細はT-NEXTの掲示で確認してください。

【基本原則】

- ・面談内容は授業内容に関するものとします。
- ・面談場所は3階教育サポート室奥のラウンジを使用します。
- ・オフィスアワー情報(曜日、時間)については、教育サポート室とホームページで公表します。
URL : <https://www.tama.ac.jp/student/smis/support.html>
- ・1人の面談時間単位は、15分です。

【予約希望の場合】

面談は、予約なしでも可ですが、事前に予約することもできます。希望する学生は、3階教育サポート室カウンターにて、面談予約希望の旨を申し出てください。また申し込む場合は、申込用紙を受け取り、必要事項を記入して提出してください。

※予約申込時間：月曜日～金曜日午前9:30～午後4:30

※直接教員と約束をした場合でも、該当する時間に予約があった場合には予約した学生を優先します。

※曜日や時間、面談場所が変更になる場合があります。

※予約可能な時間は15分間を限度とします。

予約した場合には、面談当日指定された場所に遅れない様に直接行ってください。もしも予約時間定刻に予約した学生がいない場合、他の学生が優先されます。

14. 授業評価アンケート(VOICE)について

全ての講義科目について、学生による授業評価アンケート(VOICE)を実施しています。よりよい講義の実施のために、学生から真面目で率直な意見を聞くマークシートによる無記名式アンケートです。詳細は掲示にてお知らせしますので、積極的に回答してください。

なお、過去の授業評価アンケート(VOICE)結果については、3階図書館にて公開しています(公開時期はT-NEXTにて連絡します)。履修する授業を選択する際などに参考にしてください。

15. 単位互換科目について

● 申請資格

多摩大学経営情報学部に在学する学生

● 履修期間・履修単位制限

1. ネットワーク多摩単位互換制度によって開講されている他大学の科目(産学連携科目を含む)を履修することが出来ます。開講科目の詳細については、「ネットワーク多摩」のホームページとT-NEXTにて確認してください。
2. 単位互換制度により他大学の科目を履修、単位を修得できるのは在学中30単位までとし、各学期の履修上限外科目となります。また、修得した単位は「単位互換科目」の単位として卒業要件に含まれます。

● 履修登録・履修申請

1. 履修登録は当該科目受講の翌学期に行い、単位認定されます。つまり、他大学の春学期開講科目を受講した場合、多摩大学で秋学期に履修登録し、秋学期の成績となります。
2. 履修申請は、「ネットワーク多摩」のホームページよりダウンロードし、「履修申請書」に必要事項を記載(顔写真添付)の上、教務課へ提出してください。履修登録期間は、開設大学により異なりますので、T-NEXTにて学内の受付期間を確認してください。開設大学の受付期間を過ぎた申請は受付いたしかねますので、申請手続きは余裕を持って行ってください。
※履修申請時期：<春学期>3月下旬から4月下旬頃、<秋学期>8月下旬から9月下旬頃予定
3. 「履修申請書」を提出し、開設大学より許可を受けた科目は成績等にかかわらず必ず履修することとします。
4. 履修許可者の発表はT-NEXTにて行います。

● 履修上の注意

1. 履修科目は、ネットワーク多摩単位互換制度により開講されている、単位互換科目及び産学連携事業科目のうち、半期完結の科目に限ります。
2. 在籍年次よりも上級年次に配当されている科目を履修することは出来ません。
3. 履修に当たっては移動時間を考慮し、他大学科目を履修する前後の時間に配置された多摩大学科目又は他大学科目を履修することは出来ません。ただし、昼休みを挟む場合はこの限りではありません。

● 授業

1. 休講・補講等の授業及び試験日程等に関する通知は、開設大学が通常所属大学の学生に対する通知方法により行われますので、各自の責任において確認してください。
2. 出席状況によっては、学期の途中であっても開設大学から履修の許可を取り消されたり、試験の受験資格が取り消されることがあります。
3. 学年暦の差異により、多摩大学と開設大学での授業・補講(代講)の日時が重複した場合、どちらの授業に出席するかは自身で判断してください。

● 試験

- 1.開設大学の試験と多摩大学の試験の日時が重複した場合は、その事実が判明したら直ちに 本学の教務課に相談してください。相談が無い場合、対応措置を講じることができません。
- 2.病気等により開設大学の試験を欠席したときは、追試験の受験を認められることがあります。その場合の手続き等は開設大学の定めに従います。
- 3.開設大学における授業及び試験の詳細については、開設大学が配布する資料などで確認してください。

● 成績

- 1.成績評価は開設大学の基準及び表示方法により行い、多摩大学の基準及び表示方法に置き換えて認定します。
- 2.成績の質問は、開設大学の定めるところによるものとします。

● 特別聴講学生証

- 1.特別聴講学生証は、開設大学において交付されます。
- 2.有効期限は開設大学が必要と定める期間とします。また、有効期限内であってもこれを必要としなくなったとき、又は有効期限が満了したときは特別聴講学生証を多摩大学教務課まで返却してください。

● その他

- 1.ネットワーク多摩単位互換制度を利用して履修する授業科目の聴講料は免除されます。ただし、教材費や実習費が必要な授業科目については、実費を徴収されることがあります。
- 2.開設大学における図書館等の施設・設備の利用範囲、自転車・バイクの利用、開設大学で特に注意する事項などについては、開設大学が配布する資料等で確認してください。
- 3.開設大学において急病になった、又は事故にあった場合など、急を要する治療が必要な場合は、開設大学の診療施設を利用することが出来ます。また、直ちに救急措置を講じる必要がある場合、本学の判断により保険情報を含めた個人情報開設大学の診療施設に提供することがあります。
なお、通学及び授業中に事故にあった場合、「学生教育研究災害傷害保険」の適用を受けることが出来る場合がありますので本学の学生課に問い合わせてください。

16.アセスメント

アセスメントとは、専攻・専門にかかわらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を測定するためのプログラムです。1年生と3年生の4月のオリエンテーション等でアセスメントテストを実施します。外部の一般化された試験を用いて社会で求められる一般的な能力等を測定し、自身の現状を客観的に把握することが出来ます。また、1年生と3年生の両方で受験することで、カリキュラムによる学修成果を、大学の成績とは異なる視点で確認できます。

アセスメントでの気づきを通して、大学での学びをより主体的なものにする原動力としてください。

17.TOEIC 試験補助について

大学から補助を受けて、無料で学内TOEICを受けることができます。

就職や留学に行く際の目安、また自分の英語の実力がどの程度伸びたかを見るよいチャンスです。積極的に活用して、自身の成長の指標にしてください。申し込みの詳細については随時更新しますので、教育サポート室で最新情報を確認してください。

18.多摩大学 学則(抜粋)

第1章 総則

(目的)

第1条 多摩大学(以下「本学」という。)は、永年に及ぶ産業教育における経験を基盤とし、国際化・情報化時代に即応して、学生に高度な外国語能力と世界に通用する教養・最新の経営知識及び的確な情報処理能力を修得せしめ、国際的ビジネスの場で活躍できる人材の育成を目指すとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に寄与する指導的人材を育成することを目的とする。

(自己点検及び評価)

第2条 本学は、その教育研究水準の向上を図り、大学の目的及び社会的使命を達成するため、大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行う。

2 自己点検及び評価について必要な事項は、別に規程で定める。

(個人情報保護)

第3条 本学は、教育・研究活動等の適正かつ円滑な運営を図り、個人情報の有用性に配慮するため、個人の権利及び利益を保護する。

2 個人情報保護について必要な事項は、別に規程で定める。

(ハラスメントの防止)

第4条 本学は、ハラスメントの防止及びハラスメントに起因する問題が生じた場合に、適切な対応を行うための措置を講じ、学生、教育職員及び事務職員等の快適な環境を作り、教育、研究及び就業の機会と権利を保障する。

2 ハラスメントの防止について必要な事項は、別に規程で定める。

第3章 修業年限、在学年限、学年、学期及び休業日

(修業年限)

第10条 本学の修業年限は、4年とする。ただし、第39条の規定により卒業を認められた者については、この限りでない。

(在学年限)

第11条 学生は、8年を超えて在学することができない。

2 編入学、転入学及び再入学の許可を得た者の在学年限は、第20条第2項に定める。

(学年)

第12条 学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。ただし、秋学期入学生については、10月1日に始まり、翌年9月30日に終る。

(学期)

第13条 学年を次の2学期に分ける。

(1)春学期 4月1日から 9月30日まで

(2)秋学期 10月1日から翌年3月31日まで

(休業日)

第14条 授業を行わない日(以下「休業日」という。)は、次のとおりとする。ただし、学長が必要と認めるときは、休業日を変更又は臨時に休業日を定めることができる。

(1)日曜日

(2)国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日

(3)本学の開学記念日 10月20日

(4)メモリアルデー 1月16日

- (5)夏季休業 8月10日から9月20日まで
 - (6)冬季休業 12月25日から翌年1月5日まで
 - (7)春季休業 翌年2月10日から3月31日まで
- 2 休業日の変更又は臨時の休業日については、その都度公示する。

第4章 学籍

(入学の時期)

第15条 入学の時期は、学年の始めとする。ただし、再入学及び転入学については、学期の始めとすることができる。

(入学資格)

第16条 本学に入学することができる者は、次の各号の一に該当する者とする。

- (1)高等学校若しくは中等教育学校を卒業した者
- (2)通常の課程による12年の学校教育を修了した者又は通常の課程以外の課程により、これに相当する学校教育を修了した者
- (3)外国において、学校教育における12年の課程を修了した者又はこれに準ずる者で、文部科学大臣の指定した者
- (4)文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
- (5)専修学校の高等課程（修業年限が3年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たすものに限る。）で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以後に修了した者
- (6)文部科学大臣の指定した者
- (7)高等学校卒業程度認定試験規則による高等学校卒業程度認定試験に合格した者（旧規程による大学入学資格検定に合格した者を含む。）
- (8)学校教育法第90条第2項の規定により大学に入学した者であって、本学において、大学における教育を受けるにふさわしい学力があると認められた者
- (9)本学において、個別の入学資格審査により高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、18歳に達した者

(入学の出願)

第17条 本学に入学を志願する者は、入学願書に所定の入学検定料及び別に定める書類を添えて願い出なければならない。

(入学者の選考)

第18条 前条の入学志願者に対しては、試験を行いその成績等により選考する。

(入学手続き及び入学許可)

第19条 入学者の選考に合格した者は、所定の期日までに入学誓約書その他所定の書類を提出し、第42条に規定する、所定の学費を納付しなければならない。

2 学長は、正当な事由なくして期日までに前項の手続きを完了しない者の合格を取消することができる。

3 学長は、第1項の入学手続きを完了した者に入学式において入学を許可し、学生証を交付する。

(編入学、転入学及び再入学)

第20条 次の各号一に該当し、本学に入学を志願する者は次のとおりとする。

- (1)大学を卒業した者又は退学した者
 - (2)短期大学又は高等専門学校を卒業した者
 - (3)専修学校専門課程を卒業した者
 - (4)他の大学に在学中の者で、現に在学する大学の学長による転学の承認を得た者
また、学長は次の各号一において入学を許可することができる。
- (1)編入学については、編入学定員内において、選考の上、入学を許可することができる。

(2) 転入学及び再入学については、定員に欠員のある場合に限り、選考の上、相当年次に入学を許可することができる。

2 前項の規定により入学を許可された者の既に履修した授業科目及び単位数の取扱い並びに在学すべき年数については、教授会の議を経て学長が決定する。

3 前3条の各規定は、第1項の入学に準用する。

(休学)

第21条 疾病その他特別の事由により修学することができない者は、1学期又は1年間(2学期)を区分として、様式第1に規定する休学願を提出し学長の許可を得て休学することができる。

2 学長は、疾病その他特別の事由により修学することが適当でないと認めるときに、教授会の議を経て、休学を命ずることができる。

(休学の期間)

第22条 休学期間は、1年以内とする。ただし、特別の事由があるときは、1年を限度として休学期間の延長を認めることができる。

2 休学期間は、通算して4年を超えることができない。

3 休学期間は、第10条の修業年限及び第11条の在学年限に算入することができない。

(復学)

第23条 休学期間中にその事由が消滅したときは、様式第2に規定する復学願を提出し学長の許可を得て復学することができる。

(転学)

第24条 他の大学又は短期大学に入学又は転入学を志願しようとする者は、様式第3に規定する転学願を提出し学長の許可を得なければならない。

(転学部)

第25条 転学部を願い出る者は、選考し各教授会の議を経て、学長がこれを許可する。

2 転学部について必要な事項は、別に規程で定める。

(留学)

第26条 外国の大学又は短期大学で修学することを志願する者は、様式第4に規定する留学願を提出し学長の許可を得なければならない。

2 第36条の規定は、前項の留学の場合に準用する。

3 第1項の許可を得て留学した期間は、第11条に定める在学年限に含めることができる。

(願い出による退学)

第27条 病気その他の事由により退学しようとする者は、様式第5に規定する退学願を提出し学長の許可を得なければならない。

(除籍)

第28条 次の各号の一に該当する者は、教授会の議を経て、学長が除籍する。

(1) 第11条に定める在学年限を超えた者

(2) 第22条第2項に定める休学期間を超えてなお修学できない者

(3) 長期間にわたり行方不明の者

(4) 学費の納付を怠り、催促してもなお納付しない者

第5章 教育課程及び履修方法等

(授業科目)

第29条 授業科目は、基礎教育科目及び専門教育科目とする。

2 授業科目の種類及び単位数等は、別表第1及び第5のとおりとする。

(単位の計算方法)

第30条 各授業科目の単位は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成すること

を標準とし、次の基準により計算する。

- (1) 講義及び演習については、15時間の授業をもって1単位とする。
 - (2) 実験、実習及び実技については、30時間の授業をもって1単位とする。
- 2 各授業科目の授業は、15週にわたる期間を単位として行う。ただし、学長が本学で教育上特別の必要があると認められるときは、教授会の議を経て、これらの期間より短い特定の期間において授業を行うことができる。

(履修方法)

第31条 学生は、所属する学部及び学科の所定の授業科目を履修しなければならない。

- 2 学生は、当該年度又は当該学期に履修する授業科目を選択し、指定期間内に所定の方法により履修科目を届出なければならない。
- 3 履修について必要な事項は、別に規程で定める。

(単位修得等の認定)

第32条 単位修得の認定その他授業科目履修の認定は、試験その他の審査により行う。

- 2 試験及び審査の方法について必要な事項は、別に規程で定める。

(第1年次に入学した者の既修得単位の認定)

第33条 本学の第1年次に入学した者が大学又は短期大学を卒業又は中途退学している場合、本学で教育上有益と認めるときは、教授会の議を経て、学長が既に修得した単位から、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目について、合計30単位を超えない範囲において、本学で修得したものとして認定することができる。

(成績の評価)

第34条 授業科目の成績は、一般講義科目は、A+、A、B、C、Fの5段階、ゼミナール科目はP、Fの2段階の評語をもって表示する。

- 2 表示した成績は、Fを不合格としその他を合格とする。
- 3 第33条、第35条及び第36条により認定された授業科目の成績は、認定(N)の評語をもって表示する。
- 4 成績評価について必要な事項は、別に規程で定める。

(他学部科目の履修)

第35条 学生は、他の学部開設されている授業科目のうち定められた科目を、24単位を超えない範囲において履修することができる。ただし、履修を希望する者は、あらかじめ学部長の許可を得なければならない。

- 2 前項の履修により修得した単位は、卒業に必要な修得単位数に算入することができる。

(他の大学の授業科目の履修)

第36条 学生は、他の大学、短期大学又は外国の大学との協議に基づき、授業科目を履修又は外国の大学に留学することができる。

- 2 前項の規定により履修した授業科目について修得した単位は、教授会の議を経て、学長が60単位を限度として認定することができる。
- 3 本学を休学時に他の大学、短期大学又は外国の大学で修得した単位の認定については、別表第2に掲げる単位認定料を徴収する。

(教育職員免許状取得のための課程)

第37条 本学に教育職員免許状取得のための課程を置く。

- 2 本学において資格の取得できる教育職員免許状の種類及び免許教科は、別表第3のとおりとする。
- 3 教育職員免許状を得ようとする者は、別表第4に定める「教科に関する基礎及び専門科目」及び別表第5に定める「教職に関する科目」を履修しなければならない。
- 4 別表第5に定める「教職に関する科目」は、卒業に必要な単位数に算入することができない。

第6章 進級、卒業及び学位

(進級)

第38条 別表第1に定める所定の要件を満たした者は、教授会の議を経て、学長が進級を認める。

(卒業)

第39条 本学に4年以上在学し、別表第1に定める所定の単位数以上を修得した者は、教授会の議を経て、学長が卒業を認める。

2 当該学部の学生として3年以上在学した者が、別表第1に定める所定の単位数以上を優秀な成績で修得したと認めるとき、前項の規定にかかわらず教授会の議を経て、学長が早期卒業として認めることができる。

3 早期卒業について必要な事項は、別に規程で定める。

(学位)

第40条 学長は、卒業を認めた者に次の学位を授与し、「卒業証書・学位記」を交付する。

(1)経営情報学部 学士(経営学)

(2)グローバルスタディーズ学部 学士(グローバルスタディーズ学)

第7章 賞罰

(表彰)

第41条 人物及び学業の優秀な者又は本学の学生として表彰に値する功績があった場合は、教授会の議を経て、学長が表彰する。

(懲戒)

第42条 本学則若しくは本学で定める諸規則に違反した者又はその他学生としての本分に反する行為があった場合は、教授会の議を経て、学長が懲戒する。

2 前項の懲戒の種類は、退学、停学及び訓告とする。

3 懲戒について必要な事項は、別に規程で定める。ただし、定めた規程は、本学則と同様の取扱で公開する。

第8章 学費

(学費の種類及び額)

第43条 学生は、学年毎に授業料その他所定の学費を納付しなければならない。

2 学費の種類及びその額は、別表第2のとおりとする。

(学費の納付)

第44条 授業料は、年額の二分の一ずつを次の2学期に分けて納付しなければならない。

(1)春学期(4月から9月まで)：納期 4月中

(2)秋学期(10月から翌年3月まで)：納期10月中

2 施設費(維持費)及び図書教材費は、学年始めの月に一括して納付しなければならない。

(復学等の場合の学費)

第45条 春学期又は秋学期の中途において復学又は入学した者は、復学又は入学した月から当該期末までの授業料並びに当学年度分の施設費(維持費)及び図書教材費が未納の場合は、これ等を含め一括して復学又は入学した月に納付しなければならない。

(退学等の場合の学費)

第46条 春学期又は秋学期の途中で退学又は除籍された者の当該学期分の学費は、徴収する。

2 停学期間中の学費は、徴収する。

(休学の場合の学費)

第47条 休学を許可された者又は命ぜられた者は、休学期間が1学期以上にわたる場合においてその学期分

の授業料を免除する。ただし、休学在籍料として別表第2に定める額を納付しなければならない。
(研究生等の学費)

第48条 研究生、聴講生及び特別聴講学生の入学検定料、入学金及び授業料等の学費については、別に定める。

(既納の学費)

第49条 既納の入学検定料、入学金及び授業料等の学費は、返還しない。ただし、入学式までに入学を辞退した場合には、既納した入学手続納付金のうち、入学金を除く金額を返還する。

第9章 奨学

(奨学)

第50条 能力があるにもかかわらず経済的理由によって就学が困難な者及び特に学力が優れている者に対して、奨学の方法を講ずることができる。

2 奨学の方法は、奨学金の給付又は貸与とする。

3 奨学について必要な事項は、別に規程で定める。

第10章 研究生、特別聴講学生、科目等履修生、聴講生及び外国人留学生

(研究生)

第51条 本学の特定の専門事項について、研究することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が研究生として入学を許可することができる。

2 研究生について必要な事項は、別に規程で定める。

(特別聴講学生)

第52条 他の大学又は外国の大学の学生で、協議に基づき本学の特定の授業科目を履修することを志願する者がいるときは、学長が特別聴講学生として入学を許可することができる。

2 特別聴講学生について必要な事項は、別に規程で定める。

(科目等履修生)

第53条 本学の特定の授業科目を履修することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が科目等履修生として入学を許可することができる。

2 科目等履修生について必要な事項は、別に規程で定める。

(聴講生)

第54条 本学の特定の授業科目を聴講することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が聴講生として入学を許可することができる。

2 聴講生について必要な事項は、別に規程で定める。

(外国人留学生)

第55条 外国人であって、外国において通常の過程による12年の学校教育課程を修了した者又はこれと同等以上の資格ある者が、本学に入学を志願するときは、日本政府、日本政府の承認した外国政府若しくは日本駐在の外国公館の発行した身分証明書又はこれに準ずる証明書のある者に限り、選考し学長が入学を許可することができる。

2 外国人留学生について必要な事項は、別に規程で定める。

第11章 公開講座

(公開講座)

第56条 地域社会の発展に寄与し、社会人の教養を高め、文化の向上に資するため、本学に公開講座を開設することができる。

2 公開講座について必要な事項は、別に規程で定める。

第12章 寄付講座

(寄付講座)

第57条 学外の機関等から授業科目の運営に必要な経費の寄付を受け、本学の教育研究に資するため、本学に寄付講座を開設することができる。

2 寄付講座について必要な事項は、別に規程で定める。

附 則

1 この学則は、令和3年4月1日から施行する。

19. 多摩大学学生懲戒規程(抜粋)

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則(以下「学則」という。)第41条の規定に基づき学生の懲戒について必要な事項を定めることを目的とする。

(懲戒の定義)

第2条 懲戒対象者は、学則に規定する学部学生、研究生、特別聴講生、科目等履修生、聴講生及び外国人留学生(以下「学生」という。)とする。

2 懲戒は、本学で学生の本分を全うさせるために、学校教育法及び学校教育法施行規則に基づき行う。

3 懲戒は、総合的に検討し教育的見地に基づき行う。

4 懲戒により学生に科す不利益は、懲戒目的を達成するため必要最小限とする。

(懲戒の種類)

第3条 学則第41条第2項で規定した懲戒の種類は、次の各号の一に該当する内容とする。

(1)退学は、学生としての身分を奪う事。

(2)停学は、無期又は有期としその期間の登校を禁止する事。

ア 停学の期間は、在学年限に含め修業年限に含めない。

イ 停学の期間が1ヶ月以下でかつ特別の事情がある場合は、学生委員会で審議し第7条に規定する学長の決定において修業年限に含めることができる。

ウ 有期停学は6ヶ月以下とする。

(3)訓告は、口頭及び文書により厳重な注意を行い、期限を定めて反省文の提出をさせる事。

(懲戒の基準)

第4条 前条に定める懲戒の基準は、次の各号の一に該当する内容とする。

(1)退学

ア 本学及び社会秩序を乱し、本学の教育研究活動を妨げる行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

イ 学内又は学外において重大な非違行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

ウ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

エ 本学が実施する試験等において、不正行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

オ その他退学を受けた者の行為を教唆若しくは幫助した場合

(2)停学

ア 本学及び社会秩序を乱し、本学の教育研究活動を妨げる行為を行った場合

イ 学内又は学外において悪質な非違行為を行った場合

ウ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合で悪質と判断した場合

エ 本学が実施する試験等において、悪質な不正行為を行った場合

オ その他懲戒処分をしても改善の見込みがない場合

(3)訓告

ア 学内又は学外において非違行為を行った場合

イ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合

ウ 本学が実施する試験等において、不正行為を行った場合

(審議)

第5条 学部長は、学生が懲戒の対象となりうる事項があったと認められるとき、学生委員会に調査を命ずる。

2 学生委員会は、事実関係の調査及び懲戒の種類を審議を行い、結果を教授会へ報告する。

(調査)

- 第6条 学生委員会は、当該学生及び関係者等から資料の提出を求め、事情及び意見を聴くことができる。
- 2 学生委員会は、当該学生に弁明の機会を与える。
 - 3 当該学生は、弁明の場において必要な証拠を提出し証人の喚問を求めることができる。また、当該学生は、補佐人を指名し補佐を受けることができる。
 - 4 当該学生が、弁明の場を正当な理由なく欠席したとき、弁明の権利を放棄したものとす。
 - 5 学生委員会は、懲戒処分決定前に謹慎を命ずることができる。ただし、謹慎の期間は、3ヶ月以内とする。
 - 6 謹慎は、当該学生の行為が第4条で定める懲戒基準に該当するとき行うことができる。
 - 7 謹慎期間は、停学期間に通算することができる。
 - 8 謹慎期間中は、本学の教育課程の履修登録、履修、試験等の受験及び課外活動へ参加することはできない。ただし、学部長が教育指導上必要と認めた場合は、参加ができる。
 - 9 謹慎期間中に休学又は退学を申し出た場合は、これを認めない。

(懲戒の決定及び解除)

- 第7条 懲戒は、教授会の議を経て、学長が行う。
- 2 懲戒は、様式第1に定める懲戒通知書に理由も添えて当該学生に通知する。ただし、有期停学の場合は、停学解除日も通知する。
 - 3 無期停学の解除を行う場合は、教授会の議を経て、学長が行う。学長は、決定により停学解除を当該学生に文書で通知する。

(再審査)

- 第8条 懲戒を受けた学生は、事実誤認、新事実の発見又はその他正当な理由があるとき、それらを示す資料を添えて文書にし、学長に再審査の申請を行うことができる。
- 2 再審査の申請は、懲戒通知書の決定日から1ヶ月以内とする。
 - 3 学長は、再審査を行うかどうか判断し教授会の議を経て決定する。
 - 4 学長は、再審査の必要があると決定したとき、学部長に再審査を命じる。
 - 5 学長は、再審査の必要がないと決定したとき、当該学生に文書で通知する。
 - 6 再審査の申請を行い学長が教授会の議を経て、懲戒の決定又は解除行うまでは、すでに決定された懲戒内容の変更はできない。
 - 7 再審査の調査は、第6条の規定を準用する。

(停学期間中の措置)

- 第9条 停学期間中は、当該学生が本学の教育課程の履修登録、履修、試験等の受験、及び課外活動へ参加することはできない。ただし、学部長が教育指導上必要と認めた場合は、この限りではない。
- 2 停学期間中は、当該学生に対して定期的な面談及び指導を行う。
 - 3 停学期間中に休学又は退学を申し出た場合は、これを認めない。

(事務)

- 第10条 学生課は、学生の懲戒についての庶務を担当する。

(規程の公開)

- 第11条 本規程は、学生の不利益等につながる重要な規程であることから、本学のホームページ、学生ハンドブック等に学則と同様の取扱で公開する。

附 則

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

20. 多摩大学履修規程(抜粋)

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則(以下「学則」という。)第31条、第32条及び第34条の規定に基づき、授業科目(以下「科目」という。)の履修、試験及び成績評価について必要な事項を定めることを目的とする。

(科目の履修)

第2条 学生は、学則第31条第2項の履修科目届により、履修しようとする科目を登録しなければならない。

2 登録した科目の変更又は追加は認めない。

3 学科・年次・クラスが指定された科目については、その指定に従い履修するものとする。ただし、科目担当者が特に認めた場合はこの限りでない。

4 同一科目を同一年度に重複して履修することはできない。ただし、教育課程表及び授業時間割表において指示する特定の科目についてはこの限りでない。

5 すでに単位を修得した科目を履修することはできない。

6 履修に関するその他の事項については、教育課程表、講義要綱及び時間割表に定める方法によるものとする。

(定期試験)

第3条 定期試験は、学期末に行う。

2 定期試験を受験することができる者は、履修科目届けを提出したものに限る。

3 受験できる科目は、登録した科目とする。

4 授業料その他の納付金の未納者は、受験することができない。

(追試験)

第4条 追試験は、定期試験を実施した科目(レポートにより実施した科目を除く。)を、病気その他やむを得ない理由により受験できなかった者に対し、本学が指定する日にこれを行うことができる。

2 追試験を希望する者は、医師の診断書等理由を証明するに足る書類を添え、原則として当該科目の試験日を含む3日以内(ただし、日曜日、祝日は除く。)にその申請をし、教務委員会の許可を得なければならない。

3 追試験を許可された者は、所定の期日までに追試験料を納付しなければならない。

(再試験)

第5条 卒業年次の学生及び進級年次の学生が、履修登録した科目のうち不合格になった科目に対し、再試験を実施することがある。

2 再試験についての必要な事項は、別に定める。

3 再試験を許可された者は、所定の期日までに再試験料を納付しなければならない。

(試験の実施)

第6条 第3条、第4条及び第5条の試験に関する事項は別に定める。

(臨時試験)

第7条 臨時試験は、各科目担当者が随時これを行うことがある。

(不正行為)

第8条 第3条、第4条及び第5条に定める試験において、不正行為を行なった者は多摩大学学生懲戒規程に基づき処分する。

2 受験中に答案を持ち出した者については、その受験科目を不合格とする。

(成績照会)

第10条 成績評価について疑問がある場合は、成績の照会を申出ることができる。

2 成績照会は、次学期授業開始後2週間以内に事務局担当窓口に出なければならない。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

21. 多摩大学経営情報学部履修細則

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学履修規程第11条の規定に基づき、経営情報学部における授業科目の履修について必要な事項を定めることを目的とする。

(履修上限)

第2条 各学期の履修上限単位数及び履修上限外科目は、別表第1のとおりとする。

(認定科目)

第3条 認定科目は、別表第2のとおりとする。

(細則の改廃)

第4条 この細則の改廃は、教務委員会の議を経て委員長が行う。

附 則

この細則は、令和4年4月1日から施行する。

別表第1

履修上限単位数・履修上限外科目【経営情報学部】

(1) 令和4(2022)年度入学生

各学期20単位まで履修登録することができる。ただし、前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップ I・II	A P 数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	教職に関する科目	立志特講 I～III
問題解決学特講 I～III	単位互換科目	ホームゼミ I～VIII

履修上限外科目のうち立志特講 I～III・問題解決学特講 I～III・ホームゼミ I～VIII以外は GPA 除外科目とする。

(2) 令和3(2021)年度入学生

各学期20単位まで履修登録することができる。ただし、前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップ I・II	A P 数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	教職に関する科目	立志特講 I～III
問題解決学特講 I～III	単位互換科目	ホームゼミ I～VIII

履修上限外科目のうち立志特講 I～III・問題解決学特講 I～III・ホームゼミ I～VIII以外は GPA 除外科目とする。

(3) 令和2(2020)年度入学生

各学期20単位まで履修登録することができる。ただし、前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップ I・II	A P 数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	教職に関する科目	立志特講 I～III
問題解決学特講 I～III	単位互換科目	ホームゼミ I～VIII

履修上限外科目のうち立志特講 I～III・問題解決学特講 I～III・ホームゼミ I～VIII以外は GPA 除外科目とする。

(4)平成31(2019)年度入学生

各学期20単位まで履修登録することができる。ただし、前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	A P 数学	Study Abroad Ⅰ～Ⅶ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目	立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目	ホームゼミⅠ～Ⅶ

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ・ホームゼミⅠ～Ⅶ以外はGPA除外科目とする。

(5)平成30(2018)年度入学生

各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	A P 数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とする。

(6)平成29(2017)年度入学生

各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	A P 数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とする。

(7)平成28(2016)年度入学生

各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	A P 数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とする。

別表第2

認定科目【経営情報学部】

(1)平成31(2019)年度以降入学生

認定科目		
インターンシップ I・II	A P 数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	単位互換科目	キャリア・デザイン IV

(2)平成30(2018)年度以前入学生

認定科目		
インターンシップ I・II	キャリア・デザイン II～IV	A P 数学
Study Abroad I～VIII	アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	単位互換科目

以上

22. 多摩大学早期卒業規程(抜粋)

(対象学生)

第2条 早期卒業の対象学生は、学則第38条第2項に規定する者とする。ただし、再入学、編入学及び転入学した学生又は教職課程科目の履修者は、対象とならない。

(早期卒業要件)

第5条 早期卒業の要件は、3年又は3年半在学して所定の科目を履修し、多摩大学履修規程に規定する卒業要件単位数以上を修得しなければならない。ただし、休学した期間は在学期間に含まれない。

2 早期卒業要件について必要な事項は、別に細則で定める。

(申請の取下げ)

第6条 早期卒業希望者は、卒業の1ヶ月前までに早期卒業申請を取下げることができる。

(卒業の時期)

第7条 早期卒業の時期は、春季入学生にあつては3年次の3月以降、秋季入学生にあつては3年次の9月以降とする。

附 則

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

23. 多摩大学経営情報学部早期卒業細則(抜粋)

(認定要件)

第2条 早期卒業の認定要件は、早期卒業規程第3条第1項に定めるもののほか、2年次終了時において、以下のすべての要件を満たしていなければならない。

(1)以下の単位を修得していること。

卒業に必要な必修・特別選択必修科目の単位の全てと卒業に必要な合計単位数の75%以上。(小数点以下の端数は切り上げとする)

(2)GPAが3.2以上であること。

(3)ホームゼミナールに所属し、担当教員の推薦を得ていること。ホームゼミナールに所属しない場合は専任教員2名の推薦状を得ていること。

(4)早期卒業の意志及び理由が明確であること。

(学習指導体制)

第3条 学習指導体制として、ホームゼミナール担当教員、教務委員長及びホームゼミナール担当教員が指名した教員1名(合計3名)又はホームゼミナール未所属の場合は教務委員長及び学生を推薦した専任教員2名(計3名)を配置する。

(早期卒業要件)

第4条 早期卒業の要件は、早期卒業規程第5条第1項に定めるもののほか、以下のすべての要件を満たしていなければならない。

(1)GPAが3.2以上であること。

(2)本学大学院の入学許可を得ていること。

(GPA)

第5条 成績評価の評定平均値(GPA)は、次の方法で算出する。

$$\{(4.0 \times A + \text{とPの修得単位数}) + (3.0 \times A \text{の修得単位数}) + (2.0 \times B \text{の修得単位数}) + (1.0 \times C \text{の修得単位数})\} \div \text{総履修登録単位数(「F」の単位数を含む)}$$

附 則

この細則は、平成26年10月1日から施行し、平成24年度入学生より適用する。

24. 多摩大学成績評価規程(抜粋)

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則第34条に基づき、成績評価について必要な事項を定めることを目的とする。

(GPA)

第2条 成績評価の評定平均値(GPA)は、次の方法で算出する。

$$\{(4.0 \times A + P \text{の修得単位数}) + (3.0 \times A \text{の修得単位数}) + (2.0 \times B \text{の修得単位数}) + (1.0 \times C \text{の修得単位数})\} \div \text{総履修登録単位数(「F」の単位数を含む)}$$

(卒業)

第3条 卒業判定にGPAを使用する場合、多摩大学早期卒業規程による。

(面談の実施)

第4条 成績不振者の基準は、各学期の修得単位数が4単位未満の者とし、成績不振者に対する履修指導面談、就学的意思確認面談は、各年度に1回以上行い、3月31日までに実施する。

(退学勧告)

第5条 5年を超えて在籍し、GPAが1.0以下、かつ修得単位数が60単位未満の学生については、就学的意思確認面談を実施し、必要に応じて退学勧告を行うものとする。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

25. 多摩大学奨学金規程(抜粋)

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則第49条に基づき、多摩大学(以下「大学」という。)に在籍する学生に対し、能力があるにもかかわらず経済的理由によって就学が困難な者及び特に学力が優れている者に対して、多摩大学奨学金(以下「奨学金」という。)の給付又は貸与について必要な事項を定めることを目的とする。

(奨学金の種類)

第2条 奨学金は、次の各号のいずれかに該当する種類とし、各別表に掲げる。

- (1) 特別給費生奨学金(別表第1)
- (2) 成績優秀者奨学金(別表第2)
- (3) 海外留学奨学金(別表第3)
- (4) 多摩チャレンジ奨学金(別表第4)

(選考)

第3条 奨学金受給者(以下「奨学生」という。)の選考は、各学部において奨学生審査委員会(以下「審査委員会」という。)が行い、学長に申請する。学長は、各学部教授会の議を経て理事長に推薦する。理事長は、奨学生及び奨学金支給額を決定する。

2 奨学生は、同一期間に複数の奨学金を重複して受給することができない。ただし、第2条第1項第3号に規定する海外留学奨学金は除く。

3 多摩大学私費外国人留学生授業料減免規程に基づき、減免を受けている者の奨学金の支給額は、授業料の金額を上限とする。ただし、第2条第1項第3号に規定する海外留学奨学金は除く。

4 各奨学金の選考区分については、各別表のとおりとする。

(審査委員会)

第4条 各審査委員会の構成及び運営については、各別表のとおりとする。

2 各審査委員会の庶務担当事務局部課については、各別表のとおりとする。

(支給額)

第5条 各奨学金の支給額は、各別表のとおりとする。

2 奨学金は、返還を求めない。ただし、審査時の事項に不正の事実が判明した場合は、支給された奨学金を直ちに返納しなければならない。

3 奨学金は、次の各号のいずれかにより支給する。

- (1) 学費の減免をもってこれに充てる。
- (2) 現金振込又は現金をもって支給する。

(支給の停止、保留)

第7条 学業成績、健康、その他の理由により休学若しくは留年した場合及び奨学生として選考された事由が消滅した場合は支給を停止する。

2 前項のほか奨学生に相応しくないと審査委員会が判断した場合には、学長經由理事長の了承を得て支給を停止または一時保留することができる。

3 審査委員会は、第1項又は第2項の規定によって停止又は保留されている奨学金支給の復活を申請することができる。

4 審査委員会は、第2項及び第3項の規定に係る審議を原則として3月及び9月に行う。

附 則

この規程は、令和3年4月1日から施行する。ただし、第2条第1項第2号(別表第2)については、令和2年12月1日から施行する。

別表第2

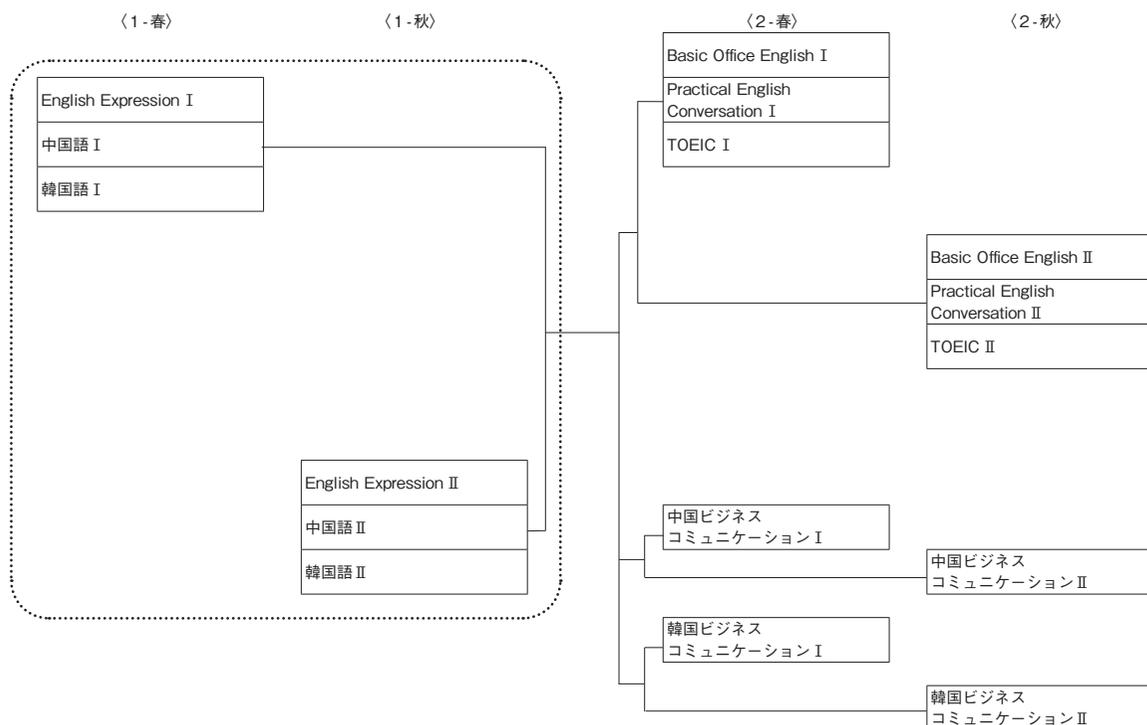
奨学金名	成績優秀者奨学金	
委員会名	成績優秀者奨学金奨学生審査委員会	
委員会構成	学部長、教務委員長、学生委員長、事務長、教務課長※各学部で行う。	
委員長(議長)	学部長	
委員会庶務事務局部課	教務課	
審査時期	5月及び11月	
審査方法	経営情報学部	(1)各学期毎、学年別成績が上位の者から順に候補者を選出する。ただし、当該学期学費未納者は、対象外とする。 (2)教職に関する授業科目を除く5科目以上の履修者とする。 (3)区分1の奨学生候補者選出については、以下とする。 ①評定平均が3.2以上の者 ②複数者が対象となった場合は、評定平均最上位の者 ③評定平均最上位の者が複数名の場合は、修得単位の多い者 ④修得単位数が同一の場合は、その者全員を区分1とする。 (4)区分1の候補者選出後、区分2の候補者は、区分1及び区分2の合計で各年次生毎に20名以内となるよう選出する。
		※特別給費生として奨学金を支給されている者は、原則対象外とする。
審査基準	学業及び成績が優秀で人物及び健康ともに優れ、他の模範になること。	

区分		1	2
奨学生数	経営情報学部	各学期毎に	各学期毎に
		1年次生 1名	1年次生 20名以内
		2年次生 1名	2年次生 20名以内
		3年次生 1名	3年次生 20名以内
		※区分1及び区分2の合計で各年次生毎に20名以内	
支給額	各学期分の授業料相当額	5万円	
支給期間	1学期間毎に現金又は現金振込で支給する。		
報告事項	なし		
備考	区分1の定員を超える人数分については区分2の支給額を加え、均等に配分する。 なお、均等に分配できない場合は、小数点を切り捨てる。		

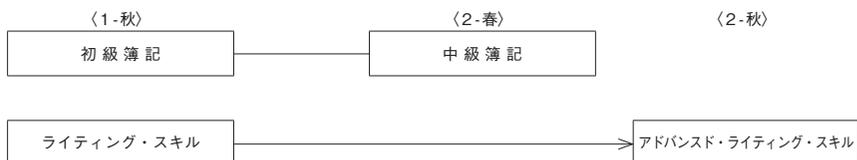
26. 前提科目一覧

2022年度 前提科目一覧

【語学系】



【その他】



※既に「文章伝達入門」（2018年度以前開講）の単位を修得している学生は、「アドバンスド・ライティング・スキル」を履修できます。

※上記科目以外に関しては、前提科目として特に定めておりませんが、単位修得を前提として講義を進めていく場合があります。シラバスをよく参照してください。

27. カリキュラム表(科目一覧)・
カリキュラムマップ・
カリキュラムマトリックス

多摩大学経営情報学部 2022 年度カリキュラム表

科目群	区分	1 年		2 年	
		春学期	秋学期	春学期	秋学期
産業 社会 科目群	必修	スタディースキル入門	ビジネススキル入門		
		多摩学 I			
	特別選択必修			特別講座 I	特別講座 II
	選択必修	グローバルヒストリー I	ITコミュニケーション入門	ITコミュニケーション入門	アドバンスド・ライティング・スキル
		ビジネス数学基礎	グローバルヒストリー II	アントレプレナーシップ論	グローバルヒストリー IV
			スポーツ・マネジメント論	グローバルヒストリー III	立志人物伝
			多摩学 II	サブカルチャー論	
	選択必修 (語学)	English Expression I	English Expression II	Basic Office English I	Basic Office English II
		韓国語 I	韓国語 II	English Expression I (再履修用)	English Expression I (再履修用)
		中国語 I	中国語 II	English Expression II (再履修用)	English Expression II (再履修用)
		日本語講座初級：留学生用	日本語講座中級 II：留学生用	Practical English Conversation I	Practical English Conversation II
		日本語講座中級 I：留学生用	日本語講座上級：留学生用	TOEIC I	TOEIC II
				韓国ビジネスコミュニケーション I	韓国ビジネスコミュニケーション II
				中国ビジネスコミュニケーション I	中国ビジネスコミュニケーション II
				ドイツ語 I	ドイツ語 I
			ドイツ語 II	ドイツ語 II	
			フランス語 I	フランス語 I	
		フランス語 II	フランス語 II		
ビジネス	選択必修		キャリア・デザイン入門	キャリア・デザイン I	キャリア・デザイン II
	選択	AP 数学	Study Abroad I～VII	インターンシップ I	インターンシップ I
		IT 活用法 I	アクティブ・ラーニング実践 I～VII	業界研究 I	業界研究 II
		Study Abroad I～VII	コンピュータ概論	スポーツ II	経営シミュレーションゲーム
		アクティブ・ラーニング実践 I～VII	スポーツ I	スポーツと健康	社会心理
		単位互換科目 I～V	単位互換科目 I～V	ビジネスコミュニケーション I	ビジネスコミュニケーション II
		経営学入門	法学(憲法)	産業社会特講(ポストコロナ時代をにらんで)	ビジネス法
		ミクロ経済学	マーケティングマネジメント論	産業社会特講(地域の歴史と偉人から教訓を学ぶ)	産業社会特講(企業を取り巻く環境の変化)
		ライフ・デザイン	マクロ経済学	産業社会特講(ビジョン・マネジメント論2022春)	産業社会特講(脅威と共栄の中国～変るビジネス環境)
			余暇マネジメント	産業社会特講(メディアの時代を生きる力)	
			産業社会特講(ジャーナリズム論)		
		産業社会特講(行動経済学)			
経営 情報 学 科 専 門 科 目	必修			経営情報論 I	経営情報論 II
		グローバルビジネス入門	IT ビジネス入門	IT 概論 I	経営思想史
	選択必修	地域ビジネス入門	グローバルビジネス入門	経営学概論	原価計算
			初級簿記	IT パスポート	財務会計
			地域ビジネス入門	中級簿記	ベンチャー企業論
				リーダーシップ論	経営科学
				IT 活用法 II	情報倫理
				Web デザイン I	IT 概論 II
				情報法	Web デザイン II
				クリエイティブデザイン I	クリエイティブデザイン II
				データサイエンス I	クリエイティブデザイン III
				データベース I	データサイエンス II
				ビジネス数学 I	データベース II
				プログラミング入門 I	ビジネス数学 II
				プログラミング入門 II	プログラミング入門 III
		マーケティング・リサーチ	マーケティング・データ分析 デザイン思考		
事業 構 想 学 科 専 門 科 目	必修			事業構想論 I	事業構想論 II
		グローバルビジネス入門	IT ビジネス入門	IT 概論 I	経営思想史
	選択必修	地域ビジネス入門	グローバルビジネス入門	経営学概論	原価計算
			初級簿記	IT パスポート	財務会計
			地域ビジネス入門	中級簿記	ベンチャー企業論
				リーダーシップ論	IT 概論 II
				国際関係論	NPO・NGO 論
				国際経済学	消費心理
				地域ビジネスプランニング	地域政策プランニング
				国際ビジネス論	ビジネス戦略
				アメリカ経済論	金融論
					ヨーロッパ経済論
					経営分析
					国際ビジネス論
					地域スポーツ論
演習 科目	必修	プレゼミ I	プレゼミ II	ホームゼミ I	ホームゼミ II
	選択		インターゼミ I～VII	インターゼミ I～VII	インターゼミ I～VII
教職 専門 科目 群			教育原理	教育課程総論	教育方法(ICTを活用した教育の理論及び方法含む)
			教職概論	教育制度論	生徒指導・進路指導論
			特別支援教育概論		特別活動・総合的な学習の時間の指導法

*経営情報学科学科専門科目の「選択必修科目」は事業構想学科学科専門科目の「選択科目」、事業構想学科学科専門科目の「選択必修科目」は経営情報学科学科専門科目の「選択科目」となります。

*ドイツ語 I、ドイツ語 II、フランス語 I、フランス語 II については、語学を選択必修(4 単位)には含まれません(選択必修として卒業要件単位には含まれます)。

3 年		4 年		区 分	科目群
春学期	秋学期	春学期	秋学期		
				必修	教 養 産 業 社 会 科 目 群
				特別選択必修	
	立志特講Ⅰ(2月集中)			選択必修	
	立志特講Ⅱ(2月集中)				
	立志特講Ⅲ(2月集中)				
				選択必修 (語学)	
キャリア・デザインⅢ	キャリア・デザインⅣ			選択必修	ビ ジ ネ ス
インターンシップⅡ	インターンシップⅡ			選 択	
教育心理学	教育相談				
業界研究Ⅲ	業界研究Ⅳ				
認知心理	ビジネスコミュニケーションⅣ				
サービス産業論					
ビジネスコミュニケーションⅢ					
				必修	
Webプログラミング	Webサービス開発			選 択 必 修	問 題 解 決 学 科 専 門 科 目 群
経営と意思決定	経営とセキュリティ				
コンピュータネットワーク活用	情報工学概論				
情報と職業	データサイエンスⅣ				
データサイエンスⅢ	先端情報技術概論				
情報ネットワーク					
データ分析実践					
	問題解決学特講Ⅰ(2月集中)			必修	
	問題解決学特講Ⅱ(2月集中)				
	問題解決学特講Ⅲ(2月集中)				
アジア経済論Ⅰ	アジア経済論Ⅱ			選 択	事 業 構 想 学 科 専 門 科 目 群
経営組織	韓国経済論				
国際公共政策	経済統計学				
事業デザイン論Ⅰ	現代メディア論				
地域観光論	事業デザイン論Ⅱ				
地域金融論	人材マネジメント論				
地域産業論	多国籍企業				
中国経済論	ビッグデータ活用法				
日本経営論	ロシア経済論				
ブランドマネジメント	日本経済論				
	問題解決学特講Ⅰ(2月集中)			必修	
	問題解決学特講Ⅱ(2月集中)				
	問題解決学特講Ⅲ(2月集中)				
ホームゼミⅢ	ホームゼミⅣ	ホームゼミⅤ	ホームゼミⅥ	必修	演 習 科 目 群
インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ	選 択	
ホームゼミⅦ～Ⅷ	ホームゼミⅦ～Ⅷ	ホームゼミⅦ～Ⅷ	ホームゼミⅦ～Ⅷ	教 職 専 門 科 目 群	
教育心理学	教育相談	教育実習	教育実習		
情報科教育法Ⅰ	情報科教育法Ⅱ		教職実践演習		

経営情報学部ディプロマ・ポリシー

中教審の答申（「学士課程教育の構築に向けて」2008年3月25日）において示された「学士力」の項目に準拠している

DP1	知識と理解【グローバル社会に対する理解】 基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処している専門的能力を体系的に修得する。
DP2	思考と判断【考え抜く力】 現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を
DP3	関心と意欲【社会の発展に貢献する力】 物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって周囲の人を動かしている巻き込み力、失敗を恐れずに粘り強く行動している実行力を身につけ、国際的ビジネスの場となる。



3つの人材像

グローバルビジネス

アジアダイナミズムに真正面から向き合える、プロジェクトマネジメント人材

地域ビジネス

地域の抱える課題を創造的に解決できる、地域イノベーション人材

ビジネスICT

顧客視点とマーケティング感覚を身につけた、ビジネスICT人材

DP4	表現と技能【役割 自分の意思をわ る状況把握力や
DP5	高い志【環境対応 社会における多 する。

専門領域

事業構想学科専門

学科共通

経営情報学科専門

	グローバル	ローカル	経営情報	情報デザイン	データサイエンス
4年次					
3年次	<ul style="list-style-type: none"> 日本経済論 経済統計学 アジア経済論Ⅰ・Ⅱ 中国経済論 韓国経済論 ロシア経済論 国際公共政策 多国籍企業 現代メディア論 	<ul style="list-style-type: none"> 地域観光論 地域産業論 地域金融論 事業デザイン論Ⅰ 事業デザイン論Ⅱ 	<ul style="list-style-type: none"> 経営組織 経営と意思決定 サービス産業論 日本経営論 認知心理 人材マネジメント論 ブランドマネジメント 	<ul style="list-style-type: none"> 情報ネットワーク 情報工学概論 経営とセキュリティ コンピュータネットワーク活用 Webサービス開発 Webプログラミング 情報と職業 先端情報技術概論 	<ul style="list-style-type: none"> ビッグデータ活用法 データサイエンスⅢ・Ⅳ データ分析実践
2年次	<ul style="list-style-type: none"> 国際経済学 金融論 グローバルヒストリーⅢ グローバルヒストリーⅣ アメリカ経済論 ヨーロッパ経済論 サブカルチャー論 	<ul style="list-style-type: none"> 地域政策プランニング 地域ビジネスプランニング 地域スポート論 NPO・NGO論 	<ul style="list-style-type: none"> ビジネス戦略 国際関係論 経営思想史 リーダーシップ論 国際ビジネス論 ITパスポート マーケティング・リサーチ 中級簿記 原価計算 財務会計 消費心理 経営分析 社会心理 	<ul style="list-style-type: none"> IT概論Ⅰ・Ⅱ WebデザインⅠ・Ⅱ クリエイティブデザインⅠ・Ⅱ・Ⅲ データベースⅠ・Ⅱ プログラミング入門Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 情報倫理 情報法 デザイン思考 	<ul style="list-style-type: none"> ビジネス数学Ⅰ・Ⅱ データサイエンスⅠ・Ⅱ マーケティング・データ分析 経営科学
	<p>専門コア科目</p> <ul style="list-style-type: none"> 事業構想論Ⅰ・Ⅱ 経営情報論Ⅰ・Ⅱ 特別講座Ⅰ・Ⅱ ホームゼミⅠ・Ⅱ 				
	<p>専門基礎科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ビジネス法 ミクロ経済学 マクロ経済学 経営学入門 経営学概論 IT活用法Ⅰ・Ⅱ グローバルビジネス入門 地域ビジネス入門 多摩学Ⅱ ITビジネス入門 経営シミュレーションゲーム 				
1年次	<ul style="list-style-type: none"> グローバルヒストリーⅠ グローバルヒストリーⅡ 		<ul style="list-style-type: none"> 初級簿記 マーケティングマネジメント論 	<ul style="list-style-type: none"> コンピュータ概論 	
	<p>特別選択科目</p> <ul style="list-style-type: none"> アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ Study AbroadⅠ～Ⅶ 				
	<p>教養基礎科目</p> <ul style="list-style-type: none"> 多摩学Ⅰ ビジネススキル入門 ビジネス数学基礎(AP数学含) スタディースキル入門 スポーツマネジメント論 プレゼミⅠ・Ⅱ English ExpressionⅠ・Ⅱ 法学(憲法) 				

学士力とディプロマ・ポリシーの関連について

DP1：学士力「知識・理解」

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解

DP2：学士力「統合的な学習経験と創造的思考力」

自らが立てた新たな課題を解決する能力

DP3：学士力「態度・志向性」

自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力

DP4：学士力「汎用的技能」

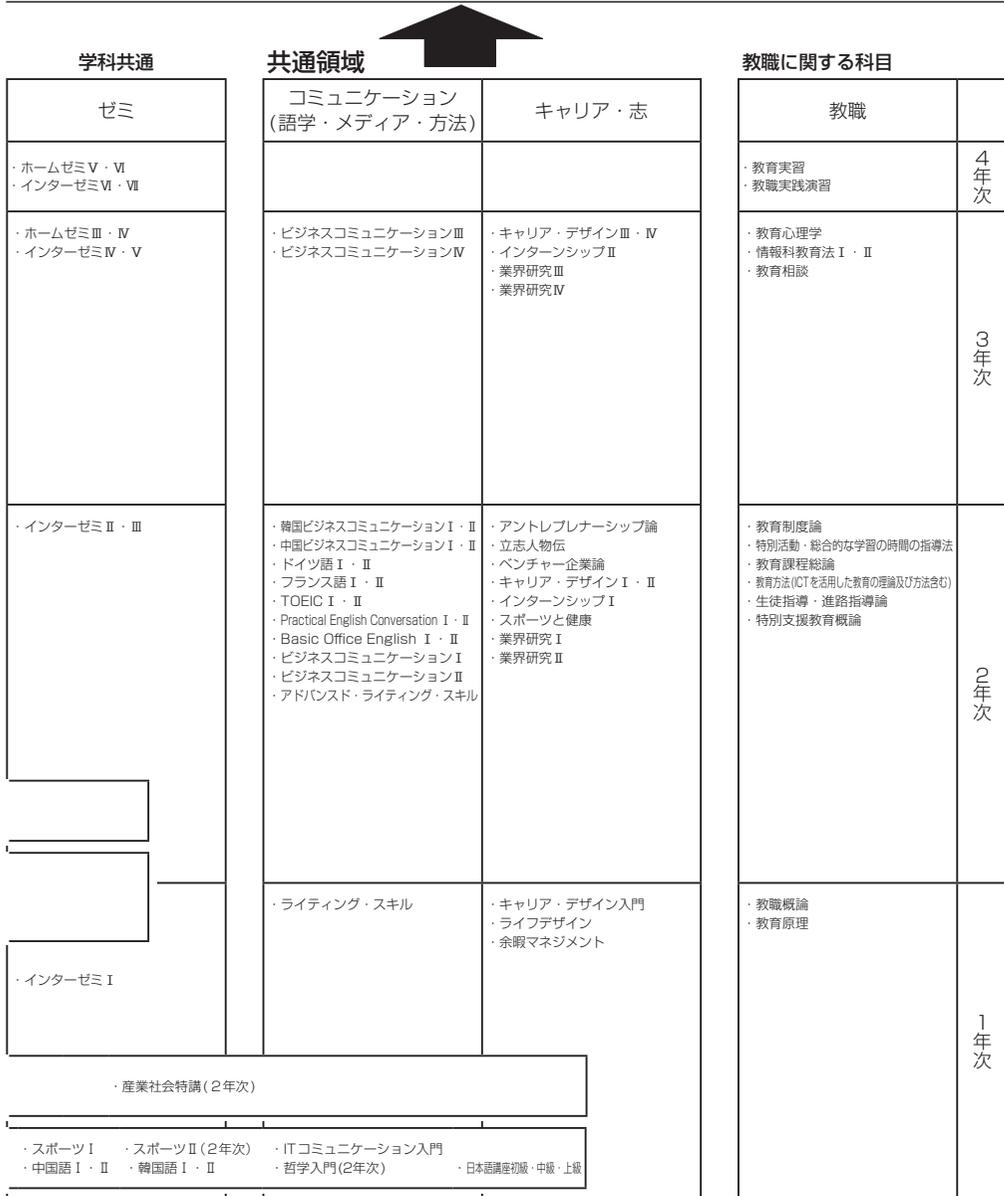
知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能

DP5：学士力「態度・志向性」

修得する。
活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるように

分担により組織目標の達成に貢献する力)
 かりやすく伝えることができる発信力や、聞き上手になって積極的に相手の意見を受け止められるようになる傾聴力、組織の中で自分がどのような役割を果たすべきなのが理解でき協調性を身につけることで、コミュニケーション能力を高め、所属する組織や社会の活動に貢献できるようにする。

能力と先進性]
 様々な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができる多様性や、社会のルールや約束を守ることができる規律性を身につけ、社会の発展に積極的に関与していくという高い志を確立



◎:ディプロマポリシーとの対応で最も身につけられる事項
○:ディプロマポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】	
産業社会科目群	必修科目	スタディースキル入門	1	2	◎			○		
		多摩学I	1	2	◎	○				
	特別選択必修科目	ビジネススキル入門	1	2	◎			○		
		特別講座I	2	2	◎		○			
	選択必修科目	特別講座II	2	2	◎		○			
		ITコミュニケーション入門	1	2	◎			○		
		アドバンスド・ライティング・スキル	2	2	○			◎		
		アントレプレナーシップ論	2	2			○		◎	
		グローバルヒストリーI	1	2	◎	○				
		グローバルヒストリーII	1	2	◎	○				
		グローバルヒストリーIII	2	2	◎				○	
		グローバルヒストリーIV	2	2	◎					
		サブカルチャー論	2	2	◎		○			
		スポーツ・マネジメント論	1	2	○	◎				
		多摩学II	1	2	◎	○				
		哲学入門	2	2	◎	○				
		ビジネス数学基礎	1	2	◎	○				
		ライティング・スキル	1	2	○			◎		
		立志人物伝	2	2						
		立志特講I	3	2				○		
		立志特講II	3	2				○		
		立志特講III	3	2				○		
		選択必修科目(語学)	Basic Office English I	2	2	○			◎	
			Basic Office English II	2	2	○			◎	
	English Expression I		1	2	○			◎		
	English Expression II		1	2	○			◎		
	Practical English Conversation I		2	2		○		◎		
	Practical English Conversation II		2	2		○		◎		
	TOEIC I		2	2	◎			○		
	TOEIC II		2	2	◎			○		
	ドイツ語I		2	2						
	ドイツ語II		2	2						
	フランス語I		2	2						
	フランス語II		2	2						
	韓国ビジネスコミュニケーションI		2	2	○			◎		
	韓国ビジネスコミュニケーションII		2	2	○			◎		
	韓国語I		1	2	◎			○		
	韓国語II		1	2	◎			○		
	中国ビジネスコミュニケーションI		2	2				◎	○	
	中国ビジネスコミュニケーションII		2	2				◎	○	
	中国語I		1	2						
	中国語II		1	2						
	日本語講座初級	1	2	○			◎			
	日本語講座上級	1	2				◎	○		
	日本語講座中級I	1	2				◎			
	日本語講座中級II	1	2				◎			
	選択必修科目	キャリア・デザイン入門	1	2	○				◎	
		キャリア・デザインI	2	2	◎		○			
		キャリア・デザインII	2	2	◎		○			
		キャリア・デザインIII	3	2	◎		○			
キャリア・デザインIV		3	2	◎		○				
ビジネス		AP数学	1	2	◎	○				
		IT活用法I	1	2	○	◎				
		Study Abroad I	1	2	◎	○				
		Study Abroad II	1	2	◎	○				
		Study Abroad III	1	2	◎	○				
		Study Abroad IV	1	2	◎	○				
		Study Abroad V	1	2	◎	○				
		Study Abroad VI	1	4	◎	○				
		Study Abroad VII	1	4	◎	○				
		Study Abroad VIII	1	4	◎	○				
		アクティブ・ラーニング実践I	1	2		◎	○			
		アクティブ・ラーニング実践II	1	2		◎	○			
		アクティブ・ラーニング実践III	1	2		◎	○			
		アクティブ・ラーニング実践IV	1	2		◎	○			
		アクティブ・ラーニング実践V	1	2		◎	○			
		アクティブ・ラーニング実践VI	1	4		◎	○			
		アクティブ・ラーニング実践VII	1	4		◎	○			
		アクティブ・ラーニング実践VIII	1	4		◎	○			
		インターンシップI	2	2	◎		○			
		インターンシップII	2	2	◎		○			
業界研究I	2	2			○		◎			
業界研究II	2	2								
業界研究III	3	2								
業界研究IV	3	2								
教育心理学	3	2	○		◎					

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】			
産業社会科 目群	ビジネス	選択科目	教育相談	3	2	◎	○					
			経営シミュレーションゲーム	2	2	○	◎					
			コンピュータ概論	1	2	◎	◎					
			サービス産業論	3	2	◎	○					
			産業社会特講(企業を取り巻く環境の変化)	2	2	○		◎				
			産業社会特講(ポストコロナ時代をにらんで)	2	2	◎	○					
			産業社会特講(地域の歴史と偉人から教訓を学ぶ)	2	2	○			◎			
			産業社会特講(ビジョン・マネジメント論2022春)	2	2				○	◎		
			産業社会特講(メディアの時代を生きる力)	2	2		◎	○				
			産業社会特講(脅威と共栄の中国~変るビジネス環境)	2	2	◎		○				
			産業社会特講(ジャーナリズム論)	2	2							
			産業社会特講(行動経済学)	2	2							
			社会心理	2	2	◎		○				
			スポーツI	1	2							
			スポーツII	2	2							
			スポーツと健康	2	2	◎		○				
			単位互換科目I	1	2							
			単位互換科目II	1	2							
			単位互換科目III	1	2							
			単位互換科目IV	1	2							
			単位互換科目V	1	2							
			認知心理	3	2	○		◎				
			ビジネスコミュニケーションI	2	2							
			ビジネスコミュニケーションII	2	2					○		
			ビジネスコミュニケーションIII	3	2							
			ビジネスコミュニケーションIV	3	2							
			ビジネス法	2	2	◎		○				
			法学(憲法)	1	2	◎		○				
			マーケティングマネジメント論	1	2	○		◎				
			経営学入門	1	2	◎		○				
			マクロ経済学	1	2	○		◎				
			ミクロ経済学	1	2	◎		○				
			余暇マネジメント	1	2	◎		○				
			ライフ・デザイン	1	2	◎		○				
			問題解決学 科目群	経営情報学 科専門科目	必修科目	経営情報論I	2	2	◎		○	
						経営情報論II	2	2	◎		○	
						IT活用法I	2	2	◎		○	
						IT概論I	2	2	◎		○	
						IT概論II	2	2	◎		○	
						ITパスポート	2	2	◎		○	
						ITビジネス入門	1	2	◎			○
						Webサービス開発	3	2	◎		○	
						WebデザインI	2	2	◎			○
						WebデザインII	2	2	◎		○	
						Webプログラミング	3	2	◎		○	
						クリエイティブデザインI	2	2			○	◎
						クリエイティブデザインII	2	2			○	◎
クリエイティブデザインIII	2	2				○		◎				
グローバルビジネス入門	1	2				○		◎				
経営科学	2	2				○		◎				
経営学概論	2	2				○		◎				
経営思想史	2	2				◎		○				
経営と意思決定	3	2				◎		○				
経営とセキュリティ	3	2				◎		○				
原価計算	2	2				◎		○				
コンピュータネットワーク活用	3	2				◎		○				
財務会計	2	2				○		◎				
情報工学概論	3	2				◎		○				
情報と職業	3	2				◎		○				
情報ネットワーク	3	2				◎		○				
情報法	2	2				◎		○				
情報倫理	2	2				◎		○				
初級簿記	1	2				○		◎				
地域ビジネス入門	1	2				◎		○				
中級簿記	2	4				○		◎				
データサイエンスI	2	2				◎		○				
データサイエンスII	2	2				○		◎				
データサイエンスIII	3	2						◎	○			
データサイエンスIV	3	2				◎		○				
データ分析実践	3	2				◎		○				
データベースI	2	2				◎		○				
データベースII	2	2				◎		○				
ビジネス数学I	2	2				◎		○				
ビジネス数学II	2	2				◎		○				
プログラミング入門I	2	2						○	◎			
プログラミング入門II	2	2						○	◎			
プログラミング入門III	2	2						◎	○			

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】	
問題解決学 科目群	経営情報学 科専門科目	ベンチャー企業論	2	2			◎		○	
		マーケティング・データ分析	2	2	◎			○		
		マーケティング・リサーチ	2	2		◎		○		
		先端情報技術概論	3	2	◎		○			
		デザイン思考	2	2		◎		○		
		問題解決学特講I	3	2			◎		○	
		問題解決学特講II	3	2			◎		○	
		問題解決学特講III	3	2			◎		○	
		リーダーシップ論	2	2						
		アジア経済論I	3	2	○	◎				
		アジア経済論II	3	2	◎		○			
		アメリカ経済論	2	2						
		NPO・NGO論	2	2	◎	○				
		韓国経済論	3	2	○		◎			
		金融論	2	2	◎		○			
		経営組織	3	2	◎	○				
		経済統計学	3	2						
		現代メディア論	3	2	○	◎				
		国際関係論	2	2			◎			○
		国際経済学	2	2	◎			○		
	国際公共政策	3	2							
	国際ビジネス論	2	2	◎			○			
	消費心理	2	2	◎	○					
	事業デザイン論I	3	2	○	◎					
	事業デザイン論II	3	2			○	◎			
	事業構想論I	2	2	◎			○			
	事業構想論II	2	2	◎			○			
	人材マネジメント論	3	2							
	多国籍企業	3	2							
	地域観光論	3	2	◎	○					
	地域金融論	3	2	○		◎				
	地域産業論	3	2	○	◎					
	地域スポーツ論	2	2							
	地域政策プランニング	2	2	◎	○					
	地域ビジネスプランニング	2	2	◎	○					
	中国経済論	3	2	◎			○			
	日本経営論	3	2							
	日本経済論	3	2							
	ビジネス戦略	2	2							
	ビッグデータ活用法	3	2			◎	○			
	ブランドマネジメント	3	2			◎	○			
	ヨーロッパ経済論	2	2							
	ロシア経済論	3	2	◎	○					
	経営分析	2	2	◎	○					
	演習科目	必修科目	プレゼミI	1	2			◎	○	
			プレゼミII	1	2			○	◎	
			ホームゼミI	2	2					
			ホームゼミII	2	2					
			ホームゼミIII	2	2					
			ホームゼミIV	2	2					
ホームゼミV		2	2							
ホームゼミVI		2	2							
選択科目		インターゼミI	1	2		◎	○			
		インターゼミII	1	2		◎	○			
		インターゼミIII	1	2		◎	○			
		インターゼミIV	1	2		◎	○			
		インターゼミV	1	2		◎	○			
		インターゼミVI	1	2		◎	○			
	インターゼミVII	1	2		◎	○				
	ホームゼミVII	2	2							
ホームゼミVIII	2	2								
教職専門 科目群	教職に関する科目	教育課程総論	2	1	◎	○				
		教育原理	1	2	◎				○	
		教育実習	4	3				◎	○	
		教育制度論	2	2	◎	○				
		教育方法(ICTを活用した教育の理論及び方法含む)	2	2	◎			○		
		教職概論	1	2	◎		○			
		教職実践演習	4	2			○	◎		
		情報科教育法I	3	2	○			◎		
		情報科教育法II	3	2	○			◎		
		生徒指導・進路指導論	2	2				○	○	
		特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2	2			◎	○		
		特別支援教育概論	2	1	◎	○				

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
 ○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】
産業社会科目群	必修科目	スタディースキル入門	1	2	◎			○	
		多摩学I	1	2	◎	○			
	特別選択必修科目	ビジネススキル入門	1	2	◎			○	
		特別講座I	2	2	◎		○		
	選択必修科目	特別講座II	2	2	◎		○		
		ITコミュニケーション入門	1	2	◎			○	
		アドバンスド・ライティング・スキル	2	2	○			◎	
		アントレプレナーシップ論	2	2			○		◎
		グローバルヒストリーI	1	2	◎	○			
		グローバルヒストリーII	1	2	◎	○			
		グローバルヒストリーIII	2	2	◎				○
		グローバルヒストリーIV	2	2	◎				
		サブカルチャー論	2	2	◎		○		
		スポーツ・マネジメント論	1	2	○	◎			
		多摩学II	1	2	◎	○			
		哲学入門	2	2	◎	○			
		ビジネス数学基礎	1	2	◎	○			
		ライティング・スキル	1	2	○			◎	
		立志人物伝	2	2					
		立志特講I	3	2				○	◎
		立志特講II	3	2				○	◎
		立志特講III	3	2				○	◎
	選択必修科目(語学)	Basic Office English I	2	2	○			◎	
		Basic Office English II	2	2	○			◎	
		English Expression I	1	2	○			◎	
		English Expression II	1	2	○			◎	
		Practical English Conversation I	2	2		○		◎	
		Practical English Conversation II	2	2		○		◎	
		TOEIC I	2	2	◎			○	
		TOEIC II	2	2	◎			○	
		ドイツ語I	2	2					
		ドイツ語II	2	2					
		フランス語I	2	2					
		フランス語II	2	2					
		韓国ビジネスコミュニケーションI	2	2	○			◎	
		韓国ビジネスコミュニケーションII	2	2	○			◎	
		韓国語I	1	2	◎			○	
		韓国語II	1	2	◎			○	
		中国ビジネスコミュニケーションI	2	2				◎	○
		中国ビジネスコミュニケーションII	2	2				◎	○
		中国語I	1	2					
	中国語II	1	2						
	日本語講座初級	1	2	○			◎		
	日本語講座上級	1	2				◎	○	
	日本語講座中級I	1	2				◎		
	日本語講座中級II	1	2				◎		
	選択必修科目	キャリア・デザイン入門	1	2	○				◎
		キャリア・デザインI	2	2	◎		○		
		キャリア・デザインII	2	2	◎		○		
		キャリア・デザインIII	3	2	◎		○		
キャリア・デザインIV		3	2	◎		○			
選択必修科目		AP数学	1	2	◎	○			
		IT活用法I	1	2	○	◎			
		Study Abroad I	1	2	◎	○			
		Study Abroad II	1	2	◎	○			
		Study Abroad III	1	2	◎	○			
		Study Abroad IV	1	2	◎	○			
		Study Abroad V	1	2	◎	○			
		Study Abroad VI	1	4	◎	○			
		Study Abroad VII	1	4	◎	○			
		Study Abroad VIII	1	4	◎	○			
		アクティブ・ラーニング実践I	1	2		◎	○		
		アクティブ・ラーニング実践II	1	2		◎	○		
		アクティブ・ラーニング実践III	1	2		◎	○		
		アクティブ・ラーニング実践IV	1	2		◎	○		
		アクティブ・ラーニング実践V	1	2		◎	○		
アクティブ・ラーニング実践VI		1	4		◎	○			
アクティブ・ラーニング実践VII		1	4		◎	○			
アクティブ・ラーニング実践VIII		1	4		◎	○			
インターンシップI		2	2	◎		○			
インターンシップII		2	2	◎		○			
業界研究I		2	2			○		◎	
業界研究II		2	2						
業界研究III	3	2							
業界研究IV	3	2							
教育心理学	3	2	○		◎				

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】
産業社会科目群	ビジネス	選択科目	教育相談	3	2	◎	○		
			経営シミュレーションゲーム	2	2	◎	◎		
			コンピュータ概論	1	2	◎	○		
			サービス産業論	3	2	◎	○		
			産業社会特講(企業を取り巻く環境の変化)	2	2	○		◎	
			産業社会特講(ポストコロナ時代をにらんで)	2	2	◎	○		
			産業社会特講(地域の歴史と偉人から教訓を学ぶ)	2	2	○			◎
			産業社会特講(ビジョン・マネジメント論2022春)	2	2			○	◎
			産業社会特講(メディアの時代を生きる力)	2	2	◎	○		
			産業社会特講(脅威と共栄の中国~変るビジネス環境)	2	2	◎	○		
			産業社会特講(ジャーナリズム論)	2	2				
			産業社会特講(行動経済学)	2	2				
			社会心理	2	2	◎		○	
			スポーツI	1	2				
			スポーツII	2	2				
			スポーツと健康	2	2	◎		○	
			単位互換科目I	1	2				
			単位互換科目II	1	2				
			単位互換科目III	1	2				
			単位互換科目IV	1	2				
			単位互換科目V	1	2				
			認知心理	3	2	○	◎		
			ビジネスコミュニケーションI	2	2				○
			ビジネスコミュニケーションII	2	2				◎
			ビジネスコミュニケーションIII	3	2				
			ビジネスコミュニケーションIV	3	2				
			ビジネス法	2	2	◎	○		
			法学(憲法)	1	2	◎	◎		
			マーケティングマネジメント論	1	2	○	◎		
			経営学入門	1	2	◎	○		
マクロ経済学	1	2	○	◎					
ミクロ経済学	1	2	◎		○				
余暇マネジメント	1	2	◎		○				
ライフ・デザイン	1	2	◎	○					
問題解決学科目群	事業構想学科専門科目	必修科目	事業構想論I	2	2	◎	○		
		事業構想論II	2	2	◎	○			
		選択必修科目	IT概論I	2	2	◎	○		
			IT概論II	2	2	◎	○		
			ITパスポート	2	2	◎	○		
			ITビジネス入門	1	2	◎		○	
			アジア経済論I	3	2	○	◎		
			アジア経済論II	3	2	◎		○	
			アメリカ経済論	2	2				
			NPO・NGO論	2	2	◎	○		
			韓国経済論	3	2	○		◎	
			金融論	2	2	◎		○	
			グローバルビジネス入門	1	2	○		◎	
			経営学概論	2	2	○	◎		
			経営思想史	2	2	◎	○		
			経営組織	3	2	◎	○		
			経済統計学	3	2				
			原価計算	2	2	◎	○		
			現代メディア論	3	2	○	◎		
			国際関係論	2	2	◎			○
			国際経済学	2	2	◎		○	
			国際公共政策	3	2				
			国際ビジネス論	2	2	◎		○	
			財務会計	2	2	○	◎		
			消費心理	2	2	◎	○		
			初級簿記	1	2	○	◎		
			事業デザイン論I	3	2	○	◎		
			事業デザイン論II	3	2	○	◎		
			人材マネジメント論	3	2				
			多国籍企業	3	2				
			地域観光論	3	2	◎	○		
			地域金融論	3	2	○		◎	
			地域産業論	3	2	○	◎		
			地域スポーツ論	2	2				
			地域政策プランニング	2	2	◎	○		
			地域ビジネスプランニング	2	2	◎	○		
			地域ビジネス入門	1	2	◎	○		
			中級簿記	2	4	○	◎		
			中国経済論	3	2	◎		○	
			日本経営論	3	2				
日本経済論	3		2						
ビジネス戦略	2	2							
ビッグデータ活用法	3	2		◎	○				
ブランドマネジメント	3	2		◎	○				

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
 ○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】	
問題解決学科目群	選択必修科目	ベンチャー企業論	2	2			◎		○	
		問題解決学特講I	3	2			◎		○	
		問題解決学特講II	3	2			◎		○	
		問題解決学特講III	3	2			◎		○	
		ヨーロッパ経済論	2	2						
		リーダーシップ論	2	2						
		ロシア経済論	3	2		◎	○			
		経営分析	2	2		◎	○			
		IT活用法I	2	2		◎	○			
		Webサービス開発	3	2		◎	○			
		WebデザインI	2	2		◎	○		○	
		WebデザインII	2	2		◎	○			
		Webプログラミング	3	2		◎	○			
		クリエイティブデザインI	2	2				○	◎	
		クリエイティブデザインII	2	2				○	◎	
	クリエイティブデザインIII	2	2		○	◎				
	選択科目	経営科学	2	2		○	◎			
		経営情報論I	2	2		◎		○		
		経営情報論II	2	2		◎	○			
		経営と意思決定	3	2			◎		○	
		経営とセキュリティ	3	2		◎	○			
		コンピュータネットワーク活用	3	2		◎	○			
		情報工学概論	3	2		◎	○			
		情報と職業	3	2		◎	○			
		情報ネットワーク	3	2		◎	○			
		情報倫理	2	2			◎	○		
		情報法	2	2		◎	○			
		データサイエンスI	2	2		◎	○			
		データサイエンスII	2	2		○	◎			
		データサイエンスIII	3	2			◎	○		
		データサイエンスIV	3	2		◎	○			
		データ分析実践	3	2			◎		○	
		データベースI	2	2		◎			○	
		データベースII	2	2		◎			○	
		ビジネス数学I	2	2		◎	○			
		ビジネス数学II	2	2		◎	○			
		プログラミング入門I	2	2			○		◎	
		プログラミング入門II	2	2		◎	○			
		プログラミング入門III	2	2		◎	○		○	
		マーケティング・データ分析	2	2		◎			○	
		マーケティング・リサーチ	2	2			◎		○	
		先端情報技術概論	3	2		◎		○		
		デザイン思考	2	2			◎		○	
		必修科目	プレゼミI	1	2				◎	○
			プレゼミII	1	2				○	◎
			ホームゼミI	2	2					
			ホームゼミII	2	2					
			ホームゼミIII	2	2					
			ホームゼミIV	2	2					
			ホームゼミV	2	2					
			ホームゼミVI	2	2					
	選択科目		インターゼミI	1	2		◎		○	
			インターゼミII	1	2		◎		○	
			インターゼミIII	1	2		◎		○	
			インターゼミIV	1	2		◎		○	
インターゼミV			1	2		◎		○		
インターゼミVI			1	2		◎		○		
インターゼミVII			1	2		◎		○		
ホームゼミVII		2	2							
ホームゼミVIII	2	2								

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

28.2022年度 経営情報学部 実務経験のある教員等による授業科目一覧

教員区分	教員氏名	科目名	単位数	実務経験の内容等
金 美徳	アジア経済論Ⅰ	2	株式会社三井物産戦略研究所にて北東アジア地域を担当・統括し、世界潮流の把握、同地域の政治経済動向とビジネストレンドの分析、地政学リスクの助言、アジア戦略の提案などを行った。具体的には、三井物産株式会社の経営幹部・各部署・各支店、二木会(三井グループ社長会)、関係省庁向けに資料・情報の提供やブリーフィングを行った。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
	韓国経済論	2		
小林 英夫	キャリア・デザイン入門	2	日本IBM株式会社でSEおよびソリューション営業に従事後、イー・アクセス株式会社(現ソフトバンク)の創業に参画。主に組織管理や経営企画を担い東証2部上場へ貢献、代表取締役副社長を務める。子会社としてイー・モバイル株式会社(現ソフトバンク・ワイモバイル事業)の創業も手掛け、経営戦略本部長・情報システム本部長、副社長を歴任。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
	経営組織	2		
	ベンチャー企業論	2		
新西 誠人	経営科学	2	日本電信電話株式会社で非接触ICカードの研究に従事。その後、株式会社リコーにおいて、人間中心設計を活用した会議システムやAI・IoTを応用した物流支援システムの研究開発、国内外の組織の技術企画を担当。社内シンクタンクで技術調査と経営層への提案を行う。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
	デザイン思考	2		
千ヶ崎 清孝	IT概論Ⅰ	2	三井情報株式会社にて、システムの開発、運用保守、品質管理とコンプライアンス活動、ネットワークセキュリティやミドルウェアの導入コンサルティング、ソリューションへのAI適用の調査企画まで幅広く担当。海外ベンダとの交渉含め、グローバル感覚をもって業務遂行してきた。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
	IT概論Ⅱ	2		
内藤 旭恵	経営とセキュリティ	2	NECエンジニアリング株式会社にて在籍。放送映像システムのソフトウェア開発に携わり、主に、株式会社バイエフエム、株式会社TBSラジオ、日本テレビ放送網株式会社などの企業を担当した後、人工衛星の筐体設計を行い、主に、宇宙航空研究開発機構(JAXA)やNEC東芝スペースシステム株式会社と開発協力。その後、携帯電話向け基地局のハードウェア設計を行った。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
	情報ネットワーク	2		
	ブランドマネジメント	2		
専任 長島 剛	事業デザイン論Ⅱ	2	多摩信用金庫の価値創造事業部や地域連携支援部で、多摩市・多摩信用金庫・多摩大学の三者による「多摩市創業支援事業連携協定」締結をはじめ、地域の自治体や大学・高専等との連携や地元企業やNPO等のマッチングに多数関わる。多摩ブルー・グリーン賞、ブルームセンター、課題解決プラットフォームTAMA、創業支援センターTAMA等開設。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
	地域金融論	2		
中庭 光彦	地域観光論	2	日本コンベンションサービス株式会社でPCO(Professional Congress Organizer)となり国際航路会議、多摩学長国際会議等数々のMICEの企画・運営、自治体のMICE戦略策定業務に携わる。その後、株式会社プロジェクトブレインを創業し、企画担当役員・文化事業のプランナーとして活躍。1999年のミツカン水の文化センター創立に当初から参画し、第11回(2010)日本水大賞厚生労働大臣賞を受賞。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
	地域政策ブランニング	2		
	地域ビジネスブランニング	2		
バトル	アジア経済論Ⅱ	2	株式会社三井物産戦略研究所国際情報部にて、親会社の株式会社三井物産の会長以下経営陣をはじめ、経営企画部、各商品本部(含国内・海外拠点)向けに、大中華圏におけるビジネス戦略の立案・企画と情報支援活動に参画。また、三井グループの関連企業の経営陣向けにも定期的に情報支援活動に従事した。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
	中国経済論	2		
初見 康行	キャリア・デザインⅢ	2	株式会社リクルートHRマーケティング(現:リクルートジョブズ)において法人営業に従事。中小企業から大手企業に対し、広告媒体を使用した採用支援活動を行う。その後、自社の人事部に異動し、主に新卒採用の企画立案・実施に携わる。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
浜田 正幸	業界研究Ⅰ	2	本田技研工業株式会社、株式会社本田技術研究所にて自動車レースのF2プロジェクトのマネジメントチームに参画。その後株式会社野村総合研究所で経営コンサルタント。独立して株式会社ケアブレインズ創業。共同ファウンダー。株式会社ジェイ・フィール創業。取締役副社長。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
	消費心理	2		
松本 祐一	NPO・NGO論	2	株式会社シー・エンド・シーにて、国内食品・飲料メーカーの商品開発のための市場調査の企画、実査、分析等に従事。その後株式会社アイアンドディーにて、国内外のIT関連企業のマーケティング、特に顧客開発のための戦略立案・実行を担当。また、学生時代に国際NGO国境なき医師団日本事務局にて、学生NPOの立ち上げと運営を経験している。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。	
	事業デザイン論Ⅰ	2		

教員区分	教員氏名	科目名	単位数	実務経験の内容等
非常勤	青木 克彦	産業社会特講 (企業を取り巻く環境の変化)	2	三菱商事株式会社、三菱UFJリース株式会社で、マネジメント、経理、財務、金融関連の業務を幅広く担当。特に、数多くの企業買収分野での経験豊富。米国駐在経験も含めグローバルなビジネスに永年携わっている。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。
	岡田 豊	産業社会特講 (ジャーナリズム論)	2	日経新聞、共同通信、テレビ朝日で記者として企業、省庁、永田町の取材や、デスク、コメンテーターなどを担当してきた。阪神淡路大震災、福島原発事故など災害報道も経験。テレビ朝日アメリカ総局長としてトランプ氏が勝利した大統領選を取材した。グローバルな視点で日本の課題を直視。「現場主義」と「自分の頭で考えること」の重要性を説く。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。
	荻阪 哲雄	産業社会特講(ビジョン・マネジメント論 2022春)	2	警視庁、ベンチャー企業で勤務の後、組織風土改革プロフェッショナルファーム(株)スコラ・コンサルトの創業期に参画。同社パートナーを経て、独立。ビジョンを行動へ変える独自手法『バインディング・アプローチ』を考案・提唱して、株式会社 チェンジ・アーティストを設立。代表に就任。クライアントの組織開発参謀を務め、これまでに3万時間以上のコンサルティングを展開して、1万2000名のリーダーを支え、企業変革を支援している。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的な研究と教育を行っている。
	橋川 幸夫	産業社会特講 (メディアの時代を生きる力)	2	1972年、音楽投稿雑誌「ロッキングオン」創刊、編集室長。1978年、全面投稿雑誌「ポンプ」を創刊、編集長。その後、メディア開発、マーケティングリサーチ、企業コンサルティングなどを勤める。1997年、株式会社デジタルメディア研究所を創業。インターネット関連の業務、コンサルを行う。「暇つぶしの時代」(平凡社)「森を見る力」(晶文社)「参加型社会宣言」(メタ・ブレイン)など著作多数。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。
	久米 信行	ビジネスコミュニケーションⅡ	2	イマジニアでゲーム企画開発と営業、日興証券(現SMBC日興証券)でAI相続診断システム開発・研修担当を経て、家業のTシャツメーカー久米繊維工業の三代目経営者(現在相談役)。いち早くICTを活用し、日経インターネットアワード、経済産業省「IT経営百選」東京商工会議所「勇気ある経営大賞」特別賞を受賞。APEC2010中小企業サミット日本代表。東京商工会議所墨田支部副会長、墨田区観光協会理事として観光地域づくりに邁進。墨田区文化振興財団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本舞台芸術振興会の評議員、日本剣剣詩舞振興会の理事として文化振興と国際交流に尽力。IU 情報経営イノベーション専門職大学 教授(起業支援と地方創生担当)。IU地域連携センターで地元墨田区の団体・企業との協働プロジェクトを推進する。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的な研究と教育を行っている。
	後藤 涼子	データベースⅠ	2	野村證券株式会社企業情報部を経て、ゼネラルビジネスサービス株式会社にて企業向けMS Office等各種アプリケーション、WEB制作研修等に携わる。その後ITインストラクター及びライターとして、講師活動を行うとともに、IT関連書籍の執筆多数。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。
	中 湊 晃	国際ビジネス論	2	三井物産(株)で執行役員を務め、鉄鉱石、エネルギーなど国際資源ビジネスを担当、事業企画、M&A、トレーディングの経験豊富。海外勤務は豪州、英国、米国、インドネシアなど合計14年に及ぶ。鉄鉱石部長、エネルギー業務部長、米国三井物産上級副社長、インドネシア総代表、三井物産戦略研究所社長を歴任。三井グループのシンクタンクである三井産業研究所の運営委員及び研究主査、日本貿易会の運営委員会会長、経団連の東亜経済人会議日本委員、内閣府個人情報保護委員会専門委員等を務める。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。
	真壁 昭夫	産業社会特講 (行動経済学)	2	一橋大学商学部卒業、第一勧業銀行(現みずほ銀行)入行。ロンドン大学大学院修士。ロンドン証券現地法人勤務、市場営業部次長、みずほ総合研究所首席研究員等で金融市場での業務や経済調査等に携わる。信州大学経済学部、法政大学政策創造研究科教授を歴任。旭化成株式会社社外監査役、商工会議所政策委員会学識委員、行動経済学会評議員等。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。
		日本経済論	2	
	結城 隆	産業社会特講(脅威と共栄の中国へ変るビジネス環境)	2	金融、製造、流通業で40年にわたって海外での事業展開に関わる調査・企画および企業買収を含む新規事業立ち上げやアドヴァイザリー業務を経験。ロンドン、パリ、ニューヨーク、北京に都合16年在住。特に中国との関わりは20年に及ぶ。上述した実務経験を担当科目において十分に活かしつつ、実践的教育を行っている。
合計：学部等共通科目			68	単位

29. シラバス

2022 年度シラバス 目次

《一般科目》

1 年生

English Expression I	1
English Expression II	2
IT コミュニケーション入門	3
IT ビジネス入門	4
IT 活用法 I	5
キャリア・デザイン入門	6
グローバルビジネス入門	7
グローバルヒストリー I	8
グローバルヒストリー II	9
コンピュータ概論	10
スタディースキル入門	11
スポーツ・マネジメント論	12
スポーツ I (シェイプアップフィットネス)	13
スポーツ I (フットサル)	14
ビジネススキル入門	15
ビジネス数学基礎	16
マーケティングマネジメント論	17
マクロ経済学	18
ミクロ経済学	19
ライティング・スキル	20
ライフ・デザイン	21
韓国語 I	22
韓国語 II	23
経営学入門	24
初級簿記	25
多摩学 I	26
多摩学 II	27
地域ビジネス入門	28
中国語 IX	29
中国語 IY	30
中国語 IIX	31
中国語 IIY	32
日本語講座初級	33
日本語講座中級 I	34

日本語講座中級 II	35
日本語講座上級	36
法学 (憲法)	37
余暇マネジメント	38

2 年生

Basic Office English I	39
Basic Office English II	40
English Expression I (再履修者用)	41
English Expression II (再履修者用)	42
IT パスポート	43
IT 活用法 II	44
NPO・NGO 論	45
Practical English Conversation I	46
Practical English Conversation II	47
TOEIC I	48
TOEIC II	49
Web デザイン I	50
Web デザイン II	51
アドバンスド・ライティング・スキル	52
アントレプレナーシップ論	53
キャリア・デザイン I	54
キャリア・デザイン II	55
クリエイティブデザイン I	56
クリエイティブデザイン II	57
クリエイティブデザイン III	58
グローバルヒストリー III	59
サブカルチャー論	60
スポーツ II (シェイプアップフィットネス)	61
スポーツ II (フットサル)	62
スポーツと健康	63
データサイエンス I	64
データサイエンス II	65
データベース I	66
データベース II	67
ビジネスコミュニケーション II	68
ビジネス数学 I	69

ビジネス数学Ⅱ	70	中国ビジネスコミュニケーションⅠ	107
ビジネス法	71	中国ビジネスコミュニケーションⅡ	108
プログラミング入門Ⅰ	72	哲学入門	109
プログラミング入門Ⅱ	73	特別講座Ⅰ・Ⅱ	110
プログラミング入門Ⅲ	74		
ベンチャー企業論	75	3年生	
マーケティング・リサーチ	76	Web サービス開発	111
韓国ビジネスコミュニケーションⅠ	77	Web プログラミング	112
韓国ビジネスコミュニケーションⅡ	78	アジア経済論Ⅰ	113
業界研究Ⅰ	79	アジア経済論Ⅱ	114
金融論	80	キャリア・デザインⅢ	115
経営シミュレーションゲーム	81	コンピュータネットワーク活用	116
経営学概論	82	サービス産業論	117
経営思想史	83	データサイエンスⅢ	118
経営情報論Ⅰ	84	データサイエンスⅣ	119
経営情報論Ⅱ	85	ビッグデータ活用法	120
経営分析	86	ブランドマネジメント	121
原価計算	87	ロシア経済論	122
国際ビジネス論	88	韓国経済論	123
国際関係論	89	経営とセキュリティ	124
国際経済学	90	経営と意思決定	125
財務会計	91	経営組織	126
産業社会特講 (ビジョン・マネジメント論 2022 春)	92	現代メディア論	127
産業社会特講 (ポストコロナ時代をにらんで)	93	事業デザイン論Ⅰ	128
産業社会特講 (メディアの時代を生きる力)	94	事業デザイン論Ⅱ	129
産業社会特講 (企業を取り巻く環境の変化)	95	情報と職業	130
産業社会特講 (脅威と共栄の中国~変るビジネス環境)	96	情報ネットワーク	131
産業社会特講 (地域の歴史と偉人から教訓を学ぶ)	97	情報工学概論	132
事業構想論Ⅰ	98	地域観光論	133
事業構想論Ⅱ	99	地域金融論	134
社会心理	100	地域産業論	135
消費心理	101	中国経済論	136
情報法	102	認知心理	137
情報倫理	103	問題解決学特講Ⅰ	138
地域ビジネスプランニング	104	問題解決学特講Ⅱ	139
地域政策プランニング	105	問題解決学特講Ⅲ	140
中級簿記	106	立志特講Ⅰ	141

立志特講Ⅱ	142
立志特講Ⅲ	143

《演習科目》

プレゼミⅠ	144
プレゼミⅡ	145
ホームゼミ 石川 晴子	146
ホームゼミ 出原 至道	147
ホームゼミ 今泉 忠	148
ホームゼミ 梅澤 佳子	149
ホームゼミ 大森 拓哉	150
ホームゼミ 落合 孝彦	151
ホームゼミ 加藤 みずき	152
ホームゼミ 金 美德	153
ホームゼミ 木村 太一	154
ホームゼミ 久保田 貴文	155
ホームゼミ 小西 英行	156
ホームゼミ 小林 昭菜	157
ホームゼミ 小林 英夫	158
ホームゼミ 齋藤 S. 裕美	159
ホームゼミ 彩藤 ひろみ	160
ホームゼミ 下井 直毅	161
ホームゼミ 杉田 文章	162
ホームゼミ 高橋 恭寛	163
ホームゼミ 趙 佑鎮	164
ホームゼミ 内藤 旭恵	165
ホームゼミ 中澤 弥	166
ホームゼミ 長島 剛	167
ホームゼミ 中庭 光彦	168
ホームゼミ 中村 その子	169
ホームゼミ 中村 有一	170
ホームゼミ 野坂 美穂	171
ホームゼミ バートル	172
ホームゼミ 初見 康行	173

ホームゼミ 浜田 正幸	174
ホームゼミ 樋笠 堯士	175
ホームゼミ 増田 浩通	176
ホームゼミ 松本 祐一	177
ホームゼミ 水盛 涼一	178
ホームゼミ 良峯 徳和	179
ホームゼミ (志)	180
インターゼミ	181

《認定科目》

AP 数学	182
Study Abroad I～VIII	183
アクティブ・ラーニング実践I～VIII	184
インターンシップI・II	185
キャリア・デザインIV	186

《教職に関する科目》

教育課程総論	187
教育原理	188
教育実習	189
教育心理学	190
教育制度論	191
教育相談	192
教育方法 (ICTを活用した教育の理論及び方法含む)	193
教職概論	194
教職実践演習	195
情報科教育法Ⅰ	196
情報科教育法Ⅱ	197
生徒指導・進路指導論	198
特別活動・総合的な学習の時間の指導法	199
特別支援教育概論	200

科目名 English Expression I (English Expression I) ※2022年度入学生用**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村(そ)、石川、荻澤、合田、田口、田中(美)、吉田 **対象学年** 1年生以上 **区分** 春学期**■授業目的**

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■科目分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。客観的指標としてTOEIC350点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク／その他：LTD

アクティブ・ラーニングとしてグループワークを行う。具体的には、本活動に主体的・能動的に参加することにより、産業社会の最前線で問題解決にあたり、常に革新的な視野で事業構想するための英語の実用的なコミュニケーション力増強に取り組む。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。各講義につき事前学習に1.5時間以上、事後学習に1.5時間、合計で3時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど1
- 第2講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど2
- 第3講 ファッションや健康、スポーツなど興味があることや趣味などについて1
- 第4講 ファッションや健康、スポーツなど興味があることや趣味などについて2
- 第5講 ここまでの復習と性格や服装についての描写
- 第6講 性格や服装についての描写1
- 第7講 性格や服装についての描写2
- 第8講 天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所1
- 第9講 天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所2
- 第10講 天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所3
- 第11講 自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現1
- 第12講 自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現2
- 第13講 自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現3
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：下記の配分で得点を付け、90点以上の場合
- 評価 A (89～80点)：下記の配分で得点を付け、80点から89点の場合
- 評価 B (79～70点)：下記の配分で得点を付け、70点から79点の場合
- 評価 C (69～60点)：下記の配分で得点を付け、60点から69点の場合
- 評価 F (59点以下)：下記の配分で得点を付け、59点以下の場合

■評価方法

平常点20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに合わせて直接お話しすることも可能です。このクラスはプレースメントテストの結果に基づくクラス指定があり、1クラスあたりの人数は20人以下となります。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

English Expression II (English Expression II) ※2022年度入学生用

サブタイトル

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける

担当教員

中村(そ)、石川、荻澤、合田、田口、田中(美)、吉田

対象学年

1年生以上

区分

秋学期

■授業目的

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。客観的指標としてTOEIC350点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク／その他：LTD

アクティブ・ラーニングとしてグループワークを行う。具体的には、本活動に主体的・能動的に参加することにより、産業社会の最前線で問題解決にあたり、常に革新的な視野で事業構想するための英語の実用的なコミュニケーション力増強に取り組む。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。各講義につき事前学習に1.5時間以上、事後学習に1.5時間、合計で3時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど
- 第2講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど
- 第3講 人間の体の動き、健康（習慣）、病気やストレス解消、などの話題についての表現を学ぶ
- 第4講 人間の体の動き、健康（習慣）、病気やストレス解消、などの話題についての表現を学ぶ
- 第5講 人間の体の動き、健康（習慣）、病気やストレス解消、などの話題についての表現を学ぶ
- 第6講 人間の体の動き、健康（習慣）、病気やストレス解消、などの話題についての表現を学ぶ
- 第7講 ファッションや買い物に関連した表現、値段交渉、好きな場所の紹介表現など
- 第8講 ファッションや買い物に関連した表現、値段交渉、好きな場所の紹介表現
- 第9講 ファッションや買い物に関連した表現、値段交渉、好きな場所の紹介表現
- 第10講 ファッションや買い物に関連した表現、値段交渉、好きな場所の紹介表現
- 第11講 家や家庭にまつわる表現、自分の家や部屋の描写、日常生活における近所の住人との会話
- 第12講 家や家庭にまつわる表現、各部屋の描写、近所の住人との会話、依頼表現など
- 第13講 家や家庭にまつわる表現、部屋の描写、近所の住人との会話、依頼表現など
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：下記の配分で得点を付け、90 点以上の場合
- 評価 A (89～80 点)：下記の配分で得点を付け、80 点から 89 点の場合
- 評価 B (79～70 点)：下記の配分で得点を付け、70 点から 79 点の場合
- 評価 C (69～60 点)：下記の配分で得点を付け、60 点から 69 点の場合
- 評価 F (59 点以下)：下記の配分で得点を付け、59 点以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに来て直接お話しすることも可能です。このクラスはプレースメントテストの結果に基づくクラス指定があり、1 クラスあたりの人数は 20 人以下となります。

科目名	ITコミュニケーション入門 (Introduction to IT Communication)		
サブタイトル	エクセル活用法		
担当教員	増田 浩通	対象学年	1年生以上
		区分	春・秋学期

■授業目的

経営情報学部において、必須かつ基礎的なスキルである「マイクロソフト・エクセル」の使い方を習得する。

■科目分類

ビジネスマネジメント/ビジネス ICT

■到達目標

大学の授業やゼミで出されるエクセルの課題を自分で解けるスキルの獲得を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

Excel の操作、利活用に関する基礎的な学力を養う。企業・社会で求められる様々な課題に Excel を活用した情報整理・分析に対処する能力を修得する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/グループワーク

毎回 Excel の課題を課し、それを各自のパソコンで作成し印刷して提出をすることを繰り返すことにより、Excel のスキル向上を図る。また期末課題で、Excel の元データを各自が独自に分析し、グラフを作り最終発表を行うことにより、データ分析及びプレゼンテーションの能力を向上させることを目指す。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

各授業で課される問題を各自で解けるまで Excel の操作に慣れること。講義時間は限られており、各自のパソコンのスキルの問題もあるので、予習・復習は必ずすること (各 1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンスおよび Excel の用語・基本操作
- 第2講 文字や数字を入力して表を作る。
- 第3講 オートフィルの使い方を理解する。
- 第4講 相対参照、絶対参照、複合参照を理解する。
- 第5講 Sum 関数、Average 関数の使い方を理解する。
- 第6講 IF 関数の使い方を理解する。
- 第7講 円グラフを作成する。
- 第8講 棒グラフを作成する。
- 第9講 折れ線グラフを作成する。
- 第10講 散布図を作成する。
- 第11講 オープンデータ分析をする。
- 第12講 期末課題の発表 課題：電力実績を視覚化する。チームビルディング
- 第13講 グラフレポート作成課題
- 第14講 自由課題作成
- 第15講 チーム発表会・期末課題提出

■フィードバックの要領

Excel を本格的に学んだものは多くないと思われるので、質問があったら適宜指導する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 課題の合計点が 90 点以上
 評価 A (89~80 点) : 課題の合計点が 89~80 点
 評価 B (79~70 点) : 課題の合計点が 79~70 点
 評価 C (69~60 点) : 課題の合計点が 69~60 点
 評価 F (59 点以下) : 課題の合計点が 59 点以下

■評価方法

第2回から第13回は各回5%、第14回、15回は各回20%で合計100%

■留意点

初回から Excel を使うので、各自インストールしておくこと。Excel をインストールしていない者は履修を認めない。本講義は演習形式のため、1クラスの履修者上限を50人とする。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ITビジネス入門 (Introduction to IT Business) ※2018年度以降入学生用

サブタイトル 経営情報学科への誘い

担当教員 小西、久保田ほか

対象学年 1年生以上

区分 秋学期

■授業目的

経営情報学科では、ITを活用したビジネスについて学びます。この講義では、ITを専門に扱うIT企業はもちろん、ITを活用してビジネスを行う一般企業においても、必要不可欠な知識や技術の「きほん」を優しく解説します。そしてこの講義を通じて「経営情報学科」での学びを誘います。

■科目分類

ビジネスICT

■到達目標

IT企業や、ITを活用してビジネスを行う一般企業で必要とされる、ITに関する基本的な用語を理解し、身の回りの具体事例を挙げることができるようになることを目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

IT企業やITを活用してビジネスを行う企業について、グローバルに展開する具体事例を挙げて説明出来るようになる。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク

ゲーグルクラスルームを活用し、学修の成果を教員と学生とで共有しながら、ペアワークを行います。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

次回授業のテキスト該当部分の予習及び、今回授業のテキスト該当部分の復習（1.5時間）

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス、ITビジネスのきほん
- 第2講 コンピュータ構成要素
- 第3講 コンピュータ構成要素
- 第4講 ソフトウェア
- 第5講 ソフトウェア
- 第6講 ハードウェア
- 第7講 ハードウェア
- 第8講 インターフェース
- 第9講 インターフェース
- 第10講 マルチメディア
- 第11講 マルチメディア
- 第12講 データベース
- 第13講 データベース
- 第14講 ネットワーク
- 第15講 ネットワーク

■フィードバックの要領

授業内で実施する予習プリントの内容について、回答例を示します。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : IT ビジネスの用語について詳しく理解し、グローバルな具体事例を挙げて説明できる。

評価 A (89~80 点) : IT ビジネスの用語について詳しく理解し、身の回りの具体事例を挙げて説明できる。

評価 B (79~70 点) : IT ビジネスの用語について理解し、身の回りの具体事例を挙げて説明できる。

評価 C (69~60 点) : IT ビジネスの用語について理解しているが、具体事例を挙げるができない。

評価 F (59 点以下) : IT ビジネスの用語について理解ができず、その具体事例を挙げることもできない。

■評価方法

平常点 (50%)、授業内ミニレポート (50%)

■留意点

①授業時に教科書及び、ノートパソコン又はタブレット等を使用するので、必ず持参してください。②授業毎に「予習」と「復習」の履行状況を確認しますので、毎回必ず行ってください。

科目名 IT 活用法 I (Utilizing Method of IT I)**サブタイトル** 初心者のためのプログラミング的思考法入門**担当教員** 出原、彩藤**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

本講義の目的は、情報技術 (IT) の活用の基本となるプログラミング的思考法を身につけることである。一般に「コンピュータが使える」といったときには、文書や表計算、プレゼンテーション資料の作成能力を想定されることが多い。しかし、これらは、IT の活用全体から見ると、ごく一部に過ぎない。本来の IT 活用能力とは、コンピュータそのものの操作を超えて、プログラミングに代表される論理的思考力・説明力にある。本講義では、さまざまなプログラムに実際に触れながら、その考え方を理解し、IT の活用の基礎を鍛えることを目的とする。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

・構造化プログラミングの基礎を理解する・コンピュータ内部のデータ構造を理解する・基礎的なアルゴリズムを理解する

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

プログラミングの実験を行いながら、論理的な思考力を身につける。また、データ構造や暗号化処理などについて学ぶ。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] ペアワーク/グループワーク

制作した作品の相互評価

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

各講義の終了後、サンプルプログラムを理解し、理論を身につけることが期待される。(120 分)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス・ユーザ登録
- 第2講 構造化プログラミング
- 第3講 イベント駆動型プログラミング
- 第4講 プロトタイピング入門
- 第5講 プロトタイピング (1)
- 第6講 プロトタイピング (2)
- 第7講 プロトタイピング (3)
- 第8講 アルゴリズム入門
- 第9講 「情報」の理解
- 第10講 暗号
- 第11講 状態遷移
- 第12講 独自アドベンチャーゲームの作成
- 第13講 アドベンチャーゲーム プレゼンテーション
- 第14講 人工知能入門
- 第15講 相互対戦

■フィードバックの要領

学生は、オンラインで質問できる。レポートはルーブリックによって評価する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
- 評価 A (89~80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79~70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69~60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 点未満

■評価方法

講義内レポート 100% で評価する。

■留意点

- ・初回講義で全体解説を行うため、履修希望者は必ず初回講義に出席すること。特段の事情がある場合を除き、初回講義に出席していないものの受講を認めない。
- ・5月以降、コンピュータを持参しない者の受講を認めない。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 キャリア・デザイン入門 (Introduction to Career Design)**サブタイトル** 自分の人生を考える**担当教員** 小林 (英)、浜田**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

キャリア・デザインとは、まさに人生設計のことである。これまで大学に入学するまでは、ある程度既定路線を進んでくれば良かったが、この先は決まった線路も道路もない。自ら自分の進む方向を決めて、自らそこに道を作って、自分の足で歩いていくしかない。その方向性と道を作り始めないと、大学卒業後の生活 (人生) ができなくなってしまう。本講では、自分の将来設計の際に考えなければならない様々な事柄について現状認識するとともに、様々な人物の職業観を学ぶ。その上で、社会と自分がどう関わっていくのかを考え、大学卒業後に一社会人として、精神的・経済的に自立して、社会に貢献していく自分自身のキャリアをデザインすることを目的とする。

■科目分類

ビジネス環境理解/ビジネスマネジメント/社会人力育成

■到達目標

自身の置かれている社会環境の現状や自らの志を理解し、職業観を醸成して自分自身の将来ビジョンをイメージするとともに、そのビジョン実現に向けた方策ならびに課題や大学での学びが明確になっている。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

自分の将来を、自分の人生という側面と社会の中での位置づけから理解し、社会の発展に貢献する力と高い志を身につけることができる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/その他: ミニツペーパー等

キャリアデザイン入門ではアクティブラーニングとして、ペアワークを通じた学生相互およびミニツペーパー提出とフィードバックを通じた教員とのコミュニケーションを行う。自らのキャリア意識の認識と他者からのフィードバックを通じて、職業観を醸成していくことが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、指定図書や授業資料に目を通し疑問点を明確にする。指定時は事前課題実施 (1.5 時間)。授業後に、講義内容やノート整理、未解消疑問点は自己調査や教員質問等で解消 (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション
- 第2講 日本における雇用と労働の実情について知る
- 第3講 働く意義とロールモデルを考える
- 第4講 企業経営者の職業意識と自らのキャリア志向を学ぶ
- 第5講 身近な環境に居る凄い人々の職業意識を学ぶ
- 第6講 専門職のキャリアと職業意識を学ぶ
- 第7講 職業従事において困難に直面する人の意識と就活の実態を学ぶ
- 第8講 授業内中間試験
- 第9講 社会人基礎力を学ぶ
- 第10講 正規社員としての仕事とアルバイトの違いを学ぶ
- 第11講 将来必要なおカネについて学ぶ
- 第12講 おカネを稼ぐ方法を学ぶ
- 第13講 仕事の社会的意義について学ぶ
- 第14講 地球社会の現状と自身の就業観を考える
- 第15講 授業内期末試験

■フィードバックの要領

毎回のミニツペーパーや課題レポートの講評、質問・意見への回答を翌回講義で行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 前半 (第二講～第八講) と後半 (第九講～第一五講) の合計が 90 点以上
- 評価 A (89～80 点) : 前半と後半の合計が 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79～70 点) : 前半と後半の合計が 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69～60 点) : 前半と後半の合計が 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 前半と後半の合計が 60 点未満

■評価方法

前半: 授業貢献点 (25%)、中間試験 (25%)。授業貢献点は、平常点・課題・受講態度を評価し、受講態度が悪い場合はマイナスもあり得る。後半: 平常点・課題 (25%)、期末試験 (25%)。

■留意点

キャリアデザイン入門は、本シラバス第2～8講の内容を小林、第9～15講の内容を浜田が担当する。X01-04・Y01-04 クラスは前半を小林、後半を浜田が担当する。X05-12・Y05-12 クラスは前半を浜田、後半を小林が担当し、内容も本シラバスの第9～15講の内容を前半 (第2～8講) に、第2～8講の内容を後半 (第9～15講) に行う。講義内容は、学生からのコメントや要望、関連項目の最新動向や時事問題を踏まえて変更することがある。

科目名 グローバルビジネス入門 (Introduction to Global Business)**サブタイトル** 世界を知る力**担当教員** 金、下井、趙、中村(そ)、バートル、樋笠、水盛 **対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

担当教員7名(金美德先生、趙佑鎮先生、下井直毅先生、バートル先生、水盛涼一先生、樋笠堯士先生、中村その子先生)が、「世界から見た日本」と「日本から見た世界」という視点から、日本と世界、政治と経済、企業とビジネス、文化とマーケティングなどをテーマに最前線事例を踏まえて解説する。また、日本や世界を高度産業社会に再構築するための問題点と解決策を考察する。主な目的は、事業構想学科への誘導である。また、グローバルビジネス系科目や特別講座Ⅰ・Ⅱ(寺島学長監修リレー講座)の基礎学習や社会科学の基本的な考え方を学ぶこと。さらに、自らの立ち位置や、将来進むべき方向性を思索することである。主なキーワードは、世界潮流、時代認識、アジア・ユーラシアダイナミズム、日中韓、国際経済、国際経営、国際ルール、日本企業のグローバル戦略、グローバルマーケティング、AIビジネス、若者の文化と留学である。

■科目分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/グローバルビジネス

■到達目標

①グローバルビジネス系統科目の特性を理解するとともに、他の系統科目との関連性を把握する。②2年時の特別必修科目である「特別講座ⅠとⅡ(共通テーマ「世界潮流と日本の進路」)」の基礎知識を習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

「世界から見た日本」と「日本から見た世界」の視点から政治・経済・企業・文化の問題点と解決策を考え、グローバルビジネスの場で活躍するとともにわが国の産業社会の発展に貢献できるようにする。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

「グローバルビジネス入門」では、アクティブ・ラーニングとして「個人ワーク」を行う。具体的には、「リサーチ内容や問題意識を教員・学生間で議論する形式」で取り組む。この議論に主体的・能動的に参加することにより、「グローバル性や広い視野を身に付けさせる」ことが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

2講義終了毎にレポートを提出すること(2時間)。合計7レポート提出することとなる。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 「アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか(1)」(金美德)
- 第3講 「アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか(2)」(金美德)
- 第4講 「海外に羽ばたこうー若者留学事情を中心に」(趙佑鎮)
- 第5講 「東アジア共同体-日中韓関係を中心に」(趙佑鎮)
- 第6講 「日本経済はどのように推移してきたか」(下井直毅)
- 第7講 「貿易についての考え方は、どう変わってきたか」(下井直毅)
- 第8講 「中国経済と日本企業のビジネス戦略(1)」(バートル)
- 第9講 「中国経済と日本企業のビジネス戦略(2)」(バートル)
- 第10講 「中国の公共投資と景気浮揚」(水盛涼一)
- 第11講 「新規事業分野の開拓にみる日中ビジネス思想の比較」(水盛涼一)
- 第12講 自動車産業と世界のルール形成(樋笠堯士)
- 第13講 AI活用と世界の動向(樋笠堯士)
- 第14講 「海外テレビCMの特徴とその分析および日本のテレビCMとの比較」(中村そのこ)
- 第15講 「海外での屋外PR企画および大規模イベントとテレビCMの関係」(中村そのこ)

■フィードバックの要領

各教員が、レポートに対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価A+(90点以上)：平常点(60%)と7レポート(40%)の合算点が、90%以上であること。
- 評価A(89~80点)：平常点(60%)と7レポート(40%)の合算点が、89~80%以上であること。
- 評価B(79~70点)：平常点(60%)と7レポート(40%)の合算点が、79~70%以上であること。
- 評価C(69~60点)：平常点(60%)と7レポート(40%)の合算点が、69~60%以上であること。
- 評価F(59点以下)：平常点(60%)と7レポート(40%)の合算点が、59%以下であること。

■評価方法

①平常点(60%)と合計7つのレポート(40%)に基づいて評価する。②担当教員7名が、2講義ずつオムニバス形式で合計14講義を行い、それぞれレポート(A4用紙1枚以上)の提出を求める(合計7レポート:A4用紙7枚以上)。

■留意点

①第1回目のガイダンスに必ず出席すること。理由は7名の担当教員によるオムニバス形式の講義が第2回目より開始されるため受講要領を承知しておく必要があるため。②PC・携帯電話・音楽イヤホンは使用を禁止する。③私語・帽子着用・飲食は禁止する。④遅刻及び途中退室は厳禁とする。⑤レポートは、1教員の講義(2回連続講義)が終了し、1週間後の木曜日16時30分までに教務課に提出すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 グローバルヒストリー I (Global History I)**サブタイトル** 地球規模で考えてみよう**担当教員** 小林 昭菜**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

外国の歴史は現代の私たちの生活とは何の関連もないのか？このような問いを念頭に置き、人、集団、国家がいかなる「つながり」によって形作られ、展開してきたのかを学習し、今生きている世界や文化がどのような「つながり」によって形成されているのかを理解する。

■科目分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

現在生きている世界の政治、経済、社会の構造を体系的に理解できるようにする。新聞を読む習慣をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会で経験を積むためには、まず知識をつけそれを理解したのち、理解した内容に思考を重ね物事を判断していく必要がある。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] その他：フィードバック

課題に対するフィードバックを実施する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業で指示するテキストを事前に読み、毎回感想を記入し授業に持参すること。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション。グローバルヒストリーとは何か。
- 第2講 地球に誕生した様々な文明。
- 第3講 ヒト・モノの大規模な移動の始まり。
- 第4講 海洋ネットワークの形成
- 第5講 神は一人なのかそれ以上いるのか。世界の宗教と宗教をめぐる戦争。
- 第6講 イスラーム・ネットワークの拡大
- 第7講 ○○人とは何で分けられるのか。国民国家とはなにか。
- 第8講 キエフ・ルーシの誕生
- 第9講 資本主義とは何か？
- 第10講 ヨーロッパの戦争
- 第11講 奴隷制度
- 第12講 ユーラシア東西の文化交流
- 第13講 開国の時代、こじ開けられるアジア
- 第14講 日露戦争と第一次世界大戦
- 第15講 これまでの講義のまとめ

■フィードバックの要領

授業の感想やコメントに対して毎回フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：平常点 (学習態度が非常に良い)、課題の出来 9 割以上。
- 評価 A (89～80 点)：平常点 (学習態度が良い)、課題の出来 8 割。
- 評価 B (79～70 点)：平常点 (学習態度が良い)、課題の出来 6—7 割。
- 評価 C (69～60 点)：平常点 (学習態度が良い)、課題の出来 5 割。
- 評価 F (59 点以下)：平常点 (学習態度が良い)、課題の出来 4 割以下。

■評価方法

授業内で課す課題の出来：55%、授業への積極的態度や発言：45%

■留意点

初回及び第2回目の授業は、本講義の目的、目標、授業の方針について説明するため、必ず出席すること。従って、初回と第2回目の講義に欠席した場合、以後の授業に出席し課題を提出していたとしても考慮しない場合がある。本講義では毎回課題を課すが、その課題に対してきちんと論理的にまとめることができている、回答になっていない提出物はその回の出席の取消しを検討することもある。

科目名 グローバルヒストリー II (Global History II)**サブタイトル** 地球規模で考えてみよう**担当教員** 小林 昭菜**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

春学期に引き続き社会に出るまでの教養をつけるため、本講義ではグローバルヒストリーを学ぶ。外国の歴史は現代の私たちの生活とは何の関連もないのか？このような問いを念頭に置き、人、集団、国家がいかなる「つながり」によって形作られ、展開してきたのかを学習し、今生きている世界や文化がどのような「つながり」によって形成されているのかを理解する。

■科目分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

秋学期は近代史以降の歴史を学習する。現在生きている世界の政治、経済、社会の構造を体系的に理解できるようにし、新聞などから現代事情と繋がる歴史を学習する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会で経験を積むためには、まず知識をつけそれを理解したのち、理解した内容に思考を重ね物事を判断していく必要がある。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] その他：フィードバック
課題に対するフィードバックを実施する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業で指示するテキストを事前に読み、毎回感想を記入し授業に持参すること。(各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション。春学期までのおさらい。歴史を学ぶとは何か。
- 第2講 ソビエト社会主義共和国連邦の誕生と第一次世界大戦
- 第3講 不平等な格差社会は変えられる？ 社会主義、共産主義、計画経済とは。
- 第4講 もう一つの世界戦争。なぜ二つ目の戦争は起こったのか。
- 第5講 日本人将兵のシベリア抑留
- 第6講 戦後日本のはじまりと 55 年体制
- 第7講 兵器を作り「にらみ合う」戦争。核の戦争とイデオロギーの戦争。
- 第8講 戦後アジアの展開と日本
- 第9講 第三世界の台頭
- 第10講 世界をつなぎ合わせていく時。冷戦の終焉。
- 第11講 グローバル化とはなにか
- 第12講 90年代のアジア、新たな秩序の形成とその展開
- 第13講 冷戦後の超大国アメリカ
- 第14講 歴史的に考えるとはどういうことか。
- 第15講 これまでの講義のまとめ

■フィードバックの要領

授業の感想やコメントに対して毎回フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が非常に良い。)、試験の出来 9 割以上。
- 評価 A (89~80 点)：平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が良い。)、試験の出来 8 割。
- 評価 B (79~70 点)：平常点 (毎週の課題の出来や学習態度がまあ良い。)、試験の出来 6—7 割。
- 評価 C (69~60 点)：平常点 (毎週の課題の出来や学習態度は良い。)、試験の出来 5 割。
- 評価 F (59 点以下)：平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が悪い。)、試験の出来 4 割以下。

■評価方法

授業内で課す課題の出来：40%、授業への積極的態度や発言：25%、期末試験：35%。

■留意点

初回及び第2回目の授業は、本講義の目的、目標、授業の方針について説明するため、必ず出席すること。従って、初回と第2回目の講義に欠席した場合、以後の授業に出席し課題を提出していたとしても考慮しない場合がある。本講義では毎回課題を課すが、その課題に対してきちんと論理的にまとめることができている、回答になっていない提出物はその回の出席の取消しを検討することもある。試験は筆記の記述式試験を実施する。

科目名 コンピュータ概論 (Introduction to Computers)**サブタイトル** コンピュータの仕組みを理解して有効に利用する**担当教員** 中村 有一**対象学年** 1 年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

この講義では「コンピュータはどういう機械か」ということを学ぶ。受講者はコンピュータに関する知識を持たないという前提で講義する。講義の狙いは、コンピュータに親しみを持ってもらうこと。コンピュータに関する広告や新聞記事に、怖れず目を通せるようになることである。講義内容は、コンピュータとは何か、コンピュータの歴史、コンピュータの構成要素などである。最新の話題より基礎的な知識に重点を置く。この知識がないとコンピュータを使えないということではないが、コンピュータを勉強する上で必須となる知識が中心となる。文系・理系とわけると理系っぽい講義の一つであるが、文系の人にも知っておいてほしい内容がほとんどである。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

コンピュータに関する基礎的な用語が理解できていること。コンピュータの仕組みがだまかに把握できていること。2 進数などの演算の仕方が理解できていること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

コンピュータに関して基礎的・教養的な知識を習得し、実社会に出てからも必要な考え方を身に着ける。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

アクティブ・ラーニングとしてワークシートや簡単なクイズを行う。講義内容に関連する課題を出題して、講義時間内に Form で答えたり、当日中に T-Next で提出する。解答例などは時間内あるいは後日解説し、知識を実感として身に着ける。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5 時間)

復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 「コンピュータとは何か」
- 第2講 「コンピュータの種類と構成要素」
- 第3講 「ビット、バイト、ヘルツ」
- 第4講 「コンピュータの歴史 (誕生)」
- 第5講 「コンピュータの歴史 (発展)」
- 第6講 「最新ハードウェアの話」：PC 部品のスペックの読み方を概観する。
- 第7講 「コンピュータの歴史 (利用者視点)」
- 第8講 「インターネットの話」：仕組みとその意味、発展の歴史
- 第9講 「コンピュータは 0、1 で勝負する (1)」：コンピュータの基礎は 2 進数
- 第10講 「コンピュータは 0、1 で勝負する (2)」：「真か偽」を扱う論理演算について学ぶ。
- 第11講 「数や文字とその表現」：数値や文字をコンピュータで扱う仕組みについて話す。
- 第12講 「マンマシンインタフェースと図形や音」
- 第13講 「人間の思想を伝えるために」：OS とプログラミング言語について取り上げる。
- 第14講 「データベースの話」：大量のデータを蓄え、整理する。
- 第15講 「近未来の話」：新しい原理のコンピュータを取り上げる

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：100 点～90 点
- 評価 A (89～80 点)：89 点～80 点
- 評価 B (79～70 点)：79 点～70 点
- 評価 C (69～60 点)：69 点～60 点
- 評価 F (59 点以下)：59 点以下

■評価方法

学期末試験 70% レポートなど平常点 30%

■留意点

復習してわからない点などがあれば、できるだけ授業中に質問して解決すること。その他、授業と並行して、入門書レベルの本を数冊読むことを勧める。

科目名 ▶▶ スタディースキル入門 (Introduction to Study Skills)**サブタイトル** ▶▶ IT 活用と多摩大学での「学びの方法」**担当教員** ▶▶ 彩藤、小西、新西、田中(友)、中澤 **対象学年** ▶▶ 1年生以上 **区分** ▶▶ 春学期**■授業目的**

本講義では、アクティブラーニングを用いて、大学での「学びの方法」を学ぶと同時に、大学生および社会人として求められる自ら学問を修めるようとする姿勢である自修力の養成を図る。具体的には、講義を整理する力であるノートテイキング能力、文章を読み解くためのリーディング能力、正確文章を書くためのライティング能力、円滑にディスカッションを行うためのコミュニケーション能力、そして自身の意見を他者に正確に伝えるためのプレゼンテーション能力の5点をスタディスキルと位置付ける。また、それらの能力を発揮するための多摩大学経営情報学部としての必須項目として、インターネットの理解、PC操作、クラウド利用等はここで身につける。今後の学修に繋げるための自修力を高めることを目的とする。

■科目分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

1. 「ノートテイキング能力」。2. 「リーディング能力」。3. 「ライティング能力」。4. 「コミュニケーション能力」。5. 「プレゼンテーション能力」。これらの1～5をPCを駆使して実施できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

この授業では大学生としての思考のフレームワークを身につけると同時に、社会人として通用する思考力・判断力の基礎を養成していく。また、多摩大学生活で活用しうるPC操作を覚える。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク

授業で習うことは、自分自身で応用できる段階まで使いこなせないと役に立たない。Googleドライブ、ドキュメント、スプレッドシートの活用から始めて、他者との共有設定、フォームの設計、データのまとめ方を自ら工夫して学ぶ。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

各回の講義に際して、オンライン配布される資料の該当箇所を読むこと (30分程度)。復習として資料の振り返り (15分程度)、各回の課題 (30分程度) および他の履修生に対するフィードバックを行う (25分)。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション/大学アカウント確認
- 第2講 T-Next・Gメール・Gクラスルーム
- 第3講 pdf書き込み/プリンタ出力/PCスペック/緊急対応
- 第4講 フォルダ/ファイル管理/仮想デスクトップ利用
- 第5講 ドキュメント操作 (Word互換)/図書館利用
- 第6講 レポート作成/アウトラインの理解
- 第7講 図表・グラフの挿入
- 第8講 図形作成 (Inkscapeなど)/図描画 (ペイント系ソフト)
- 第9講 スプレッドシート (Excel)/表データ/グラフの作成
- 第10講 ビボット分析/結果をみて考察する
- 第11講 進捗調整/基礎力テスト
- 第12講 ファイル共有と共同作業/Googleスライド (PowerPoint互換)
- 第13講 効果的かつ魅力的な発表/質疑応答所作
- 第14講 スタディスキル効果測定/自己評価シートの作成
- 第15講 補習

■フィードバックの要領

オンラインシステムを導入し、学生同士および教員によるフィードバックを実施する。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 平常点、小課題、進捗テストのいずれもが顕著に優れており、合計が90点以上である。
- 評価 A (89~80点) : 平常点、小課題、進捗テストが優れており、合計が80点以上である。
- 評価 B (79~70点) : 平常点、小課題、進捗テストが十分に良く、合計が70点以上である。
- 評価 C (69~60点) : 平常点、小課題、進捗テストの合計が60点以上である。
- 評価 F (59点以下) : 平常点、小課題、進捗テストの合計が60点未満か、他の履修者の勉学を妨げている。

■評価方法

平常点: 30% : 毎回の講義における履修状況を評価します。小課題: 40% : 講義の内外で小課題を課します。進捗テスト: 30% : スタディスキルの効果を評価します

■留意点

1. 「履修状況に応じて、内容を変更することがある」。2. 「この授業ではパソコンを用いて授業を展開し、授業資料はwebでの配信を予定している。したがって、授業の際には端末を十分に充電して持参すること。なお、端末を忘れた場合には欠席扱いにするので気をつけること」。3. 「Google Classroomを用いて連絡を行うために随時確認すること」。

科目名 スポーツ・マネジメント論 (Sports Management Theory)**サブタイトル** スポーツが人生にもたらす価値とは。**担当教員** 福角 有祐**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

本講義では、日本トップクラスの本学フットサル部を「世界を感動させるようなクラブに発展させスポーツの価値を高める」という高い志を持ち、実践的に学び、オリジナルな意見を述べ、自立した人材を育む。

■科目分類

顧客理解／ビジネス創造／社会人力育成

■到達目標

学生主体の調査をもとにグループで、スポーツ（人、モノ、環境）をマネジメントできる能力を身につける。本学のフットサル部の発展を創造し、実践する。ケーススタディやグループディスカッションを通じて得るコミュニケーションスキルをもって、多摩大学独自のスポーツ・マネジメントを構築する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

スポーツマネジメントを学ぶことで、スポーツの価値を考察し、今後の人生を充実させる幅を広げていく人材育成

■授業形態 AL 手法

〔授業形態〕 講義

〔活動形態〕 個人ワーク

講義内でのテーマに対して、個人やグループの様々な意見・思考を考察する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各回の予習課題には最低限 1.5 時間程度の学習が必要となる。さらに毎回の講義内容で学んだ事柄については積極的に知見を広げ、問題意識を深めるための復習として、1.5～2 時間程度の復習が必要となる。

■授業の概要

- 第1講 本講義の概要、目的、意味を理解する（ガイダンス）。
- 第2講 スポーツマネジメントの発展多摩大学フットサル部のチームマネジメントを学ぶ①
- 第3講 スポーツマネジメントの目的
- 第4講 スポーツマネジメントの捉え方
- 第5講 メディアとスポーツマネジメント
- 第6講 多チャンネル時代のスポーツ放送ビジネス
- 第7講 印刷メディアとスポーツ報道
- 第8講 映画メディアとスポーツ文化
- 第9講 子供の生活・発達とスポーツ
- 第10講 子供のスポーツ環境
- 第11講 子供のスポーツをめぐるマネジメント課題
- 第12講 学校体育をめぐるマネジメントの構造と特徴
- 第13講 トッププレイヤーのセルフマネジメントを学ぶ
- 第14講 振り返り
- 第15講 講義のまとめ

■フィードバックの要領

講義内で提出されたレポートに対する回答等でフィードバックします。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：講義内容を理解し、講義参加意欲も十分。優れた提案・意見をレポートに反映できる。
- 評価 A (89～80 点)：授業への参加意欲も十分にあり内容を理解し、自分の意見を持てるようになった。
- 評価 B (79～70 点)：講義内容について理解している。
- 評価 C (69～60 点)：講義内容は理解しているが、積極性に欠ける。
- 評価 F (59 点以下)：講義への積極的な参加もなく、理解も乏しい。

■評価方法

平常点 70%、レポート課題 30%、絶対評価：多摩大学の評価基準に基づいて評価します。

■留意点

本講義は、授業への参加とプレゼンテーションの内容、レポートの内容および提出率を重視しております。

科目名	スポーツ I (シェイプアップフィットネス) (Sports I-Fitness)		
サブタイトル	シェイプアップフィットネス		
担当教員	梅澤 佳子	対象学年	1 年生以上
		区分	秋学期

■授業目的

スポーツの諸側面を学ぶことによって、(1) 自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。(2) 生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力(「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります)を身につけること。(3) スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。(4) スポーツの価値についての知見を深めることを目的としています。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

「講義目的」に記載されている目的に即した、個々人の発展が見られることが目標であり、学生一人ひとりの状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力を身につける。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

本講義は、アクティブ・ラーニングとして個人ワーク、ペアワーク、グループワークを行う。活動に主体的・能動的に参加することにより身体の構造と機能を理解し、協力し合いながら効果的な身体トレーニング方法を習得することが目標である。尚、新型コロナウイルス感染症の影響により内容が変更になる場合がある。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

健康、身体運動、スポーツの意義について広く理解すべく、参考文献、報道、その他の情報を十分に蒐集し理解しておくこと。(各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第 1 講 本講義の目的、到達目標、受講にあたっての注意点等について説明する。
- 第 2 講 身体測定①・体力測定
- 第 3 講 ストレッチと身体ほぐし①
- 第 4 講 ストレッチと健康トレーニング①
- 第 5 講 ストレッチと健康トレーニング②
- 第 6 講 ストレッチと健康トレーニング③
- 第 7 講 ストレッチと健康トレーニング④
- 第 8 講 ストレッチと健康トレーニング⑤
- 第 9 講 有酸素運動の理論と実践
- 第 10 講 有酸素運動と健康トレーニング
- 第 11 講 有酸素運動を体験する
- 第 12 講 身体測定②
- 第 13 講 3 日間の食生活調査表に関する説明
- 第 14 講 3 日間の食生活調査表の作成②
- 第 15 講 振り返りとディスカッション

■フィードバックの要領

トレーニング日誌の確認とコメント記載によるコミュニケーション等

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 本講義の到達目標に十分達している。
 評価 A (89~80 点) : 技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができています。
 評価 B (79~70 点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められる。
 評価 C (69~60 点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められる。
 評価 F (59 点以下) : 講義目的に沿った活動ができなかったとみられる。

■評価方法

- ・平常点(参加への意欲、姿勢等) : 60% (各回の講義内容と目標を理解し身体運動を行ったかを 3 段階で評価します。)
- ・課題の提出 : 40% (指定された内容について課題を作成し提出してもらいます。)

■留意点

①講義と実技を組み合わせる。②受講希望者が多数の場合は抽選となる。③欠席が 3 分の 1 を超えた場合、原則として単位を付与しない。また就職活動による欠席は考慮しない。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 スポーツ I (フットサル) (Sports I-Futsal)**サブタイトル** フットサルと出会い、その奥深さをしるための入門スクール**担当教員** 福角 有祐**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

①人生を豊かにするためのスポーツ教養の一つとして、フットサルの知識と技能を身に着けること。②フットサルを実践することを通じて、社会人として求められる基礎能力であるコミュニケーションや判断力、実行力、協同する力などを育成すること。③フットサルを通じて、競技者へのシンパシーを獲得し、観戦する（応援する）価値について知ること

■科目分類

顧客理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

競技のルールやマナーの概要を知り、その面白さ、楽しさについて十分理解し他人にもそれを伝えることができる。フットサルゲームに参加し協同者と協力して楽しむことができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

フットサル競技の特性は、そのスピード感であり、判断力、決断力、実行力がきわめて大切であり、社会人力育成につながる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

フットサルゲームの戦略・戦術を考案・実践し学ぶ。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に収集し、理解しておくこと。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 クラスメンバーの決定
- 第2講 フットサルに出会う！
- 第3講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得①
- 第4講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得②
- 第5講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得③
- 第6講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ①
- 第7講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ②
- 第8講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ③
- 第9講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ④
- 第10講 フットサル競技の実践①
- 第11講 フットサル競技の実践②
- 第12講 フットサル競技の実践③
- 第13講 フットサル競技の実践④
- 第14講 フットサル競技の実践⑤
- 第15講 全体の振り返り

■フィードバックの要領

担当教員から学びの状況と今後の方向性について直接アドバイスします。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
- 評価 A (89～80 点) : 技能の開発が十分行われ、将来行かされる準備ができていていること。
- 評価 B (79～70 点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。
- 評価 C (69～60 点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。
- 評価 F (59 点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法

平常点 100%

■留意点

高い競技レベルを前提としてはいない。むしろ、初心者や、スポーツ未経験者にスポーツ体験をしてもらうことを重視している。経験者には、これまでの経験を踏まえて、初心者受講生へのコーチングなどを通じてよりスポーツへの理解を深めてもらうことを期待する。

科目名 ビジネススキル入門 (Introduction to Business Skills)**サブタイトル** ビジネス能力検定ジョブパス3級 (及び2級)**担当教員** 小西、落合、加藤、高橋、田中(友)、葛本 **対象学年** 1年生以上 **区分** 秋学期**■授業目的**

この講義では、卒業後に期待される社会人・職業人になるために、学生時代に身につけておくべき基本的な事柄を学びます。具体的には、①規則正しい生活習慣、②コミュニケーション能力、③日常生活のマナー、④学ぶ楽しさ、⑤情報リテラシー等について、文部科学省後援「ビジネス能力検定ジョブパス3級 (及び2級)」の公式テキストを用いて学びます。Google Classroomを使用し、学生との双方向型授業を展開します。

■科目分類

ビジネス環境理解/ビジネスマネジメント/社会人力育成

■到達目標

文部科学省後援「ビジネス能力検定ジョブパス3級 (及び2級)」合格を到達目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスパーソンとして必要な様々な知識を理解し、社会人基礎力を身につける。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク

Google Classroomを活用し、学修の成果を教員と学生とで共有しながら、ペアワークを行います。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前に配布する予習用サブノートを用いて、毎回 1.5 時間以上の予習が必要。さらに、授業時に配布するワークシートを用いて、毎回 1.5 時間以上の復習が必要。

■授業の概要

- 第1講 ビジネス能力検定ジョブパス3級について 模擬問題演習①
 第2講 第1編：ビジネスとコミュニケーションの基本 第1章：キャリアと仕事へのアプローチ
 第3講 第2章：仕事の基本となる8つの意識
 第4講 第3章：コミュニケーションとビジネスマナーの基本
 第5講 第4章：指示の受け方と報告、連絡・相談 第5章：話し方と聞き方のポイント
 第6講 第6章：来客対応と訪問の基本マナー 第7章：会社関係でのつき合い
 第7講 模擬問題演習②
 第8講 第2編：仕事の実践とビジネスツール 第1章：仕事への取り組み方
 第9講 模擬問題演習③
 第10講 第2章：ビジネス文書の基本
 第11講 模擬問題演習④
 第12講 第3章：電話応対 第4章：統計・データの読み方・まとめ方
 第13講 模擬問題演習⑤
 第14講 第5章：情報収集とメディアの活用 第6章：会社を取り巻く環境と経済の基本
 第15講 模擬問題演習⑥

■フィードバックの要領

授業に関するコメント (ミニッツペーパー) にコメントを付して返却

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : ジョブパス3級 (又は2級) 検定試験に、成績最優秀で合格する。
 評価 A (89~80 点) : ジョブパス3級 (又は2級) 検定試験に、成績優秀で合格する。
 評価 B (79~70 点) : ジョブパス3級 (又は2級) 模擬試験に合格する。
 評価 C (69~60 点) : ジョブパス3級 (又は2級) 合格に準ずる知識を有する。
 評価 F (59 点以下) : ジョブパス3級 (又は2級) 合格に準ずるレベルに達していない。

■評価方法

ジョブパス3級 (又は2級) 検定試験、又はジョブパス3級 (又は2級) 模擬試験に合格すること。(100%)

■留意点

教科書は毎回使用しますので、受講者は全員購入の上、毎回持参してください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビジネス数学基礎 (Practical Mathematics)**サブタイトル** 実社会に必要な数学スキル基礎**担当教員** 久保田、菅沼、良峯、日本数学検定協会 **対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

経営情報学部においては、複合領域での知識や技術の修得が必要となる。このような複合領域を対象とする分野で必要になるデータを扱う数学的手法の基礎について、演習と講義により身につけることが本講義の目的である。この講義は選択必修科目である。演習の積み重ねを通して技術が身に付く構成になっているので、欠席しないこと。本講義では、課題を解決するためにどのようなデータの取り扱いをするとよいか、中学から高校1年程度の数学を基点として、問題解決方法の理解とそれを応用した問題解決演習を行い、産業社会において必要な数理技能の基礎を完全習得する。

■科目分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

経営情報学部で学ぶ上での最低限の数学の能力が身についているか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

データを扱う技法の基礎を身につけることにより、その分析技能と結果の表現方法を習得する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

ビジネス数学基礎では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。授業の中で配布プリントの演習問題を実施する他、Google フォームにおいてその類題を CBT として実施することで多くの問題に当たることができる。それによりビジネスに生かす基礎的な数学の知識を習得すると共に、実際に自ら演算できるスキルを獲得する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

中学・高校数学の最も基礎的な知識を必要とするので、各回で取り扱う単元の事前学習 (0.5 時間) を行うこと。各回で完答できなかった問題を中心に、課題の復習 (1 時間) を行うこと。

■授業の概要

第1講 知識レベルの再評価

第2講 「把握力」

第3講 「分析力」

第4講 「選択力」

第5講 「予測力」

第6講 「表現力」

第7講 まとめ

第8講 中間テスト

第9講 「把握力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第10講 「分析力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第11講 「選択力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第12講 「予測力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第13講 「表現力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第14講 総合課題

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

毎回の授業内課題演習のチェック、中間・期末テストのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : ビジネス数学検定 3 級において 90 点以上およびそれに相当する成績を収めたもの

評価 A (89~80 点) : ビジネス数学検定 3 級において 80 点以上およびそれに相当する成績を収めたもの

評価 B (79~70 点) : ビジネス数学検定 3 級において 70 点以上およびそれに相当する成績を収めたもの

評価 C (69~60 点) : ビジネス数学検定 3 級において 60 点以上およびそれに相当する成績を収めたもの

評価 F (59 点以下) : 上記以外

■評価方法

試験 (90%)、平常点 (10%) により評価する。

■留意点

①クラスは自分が割り当てられたクラスを確認の上、そのクラスで履修する。②学期途中でクラス替えがあるので注意する。③電車の遅延や病欠などの際には、遅延証明書・診断書を提出する。

科目名 マーケティングマネジメント論 (Marketing Management)**サブタイトル** マーケティング論とマネジメント論の統合**担当教員** 趙 佑領**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

マーケティングとは「売れる仕組みづくり」である。そして、マーケティングマネジメント論とは、マーケティングをマネジメントの観点から捉える「システムの」、[全体最適]思考からの論である。そして、企業だけでなく個人や非営利組織の問題解決における手段と思考の多くが、マーケティングに通じるものである。この講義では、マーケティングマネジメントを行う人にとって必要な知識、概念、理論、手法、発想、技術、思考などの「基礎」を学ぶことで、その実行と問題解決の手がかりを得ることを目的とする。実際のマーケティングにおける企業を中心とした最前線事例をできるだけとりあげて、現実のマネジメントに適用可能になるよう説明する。担当教員としてメリハリがあり、分かり易い講義を常に心がけたい。

■科目分類

顧客理解/ビジネス創造/ビジネスマネジメント

■到達目標

マーケティング・マネジメント・プロセスの基本を理解し、マーケティング企画・マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得をめざす。中小企業診断士試験レベルの問題解説を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的なマーケティングの思考力を基に、組織と個人の課題解決に向けたマーケティングとマネジメントの統合のプロセスを理論的に理解する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

マーケティング・マネジメント論では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。教員が示した講義内容の中で印象深い箇所を中心に感想レポートを毎週授業ごとにTNEXTに1000字以上入力提出し、教員の評価とコメントを受ける。授業内容の理解を深め、マーケティングのセンスを向上させることが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

講義終了間際に教員が示す事前事後学習ポイントを中心に、それらを授業前に読んだ上で(各1.5時間以上)講義に臨み、毎回授業後にはT-NEXTまたはWORDを用いて毎週1000字以上の感想レポートを提出する。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション、マーケティングの定義、マーケティングマネジメントの概要
- 第2講 戦略とは? 戦略の構想、ビジョン策定
- 第3講 マーケティング環境分析(1)、マーケティング環境の性格
- 第4講 マーケティング環境分析(2)、SWOT分析
- 第5講 STP(1)一市場細分化するための基準
- 第6講 STP(2)一ポジショニング成功の鍵
- 第7講 コンセプトメイキング
- 第8講 サービス(プロダクト)
- 第9講 価格(プライシング)
- 第10講 チャネル(流通経路)
- 第11講 コミュニケーション(プロモーション)
- 第12講 マーケティングマネジメントの実際と日本企業のマーケティング
- 第13講 マーケティングマネジメントに必要な発想法と思考法
- 第14講 実社会のブランドマーケティングの専門家、またはマーケティングマネジャーのゲスト講義
- 第15講 総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、評価あるいはコメントをT-NEXTまたはWORDに記入してフィードバック

■評価基準

- 評価A+(90点以上): ほぼ全授業回のレポート提出をし、マーケティング・プロセスの基本を高度に理解
- 評価A(89~80点): ほぼ全授業回のレポート提出をし、マーケティング・プロセスの主要概念をかなり理解
- 評価B(79~70点): マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得がある程度に達している。
- 評価C(69~60点): マーケティング・プロセスの基本知識を一部有している
- 評価F(59点以下): マーケティングの基本を理解していない結果として不合格、全授業回数数の3分の1以上欠席

■評価方法

毎回授業ごとの小レポート(全15本をT-ENXTに提出)の総計点(100%)。出席を疎かにすると毎回の小レポートを提出できないことになるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。

■留意点

①講義の順序は、学生の理解度と進捗度によって前後変更する場合がある ②私語、携帯電話、本授業と無関係のパソコン使用、途中退室は絶対不可であり、熾烈に厳しく注意する。学生の社会人としての常識涵養のための注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 マクロ経済学 (Macroeconomics)**サブタイトル** マクロ経済学 (Macroeconomics)**担当教員** 下井 直毅**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

日常的に新聞やテレビのニュースで報じられている様々な日本経済を取り巻く問題を分析するための枠組みとしての経済学を学ぶ。また、その基本的な知識を身につけることを目的とする。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

この講義では、マクロ経済学の基本的な知識の修得を目指す。日常的に新聞やテレビのニュースで報じられている失業率や財政赤字や株価など、日本経済を取り巻く問題をどのように考えたらいいのかを理解することを目標とし、マクロ経済学を一通り学ぶことで、何が今日の日本経済の中で問題になっているのかが分かるようになることを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることができる。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

マクロ経済学では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。具体的には練習問題等を解くというものだが、こうした活動に主体的・能動的に取り組むことで、授業内容をより一層理解し、興味関心を高めることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。毎授業後には、授業内で配布された資料に再び目を通し、理解の定着をはかること。これらの準備には、1.5 時間以上の取り組みが必要である。

■授業の概要

- 第1講 マクロ経済学とは
- 第2講 GDP を理解する
- 第3講 マクロ経済学における「短期」と「長期」
- 第4講 GDP はどのように決まるか
- 第5講 貨幣の需給と利子率
- 第6講 IS-LM 分析と財政金融政策
- 第7講 国際マクロ経済学
- 第8講 短期モデルと長期モデルの比較
- 第9講 物価水準はどのように決まるか
- 第10講 インフレとデフレ
- 第11講 経済成長の理論
- 第12講 消費と貯蓄
- 第13講 投資決定の理論
- 第14講 ケインジアン・マネタリスト以降のマクロ経済学
- 第15講 授業内試験

■フィードバックの要領

授業内試験に関して、希望者に対してはコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : マクロ経済学の基本的な知識をほぼすべて修得できている。
- 評価 A (89~80 点) : マクロ経済学の基本的な知識をかなり修得できている。
- 評価 B (79~70 点) : マクロ経済学の基本的な知識を十分に修得できている。
- 評価 C (69~60 点) : マクロ経済学の基本的な知識をある程度修得できている。
- 評価 F (59 点以下) : マクロ経済学の基本的な知識を修得できていない。

■評価方法

授業の平常点 (30%)、試験 (70%)。合計 100% で 100 点満点。

■留意点

「ミクロ経済学」を前提科目（当該科目履修前に絶対に履修しなくてはならない科目）とする。

科目名 ミクロ経済学 (Microeconomics)**サブタイトル** ミクロ経済学 (Microeconomics)**担当教員** 下井 直毅**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

この講義ではミクロ経済学について学ぶ。ミクロ経済学は、産業社会の中で資源配分がどのように行われているのか、あるいはないのかといった、メカニズムを明らかにすることを主たる目的としている。限られた生産資源である労働や資本などをいかに効率的に生産にまわすのか(配分するのか)という問題を扱う。また、企業や産業を取り巻く社会問題についても経済学の発想で分析し、問題把握を行う。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

できるだけ現実の産業社会における経済現象に関心を持ち、それを分析するための枠組みとしての経済学を学び、その基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることができる。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

ミクロ経済学では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。具体的には練習問題等を解くというものだが、こうした活動に主体的・能動的に取り組むことで、授業内容をより一層理解し、興味関心を高めることが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。毎授業後には、授業内で配布された資料に再び目を通し、理解の定着をはかること。これらの準備には、1.5時間以上の取り組みが必要である。

■授業の概要

- 第1講 需要と供給 需要と供給の関係について理解する
- 第2講 需要曲線の構造と消費者の行動 需要曲線と消費者の行動について理解する
- 第3講 費用曲線と企業の行動 費用曲線と企業の行動について理解する
- 第4講 企業の利潤最大化行動と供給曲線 企業の最適行動について理解する
- 第5講 消費者行動の理論 消費者行動について理解する
- 第6講 消費者行動理論の展開 様々な財について理解する
- 第7講 企業の生産関数と費用最小化行動 様々な生産関数を理解する
- 第8講 一般均衡と資源配分 一般均衡の概念を理解する
- 第9講 独占の理論 独占とは何かを理解する
- 第10講 独占的競争の理論 独占的競争とは何かを理解する
- 第11講 ゲームの理論 戦略的思考について理解する
- 第12講 市場の失敗 市場が失敗するとはどういうことかを学ぶ
- 第13講 市場の失敗Ⅱ 市場の失敗の事例として費用削減産業について理解する
- 第14講 不確実性と経済現象 不確実性とは何かを理解する
- 第15講 授業内試験

■フィードバックの要領

授業内試験に関して、希望者に対してはコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : ミクロ経済学の基本的な知識をほぼすべて修得できている。
- 評価 A (89~80点) : ミクロ経済学の基本的な知識をかなり修得できている。
- 評価 B (79~70点) : ミクロ経済学の基本的な知識を十分に修得できている。
- 評価 C (69~60点) : ミクロ経済学の基本的な知識をある程度修得できている。
- 評価 F (59点以下) : ミクロ経済学の基本的な知識を修得できていない。

■評価方法

授業の平常点 (30%)、試験 (70%)。合計100%で100点満点。

■留意点

事前学修として、オープンな教育リソースとして、JMOOCを受講することを薦める(無料)。詳しくは、「JMOOC受講案内」(<https://www.jmooc.jp/about/>)を確認すること。これは、1週間が基本的な学習の単位となっており、1週間で見るべき講義が5本から10本公開される。各講義は10分程度の短い動画で構成されている。経済にまつわるものであれば何でもかまわない。実際に開講されている講座は、上記のHPサイトで確認できる。

科目名 ライティング・スキル (Writing Skill)**サブタイトル** 知的な文章を自在に書く力をつける**担当教員** 樋口 裕一**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

ビジネスパーソンとして、社会人として、産業社会で活躍し、問題発見、問題解決、論理的思考、他者の説得をするために不可欠なライティングスキルを養成する

■科目分類

顧客理解／ビジネス環境理解／社会人育成

■到達目標

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確に思考し、判断し、それを他者に伝える力をつける。また、文章を書くスキルを身に着けることによって、自分の高い志を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確な思考と判断を培い、それを他者に伝える力表現力と技能を身に着ける。それによって、自分の高い志を持てるようにする。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義／演習

【活動形態】 個人ワーク

個人ワークとして文章を書くが、グループまたは全員で批評し合い、グループでよい表現や文章を仕上げていく。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

2時間以上かけて、書籍、インターネットを用いて、予定されている授業内容について情報を整理する。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション 文章の書き方の基本
- 第2講 第1回課題答案作成（200字～300字程度の文章）
- 第3講 文法的に正しい文・文原稿用紙の使い方・間違いやすい表現
- 第4講 よい文章と悪い文章の違い 論理の展開
- 第5講 第2回課題答案作成（300字程度の文章）
- 第6講 様々な文体への対応（日常の文体、新聞の文体、ビジネス文体）
- 第7講 第3回課題（600字程度の文章）
- 第8講 第3回課題解説 鋭い視点で論を展開する方法
- 第9講 鋭い視点で論を展開する方法・その2
- 第10講 文章を読んで論じる方法
- 第11講 第4回課題答案作成（文章を読んで、それについて論じる）
- 第12講 第4回課題解説 グラフ・表の読みとり
- 第13講 リアリティのある文章の書き方
- 第14講 第5回課題答案作成（エントリーシート）
- 第15講 第5回課題解説・これからの勉強法

■フィードバックの要領

提出した文書についてコメントを付してフィードバックを行なう。

■評価基準

- 評価 A+（90点以上）：全答案平均が A 相当以上（書き直し、発言による加点を含める）
- 評価 A（89～80点）：全答案平均が B 相当以上（書き直し、発言による加点を含める）
- 評価 B（79～70点）：全答案平均が C 相当以上（書き直し、発言による加点を含める）
- 評価 C（69～60点）：全答案平均が D 相当以上（書き直し、発言による加点を含める）
- 評価 F（59点以下）：全答案平均が D 未満（書き直し、発言による加点を含める）

■評価方法

提出文章（80パーセント）、平常点（20パーセント）

■留意点

授業中の私語禁止。そのほか、飲食（ただし飲みものの摂取は許す）・ガム・帽子着用（宗教などの理由のある学生は許可する）・寝る姿勢を整えての居眠り・無断退出・イヤホンの着用・教員に対する暴言など、授業を害する行為についても禁止する。目に余るものは退出させ、欠席とみなす。

科目名 ライフ・デザイン (Life Design)**サブタイトル** クオリティ・オブ・ライフについて考える**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

生活環境が整備され、日本人の平均寿命は80歳を超えるようになりました。さらに皆さんは人生100時代を前提にライフ・デザインを考えなければなりません。これまでと異なるライフ・デザインを描くために、少子化、高齢化、人口減少、グローバル化、産業構造の変化、ICT、科学技術の進歩を生活者の視点から学びます。そして、これからの生き方、社会のあり方に、一人ひとりが真剣に向き合い、考え、行動するための実践的知識の獲得を目指します。

■科目分類

ビジネス創造／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

1. 社会学的なものの見方、考え方を理解すること。2. 暮らし、地域に興味と関心を向けることができるようになる。3. 暮らし、地域の課題をみつけ解決のためのデザインを考える習慣がつくこと。4. 自分自身のライフデザインを考える。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

生活全般に関する基礎的な知識を養い、グローバルな視点から社会現象の実態、現象の起こる原因に関係するメカニズムを解明するための手法を学びます。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク

講義内においてペアワークを実施する場合があります。ペアワークを通じて多様な考え方や価値観に対する理解を深めてもらいたい。但し、新型コロナウイルス感染症の状況によりアクティブ・ラーニングを活動形態を変更する場合があります。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前に予習のための用語やポイントを説明しますので、予習しておいてください。講義後は、配布資料、ノートを元に必要な情報を自ら収集し深い学びを行ってください。(各1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 ライフ・デザインってなに？
- 第2講 今、なぜ、ライフデザインが必要なの？
- 第3講 アルバイトから働くことについて考えてみよう
- 第4講 「これが当たり前」の働き方って？
- 第5講 ワーク・ライフ・バランスの国際比較
- 第6講 日本人のワーク・ライフ・バランスはどうなってる？
- 第7講 中間試験または課題の作成
- 第8講 生活文化を楽しみ、生活文化を継承する
- 第9講 戦後の暮らしとコミュニティ
- 第10講 共に考える、これからのライフデザイン①
- 第11講 協働型社会を考える、これからのライフデザイン②
- 第12講 優れたデザインの先行事例調査①
- 第13講 優れたデザインの先行事例調査②
- 第14講 講義のまとめ
- 第15講 授業内試験

■フィードバックの要領

講義内で提出されたミニ・レポートに対する回答等でフィードバックします。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：授業内容を十分に理解し、優れた意見を持っている。
- 評価 A (89～80点)：授業内容を理解し、自分の意見を持てるようになった。
- 評価 B (79～70点)：授業内容について理解している。
- 評価 C (69～60点)：不十分な点もあるが授業内容を理解している。
- 評価 F (59点以下)：著しく理解が不十分である。

■評価方法

提出物 (60%)、最終課題または試験 (40%)。絶対評価：多摩大学の評価基準に基づいて評価します。

■留意点

出席は評価のための前提条件です。欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しません。就職活動による欠席について考慮しない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 韓国語 I (Korean I)**サブタイトル** ハングルのマスター**担当教員** 趙、高**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

多摩大学では世界潮流としてのアジアダイナミズムを体得すべく諸々の教育プログラムを提供しているが、アジアの第一関門は隣国の韓国であろう。本講義では韓国語をはじめて学ぶ学生を対象に、ハングル文字と発音、基礎的文法やコミュニケーションを学ぶことを目的とする。韓国語の単語を一つ知るごとに、フレーズを一つ学ぶごとに、学生の目に映る韓国や韓国人は変わってくるものである。韓国語のみならず韓国や韓流を知りたい意欲ある学生の参加を望む。本講義を1年間積極的に参加することで、中級レベルの韓国語も扱う韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱの学習につながることを期待するものである。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

①ハングル文字や発音を徹底してマスターした後、ハングル能力検定試験5級レベルの語彙や文法表現を学習する。②韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ・韓国経済論・アジア経済論Ⅰを学ぶ際の土台づくり、③来年度の6月に行われるハングル能力検定試験5級を目指し、その実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

韓国語の文字であるハングルの学習することで韓国語の読み書きができるようになり、文法や語彙など基本的な表現を学習することで簡単な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

韓国語Ⅰでは、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。具体的には、ハングルの覚え、文法や語彙など基本的な表現を学習することに取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、韓国語で簡単な意思疎通ができるようになることが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前には、その回の該当課の本文をスムーズに読めるようにすること。また、その回に小テストを行う際には、その回の授業が始まる前に教科書の練習問題を復習すること(各1.5時間学習相当)。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション、韓国語について
- 第2講 2課「子音②」と3課「子音③」
- 第3講 4課「子音④」と5課「合成母音」
- 第4講 6課「パッチム」と7課「連音化」
- 第5講 8課「～는～입니다」/9課「～라고 합니다」/鼻音化
- 第6講 10課「～가～예요」/11課「～를～해요」/濁音化
- 第7講 12課「해요体①」/13課「해요体②」/ㅎの弱音化
- 第8講 14課「～이십니다」/～이세요」/15課「～가 아니예요」
- 第9講 16課「～으십니다」/～으세요」/17課「안～」
- 第10講 18課「일, 이, 삼」/19課「이것, 그것, 저것」
- 第11講 20課「있다/없다」/21課「하나, 둘, 셋」
- 第12講 22課「앞, 뒤, 옆」/23課「잘하다/못하다」/激音化
- 第13講 24課「～으세요」/25課「～을까요?」
- 第14講 26課「～쓰어요」/27課「아직 안～ 쓰어요」
- 第15講 映画鑑賞、個人面談

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：ハングルの完全マスターし、文法を高度に理解し、基本ボキャブラリーが豊富である
- 評価 A (89～80点)：ハングルのマスターし、基本的文法を良く理解、基本ボキャブラリーを習得している
- 評価 B (79～70点)：ハングル文字や発音を一定程度マスターしており、基本的文法を一定程度理解している
- 評価 C (69～60点)：ハングルの基本的なスムーズには読めて、基本的文法のいくつかを習得している
- 評価 F (59点以下)：ハングルのスムーズに読めず、あるいは読めるものの欠席が多い

■評価方法

- ・授業での毎回の小テストの総計点(100%)
- ・出席を疎かにすると毎回実施する小テストを受けられないことになるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。

■留意点

- ・語学の学習には地道さ、根気強さが必要であるため、なるべく毎回の出席を望む。これまでの経験だと、出席が良好な学生が成績も上位であり、毎回の出席こそ語学上達の近道である。一定の出席に満たない場合、学期途中においてもFになる可能性を警告する。授業では随時、筆記や発音の小テストがあるが、決して高いハードルではない。
- ・小テストに対してフィードバックを行う。

科目名 韓国語Ⅱ (Korean II)**サブタイトル** 初級単語と文法の学修**担当教員** 趙、高**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

多摩大学では世界潮流としてのアジアダイナミズムを体得すべく諸々の教育プログラムを提供しているが、アジアの第一関門は隣国の韓国であろう。本講義では韓国語をはじめて学ぶ学生を対象に、ハングル文字と発音、基礎的文法やコミュニケーションを学ぶことを目的とする。韓国語の単語を一つ知るごとに、フレーズを一つ学ぶごとに、学生の目に映る韓国や韓国人は変わってくるものである。韓国語のみならず韓国や韓流を知りたい意欲ある学生の参加を望む。本講義を1年間積極的に参加することで、中級レベルの韓国語も扱う韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱの学習につながることを期待するものである。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

①ハングル文字や発音を徹底してマスターした後に、ハングル能力検定試験5級レベルの語彙や文法表現を学習する。②韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ・韓国経済論・アジア経済論Ⅰを学ぶ際の土台づくり。③来年度の6月に行われるハングル能力検定試験5級を目指し、その実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

韓国語の文字であるハングルを学習することで韓国語の読み書きができるようになり、文法や語彙など基本的な表現を学習することで簡単な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

韓国語Ⅱでは、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。具体的には、ハングル能力検定試験5級レベルの語彙や文法表現を学習することに取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、来年度の6月に行われるハングル能力検定試験5級を目指し、その実力をつけることが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

授業前には、その回の該当課の本文をスムーズに読めるようにすること。また、その回に小テストを行う際には、その回の授業が始まる前に教科書の練習問題を復習すること(各1.5時間学習相当)。

■授業の概要

- 第1講 28課「～고」/29課「～고 싶다」
- 第2講 30課「吳～」/31課「ㄹ변則」
- 第3講 32課「～지요/죠」/33課「～잖」
- 第4講 34課「～하나다만」/35課「～요/요?」
- 第5講 36課「～하고 같다」/37・38課「模擬試験(筆記)」
- 第6講 39・40課「模擬試験(聞き取り)/会話練習(1)「自己紹介」
- 第7講 会話練習(2)「日課」
- 第8講 会話練習(3)「将来の夢・希望」
- 第9講 会話練習(4)「体験・経験」
- 第10講 会話練習(5)「お正月」
- 第11講 会話練習(6)「番組」
- 第12講 会話練習(7)「ショッピング」
- 第13講 会話練習(8)「パソコンとインターネット」
- 第14講 会話練習(9)「語学」
- 第15講 映画鑑賞、願書作成

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : ハングルの完全マスターし、文法を高度に理解し、基本ボキャブラリーが豊富である
- 評価 A (89~80点) : ハングルのマスターし、基本的文法を良く理解、基本ボキャブラリーを習得している
- 評価 B (79~70点) : ハングル文字や発音を一定程度マスターしており、基本的文法を一定程度理解している
- 評価 C (69~60点) : ハングルの基本的にスムーズには読めて、基本的文法のいくつかを習得している
- 評価 F (59点以下) : ハングルのスムーズに読めず、あるいは読めるものの欠席が多い

■評価方法

- ・授業での毎回の小テストの総計点(100%)
- ・出席を疎かにすると毎回実施する小テストを受けられないことになるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。

■留意点

- ・語学の学習には地道さ、根気強さが必要であるため、なるべく毎回の出席を望む。これまでの経験だと、出席が良好な学生が成績も上位であり、毎回の出席こそ語学上達の近道である。一定の出席に満たない場合、学期途中においてもFになる可能性を警告する。
- ・復習を重視すること
- ・授業では随時、筆記や発音の小テストがあるが、決して高いハードルではない。
- ・小テストに対してフィードバックを行う。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営学入門 (Introduction to Management)**サブタイトル** 経営学への誘い**担当教員** 落合 孝彦**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

この授業は「目標を効果的に達成するための方法／そのための組織の運営方法」の学として誕生した経営学の入門編と位置付けられる。目標達成方法としての管理を全社的に行うことが経営であるとの認識のもと、マネジメントサイクル (PLAN⇒DO⇒SEE) に従い「戦略論⇒マーケティング⇒組織論⇒人的資源管理⇒会計」の基礎、さらにはヒト・モノ・カネに続く第4の経営資源として注目される「経営情報」の基礎について説明する。なおこの授業は「ITパスポート資格試験」の出題範囲に対応する内容で構成されている点に留意されたい。

■科目分類

顧客理解／ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント

■到達目標

1. 戦略・マーケティングにおける環境分析、戦略上の狙い、仕組みやプロセスを理解する。
2. 企業経営における情報システムの重要性、組織の編成原理・形態について理解する。
3. 財務諸表の構造・見方に関する基礎知識を習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP1：教材の活用や練習問題の解答を通じて経営学に関する基礎知識の習得を促す
 DP2：レポート作成等を通して知識の応用・思考力の醸成を促す

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

この授業は講義形式であるため、アクティブ・ラーニングの活動形態は個人ワークとなる。具体的には毎回配布されるワークシートへの記入、練習問題 (4択問題・正誤テスト) の解答作業を通じて、基礎知識の習得を促すことが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

予習：授業前に指定箇所 (キーワード) の意味を教科書等で確認 (1.5h)

復習：事後の学習ポイントを確認し理解が不十分な箇所の抽出と解消 (1.5h)

■授業の概要

- 第1講 経営とは何か
 第2講 経営戦略①～ドメインと成長戦略～
 第3講 経営戦略②～プロダクト・ポートフォリオ・マネジメント～
 第4講 経営戦略③～競争戦略～
 第5講 経営戦略④～経営情報分析とアライアンス～
 第6講 マーケティング①～マーケティングの基礎概念～
 第7講 マーケティング②～マーケティングの事例紹介～
 第8講 組織と人的資源管理①～組織の基本形態～
 第9講 組織と人的資源管理②～組織の諸形態～
 第10講 財務諸表①～貸借対照表 (B/S) の見方～
 第11講 財務諸表②～損益計算書 (P/L) とキャッシュフロー計算書 (C/S) の見方～
 第12講 経営情報①～データ分析と意思決定～
 第13講 経営情報②～技術開発マネジメントとビジネスインダストリー～
 第14講 経営情報③～システム戦略～
 第15講 授業のまとめ

■フィードバックの要領

復習・練習問題の正誤確認は原則授業中、レポート返却については授業の中で説明する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：到達目標すべてについての高い理解度と積極性 (レポートの提出が要件となる)。

評価 A (89～80点)：到達目標すべてについての高い理解度。

評価 B (79～70点)：到達目標すべてについての平均的な理解度。

評価 C (69～60点)：到達目標すべてについて要求される最低限度の理解度。

評価 F (59点以下)：ITパスポート試験合格レベルに到達していない理解度。

■評価方法

期末試験：70%、その他30% (内訳 課題レポート：20%、特別に指定された授業内課題：10%)

■留意点

講義中の食事、講義の進行を妨害する行為については相応に対処する。

科目名 初級簿記 (Introductory Level Bookkeeping)**サブタイトル** 会計学入門**担当教員** 木村 太一**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

私たちは普段、お金を払って物を買ったり、仕事やアルバイトをしてお金を受け取ったりする。あるいは銀行にお金を預けたり、引き出したりといったこともするだろう。このように、私たちの生活にはお金のやり取りが欠かせない。そうしたお金のやり取りを記録する方法、それが複式簿記である。そんなものを使わなくても、今やお小遣い帳はアプリでつける時代。それにもかかわらず、会社はみんな複式簿記を使ってお金のやり取りを記録している。はるか昔から、時代を超えて今なお使われているこの複式簿記という記録の方法を知る。これが本講義の目的の1つである。また、複式簿記を勉強していくと、「結構面倒くさい」ことに気づくと思う。そんなことを、なぜしているのか？ 経営者が会計を行なう動機、そしてそんな会計によって生み出された情報を欲しがらる動機について学び、現代の会計に繋がる会計の歴史にも触れながら、現代会計の「存在の理屈」を考える。これが本講義の今一つの目的である。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

①複式簿記という記録方法と、財務諸表作成のプロセスを一通り理解する。②現代において会計がどのような考え方の下に行なわれ、どのような役割を果たしているのかを一通り理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

複式簿記というビジネスに不可欠な技術を習得し、これを通じて取引を2つの面から捉えるという複式簿記ならではの世界の見方に触れる。また、現代会計の「存在の理屈」について思量する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

企業情報の入手方法を教授した後、受講生自らが公開情報を基に企業調査を行なう。これにより、授業で学んだ会計の知識や理論が、現実社会でどのように活かされているのかを理解することが期待される。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

予習よりも復習に重きを置いて、その回に用いられたテキストやレジュメの数値例で何度も計算をすること。また、新聞やニュースに注意を向けてみて欲しい。きっと学んだ用語や比率をみつかることができるはずである。(各 1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 会計とは何か
- 第2講 企業情報の入手方法
- 第3講 財務諸表
- 第4講 複式簿記①—簿記一巡／資金調達／現金による商品売買
- 第5講 複式簿記②—掛による商品売買／返品
- 第6講 複式簿記③—小切手／手形
- 第7講 複式簿記④—諸掛り／有形固定資産の取得
- 第8講 複式簿記⑤—利息のやり取りを含む金銭貸借
- 第9講 複式簿記⑥—決算整理と売れ残り
- 第10講 複式簿記⑦—減価償却
- 第11講 複式簿記⑧—簿記のまとめ
- 第12講 会計理論①—会計の機能
- 第13講 会計理論②—減価償却思考成立の背景
- 第14講 会計理論③—発生・実現・対応
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

課題や練習問題を通じて理解度を測り、講義を進める。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 授業内試験と課題の総合計のうち90%以上を獲得した場合に付与する。
- 評価 A (89~80点) : 授業内試験と課題の総合計のうち80%以上90%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 B (79~70点) : 授業内試験と課題の総合計のうち70%以上80%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 C (69~60点) : 授業内試験と課題の総合計のうち60%以上70%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 F (59点以下) : 授業内試験と課題の総合計のうち獲得したのが60%未満であった場合に付与する。

■評価方法

課題 10%、定期試験 90%

■留意点

電卓を使用するので各自購入のこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 多摩学 I (Tama Study I)**サブタイトル** 多摩圏の地理・歴史・産業・文化・交通・社会 (コミュニティ)・行財政を学ぶ**担当教員** 野坂、加藤、高橋、内藤、長島、樋笠 **対象学年** 1年生以上 **区分** 春学期**■授業目的**

本講義の目的は、私たちの大学が立地している多摩地域にも、地域なりの「力」がある。その「力」と可能性について考えることが、この地域の活性化と発展につながる。「多摩学 I」は多摩圏 (多摩・神奈川) の来歴を探り、多摩の現代について考え、未来を構想する学問である。その地歴を探り、この地域の持つ意味と可能性を多角的・学際的に探求していく。本講義では、多摩圏 (多摩・神奈川) の地理・歴史・産業・文化・交通・社会 (コミュニティ)・行財政に関する基本的な知識を習得することが目的である。

■科目分類

ビジネス環境理解 / 社会人力育成 / 地域ビジネス

■到達目標

多摩・神奈川の地理・歴史・産業・文化・交通・社会 (コミュニティ)・行財政についての基本的な知識を習得する。知識を身につけたうえで、多摩における強みや課題を発見し、自分なりの課題解決方法を見つめることができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP1: 多摩圏の地理・交通・歴史・産業・文化・社会 (コミュニティ)・行財政に関する基本的知識を学び、特徴を理解する。
DP2: 多摩・神奈川の特徴や強みおよび課題を自分なりに見つけ出す。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク / ペアワーク / グループワーク

多摩学では、アクティブ・ラーニングとして学外での活動を行う。学生が自分の関心のある多摩地域の博物館等に行き、調べた内容をレポートとして提出する。主体的・能動的に取り組むことにより、多摩地域への関心を深め、知識の習得に努める。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

課題についてしっかりと取り組むこと (1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション: 本講義の目的および学習内容についての説明
- 第2講 多摩圏の歴史① (縄文～江戸時代)
- 第3講 多摩圏の歴史② (明治～昭和前期)
- 第4講 多摩圏の概要
- 第5講 多摩圏の農林業
- 第6講 多摩圏の工業
- 第7講 多摩圏の金融
- 第8講 多摩圏の文化
- 第9講 多摩圏の交通
- 第10講 多摩圏の行財政
- 第11講 多摩圏の社会
- 第12講 レポートの作成
- 第13講 多摩圏の商業
- 第14講 多摩圏の情報通信業
- 第15講 期末テストの実施

■フィードバックの要領

提出課題における質問等については、フィードバックを次回の授業にて行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上): 多摩圏について十分に理解し、自分の考えや意見の記述内容が非常に優れている。
- 評価 A (89～80 点): 多摩圏について十分に理解し、自分の考えや意見の記述内容が優れている。
- 評価 B (79～70 点): 多摩圏について理解し、自分の考えや意見が記述されている。
- 評価 C (69～60 点): 多摩圏についてあまり理解しておらず、自分の考えや意見の記述内容がやや不十分。
- 評価 F (59 点以下): 多摩圏についてほとんど理解しておらず、自分の考えや意見の記述が不十分。

■評価方法平常点 60% (毎回の小テストの点数 or 課題の点数を含む)、テスト 40%、さらに発言ポイント + α として加味する。**■留意点**

必修科目のため、必ず出席をすること

科目名 多摩学Ⅱ (Tama StudyⅡ)**サブタイトル** ～多摩圏の企業・行政を理解する～**担当教員** 野坂、長島**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

多摩学Ⅰ(春学期)では、地理・歴史・文化・産業・交通・社会(コミュニティ)・行財政に関する基本的な知識を網羅的に習得することを目的とした。多摩学Ⅱ(秋学期)では、春学期の座学を発展させて「リアル(現場)」の学びを中心とする。具体的には、多摩圏に立地する企業の経営者や行政の方、生産者等をゲストスピーカーとして招聘し、現場目線の現状と課題についてお話をしただく。「現場」の第一線で働く方々の話を直接聞くことで、ビジネス志向を高めながら、多摩地域における企業・産業に対する理解を深めるとともに、多摩圏の課題解決の方策を自分達なりに考えることを目的とする。

■科目分類

顧客理解/ビジネス環境理解/社会人力育成

■到達目標

多摩圏における企業・産業の役割、現状と課題等について理解を深め、自分なりの意見や疑問点を持つことができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP1: 多摩圏の第一次産業、第二次産業、第三次産業の知識を習得し、その全体像を理解する。

DP2: 基本的な知識を身につけたうえで、多摩圏の産業に関する特徴や強みおよび課題を自分なりに見つけ出す。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク

多摩学Ⅱでは、アクティブラーニングとして、個人ワークまたはペアワークを実施する。レポート課題においては、ペアでの他者評価を行ってもらう。これにより、客観的な評価を得ることで、自己のリテラシースキルの向上につなげる。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

課題について自分で調べて学習すること(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 演習①新聞記事から多摩圏について調べよう(説明・作業)
- 第3講 演習②新聞記事から多摩圏について調べよう(グループ報告会)
- 第4講 多摩圏の第一次産業①生産者(ゲストスピーカーによる講演・「寄附講座」)
- 第5講 多摩圏の第一次産業②教員による前回の講演の復習回
- 第6講 多摩圏の第二次産業①製造業者(ゲストスピーカーによる講演・「寄附講座」)
- 第7講 多摩圏の第二次産業②教員による前回の講演の復習回
- 第8講 演習③資料館訪問の成果報告会(グループ報告会)
- 第9講 多摩圏の第三次産業①サービス業の事業者(ゲストスピーカー講演・「寄附講座」)
- 第10講 多摩圏の第三次産業②教員による前回の講演の復習回
- 第11講 多摩圏の金融機関①信用金庫(ゲストスピーカーによる講演・「寄附講座」)
- 第12講 多摩圏の金融②教員による前回の講演の復習回
- 第13講 多摩圏の行政①市役所(ゲストスピーカーによる講演・「寄附講座」)
- 第14講 多摩圏の行政②教員による前回の講演内容に関する復習
- 第15講 期末テストの実施

■フィードバックの要領

小テストについては、回答後に、解説をT-NEXTに掲載予定。

■評価基準

評価A+(90点以上): 多摩の産業について十分に理解し、自分の考えや意見の記述内容が非常に優れている。

評価A(89~80点): 多摩の産業について十分に理解し、自分の考えや意見の記述内容が優れている。

評価B(79~70点): 多摩の産業について理解し、自分の考えや意見が記述されている。

評価C(69~60点): 多摩の産業についてあまり理解しておらず、自分の考えや意見の記述内容がやや不十分。

評価F(59点以下): 多摩の産業についてほとんど理解しておらず、自分の考えや意見の記述が不十分。

■評価方法

平常点50%(毎回の課題提出の合計点)、課題レポート20%、期末テスト30%=合計100%

*平常点とは出席点ではありません。毎回の授業での意見・感想の提出が点数となります。

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 地域ビジネス入門 (Introduction to Region Business)**サブタイトル** ～地域課題解決の基本を考える～**担当教員** 梅澤、中澤、長島、中庭、野坂、松本**対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

多摩大学における地域ビジネス論では日本・世界各地に、地域・歴史特有の事業があると考え、事業(=ビジネス)を課題解決手法としてとらえる。事業内、事業間の多様な差異を比較し、課題解決手法としての事業を考えるため、対象は多様な地域とし、国内と海外の区別をしない。地域・歴史毎に特徴のある事業をとらえるために、本講義では政治・経済・社会・文化の側面から、現場・事例の課題を観察し、分析し、事業としての解決策を立案・評価し解決の実現に導くための考え方、方法論、事例について学ぶ。

■科目分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/地域ビジネス

■到達目標

地域ビジネスに関する基礎知識、基礎的な考え方を習得すること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域ビジネスに関する基本的な学力を養い、その視点から国内外の地域・歴史特有の課題を理解し、解決方法を生み出す能力の基礎を習得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク

本講義科目は、アクティブ・ラーニングとして上述のAL手法を行う場合がある。複数教員で担当しているため活動形態は各教員によって異なる。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

オリエンテーションをもとに各授業の事前学習で30分、授業のレジュメ・ノートを使用した講義のポイント整理で1時間。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション「地域ビジネスとは何か？」(担当:全員)
- 第2講 個人と社会(担当:中庭)
- 第3講 会社の基本(担当:長島)
- 第4講 政府、制度とは(担当:中庭)
- 第5講 産業・企業とは(担当:野坂)
- 第6講 「事業」とは何か?(担当:松本)
- 第7講 生活者の視点から地域ビジネス(事業)を考える(担当:梅澤)
- 第8講 コンテンツ産業と地域(担当:中澤)
- 第9講 地域活性化入門(担当:中庭)
- 第10講 第二次産業への理解(担当:長島)
- 第11講 第一次産業への理解(担当:野坂)
- 第12講 地域ビジネスの事業開発演習(担当:松本)
- 第13講 ソーシャルデザインと地域ビジネス(担当:梅澤)
- 第14講 コンテンツ・ツーリズムと現代(担当:中澤)
- 第15講 ふりかえりと総括(担当:全員)

■フィードバックの要領

レポートへのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上): 各講義について深く理解し、地域ビジネスに対する考えを明確に示すことが出来る。
- 評価 A (89～80点): 各講義について深く理解し、地域ビジネスに対する考えを示すことが出来る。
- 評価 B (79～70点): 各講義について深く理解し、地域ビジネスの可能性を考えることが出来る。
- 評価 C (69～60点): 各講義について深く理解し、地域ビジネスの重要性を把握している。
- 評価 F (59点以下): 各講義についての理解が不十分であり、地域ビジネスの重要性をつかんでいない。

■評価方法

平常点40%、各講義に関するレポート60%

■留意点

科目名 中国語 IX (Chinese IX)**サブタイトル** 中国語へのいざない**担当教員** 水盛 涼一**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は14億人を超える。これは英語(6億人)、インドのヒンディー語(5億人)、スペイン語(4億5千万人)、アラビア語(3億人)、そして日本語(1億3千万人)の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口となる。しかも大中華圏は日本に近く、観光に貿易にと交流は益々密接となっている。すでに日本と切っても切り離せない関係の大中華圏について、最新の教科書を使い、社会や文化の話題を中心に、すぐに役立つ実践的な中国語を習得する。※母語が中国語ではない学生のみ履修できる。2年次以上の学生の履修可否は試験・面接のうえ決定する。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏の社会や文化について理解を深め、異文化との接触時に戸惑わず積極的に自己主張できるようにする。②中国語による自己紹介をはじめ、会話や表現への基礎力を身につける。③客観的指標として、中国語検定試験四級程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

「表現と技能」が中心である。また語学はその言葉を母国語とする文化を知るものであるから「知識と理解」となる。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

午前90分および午後90分には発音・読解・作文の各項目でランダムに担当を割り振り、緊張感のなか質疑応答を行う。また午後の作文では相互教授法に基づく知識定着を目指し、教員による机間巡視を加え柔軟な対応を行う。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

講義前には必ず該当範囲を読み、CDを聞いておく。また毎週にわたり簡単な確認テストを実施する。そのため、講義前にはおよそ2時間弱の予習復習が必要となる。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 中国の現状、また中国語の発音について
- 第3講 教科書：第一課
- 第4講 教科書：第二課
- 第5講 教科書：第三課
- 第6講 教科書：第四課
- 第7講 教科書：第一課から第四課までの復習
- 第8講 教科書：第五課
- 第9講 教科書：第六課
- 第10講 教科書：第七課
- 第11講 教科書：第八課
- 第12講 教科書：第九課
- 第13講 教科書：第十課
- 第14講 中国語による自己紹介を行い、聴力および発音に関する試験に代える。
- 第15講 期末試験

■フィードバックの要領

毎週の小テストやクラスレベル調整追加プリントは当然ながら返却し双方通行を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 90点以上。
- 評価 A (89~80点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 89~80点。
- 評価 B (79~70点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 79~70点。
- 評価 C (69~60点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 69~60点。
- 評価 F (59点以下) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 59点以下。

■評価方法

期末試験(60%)、授業に取り組む姿勢・積極性および講義内小テスト(40%)。なお期末試験は自己紹介(30%)および文法に関する筆記試験(30%)による。

■留意点

母語が中国語ではない学生のみ履修できる。2年次以上の学生の履修可否は試験・面接のうえ決定する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国語 IY (Chinese IY)

サブタイトル 中国語 I Y

担当教員 田 園

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■授業目的

授業は主にリーディングとスピーキングより構成され、中国語の発音と基礎文法を習得したうえで、「すぐに使える」ことに重きをおく。リーディングは、主に基礎文法を習得する。スピーキングは、発音と簡単な日常会話を学習した後、本文の暗唱やロールプレイング形式で、応用練習を行い、知識やスキルの定着をはかる。全体的には中国語の「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの技能を伸ばし、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。

■科目分類

ビジネス環境理解／グローバルビジネス

■到達目標

①中国語リーディングとスピーキングの基礎知識とスキルの習得。②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

中国語に関する基礎的な学力を養い、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク

中国語 I では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークまたはペアワークを行う。具体的には、会話文の読む練習をし、またはペアで中国語で簡単な会話文を作る。主体的・能動的に取り組むことにより、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には CD を聞き、単語、文法、本文の予習をしておく。(1.5 時間) 授業後には CD を繰り返して聞き、本文の読む練習・暗唱をし、練習問題を解く。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス及び中国語概説
- 第2講 教科書：第1課 声調、単母音と複母音
- 第3講 教科書：第2課 声母、無気音と有気音及びそり舌音
- 第4講 教科書：第3課 鼻音
- 第5講 教科書：第4課 声調変化と声調の組み合わせ
- 第6講 第1課から第4課までの復習及び小テスト
- 第7講 実践：自分の名前の発音及び簡単な挨拶語
- 第8講 教科書：第5課 どうぞよろしく
- 第9講 教科書：第6課 お名前は
- 第10講 教科書：第7課 ご出身は
- 第11講 教科書：第8課 飲み物は
- 第12講 教科書：第9課 おいくつ
- 第13講 教科書：第10課 和食はいかが
- 第14講 教科書：第5課から第10課までの復習
- 第15講 授業内試験

■フィードバックの要領

課題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：特に優れているもの
- 評価 A (89~80 点)：優れているもの
- 評価 B (79~70 点)：一応の努力が認められるもの
- 評価 C (69~60 点)：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
- 評価 F (59 点以下)：C の水準に達しないもの

■評価方法

授業内試験 (60%)、平常点 (授業態度や小テストなど、20%)、授業中の会話力 (20%) による総合評価

■留意点

授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

科目名 中国語 IIX (Chinese IIX)**サブタイトル** 中国語 II X**担当教員** 田 園**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

授業は主にリーディングとスピーキングより構成され、「すぐに使える」ことに重きをおく。リーディングは、主に基礎文法を習得する。スピーキングは、本文を習った後、暗唱やロールプレイング形式で、応用練習を行い、知識やスキルの定着をはかる。全体的には中国語 I に引き続き、中国語の「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの技能を伸ばし、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■科目分類

ビジネス環境理解／グローバルビジネス

■到達目標

①中国語リーディングとスピーキングの基礎知識とスキルの習得。②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

中国語に関する基礎的な学力を養い、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク

中国語 II では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークまたはペアワークを行う。具体的には、会話文の読む練習をし、またはペアで中国語で簡単な会話文を作る。主体的・能動的に取り組むことにより、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には CD を聞き、単語、文法、本文の予習をしておく。(1.5 時間) 授業後には CD を繰り返して聞き、本文の読む練習・暗唱をし、練習問題を解く。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 テキスト前半の復習
- 第2講 教科書：第11課 家庭訪問
- 第3講 教科書：第12課 買い物
- 第4講 教科書：第13課 道案内
- 第5講 教科書：第14課 中秋節
- 第6講 教科書：第15課 食事の前は
- 第7講 教科書：第11課から第15課までの復習
- 第8講 教科書：第16課 手作り料理
- 第9講 教科書：第17課 カニの季節
- 第10講 教科書：第18課 スキー場で
- 第11講 教科書：第19課 おみやげ
- 第12講 教科書：第20課 空港まで
- 第13講 教科書：第16課から第20課までの復習
- 第14講 総復習
- 第15講 授業内試験

■フィードバックの要領

課題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 特に優れているもの
- 評価 A (89~80 点) : 優れているもの
- 評価 B (79~70 点) : 一応の努力が認められるもの
- 評価 C (69~60 点) : 合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
- 評価 F (59 点以下) : C の水準に達しないもの

■評価方法

授業内試験 (60%)、平常点 (授業態度や小テストなど、20%)、授業中の会話力 (20%) による総合評価

■留意点

授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国語 IY (Chinese IY)**サブタイトル** 中国語さらに一步**担当教員** 水盛 涼一**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は14億人を超える。これは英語(6億人)、インドのヒンディー語(5億人)、スペイン語(4億5千万人)、アラビア語(3億人)、そして日本語(1億3千万人)の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口となる。しかも大中華圏は日本に近く、観光に貿易にと交流は益々密接となっている。すでに日本と切っても切り離せない関係の大中華圏について、最新の教科書を使い、社会や文化の話題を中心に、すぐに役立つ実践的な中国語を習得する。*母語が中国語ではない学生のみ履修できる。基本的に「中国語I」の履修が必要であり、2年次以上の学生の履修可否は試験・面接のうえ決定する。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏の社会や文化について理解を深め、異文化との接触時に戸惑わず積極的に自己主張できるようにする。②中国語による自己紹介をはじめ、会話や表現への基礎力を身につける。③客観的指標として、中国語検定試験四級程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

「表現と技能」が中心である。また語学はその言葉を母国語とする文化を知るものであるから「知識と理解」となる。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク

午前90分および午後90分には発音・読解・作文の各項目でランダムに担当を割り振り、緊張感のなか質疑応答を行う。また午後の作文では相互教授法に基づく知識定着を目指し、教員による机間巡視を加え柔軟な対応を行う。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義前には必ず該当範囲を読み、CDを聞いておく。また毎週にわたり簡単な確認テストを実施する。そのため、講義前にはおおよそ2時間弱の予習復習が必要となる。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション

第2講 中国の現状、また中国語の自己紹介について

第3講 教科書：第十一課

第4講 教科書：第十二課

第5講 教科書：第十三課

第6講 教科書：第十四課

第7講 教科書：第十五課

第8講 教科書：第十六課

第9講 教科書：第十七課

第10講 教科書：第十八課

第11講 教科書：第十九課

第12講 教科書：第二十課

第13講 教科書の文法総復習

第14講 中国語による春学期よりも高度な自己紹介を行い聴力および発音に関する試験に代える。

第15講 期末試験

■フィードバックの要領

毎週の小テストやクラスレベル調整追加プリントは当然ながら返却し双方通行を行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 評価点 100点 (下記「配分」参照) のうち 90点以上。

評価 A (89~80点) : 評価点 100点 (下記「配分」参照) のうち 89~80点。

評価 B (79~70点) : 評価点 100点 (下記「配分」参照) のうち 79~70点。

評価 C (69~60点) : 評価点 100点 (下記「配分」参照) のうち 69~60点。

評価 F (59点以下) : 評価点 100点 (下記「配分」参照) のうち 59点以下。

■評価方法

期末試験(60%)、授業に取り組む姿勢・積極性および講義内小テスト(40%)。なお期末試験は自己紹介(30%)および文法に関する筆記試験(30%)による。

■留意点

母語が中国語ではない学生のみ履修できる。基本的に「中国語I」の履修が必要であり、2年次以上の学生の履修可否は試験・面接のうえ決定する。

科目名 日本語講座初級 (Japanese Language Beginners Course)**サブタイトル** 日本語で大学生活や社会生活を円滑に進めるための表現全般を身に付ける。**担当教員** TIJ 東京日本語研修所**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

留学生在日本で生活するための日常会話、友だちと交流するための会話、また大学の職員、教師とコミュニケーションするための会話、社会から情報を得るための会話能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人育成／地域ビジネス

■到達目標

①日常生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。②日常生活や大学生活の中で、自分が言いたいことを大体伝えることができる。③自分の経験や夢、希望などを適切な表現で書き、スピーチ形式で発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

現代社会問題に関心を持ち、社会生活の中で必要な表現や語彙を学び、コミュニケーション力を身に付けて主体的に行動できるようにする。課題発見力、課題解決力を養う。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義／演習

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

日本語講座初級では、与えられたテーマに沿って自分の意見を箇条書きにまとめ、構成を考える。スピーチやグループワークから情報を得るための会話能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を獲得することを目標とする。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習：教材の漢字の読みや語彙を調べてくること。スピーチ原稿を書くこと。90分

復習：教材の練習問題に解答すること。発表原稿を提出すること。90分

■授業の概要

- 第1講 プレースメントテスト、面接／自己紹介、アイスブレイキング
- 第2講 オリエンテーション、到達目標設定／プレゼンテーション、書き言葉の基礎演習
- 第3講 発表【環境】①新聞記事を読む、内容確認／ディスカッション、語彙文法練習問題
- 第4講 発表【環境】②関連資料を読む、ニュースを聞く／発表について考える
- 第5講 発表【環境】③発表準備、練習／発表、質疑応答、フィードバック
- 第6講 発表【教育】①新聞記事を読む、内容確認／ディスカッション、語彙文法練習問題
- 第7講 発表【教育】②関連資料を読む、ニュースを聞く／発表について考える
- 第8講 発表【教育】③発表準備、練習／発表、質疑応答、フィードバック
- 第9講 発表【法整備】①新聞記事読み、内容確認／ディスカッション、語彙文法練習問題
- 第10講 発表【法整備】②関連資料を読む、ニュースを聞く／発表について考える
- 第11講 発表【法整備】③発表準備、練習／発表、質疑応答、FB
- 第12講 発表【経済】①新聞記事を読む、内容確認／ディスカッション、語彙文法練習問題
- 第13講 発表【経済】②関連資料を読む、ニュースを聞く／発表について考える
- 第14講 発表【経済】③発表準備、練習／期末発表、質疑応答
- 第15講 期末発表、質疑応答／フィードバック、到達目標確認

■フィードバックの要領

提出課題は添削し、コメントをつけてFBする。発表は評価基準表に従い採点する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：テーマについて、自分が考えたことが積極的・論理的・適切な表現で発表できる。

評価 A (89～80点)：テーマについて、自分の考えたことが分かりやすく適切に発表できる。

評価 B (79～70点)：テーマについて、自分が考えたことが発表できる。

評価 C (69～60点)：テーマについて、自分が考えたことが短く発表できる。

評価 F (59点以下)：平常点・授業内試験で基準を満たさなかった。

■評価方法

平常点 20%、小テスト 20%、課題提出 20%、発表 20%、授業内試験 20%

■留意点

JLPTN3～N2レベルの日本語が望ましい。日本語を母語としない学生を対象とする。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

日本語講座中級 I (Japanese Language Intermediate Course I)

サブタイトル

日本語で現代社会問題について課題を設定して発表するための表現力全般をつける。

担当教員

TIJ 東京日本語研修所

対象学年

1年生以上

区分

春学期

■授業目的

留学生在日本で生活するための日常会話だけでなく、大学の授業を聞くため、授業に積極的に参加するために必要な力をつける。さらに、社会から情報を得たり、社会に参加し問題解決するための日本語会話能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

①社会生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。②社会生活や大学生活の中で、自分の意見をほぼ伝えることができる。③社会の問題について、よく考えて理解し、自分の意見を論理的に書き、発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

日本語を通じて人間関係を構築し、社会を学ぶ過程で遭遇する様々な課題に対処できる力をつける。チームワークを重視し、リーダーシップをとれるよう積極性と実行力を修得する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

「日本語講座中級 I」では、現代社会問題からテーマを取り上げ、背景知識共有・本文読解・語彙・文法練習を通して、テーマについて積極的にコミュニケーションをとり、相互理解を深めることを目的とする。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：教材の漢字の読みや語彙を調べてくること。スピーチ原稿を書くこと。90 分

復習：教材の読解問題に解答すること。小論文や発表原稿を提出すること。90 分

■授業の概要

- 第1講 プレースメントテスト、面接／自己紹介、アイスブレイキング
- 第2講 オリエンテーション、到達目標設定／プレゼンテーション、書き言葉の基礎演習
- 第3講 プレゼン【環境】①新聞記事を読む、内容確認／ディスカッション、語彙文法練習問題
- 第4講 プレゼン【環境】②関連資料を読む、ニュースを聞く／発表について考える
- 第5講 プレゼン【環境】③発表準備、練習／発表、質疑応答、フィードバック
- 第6講 プレゼン【ジェンダー】①新聞記事を読む、内容確認／ディスカッション、語彙文法練習
- 第7講 プレゼン【ジェンダー】②関連資料を読む、ニュースを聞く／発表について考える
- 第8講 プレゼン【ジェンダー】③発表準備、練習／発表、質疑応答、フィードバック
- 第9講 プレゼン【ICT】①新聞記事を読む、内容確認／ディスカッション、語彙文法練習問題
- 第10講 プレゼン【ICT】②関連資料を読む、ニュースを聞く／発表について考える
- 第11講 プレゼン【ICT】③発表準備、練習／発表、質疑応答、フィードバック
- 第12講 プレゼン【働き方改革】①新聞記事読み、内容確認／ディスカッション、語彙文法練習
- 第13講 プレゼン【働き方改革】②関連資料を読む、ニュースを聞く／発表について考える
- 第14講 プレゼン【働き方改革】③発表準備、練習／期末発表、質疑応答
- 第15講 期末プレゼンテーション、質疑応答／フィードバック、到達目標確認

■フィードバックの要領

提出課題は添削し、コメントをつけて FB する。発表は評価基準表に従い採点する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：社会問題内容がほぼ理解でき、自分の意見や課題を積極的に的確に発表できる。

評価 A (89～80 点)：社会問題内容がだいたい理解でき、自分の意見がしっかり発表できる。

評価 B (79～70 点)：社会問題内容が理解でき、自分が考えたことが発表できる。

評価 C (69～60 点)：やさしい会話が理解でき、社会問題について考えたことが短く発表できる。

評価 F (59 点以下)：平常点・授業中の活動・期末プレゼンテーションが基準を満たさなかった。

■評価方法

平常点 20%、小テスト 20%、課題提出 20%、発表 20%、授業内試験（プレゼンテーション）20%

■留意点

JLPTN2 レベルの日本語が必要。日本語を母語としない学生を対象とする。

科目名 日本語講座中級Ⅱ (Japanese Language Intermediate Course II)**サブタイトル** 日本語で現代社会問題について議論するための表現全般を身に付ける**担当教員** TIJ 東京日本語研修所**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

留学生が日本で生活するための日常会話だけでなく、大学の授業を聞くため、授業に積極的に参加するために必要な力をつける。さらに、社会から情報を得たり、社会に参加し問題解決するための日本語会話能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

①社会生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。②社会生活や大学生活の中で、自分の意見を伝えることができる。③社会の問題について、よく考えて理解し、自分の意見を論理的に書き、発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

現代社会問題に関心を持ち、課題に積極的に取り組む主体性や周囲の人を巻き込んで目的達成をする実行力を身に付けられるようにする。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

「日本語講座中級Ⅱ」では、現代社会問題を取り上げ、背景知識共有・本文読解・語彙・文法練習を通して、テーマについて積極的にコミュニケーションをとり、相互理解を深めることを目標とする。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

予習：教材の漢字の読みや語彙を調べてくること。スピーチ原稿を書くこと。90分

復習：教材の読解問題に解答すること。小論文や発表原稿を提出すること。90分

■授業の概要

- 第1講 プレースメントテスト、面接／自己紹介、アイスブレイキング
- 第2講 オリエンテーション、到達目標設定、ディスカッション説明／ディスカッション【生活】
- 第3講 ディスカッション【教育】新聞記事読み、内容確認／ディスカッション、FB
- 第4講 ディスカッション【多様性】新聞記事を読む、内容確認／ディスカッション、FB
- 第5講 ディスカッション【経済】新聞記事を読む、内容確認／ディスカッション、FB
- 第6講 ディスカッション【働き方改革】新聞記事を読む、内容確認／ディスカッション、FB
- 第7講 ディベートの基礎解説／サンプルディベートを分析する
- 第8講 ディベート【環境】①資料読み、データ集め／グループワークで立論、質疑作成
- 第9講 ディベート【環境】②グループワーク、立論、質疑、反駁を準備する／ジャッジ
- 第10講 ディベート【環境】③対戦、ジャッジ、FB／関連ニュース
- 第11講 ディベート【経済・地域振興】①資料読み、データ集め／立論、質疑作成
- 第12講 ディベート【経済・地域振興】②立論、質疑、反駁準備／ジャッジについて学ぶ
- 第13講 ディベート【経済・地域振興】③対戦、ジャッジ、FB／関連ニュース
- 第14講 プレゼン【現代社会問題】発表原稿修正、PPT完成／発表練習
- 第15講 期末プレゼンテーション、質疑応答／FB、到達目標確認

■フィードバックの要領

提出課題は添削し、コメントをつけてFBする。発表は評価基準表に従い採点する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：テーマについて、自分が考えたことが積極的・論理的・適切な表現で発表できる。

評価 A (89～80点)：テーマについて、自分の考えたことが分かりやすく適切に発表できる。

評価 B (79～70点)：テーマについて、自分が考えたことが発表できる。

評価 C (69～60点)：テーマについて、自分が考えたことが短く発表できる。

評価 F (59点以下)：平常点・授業内試験で基準を満たさなかった。

■評価方法

平常点 20%、小テスト 20%、課題提出 20%、発表 20%、授業内試験（プレゼンテーション） 20%

■留意点

JLPTN2レベルの日本語が必要。日本語を母語としない学生を対象とする。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 日本語講座上級 (Japanese Language An Upper Course)

サブタイトル 社会問題について日本語でディベートをし、課題発見力、論理的思考力を身に付ける。

担当教員 TIJ 東京日本語研修所

対象学年 1年生以上

区分 秋学期

■授業目的

留学生在が授業や日常生活から社会情報を得て、社会に参加して課題を見出し、問題解決するための日本語伝達能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■科目分類

ビジネス環境理解/社会人育成/地域ビジネス

■到達目標

①社会生活や大学生活の中で話されている会話が理解できる。②社会生活や大学生活の中で、自分の意見を的確に伝えることが出来る。③社会の問題について、課題を発見し解決策を論理的に書き、データを探して資料を作成し発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

発信力や傾聴力などのコミュニケーション能力、組織や社会における状況把握力・協調性・多様性への理解を深め、社会の発展に積極的に関与していきける力を養う。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義/演習

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

「日本語講座上級」では、現代社会問題からテーマを選び、ディベートやプレゼンテーションを通して、課題発見力、分析力、伝達力を向上させる。発信力、傾聴力などのコミュニケーション能力を高めると同時に、グループワークを通して、協調性・多様性への理解を深め、社会に積極的に関与していく力を養うことを目標とする。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習：新聞記事やニュースの語彙を調べてくること。論題について原稿を書くこと。120分

復習：ディベートの立論作成や論題についての小論文を提出すること。120分

■授業の概要

- 第1講 プレゼンテーション、面接/自己紹介、アイスブレイキング
- 第2講 オリエンテーション、到達目標設定、ディスカッション基礎/ディスカッション【生活】
- 第3講 ディスカッション【教育】新聞記事を読む、内容確認/ディスカッション、FB
- 第4講 ディスカッション【多様性】新聞記事を読む、内容確認/ディスカッション、FB
- 第5講 ディベートの基礎解説/サンプルディベートを分析する
- 第6講 ディベート【法整備】①資料読み、データ集め/グループワークで立論、質疑作成
- 第7講 ディベート【法整備】②立論、質疑準備/対戦、フィードバック
- 第8講 ディベート【環境】①資料読み、データ集め/グループワークで立論、質疑作成
- 第9講 ディベート【環境】②立論、質疑、反駁を準備する/ジャッジについて学ぶ
- 第10講 ディベート【環境】③対戦、ジャッジ、フィードバック/関連ニュース
- 第11講 ディベート【生命倫理】①資料読み、データ集め/グループワークで立論、質疑作成
- 第12講 ディベート【生命倫理】②立論、質疑、反駁を準備する/ジャッジについて学ぶ
- 第13講 ディベート【生命倫理】③対戦、ジャッジ、フィードバック/関連ニュース
- 第14講 プレゼンテーション【現代社会問題】発表原稿修正、PPT完成/発表練習
- 第15講 期末プレゼンテーション、質疑応答/フィードバック、到達目標確認

■フィードバックの要領

提出課題は添削し、コメントをつけてFBする。発表は評価基準表に従い採点する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：社会問題内容について自分の意見を整理して積極的に的確に発表できる。傾聴力もある。

評価 A (89~80点)：社会問題内容がだいたい理解でき、自分の意見が的確に発表できる。

評価 B (79~70点)：社会問題内容が理解でき、自分が考えたことが発表できる。

評価 C (69~60点)：社会問題内容はなんとなく理解でき、考えたことが短く発表できる。

評価 F (59点以下)：平常点・授業中の活動・ディベートの力が基準を満たさなかった。

■評価方法

平常点 20%、小テスト 20%、課題提出 20%、発表 20%、授業内試験(プレゼンテーション) 20%

■留意点

JLPTN2~N1 レベルの日本語が必要。日本語を母語としない学生を対象とする。

科目名 法学(憲法)(Jurisprudence (including Constitution Law))**サブタイトル** 生活と憲法**担当教員** 樋笠 堯士**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

日本国憲法は我が国の最高法規であり、私たちの生活とは切り離せない重要な法律です。日本国憲法は、大きく分けると人権に関する規定、国の統治に関する規定に分けられますが、その双方をバランス良く学び、最低限の憲法の知識・素養・思考方法を身に付けることが目的です。

■科目分類

ビジネス環境理解/社会人力育成

■到達目標

私たちの周りの様々な問題と憲法が深く関わっていることを理解し、今後活かせる知識・素養・思考方法を得ることが目標です。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

人権に関する知識を学び、統治機構の役割を理解する (DP1 知識と理解)。裁判所がどのような理由・根拠で憲法上の権利を違憲・合憲とするのかの判断過程を学び、法的な思考力を養う (DP2 思考と判断)。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

「法学(憲法)」では、アクティブ・ラーニングとして「判例分析研究」を行う。具体的には、憲法の裁判例を自分で調査し、その違憲性や適法性を検討する課題に取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、「問題解決力」を得ることが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

事前に教科書の指定範囲を読んでから講義に参加する(1時間)。講義後には、レジュメの内容と教科書の該当ページを照らし合わせ、学んだ情報を補う(0.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 外国人の人権
- 第3講 プライバシー権
- 第4講 法の下の平等
- 第5講 信教の自由
- 第6講 表現の自由
- 第7講 営業の自由
- 第8講 生存権
- 第9講 教育権
- 第10講 人身の自由
- 第11講 財産権、労働基本権、参政権など諸権利
- 第12講 天皇制・平和主義・国会①
- 第13講 国会②・内閣
- 第14講 裁判所
- 第15講 地方自治・憲法改正

■フィードバックの要領

「T-NEXT」により、課題への回答や教員への質問を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 講義内容に関して、完全に近い理解度に達している。
- 評価 A (89~80点) : 講義内容に関して、優れた理解度に達している。
- 評価 B (79~70点) : 講義内容に関して、平均的な理解度に達している。
- 評価 C (69~60点) : 講義内容に関して、最低限の理解度に達している。
- 評価 F (59点以下) : 講義内容に関して、最低限の理解度に達していない。

■評価方法

平常点(30%)、レポート(10%)、期末試験(60%) レポートは学籍番号によって提出時期が変わるので、指示を確認し、提出期限を守る。期末試験は、指定された(手書きの)持ち込みペーパーのみ持ち込み可能。

■留意点

特になし。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 余暇マネジメント (Management of Leisure Life & Society)**サブタイトル** 文化やレジャーから社会を洞察する**担当教員** 杉田 文章**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

(1) 以下三点について知り、自分なりの知見を有することに資する ①「余暇」の概念、歴史、現状、意義 ②「余暇市場」の構造、現状、背景 ③「余暇製品」産業の使命、マーケティング方法の中核
 (2) 「余暇をマネジメントする」概念を理解することによって、問題発見・解決の切り口を与えること。

■科目分類

顧客理解／ビジネス創造

■到達目標

本講義における「余暇」「レジャー」の概念と意義について十分理解し、たとえばあるレジャー製品（財もしくはサービス）について、そのマーケティングの在り方について論じることができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

余暇の在り方と余暇をめぐる産業市場の在り方について知り、課題を洞察したうえで解決策を探る。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク／グループワーク

自分の関心に基づき、レジャー市場の特定分野について自ら調査・分析し、レジャー文化の推進と、レジャー市場の発展に寄与する方策について考察しまとめる。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

①「余暇」「余暇市場産業」に関する諸情報、②今日の余暇市場動向や観光・レジャー政策の動向に関する情報を、講義内で示される諸資料等より、把握してもらいたい。(2～3 時間程度)

■授業の概要

第1講 イントロダクション～余暇を考察することの意義～

第2講 「余暇」を定義する

第3講 社会の移り変わり余暇～ダニエル・ベルのモデルから考える～

第4講 新たなステージのレジャーを考える～ヨゼフ・ビーバーと「スコレー」概念を手掛かりに～

第5講 欲求充足と幸福①

第6講 欲求充足と幸福②

第7講 「あそび」とは何か

第8講 スポーツ現象に見る、「遊び」の制度化と商品化

第9講 レジャー市場の推移・現状と課題

第10講 プロスポーツの現状と課題

第11講 産業政策から見たレジャー産業の市場構造

第12講 レジャー産業市場の課題

第13講 レジャー普及モデルを考える

第14講 レジャー産業における製品と製品政策

第15講 全体まとめ

■フィードバックの要領

毎回の講義毎に受講者からのコメントを集め、これに対して公開返答を実施する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 余暇の社会・歴史的背景と余暇の在り方の関係を理解していること。

評価 A (89～80 点) : 講義で扱われた諸理論について深く理解していること。

評価 B (79～70 点) : 余暇の概念について理解できていること。

評価 C (69～60 点) : 余暇をめぐる理論、現状について、最低限理解していること

評価 F (59 点以下) : 上記のいずれも達成されていない場合、F 評価とする。

■評価方法

期末試験 60%、講義中のミニレポート等を含めた受講態度などの参加状況によって 40% を評価することとする。

■留意点

科目名	Basic Office English I (Basic Office English I)		
サブタイトル	世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける		
担当教員	中村 (そ)、吉田	対象学年	2 年生以上
		区分	春学期

■授業目的

世界でそして地域で活躍するために必要なビジネス英語表現力を身に付け、志の実現に向かって主にビジネスの現場、オフィスで積極的に情報をやり取りし、いろいろな形のコミュニケーションに対応できるようにする。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク／その他：ロールプレイ

本講義では、ロールプレイ、ジグソー、Think-Pair - Share などをを行い、英語の実用的な運用能力を高める。それにより、自分の考えやアイデアを積極的に発信し、相手と英語らしい自然な表現でコミュニケーションできるようになることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を 1.5 時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど
- 第2講 オフィスやビジネス現場での自己紹介
- 第3講 自己紹介と他人紹介
- 第4講 会社、業務、商品紹介
- 第5講 電話のやりとり
- 第6講 電話での確認や依頼
- 第7講 その他の電話表現
- 第8講 これまでの総復習と中間テスト
- 第9講 英語メールの様式
- 第10講 メールでの確認、依頼
- 第11講 メールでのあいさつとお知らせ
- 第12講 アポイントメントを取る
- 第13講 日時や場所を決める
- 第14講 約束の変更やキャンセル押さえておきたい経済用語
- 第15講 期末テスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：下記の配分で得点を付け、90 点以上の場合
- 評価 A (89～80 点)：下記の配分で得点を付け、80 点から 89 点の場合
- 評価 B (79～70 点)：下記の配分で得点を付け、70 点から 79 点の場合
- 評価 C (69～60 点)：下記の配分で得点を付け、60 点から 69 点の場合
- 評価 F (59 点以下)：下記の配分で得点を付け、59 点以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 Basic Office English II (Basic Office English II)**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村(そ)、吉田**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

世界でそして地域で活躍するために必要なビジネス英語表現力を身に付け、志の実現に向かって主にビジネスの現場、オフィスで積極的に情報をやり取りし、いろいろな形のコミュニケーションに対応できるようにする。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク／その他：ロールプレイ

本講義では、ロールプレイ、ジグソー、Think-Pair - Share などをを行い、英語の実用的な運用能力を高める。それにより、自分の考えやアイデアを積極的に発信し、相手と英語らしい自然な表現でコミュニケーションできるようになることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を 1.5 時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなどその2
- 第2講 会議の準備
- 第3講 会議の進行
- 第4講 会議の進行およびまとめ
- 第5講 商品やサービスの説明
- 第6講 価格や納期の交渉
- 第7講 商談の成否に関する表現
- 第8講 これまでの総復習と中間テスト
- 第9講 クレームを伝える
- 第10講 クレームに対応する
- 第11講 OA 機器のトラブル、その他のトラブル
- 第12講 求人についての問い合わせ
- 第13講 面接での質疑応答
- 第14講 会社の制度や人事情報外国での採用事情
- 第15講 期末テスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数とコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：下記の配分で得点を付け、90 点以上の場合
- 評価 A (89～80 点)：下記の配分で得点を付け、80 点から 89 点の場合
- 評価 B (79～70 点)：下記の配分で得点を付け、70 点から 79 点の場合
- 評価 C (69～60 点)：下記の配分で得点を付け、60 点から 69 点の場合
- 評価 F (59 点以下)：下記の配分で得点を付け、59 点以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに合わせて直接お話しすることも可能です。

科目名 English Expression I (English Expression I) ※再履修者用**サブタイトル** 自習型再履修専用クラス**担当教員** 中村 その子**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

この授業は教室では開講されず、別途掲示されるテキストを大学コンビニエンスストアで購入、自習して、各学期の期末試験期間内に実施される試験を受け、その点数によって単位が認定される形式です。最初は自己紹介、自由時間の過ごし方と好きなこと、自分の長所や短所、成功体験、失敗談などを語るころから始め、スモールトークや日常会話を円滑に行えるようにする。徐々に、アルバイトやボランティア活動、自分の住んでいる町の特徴などについて話す練習、ものごとの起源やプロセスを説明する練習に移り、英語力の社会的な幅を広げて行きたい。

■科目分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。以下がこの授業のゴールとなる。客観的指標として TOEIC350 点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク／その他：ロールプレイ

本講義では、スクーリング時にロールプレイ、ジグソー、Think-Pair - Share などをを行い、英語の実用的な運用能力を高める。それにより、自分の考えやアイデアを積極的に発信し、相手と英語らしい自然な表現でコミュニケーションできるようになることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

指定されたテキストを学期を通して十分に自習し期末試験に備えること。各講義につき事前学習に 1.5 時間以上、事後学習に 1.5 時間、合計で 3 時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 アイスブレイキング、自己紹介、自分を語る
- 第2講 キャンパスライフ、買い物、娯楽などの日常生活について語る
- 第3講 自分の住んでいる町やふるさとを語る
- 第4講 食生活や外食、レストランなどに関係する表現を学ぶ
- 第5講 職業にまつわる英語表現を学ぶ
- 第6講 留学に関連した英語表現を学ぶ
- 第7講 プレゼンテーション技術について学ぶ
- 第8講 体の調子や病院での会話を学ぶ
- 第9講 ここまで学習した事項の復習 1
- 第10講 ここまで学習した事項の復習 2
- 第11講 ここまで学習した事項の復習 3
- 第12講 ここまで学習した事項の復習 4
- 第13講 これまでの総復習
- 第14講 スクーリングおよび期末試験準備 1
- 第15講 スクーリングおよび期末試験準備 2

■フィードバックの要領

学期中のスクーリング時に学修アドバイスをする

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : テストの点数が 90 点以上
- 評価 A (89~80 点) : テストの点数が 80 点から 89 点
- 評価 B (79~70 点) : テストの点数が 70 点から 79 点
- 評価 C (69~60 点) : テストの点数が 60 点から 69 点
- 評価 F (59 点以下) : テストの点数が 59 点以下

■評価方法

テストの点数が 100%

■留意点

このクラスは、学生番号の上 3 桁が 221。を含んでそれより以前の入学年度学生番号を持っており、語学の単位が卒業要件を満たしていない学生のみが履修できます。教室での授業は行われず、定期試験期間内の行われる試験を受けて合格点を取ることにによる単位認定です。なお、当該学期中に Tnext で日時を連絡の上スクーリング（質問や相談を受け付ける機会）を行いますので、参加してください。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

English Expression II (English Expression II) ※再履修者用

サブタイトル

自習型再履修専用クラス

担当教員

中村 その子

対象学年

2年生以上

区分

春・秋学期

■授業目的

この授業は教室では開講されず、別途掲示されるテキストを大学コンビニエンスストアで購入、自習して、各学期の期末試験期間内に実施される試験を受け、その点数によって単位が認定される形式です。最初は自己紹介、自由時間の過ごし方と好きなこと、自分の長所や短所、成功体験、失敗談などを語るころから始め、スモールトークや日常会話を円滑に行えるようにする。徐々に、アルバイトやボランティア活動、自分の住んでいる町の特徴などについて話す練習、ものごとの起源やプロセスを説明する練習に移り、英語力の社会的な幅を広げて行きたい。

■科目分類

社会力育成／グローバルビジネス

■到達目標

経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。以下がこの授業のゴールとなる。客観的指標として TOEIC350 点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク／その他：ロールプレイ

本講義では、スクーリング時にロールプレイ、ジグソー、Think-Pair - Share などを行い、英語の実用的な運用能力を高める。それにより、自分の考えやアイデアを積極的に発信し、相手と英語らしい自然な表現でコミュニケーションできるようになることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

指定されたテキストを学期を通して十分に自習し期末試験に備えること。各講義につき事前学習に 1.5 時間以上、事後学習に 1.5 時間、合計で 3 時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 パーティーに関連する表現やビジネスの場でのスモールトーク
- 第2講 ビジネスの場でのスモールトーク
- 第3講 映画やエンターテイメントに関連した表現
- 第4講 旅行、出張、レストラン、ホテルなどに関連した表現
- 第5講 娯楽産業、レジャー産業に関連した表現
- 第6講 ビジネスでの接待やオフィスでの会話表現、接客表現
- 第7講 プレゼンテーション技術について学ぶ。引き続きオフィスでの表現
- 第8講 オフィスでの表現と自分の生活や趣味に関する表現
- 第9講 ここまで学習した事項の復習 1
- 第10講 ここまで学習した事項の復習 2 アートや芸術、ビジネスパーソンとしての教養と素養
- 第11講 ここまで学習した事項の復習 3
- 第12講 ここまで学習した事項の復習 4 健康やスポーツについての表現
- 第13講 これまでの総復習ニュース、社会問題について語る
- 第14講 スクーリングおよび期末試験準備 1
- 第15講 スクーリングおよび期末試験準備 2

■フィードバックの要領

学期中のスクーリング時に学修アドバイスをする

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : テストの点数が 90 点以上
- 評価 A (89~80 点) : テストの点数が 80 点から 89 点
- 評価 B (79~70 点) : テストの点数が 70 点から 79 点
- 評価 C (69~60 点) : テストの点数が 60 点から 69 点
- 評価 F (59 点以下) : テストの点数が 59 点以下

■評価方法

テストの点数が 100%

■留意点

このクラスは、学生番号の上 3 桁が 221。を含んでそれより以前の入学年度学生番号を持っており、語学の単位が卒業要件を満たしていない学生のみが履修できます。教室での授業は行われず、定期試験期間内の行われる試験を受けて合格点を取ることにによる単位認定です。なお、当該学期中に Tnext で日時を連絡の上スクーリング（質問や相談を受け付ける機会）を行いますので、参加してください。

科目名 ITパスポート (IT passport)**サブタイトル** ITパスポート試験対策を含む**担当教員** 小西 英行**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

国家試験である「ITパスポート試験」は、「ビジネスICT」の分野で「問題解決のための理論や方法」についての実践的知識を問うものであり、具体的には「ストラテジー系」分野と「マネジメント系」分野、そして「テクノロジー系」分野があります。本講義では、この「ITパスポート試験」を受験しようとする学生を対象に、合格に必要な知識を得ることを目的とします。

■科目分類

ビジネスマネジメント/ビジネスICT

■到達目標

本講義は、グローバル社会に対する理解を深めるために必要な、ビジネスICTに関する専門知識について、①専門用語についての定義や用例などを理解し、②具体例を挙げて説明出来ることを学修目標とします。そしてこれらの学修成果の定着を図るために、授業に対する「予習」「復習」を習慣化することを目標とします。そしてこれらの学修を通じて最終的には「ITパスポート試験」合格を目指します。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

「ビジネスICT」の分野で「問題解決のための理論や方法」についての実践的知識を習得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク

ゲーグルクラスルームを活用し、学修の成果を教員と学生とで共有しながら、ペアワークを行います。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前に配布する予習用サブノートを用いて、毎回1時間以上の予習が必要。さらに、授業時に配布するワークシートを用いて、毎回1時間以上の復習が必要。

■授業の概要

- 第1講 国家試験「ITパスポート試験」について 模擬問題①
- 第2講 1 企業と法務
- 第3講 2 経営戦略
- 第4講 模擬問題②
- 第5講 3 システム戦略 3-1 システム戦略
- 第6講 3 システム戦略 3-2 システム化計画
- 第7講 模擬問題③
- 第8講 4 開発技術 4-1 システム開発技術
- 第9講 4 開発技術 4-2 ソフトウェア開発管理技術
- 第10講 模擬問題④
- 第11講 5 プロジェクトマネジメント 5-1 プロジェクト・マネジメント
- 第12講 6 サービスマネジメント 6-1 サービスマネジメント
- 第13講 6 サービスマネジメント 6-2 システム監査
- 第14講 模擬問題⑤
- 第15講 授業内期末試験

■フィードバックの要領

チャトルカードで毎回コメントバック。択一式期末試験で、解答公開による自己採点。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、具体例を挙げて詳細に説明できる。

評価 A (89~80 点) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、具体例を挙げて説明できる。

評価 B (79~70 点) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、詳細に説明できる。

評価 C (69~60 点) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、大まかに説明できる。

評価 F (59 点以下) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、ほとんど理解していない。

■評価方法

授業内期末試験 (100%) ただし、予習・復習・発言等に応じて、ボーナスポイントを付加する。

■留意点

①授業時に教科書及び、ノートパソコン又はタブレット等を使用するので、必ず持参してください。②授業毎に「予習」と「復習」の履行状況を確認しますので、毎回必ず行ってください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 IT 活用法 II (Utilizing Method of IT II)**サブタイトル** リポジトリ管理システムを利用した協業**担当教員** 出原 至道**対象学年** 2 年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

近年、情報技術スキルの証明には、公開リポジトリサービス上での活動が求められるようになってきた。本講義では、リポジトリ管理システムを利用したクラウド上でのチーム協業の演習を基盤として、情報技術を用いた新しいビジネス（ゲームなどを含むサービス全般）の発想と提案を行うことができるようになることを目的とする。本講義の到達点である、マーケティング視点に基づくものづくりの発想法と、リポジトリへの蓄積、および、チーム協業は、社会において大きな競争力になる。受講者の到達レベルに応じて、講義内容を変更することがある。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

リポジトリ管理システムを利用したオンライン共同作業ができるようになる。また、その作業を通じて、マーケティング視点に基づくものづくりの発想法を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

共有リポジトリを通じて、自分の意見を伝えること・異なる意見の間で調整を図ることができるようになる。プロジェクト管理手法を学ぶことで、課題解決プロセスを明確に意識して課題解決提案ができるようになる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] グループワーク

github 上での協同、相互レビュー

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各回に示す内容について、チームごとに事後学習 3 時間の議論を行い、記録する。（一部個人課題）

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス・GitHub ユーザ登録・チーム決定
- 第2講 環境設定・基礎概念の理解
- 第3講 GitHub Classroom 演習・マークダウン記法
- 第4講 コンフリクトの解決
- 第5講 初めてのチーム作業演習
- 第6講 要素制限発想法
- 第7講 コンセプト・リフレーミング・カンバン方式
- 第8講 魅力的な提案へ
- 第9講 プレゼンテーション
- 第10講 プレゼンテーション
- 第11講 プレゼンテーション
- 第12講 ウェブ技術を利用したサービス（ここから個人課題）
- 第13講 Web API プログラミング入門
- 第14講 ウェブサービスの連携
- 第15講 プレゼンテーション

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対するコメント・リポジトリにおけるコメント機能

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
 評価 A (89~80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
 評価 B (79~70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
 評価 C (69~60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 点未満

■評価方法

平常点 60%、個人レポート 40% で評価する。

■留意点

- ・第 1 回目の講義で全体のオリエンテーションを行うので必ず出席すること。特段の事情がある場合を除き、第 1 回講義に欠席した場合は、受講を認めない。
- ・PC は必須である。PC を持参しない者の受講を、認めない。
- ・受講者の到達レベルに応じて、講義内容を変更することがある。

科目名 NPO・NGO論 (NPO・NGO Theory)**サブタイトル** ソーシャルセクター入門**担当教員** 松本 祐一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

社会的な問題の解決の主体である NPO や NGO (以下、2つの概念を合わせて便宜上 NPO と表記) などのソーシャルセクターが登場した歴史的背景、現代における存在意義、経営の特徴を学び、ソーシャルイノベーションを生み出す組織原理について理解する。

■科目分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/ビジネスマネジメント

■到達目標

NPO 特有の組織原理を理解すること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

企業や行政とは違う NPO 独自の組織のあり方を理解する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク

NPO・NGO 論では、アクティブ・ラーニングとして、自身が立ち上げる NPO をデザインすることを目標に各講義中後のワークや課題を実施、主体的・能動的に取り組むことで、NPO を経営という視点からより深く理解することを目指す。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

最低 1.5 時間以上の興味のある NPO の事例の収集

■授業の概要

- 第1講 講義の目的と内容を共有する。(オリエンテーション)
- 第2講 ソーシャルセクターのイメージをつかむ。
- 第3講 NPO がなぜ必要かを考える。(ゲスト講演から考える NPO)
- 第4講 NPO がなぜ必要かを考える。(理論から説明する NPO)
- 第5講 NPO の組織的特色を理解する。
- 第6講 NPO と他の組織の違いを総括する。
- 第7講 NPO の成果とは何かを考える。
- 第8講 歴史と社会的背景から NPO 経営を理解する。
- 第9講 NPO におけるマーケティングの役割を理解する。
- 第10講 支援を得るために必要な資源動員について理解する。
- 第11講 NPO に関わる「人」について考える。
- 第12講 NPO に関わる「協働」を考える。
- 第13講 ソーシャルイノベーションという視点から NPO をとらえなおす。
- 第14講 NPO 経営の特徴を総括する。
- 第15講 ソーシャルセクターの今後の可能性と課題について考える。

■フィードバックの要領

2 回の確認テストの内容について、解説しフィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 課題を全て提出し内容を理解している。セクションレポートが 2 回とも A
- 評価 A (89~80 点) : 課題を全て提出し内容を理解。セクションレポートのうち 2 回とも B 以上。
- 評価 B (79~70 点) : 課題を 8 割以上提出し、内容を理解。セクションレポートのうち、1 回以上 B
- 評価 C (69~60 点) : 課題を 6 割以上提出し、内容をある程度理解。
- 評価 F (59 点以下) : 課題の提出が 5 割以下。またはセクションレポートが 2 回とも D

■評価方法

授業中・後提出の課題・確認テスト・セクションレポート・平常点 60% 中間レポート 20% 最終レポート 20%

■留意点

- ① 15 分以上の遅刻は欠席として扱う。② 中間レポートと最終レポートの提出が単位修得の最低限の条件です。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

Practical English Conversation I (Practical English Conversation I)

サブタイトル

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける

担当教員

中村 その子

対象学年

2年生以上

区分

春学期

■授業目的

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■科目分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク／その他：LTD PBL ジグソー

アクティブ・ラーニングとしてLTDを行う。具体的には英語を用いて外部組織と連携してアイデア提案、プロジェクト企画制作、商品開発などに取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、産業社会の最前線で問題解決にあたり、常に革新的な視野で事業構想ができるようになることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。各講義につき事前学習に1.5時間以上、事後学習に1.5時間、合計で3時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなどその1
- 第2講 電話での会話やPC（SNS）に関連した表現、アポイントメントに関連した表現その1
- 第3講 家族や結婚、自分の生活や趣味、ショッピングやデート、スポーツその1
- 第4講 アニメーション、映画やテレビ番組、メディア関連その1
- 第5講 人物、製品、サービスなどを魅力的に描写その1
- 第6講 食品販売、レストラン、料理など、食に関連した英語表現その1
- 第7講 比較対照、提案、オファー、選択決定、意見やアドバイスのやりとりその1
- 第8講 自由時間、週末の楽しみ方、趣味、旅行、特技その1
- 第9講 的確な指示の与え方と説明の仕方その1
- 第10講 アルバイト、インターンシップ、就職活動、ボランティア活動などについてその1
- 第11講 因果関係、同意不同意、将来計画、予想予測、論理思考その1
- 第12講 ファッション、音楽、および音楽関連産業に関する英語表現その1
- 第13講 地球にやさしい英語表現＝環境問題その1
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション 世界に発信すべき日本の伝統と文化
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+（90 点以上）：下記の配分で得点を付け、90 点以上の場合
- 評価 A（89～80 点）：下記の配分で得点を付け、80 点から 89 点の場合
- 評価 B（79～70 点）：下記の配分で得点を付け、70 点から 79 点の場合
- 評価 C（69～60 点）：下記の配分で得点を付け、60 点から 69 点の場合
- 評価 F（59 点以下）：下記の配分で得点を付け、59 点以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに合わせて直接お話しすることも可能です。

科目名 Practical English Conversation II (Practical English Conversation II)**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村 その子**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■科目分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク／その他：LTD PBL ジグソー

アクティブ・ラーニングとしてPBLを行う。具体的には、英語を用いて外部組織と連携してアイデア提案、プロジェクト企画制作、商品開発などに取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、産業社会の最前線で問題解決にあたり、常に革新的な視野で事業構想ができるようになることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。各講義につき事前学習に1.5時間以上、事後学習に1.5時間、合計で3時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなどその2
- 第2講 電話での会話やPC (SNS)に関連した表現、アポイントメントに関連した表現その2
- 第3講 家族や結婚、自分の生活や趣味、ショッピングやデート、スポーツその2
- 第4講 アニメーション、映画やテレビ番組、メディア関連その2
- 第5講 人物、製品、サービス内容などを魅力的に描写その2
- 第6講 食品販売、レストラン、料理など、食に関連した英語表現その2
- 第7講 比較対照、提案、オファー、選択決定、意見やアドバイスのやりとりその2
- 第8講 自由時間、週末の楽しみ方、趣味、旅行、特技その2
- 第9講 的確な指示の与え方と説明の仕方その2
- 第10講 アルバイト、インターンシップ、就職活動、ボランティア活動などについてその2
- 第11講 因果関係、同意不同意、将来計画、予想予測、論理思考その2
- 第12講 ファッション、音楽、および音楽関連産業に関する英語表現その2
- 第13講 地球にやさしい英語表現 = 環境問題その2
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション 世界に発信すべき日本の伝統と文化
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数とコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 下記の配分で得点を付け、90 点以上の場合
- 評価 A (89~80 点) : 下記の配分で得点を付け、80 点から 89 点の場合
- 評価 B (79~70 点) : 下記の配分で得点を付け、70 点から 79 点の場合
- 評価 C (69~60 点) : 下記の配分で得点を付け、60 点から 69 点の場合
- 評価 F (59 点以下) : 下記の配分で得点を付け、59 点以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに会って直接お話しすることも可能です。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 TOEIC I (TOEIC I)**サブタイトル** 特に英語検定試験受験を必要とする海外活動のために**担当教員** 石川 晴子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

English Expression と並行してまたはその後、英語力を継続的に高め、TOEIC の点数アップをめざす学生のための授業である。英語の総合的な力が上がれば TOEIC の点数も、もちろん上がって行くはずであるが、特徴のある能力資格試験なので、どのような傾向の問題がどんな形で出題されるのか、といった予備知識や技術的な訓練、慣れも大切な要素となる。この講義では TOEIC の得点を少なくとも現在の自分の点数から 100 点は上げることをめざし、リスニング・リーディングの両セクションで確実に点数を取ることに加えて、語彙、文法、読解力の増強をはかる。ただ、TOEIC の点数を上げるだけが英語を学ぶ目的ではないので、単なるノウハウに終わらせることなく、最後には、TOEIC の勉強をしたことが一人一人の英語コミュニケーション能力を総合的に高める結果につなげたい。

■科目分類

顧客理解／社会力育成／グローバルビジネス

■到達目標

授業履修前の TOEIC 得点より 100 点アップした実力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

TOEIC に必要な英語力と受験スキルを身に着ける。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

ペアワーク、グループワークを行う。例えば、ペアで TOEIC リスニングセクションのスクリプトを音読し、相互チェックをしたり、口頭で問題の出し合いをしたりする。リーディングセクションでは、問題を解いた後にペアまたはグループで答え合わせしたり、その内容について分析したりする。各自が主体的、能動的に取り組む活動を取り入れることで、より深い理解と、記憶への定着を目指す。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

TOEIC 受験へ向けての準備（各 1.5 時間）

■授業の概要

- 第1講 授業の進め方と TOEIC の概要について
- 第2講 TOEIC の各パートの概要、出題形式、傾向について
- 第3講 Part 1 演習：写真問題 人物の動作と状態
- 第4講 Part 1 演習：物の状態と位置
- 第5講 Part 2 演習：疑問詞を使った疑問文
- 第6講 Part 2 演習：基本構文（依頼／提案・勧誘／申し出）と応答の決まり文句
- 第7講 Part 2 演習：Yes No 疑問文
- 第8講 Part 5 演習：品詞問題
- 第9講 Part 5 演習：動詞
- 第10講 Part 5 演習：代名詞・関係代名詞
- 第11講 Part 5 演習：接続詞・前置詞
- 第12講 Part 3 演習：日常場面での会話
- 第13講 Part 3 演習：電話での会話
- 第14講 期末試験対策
- 第15講 期末試験および総括

■フィードバックの要領

課題・試験等に対して行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：評価方法により計算された総合点が 90% 以上の場合
- 評価 A (89～80 点)：評価方法により計算された総合点が 80～89% 以上の場合
- 評価 B (79～70 点)：評価方法により計算された総合点が 70～79% の場合
- 評価 C (69～60 点)：評価方法により計算された総合点が 60～69% の場合
- 評価 F (59 点以下)：評価方法により計算された総合点が 59% 以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内活動（小テスト、課題、宿題含む）40%、授業内試験 40%

■留意点

①事前履修科目について：同一言語にこだわらず D 区分 4 単位を修得していること。②履修定員について：本科目は原則 30 人の人数制限がある。初回の授業の出席者の履修を優先する。

科目名 TOEIC II (TOEIC II)**サブタイトル** 特に英語検定試験受験を必要とする海外活動のために**担当教員** 石川 晴子**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

English Expression と並行してまたはその後、英語力を継続的に高め、TOEIC の点数アップをめざす学生のための授業である。英語の総合的な力が上がれば TOEIC の点数も、もちろん上がって行くはずであるが、特徴のある能力資格試験なので、どのような傾向の問題がどんな形で出題されるのか、といった予備知識や技術的な訓練、慣れも大切な要素となる。この講義では TOEIC の得点を少なくとも現在の自分の点数から 100 点は上げることをめざし、リスニング・リーディングの両セクションで確実に点数を取ることに加えて、語彙、文法、読解力の増強をはかる。ただ、TOEIC の点数を上げるだけが英語を学ぶ目的ではないので、単なるノウハウに終わらせることなく、最後には、TOEIC の勉強をしたことが一人一人の英語コミュニケーション能力を総合的に高める結果につなげたい。

■科目分類

顧客理解／社会力育成／グローバルビジネス

■到達目標

授業履修前の TOEIC 得点より 100 点アップした実力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

TOEIC に必要な英語力と受験スキルを身に着ける。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

ペアワーク、グループワークを行う。例えば、ペアで TOEIC リスニングセクションのスク립トを音読し、相互チェックをしたり、口頭で問題の出し合いをしたりする。リーディングセクションでは、問題を解いた後にペアまたはグループで答え合わせしたり、その内容について分析したりする。各自が主体的、能動的に取り組む活動を取り入れることで、より深い理解と、記憶への定着を目指す。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

TOEIC 受験へ向けての準備（各 1.5 時間）

■授業の概要

- 第 1 講 授業の進め方と TOEIC の概要について
- 第 2 講 TOEIC の各パートの概要、出題形式、傾向について
- 第 3 講 Part 3 演習：オフィスでの会話①
- 第 4 講 Part 3 演習：オフィスでの会話②
- 第 5 講 Part 4 演習：アナウンス・ツアー
- 第 6 講 Part 4 演習：ラジオ放送・宣伝
- 第 7 講 Part 4 演習：留守番電話
- 第 8 講 Part 4 演習：トーク・スピーチ・会議の一部
- 第 9 講 Part 7 演習：表・用紙
- 第 10 講 Part 7 演習：広告
- 第 11 講 Part 7 演習：チャット
- 第 12 講 Part 7 演習：手紙・Eメール
- 第 13 講 Part 7 演習：ダブルパッセージ・トリプルパッセージ
- 第 14 講 期末試験対策
- 第 15 講 期末試験および総括

■フィードバックの要領

課題・試験等に対して行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：評価方法により計算された総合点が 90% 以上の場合
- 評価 A (89～80 点)：評価方法により計算された総合点が 80～89% 以上の場合
- 評価 B (79～70 点)：評価方法により計算された総合点が 70～79% の場合
- 評価 C (69～60 点)：評価方法により計算された総合点が 60～69% の場合
- 評価 F (59 点以下)：評価方法により計算された総合点が 59% 以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内活動（小テスト、課題、宿題含む）40%、授業内試験 40%

■留意点

①事前履修科目について：同一言語にこだわらず D 区分 4 単位を修得していること。②履修定員について：本科目は原則 30 人の人数制限がある。初回の授業の出席者の履修を優先する。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 WebデザインI (Web Design I)**サブタイトル** ソースコード (HTML、CSS) を用いてホームページを作成する**担当教員** 良峯 徳和**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

この授業では、ウェブサイト（ホームページ）の構築、登録、更新を行うために必要な基本的な概念、技術の習得を目指す。インターネットが始まった当初から今日に至るまでのウェブサイトのデザインおよびその技術的変遷について学ぶと同時に、「ハイパーテキスト」という概念がもたらしたインターネット上の情報を構造的かつ動的に表現するための理論的な方法論について学習する。具体的には、HTML、CSS（スタイルシート）といったウェブページ構築に必要な基本的な言語および具体的手法等を、実習を通じて習得する。

■科目分類

ビジネス創造/ビジネスICT

■到達目標

①HTML および CSS を用いて、ウェブページを作成・編集するための知識、スキルの習得 ・ウェブページのソースファイルの意味や機能の理解、把握 ②ウェブページを構成するさまざまなファイルを、サーバー側の要求に合わせて、アップロードしたり、アップデートする方法の習得③ウェブデザインに関するさまざまな概念や知識の習得

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

HTML、CSS を用いてウェブページを作成・編集するための基本知識を習得し、社会でウェブページが果たしているさまざまな役割とその重要性について理解する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク

Web デザイン1 では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。授業内でさまざまなパターンの HTML 文書の作成練習を実施する他、Google フォームを使って HTML 言語やスタイルシートに関する多数の練習問題を実施することで、Web 作成に関する基礎的な知識を修得することができる。それにより実際に Web ページを作成する際のスキルを獲得する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の授業に先がけテキストに記載してある練習問題を行うこと。（この作業に 1.5 時間以上必要）授業の開始時に毎回前回の授業の内容を確認するための小テストを行う。その準備として 1.5 時間以上の復習を行うこと。

■授業の概要

- 第1講 インターネットの歴史、WWW の概念
- 第2講 Web ページのソースファイル；フォントとフォーマットのための HTML タグ
- 第3講 画像表示；ハイパーリンク
- 第4講 表の作成；デザインテーブル
- 第5講 フレームを使ったホームページ
- 第6講 リスト、フォーム、ボタン
- 第7講 HTML 全般の復習と練習問題
- 第8講 CSS の基本的文法；ホームページの背景を設定、画像表示
- 第9講 CSS によるテキストの設定、各種テキストスペースの設定；フォントの設定
- 第10講 アプリケーションを使ってスタイルシートを設定する方法；ボールドスタイルの設定
- 第11講 マージン、パディングの設定；イメージフロート
- 第12講 CSS 疑似クラス
- 第13講 CSS 全般の復習と練習問題
- 第14講 オリジナルホームページの作成
- 第15講 オリジナルホームページの作成、アップロード

■フィードバックの要領

提出された課題に対して、修正点やコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：講義内容を十分に理解し、目的に応じて学んだ内容を応用、発展させることができる。
- 評価 A (89～80 点)：講義内容を理解し、目的に応じて学んだ内容にある程度柔軟に活用することができる。
- 評価 B (79～70 点)：講義内容をほぼ理解し、目的に応じて学んだ内容にある程度活用することができる。
- 評価 C (69～60 点)：講義内容の基本的事柄を理解し、簡単なことであれば、応用ができる。
- 評価 F (59 点以下)：講義内容について基本的な知識も理解も有していない。

■評価方法

課題提出：40%，小テスト：40%，平常点：20%。ただし、授業参加は全体の 2/3 以上、課題提出および小テストも全体の 2/3 以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

①本授業は Web デザインⅡを履修する際の必須要件となっている。Web デザインⅡも継続的に履修したい学生は必ず本授業を履修すること。②毎週の課題提出および小テスト正解率が全体で 2/3 を越えない学生、出席が全体の 2/3 に満たない学生は、単位を取得することができない。③就職活動に伴う欠席については活動していたという証明書がある場合に限り、これを正当な理由として考慮する。

科目名 WebデザインII (Web Design II)**サブタイトル** javascriptを学んで、動的、インタラクティブなWebページをデザインする**担当教員** 良峯 徳和**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

この授業は、HTMLやCSSの基本をマスターした学生を対象に、より高度な表現力、よりインタラクティブなコミュニケーションを可能とするWebページ制作技術の習得を目的とする。具体的には、HTML、CSSの基礎に加えて、javascriptと呼ばれるクライアントサイドのWebプログラミングの技法をWebページに組み込むための基礎知識ならびに制作技術を学ぶ。

■科目分類

ビジネス創造/ビジネスICT

■到達目標

①プログラミングの基本となるアルゴリズム、構文ルールを理解・習得し、プログラムを構築する基礎能力を身に着ける。②Webデザインに有効なさまざまなメソッドの使い方を理解・習得し、必要に応じて使いこなす技術力を身に着ける。③Webのユーザビリティやアクセシビリティについての理解を深めるとともに、著作権への配慮やセキュリティの問題についても関心を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

自分が意図するWeb上の表現内容を読み手が見やすく、アクセスしやすく、プログラミング技術を使って実現する技能を養う

■授業形態 AL手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク

Webデザイン2では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。授業内でさまざまなパターンのJavascriptのプログラムを含むHTML文書の作成練習を実施する他、Googleフォームを使ってJavascriptプログラムに関する多数の練習問題を実施することで、Javascriptの正しい記述方法を修得することができる。それにより実際のWebページ作成に役立つJavascriptのスキルを獲得する。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎回の授業に先がけテキストに記載してある練習問題を行うこと。(この作業に1.5時間以上必要) 授業の開始時に毎回前回の授業の内容を確認するための小テストを行う。その準備として1.5時間以上の復習を行うこと。

■授業の概要

- 第1講 javascriptとは何か? ; javascriptはWebの世界でどのように利用されているか。
- 第2講 javascriptの基本構文1
- 第3講 javascriptの基本構文2
- 第4講 javascriptの基本構文3
- 第5講 ポップアップウインドウを使ったプログラミング技法を習得。
- 第6講 ループ(繰り返し)処理を使って、作業を大量かつ高速に行わせるプログラミングの技法
- 第7講 ループ(繰り返し)処理を具体的な課題に応用
- 第8講 イベント処理を伴うダイナミックWebページの作成方法
- 第9講 文字列オブジェクトを対象としたさまざまな操作や処理
- 第10講 日時に関するオブジェクトや行列を対象とした操作や処理
- 第11講 行列(array)や数オブジェクトを対象としたさまざまな操作や処理
- 第12講 HTML要素をオブジェクトとしたさまざまな操作や処理
- 第13講 jQuery、セレクトタ、メソッド、パラメータ
- 第14講 jQueryを用いたWebデザイン
- 第15講 最終課題作成実習

■フィードバックの要領

提出された課題に対して、修正点やコメントを記入することでフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価A+ (90点以上) : 講義内容を十分に理解し、目的に応じて学んだ内容を応用、発展させることができる。
- 評価A (89~80点) : 講義内容を理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度柔軟に応用することができる。
- 評価B (79~70点) : 講義内容をほぼ理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度応用することができる。
- 評価C (69~60点) : 講義内容の基本的事柄を理解し、簡単なことであれば、応用ができる。
- 評価F (59点以下) : 講義内容について基本的な知識も理解も有していない。

■評価方法

課題提出: 40%、小テスト: 40%、学期末課題: 20%。ただし、授業参加、課題提出、小テストのいずれにおいても全体の2/3以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

小テストは毎回の授業の開始時に実施するため、遅刻・欠席の場合は受験できない。忌引き、就職の面接試験、インターンシップなどの理由で欠席した場合のみ、該当小テスト後の1週間以内に限り、追試を受けることができる。詳細については、最初の授業で説明する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 アドバンスド・ライティング・スキル (Advanced Writing Skill)**サブタイトル** 文章の達人になる！**担当教員** 樋口 裕一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

産業社会で活躍し、問題発見、問題解決、論理的思考、他者の説得をするためのライティングスキルをマスターして文章の達人になることをめざす。

■科目分類

顧客理解／ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確に思考し、判断し、それを他者に伝える力をつける。また、文章を書くスキルを身に着けることによって、自分の高い志を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確な思考と判断を培い、それを他者に伝える力表現力と技能を身に着ける。それによって、自分の高い志を持てるようにする。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義／演習

【活動形態】 個人ワーク

個人ワークとして文章を書くが、グループまたは全員で批評し合い、グループでよい表現や文章を仕上げていく。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

2時間以上かけて、書籍、インターネットを用いて、予定されている授業内容について情報を整理する。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション 論理的文章の書き方の基礎を復習
- 第2講 第1回課題答案作成（600字～800字の文章）
- 第3講 第1回課題解説 論を深めるテクニック
- 第4講 文章について論じるテクニック
- 第5講 第2回課題答案作成（文章について800字程度で論じる）
- 第6講 文章を正確に読み取るテクニック
- 第7講 説得力を高めるテクニック
- 第8講 第3回課題（エッセイ）
- 第9講 魅力的な文章を書くテクニック
- 第10講 リアリティを作り出すテクニック
- 第11講 第4回課題答案作成（エッセイ）
- 第12講 文章にメリハリをつけるテクニック
- 第13講 引き締まった文体にするテクニック
- 第14講 第5回課題答案作成（自己PR・レポート・宣伝文）
- 第15講 第5回課題解説・これからの勉強法

■フィードバックの要領

提出した文書についてコメントを付してフィードバックを行なう。

■評価基準

- 評価 A+（90点以上）：全答案平均が A 相当以上（書き直し、発言による加点を含める）
- 評価 A（89～80点）：全答案平均が B 相当以上（書き直し、発言による加点を含める）
- 評価 B（79～70点）：全答案平均が C 相当以上（書き直し、発言による加点を含める）
- 評価 C（69～60点）：全答案平均が D 相当以上（書き直し、発言による加点を含める）
- 評価 F（59点以下）：全答案平均が D 未満（書き直し、発言による加点を含める）

■評価方法

提出文章（80パーセント）、平常点（20パーセント）

■留意点

授業中の私語禁止。そのほか、飲食（ただし飲みものの摂取は許す）・ガム・帽子着用（宗教などの理由のある学生は許可する）・寝る姿勢を整えての居眠り・無断退出・イヤホンの着用・教員に対する暴言など、授業を害する行為についても禁止する。目に余るものは退出させ、欠席とみなす。

科目名 アントレプレナーシップ論 (Entrepreneurship)**サブタイトル** 立志起業家論**担当教員** 趙 佑領**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

将来に企業やプロジェクトを起こしたいと考えている学生がその実践に生かせる手がかりを学ぶことを目的とする。この場合の「手がかり」とは、起業家に必要な「初歩的知識」すなわち、戦略、組織、マーケティング等のことであり、さらにはビジネスを立ち上げようという「志」、「やる気、思い」である。この授業では、理論を中心とした部分と共に志・実践に役立つ部分を強化しており、これらの知識と志が社会変革（ソーシャル・イノベーション）とどのような関連があるかを示す。趙が講義した内容と対応するかたちで、外部講師として本学に招いたベンチャー業界の実務家（産業社会で活躍し名声を得ている起業家、インキュベーター、メンター）は、起業経営の現実と最前線事例のダイナミクスさを学生諸君に感じさせるであろう。将来何をしたいのか漠然としている学生にとっても実務家の体験談を交えた講義は志・キャリア設計の参考のうえに有意義であると思われる。

■科目分類

ビジネス創造／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

①ビジネスの立ち上げに必要な知識習得、②起業経営特有の戦略、組織、マーケティングを理解する、③自分にとって経営（学）を勉強する意味を含む志・人生設計及び問題解決を考えさせるきっかけづくり、④ソーシャル・イノベーション。本講義においては知識以上に「志」、「やる気、思い」は重要なキーワードである。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ベンチャー企業を巡る社会問題に関連する経営環境と問題解決への手がかりと関心を理論的に理解させ、先進的な問題解決に関わる実務者の講演を通じて、社会変革に関与していこうという学生の高い志の確立につなげる。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

アントレプレナーシップ論では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。教員と外部講師が示した講義内容の中で印象深い箇所を中心に感想レポートを毎週授業ごとにTNEXTに1000字以上入力提出し、教員の評価とコメントを受ける。授業内容の理解を深め、志を向上させることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等1.5時間以上）及び具体的な内容

講義終了間際に教員が示す事前事後学習ポイントを中心に、それらを授業前に読んで上で（各1.5時間以上）当該回の講義に臨み、毎週授業後にはTNEXTを用いて1000字以上の感想レポートを提出

■授業の概要

- 第1講 ベンチャー企業とは何か、アントレプレナーシップとは何か
- 第2講 個人事業と会社設立における手順とルール
- 第3講 起業家としての志と勇気ある生き方（外部講師講演）
- 第4講 ベンチャー企業の隆盛を示している世界各地の地域振興の事例とイノベーションの関係
- 第5講 ベンチャー企業経営論のフレームワーク
- 第6講 インキュベーター事業経験からみた成功する起業家、失敗する起業家（外部講師講演）
- 第7講 イノベーション手法、事業機会の発見・評価とビジネスモデル構築
- 第8講 ベンチャー企業の組織のマネジメント
- 第9講 ベンチャー企業の新価値創出と組織のあり方（外部講師講演）
- 第10講 限りある自社資源の限界を超えるための他社の経営資源活用
- 第11講 ベンチャー企業のグローバル化の意義
- 第12講 提携戦略等で必要とされる「交渉」の本質について理解する
- 第13講 起業家・ベンチャー企業のマーケティング
- 第14講 日本の起業家・志ある経営（外部講師講演）
- 第15講 総括

■フィードバックの要領

感想レポートに対し評価あるいはコメントをT-NEXTまたはWORDに記入してフィードバック

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : ほぼ全授業回に関係するレポート提出をし、起業経営特有の知識と志を大変良好に理解
 評価 A (89～80点) : ほぼ全授業回に関係するレポート提出をし、起業経営特有の知識と志をかなり理解
 評価 B (79～70点) : 起業に必要な知識を良好に習得、レポートでは自分の考えが良く述べられている
 評価 C (69～60点) : 起業に必要な知識をある程度習得、レポートでは自分の考えが一定部分述べられている
 評価 F (59点以下) : ベンチャー経営の基本理解しておらずレポートの多数未提出。全授業回数3分の1以上欠席

■評価方法

毎回授業ごとの小レポート（全15本をTNEXTに提出）の総計点（100%）。出席を疎かにすると毎回提出の小レポートを提出できなくなるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。

■留意点

①講義の順序は、学生の理解度と進捗度によって前後変更する場合がある。②外部講師の講義日もスケジュール状況によって変更になる場合もある。③私語、携帯電話、本授業と無関係のパソコン使用、途中退室は絶対不可であり、熾烈に厳しく注意する。学生の社会人としての常識涵養のための注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 キャリア・デザイン I (Career Design I)**サブタイトル** 社会の変化を知る、自己を知る、業界・企業を知る**担当教員** 初見、浜田、葛本**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

本講義を通して、自己の将来を考え、卒業後の職業生活（キャリア）の方向性を検討する。具体的には、(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解することの3点を通して、将来のキャリアデザインを設計していく。キャリア・デザイン I では、特に職業選択の背景知識として必要となる「社会の変化」について学習していく。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解する、の3点を通して、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

(1) 社会の変化、(2) 自己理解、(3) 業界・企業の分析を通して、職業観の育成を図ると共に、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク

キャリア・デザイン I では、アクティブ・ラーニングとしてフィールドワークを行う。6月に開催される Web インターンシップ EXPO に参加し、興味のある業界・企業を3社以上回る必要がある。主体的・能動的に参加することにより、自己の職業適性や興味のある仕事を見つけ出すことが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義テーマに対する事前学習（1.5 時間）。講義後の振り返りシート（本日の学び）の作成と内容の復習、指定図書の読書など（1.5 時間）。

■授業の概要

- 第1講 キャリア・デザイン I ガイダンス
- 第2講 社会の変化を知る①（長寿化：100 年人生について）
- 第3講 社会の変化を知る②（長寿化：100 年人生におけるキャリア戦略）
- 第4講 社会の変化を知る③（人口動態の変化）
- 第5講 社会の変化を知る④（労働市場の変化）
- 第6講 社会の変化を知る⑤（新卒採用市場の変化）
- 第7講 社会の変化を知る⑥（AI の進化）
- 第8講 社会の変化を知る⑦（AI が労働市場に及ぼす影響）
- 第9講 フィールドワーク準備①（就職情報サイトへの登録）
- 第10講 フィールドワーク準備②（興味ある業界・企業の探索）
- 第11講 フィールドワーク（振り返り）③（夏季休業中のインターンシップの検討）
- 第12講 キャリア・デザイン I まとめ（社会の変化についての振り返り・まとめ）
- 第13講 予備日（振り替え休講①）
- 第14講 予備日（振り替え休講②）
- 第15講 キャリア・デザイン I まとめ②（夏季休業中の行動計画の作成）

■フィードバックの要領

「本日の学び」の小レポート提出を行い、評価・フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+（90 点以上）：フィールドワークに参加し、提出物について大変優れている場合
- 評価 A（89～80 点）：フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達している場合
- 評価 B（79～70 点）：フィールドワークに参加し、提出物について一定の到達度に達している場合
- 評価 C（69～60 点）：フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達していない場合
- 評価 F（59 点以下）：フィールドワークに不参加、もしくは提出物について最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

「本日の学び」（50%）フィールドワークへの参加（40%）その他講義で指示された課題の提出物（10%）

■留意点

本講義は主に2年生を対象とした科目である。本科目の後にキャリア・デザイン II（秋学期）を履修すること。合わせて、インターンシップ I の履修を推奨する。また、本科目では Web 上でのフィールドワーク（6 月予定）への参加が必須となる。土日に開催される予定のため、事前のスケジュール調整を行うこと。

科目名 キャリア・デザイン II (Career Design II)**サブタイトル** 社会の変化を知る、自己を知る、業界・企業を知る**担当教員** 初見、浜田、葛本**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

本講義を通して、自己の将来を考え、卒業後の職業生活（キャリア）の方向性を検討する。具体的には、(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解することの3点を通して、将来のキャリアデザインを設計していく。キャリア・デザインIIでは、特に業界・企業分析の手法について学習していく。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解する、の3点を通して、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

(1) 社会の変化、(2) 自己理解、(3) 業界・企業の分析を通して、職業観の育成を図ると共に、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク

キャリア・デザインIIでは、アクティブ・ラーニングとしてフィールドワークを行う。10月に開催されるWeb インターンシップ EXPOに参加し、興味のある業界・企業を3社以上回る必要がある。主体的・能動的に参加することにより、自己の職業適性や興味のある仕事を見つけ出すことが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義テーマに対する事前学習（1.5時間）。講義後の振り返りシートの作成と内容の復習、推薦図書を読書など（1.5時間）。

■授業の概要

- 第1講 キャリア・デザインIIガイダンス
- 第2講 業界・企業分析①（業界・企業研究の基本を学ぶ）
- 第3講 業界・企業分析②（コンビニエンス業界の研究：セブンイレブン）
- 第4講 業界・企業分析③（コンビニエンス業界の研究：ローソン）
- 第5講 業界・企業分析④業界・企業分析③（コンビニエンス業界の研究：ファミリーマート）
- 第6講 自己を知る（適職診断テストの実施）
- 第7講 業界・企業分析⑤（アパレル業界の研究：ユニクロ）
- 第8講 業界・企業分析⑥（アパレル業界の研究：しまむら）
- 第9講 業界・企業分析⑦（アパレル業界まとめ）
- 第10講 履歴書・エントリーシートの基礎講座
- 第11講 フィールドワーク①（就職情報サイトへの登録）
- 第12講 フィールドワーク②（訪問企業の検討）
- 第13講 キャリア・デザインIIまとめ
- 第14講 予備日（振り替え休講①）
- 第15講 予備日（振り替え休講②）

■フィードバックの要領

講義内容に関する小レポートについて、評価・フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：フィールドワークに参加し、提出物について大変優れている場合
- 評価 A (89～80点)：フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達している場合
- 評価 B (79～70点)：フィールドワークに参加し、提出物について一定の到達度に達している場合
- 評価 C (69～60点)：フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達していない場合
- 評価 F (59点以下)：フィールドワークに不参加、もしくは提出物について最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

「本日の学び」および講義で指示された課題の提出物（40%）フィールドワークへの参加（40%）履歴書・エントリーシートの提出（20%）

■留意点

本講義は主に2年生を対象とした科目である。本科目の後にキャリア・デザインIII（春学期）、IV（秋学期）やインターンシップI・IIの履修を推奨する。また、本科目ではWeb上でのフィールドワーク（10月予定）への参加が必須となる。土日に開催される予定のため、事前のスケジュール調整を行うこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 クリエイティブデザイン I (Creative Design I)**サブタイトル** マルチメディア実践/デジタル図形の描き方、動画制作ほか**担当教員** 彩藤 ひろみ**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

動画を作成する機会が増えてきた。動画編集について基本的な知識を習得する。その周辺で、デジタル図形の描き方、使い方、色の仕組み、著作権への配慮、著作権フリーの映像や音楽の探し方、使い方を理解する。また、魅力的なシナリオ構築の方法を身につける。特に、2つのものを比較してどちらを選択するか、という問題解決をコンピュータを使って考える。具体的には、撮影物の構図などをデジタル作画して比較する。

■科目分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

動画編集について基本的な知識を習得する。その周辺で、デジタル図形の描き方、使い方、色の仕組み、著作権への配慮、著作権フリーの映像や音楽の探し方、使い方を理解する。シナリオの作り方、それを実現する方法についても演習を通じて理解する。目的・情報の受信者の状況に応じた情報の表現方法や情報機器の選択について理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

与えられた3課題(ショートムービー作成)を順番にこなす。ソフトウェアの選択、課題の解釈と実践方法などが自由となっている。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

好きな映画やアニメ、CMなどをよく見て、どこが面白いポイントなのか、自分なりに分析してみる。準備に1.5時間以上、復習作業に1.5時間以上かかる。

■授業の概要

- 第1講 6秒ムービーの鑑賞
- 第2講 超ショートアニメーションの作成
- 第3講 ムービー編集ははじめの一歩
- 第4講 ムービーの特殊効果について
- 第5講 音楽やサウンド効果について
- 第6講 第1作品 6秒ムービーの完成と鑑賞
- 第7講 イラスト作成方法の習得
- 第8講 ベクトルデータの活用
- 第9講 3DCGの活用
- 第10講 第2作品の構想
- 第11講 第2作品 イラストと実写の組み合わせ、または、3DCGと実写の組み合わせ
- 第12講 動画編集基礎知識確認
- 第13講 グループ作品シナリオ作り
- 第14講 作品中間チェックと仕上げのための作業
- 第15講 作品発表会

■フィードバックの要領

全3回の課題を順番にクリアしないとイケない。各回で、結果をフィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 動画編集の基本的知識習得および各課題での技術点と芸術点が特に優れているもの。
- 評価 A (89~80点) : 動画編集の習得および各課題での技術点と芸術点が優れているもの。
- 評価 B (79~70点) : 普通程度の動画編集知識があり、作品づくりが出来たもの。
- 評価 C (69~60点) : 頑張ったことがわかる作品を作れたもの。
- 評価 F (59点以下) : 課題の放棄、修正を行わなかったもの。

■評価方法

各回授業の進捗報告(20%) 作品の技術点(40%) 芸術点(40%) 3課題とも提出は必須。

■留意点

最初からPCは必須になる。マウスを準備するほうがよい。外部を撮影する場合は、肖像権などに充分配慮すること。

科目名	クリエイティブデザイン II (Creative Design II)		
サブタイトル	クリエイティブデザイン II ～3DCG 制作とその社会的浸透～		
担当教員	彩藤 ひろみ	対象学年	2 年生以上
		区分	秋学期

■授業目的

3DCG を利用した CM, アニメ、映画、ポスターなどが増えてきた。立体をそのまま 3D プリンターで印刷することも簡単になってきた。3DCG を制作体験しながら、これからの社会のどのような方面に応用できるか考察し、具体的に提案できるようにする。情報伝達・発信のひとつの表現方法として、3DCG を身につける。個々人の技術習得も狙うが、問題発見、解決の糸口として、グループワーク、プレゼンテーションを実施する。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

3DCG ソフトの種類の理解、3DCG ソフトの利用、グループワーク、プレゼンテーションを通じてのプロジェクトの推進、3DCG の社会的価値の考察と成果発信

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義／演習

【活動形態】 個人ワーク／グループワーク

最終作品に向け、各回の進捗を踏まえ、構図の決定、作品制作を個人ワークで実施する。大きな作品を作成するにあたり、グループワークを活用する回もある。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

オープンソースソフトウェア Blender の練習に、予習、復習とも 1.5 時間以上かかる。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション：3DCG が当たり前になってきた世界
- 第2講 Blender の使い方・基本オブジェクトの操作
- 第3講 カメラ調整について
- 第4講 ライティング（照明）について
- 第5講 シーンの組み立て
- 第6講 データ変換について
- 第7講 キャラクター 3DCG の仕上げりまでの流れ
- 第8講 トポロジーについて
- 第9講 AR・VR と 3DCG
- 第10講 キャラクタモデリング
- 第11講 テクスチャペイントについて
- 第12講 応用作品の準備：喫茶店のインテリア
- 第13講 応用作品の準備：喫茶店の備品
- 第14講 現代社会と 3DCG
- 第15講 作品鑑賞会

■フィードバックの要領

課題に対する努力と成果に対して、フィードバックをする。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：技術の著しい伸びと 3DCG に対する深い理解
- 評価 A (89～80 点)：技術の伸びと 3DCG に対する理解
- 評価 B (79～70 点)：技術が一定レベルを超えたと評価できるもの
- 評価 C (69～60 点)：基本をおさえたと言評価できるもの
- 評価 F (59 点以下)：積み重ねの努力をせず、基準に達しなかったもの

■評価方法

授業内での平常点 (60%) と作品課題 (40%)

■留意点

PC は最初から必要。マウスを用意してほしい。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 クリエイティブデザイン III (Creative Design III)**サブタイトル** バーチャルリアリティ技術の習得とインタラクティブアプリケーション制作**担当教員** 出原 至道**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

学生にとって、新しいアイデアを出し、協業によってそれを実現していく能力を鍛えることは、極めて重要である。本講義は、コンピュータを用いたバーチャルリアリティアプリケーションのチーム開発の演習を通して、各種のアルゴリズムの実装とユーザ視点のものづくりを行うことを目的とする。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

① github を利用した共同開発手法に熟練する、②実用的なアルゴリズムの実装が C# でできるようになる、③コンピュータを利用したシミュレーションを理解し、実装できるようになる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

コンピュータを利用したシミュレーション技法について、独自の実装を考案・実施できる。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 グループワーク

github による共同開発

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義後、各チームで独自に実装研究を 90 分程度行い、記録すること。プロジェクト管理システム上で、作業時間の報告を行うこと。作業成果は、github 上に随時反映させること。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス・GitHub 操作能力のチェック
- 第2講 環境整備
- 第3講 github の利用
- 第4講 ゲームエンジン入門
- 第5講 インタラクション
- 第6講 プロジェクトゴールの設定
- 第7講 実現しようとするコンセプトの確定
- 第8講 ユーザインタフェースの設計
- 第9講 実装演習
- 第10講 実装演習
- 第11講 実装演習
- 第12講 実装演習
- 第13講 実装演習
- 第14講 プレゼンテーション準備
- 第15講 プレゼンテーション

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対してコメントをフィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 数値評価 90 点以上
- 評価 A (89~80 点) : 数値評価 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79~70 点) : 数値評価 70 点以上 79 点未満
- 評価 C (69~60 点) : 数値評価 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 数値評価 60 点未満

■評価方法

平常点 (github 上での寄与) 50%、最終プレゼンテーション 40%、最終プレゼンテーション相互評価 10%

■留意点

本講義は、GitHub の操作能力が前提条件として必須である。IT 活用法 2 の単位を取得していない者は、相当する技術をあらかじめ身につけておかなければ、単位の取得は見込めない。①毎回、コンピュータを持参すること。②特段の事情がある場合を除き、第1回の講義に出席していないものの受講は認めない。③ github 上に個人リポジトリを用意しておくことが望ましい④外付けのマウスを持参することが望ましい、

科目名 グローバルヒストリー III (Global History III)**サブタイトル** 国際社会のなかの日本とアジア**担当教員** 水盛 涼一**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

近くて遠い国、中国。現在の日本にとって中国は生産拠点や市場として無視できない存在でありながら、歴史解釈や領土について大きな問題を抱えている。そこで本講義では日本がどのように中国と接してきたのか注目し、日中関係の展開を解説していく。大まかに前半では近代から現代にいたる歴史を説明し、日本と中国の類似する点および相違する点を明確にし、また後半では現在の中国が置かれている諸問題を概略し、現在の中国の人々のインターネットでの言論を紹介し、彼らがどのような思考をしているのか確認する。その過程で、現代における異文化理解の困難性、また交流の重要性の理解を目指す。

■科目分類

顧客理解／ビジネス創造／グローバルビジネス

■到達目標

グローバル化の時代において、情報の海に飲み込まれることなく自ら思考して異文化を理解するスタンスを涵養する。その格好の題材として、中国の心性を把握し、日本や諸外国への相対的な視点を獲得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

世界の歴史は諸文化を知るものであり「知識と理解」にあたる。そして、突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくだろう。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

内発的自省そして外発的誘導により自己認識そして世界認識を改める。具体的には海外事情と国内とを比較するミニッツペーパーや講義レビューにより自己省察を促し、また MBR (Monthly Brief Report) を加えた3種の提出物に対する講師の応答により異文化理解への扉を開く。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎週冒頭にミニッツペーパー、最後に講義レビューの提出を求める。また毎月の各節終了時には講義内で MBR (Monthly Brief Report) を作成する。そのため、およそ毎週に 1.5 時間ずつの予習復習を要すだろう。

■授業の概要

第1講	ガイダンス	
第2講	略説中国史——中国の地形と少数民族	
第3講	中国の試験地獄——社会体制と官僚試験	第一回
第4講	中国の試験地獄——社会体制と官僚試験	第二回
第5講	中国の試験地獄——社会体制と官僚試験	第三回
第6講	中国の試験地獄——社会体制と官僚試験	第四回
第7講	歴史時代の長い好景気	第一回
第8講	歴史時代の長い好景気	第二回
第9講	歴史時代の長い好景気	第三回
第10講	歴史時代の長い好景気	第四回
第11講	中華と夷狄——国境線のない世界の自己と他者	第一回
第12講	中華と夷狄——国境線のない世界の自己と他者	第二回
第13講	中華と夷狄——国境線のない世界の自己と他者	第三回
第14講	中華と夷狄——国境線のない世界の自己と他者	第四回
第15講	そして現在の日本と中国へ	

■フィードバックの要領

毎次にわたって BRD (Brief Report of the Day) を学生・教員間で往復します。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 評価点 100 点 (下記“配分”参照) のうち 90 点以上。
 評価 A (89~80 点) : 評価点 100 点 (下記“配分”参照) のうち 89~80 点。
 評価 B (79~70 点) : 評価点 100 点 (下記“配分”参照) のうち 79~70 点。
 評価 C (69~60 点) : 評価点 100 点 (下記“配分”参照) のうち 69~60 点。
 評価 F (59 点以下) : 評価点 100 点 (下記“配分”参照) のうち 59 点以下。

■評価方法

MBR の内容 (60%)、ミニッツレポート・講義レビューを通して見た講義に取り組む姿勢・積極性 (40%)

■留意点

①講義は毎回、前週に配布した資料を読み込んでいることを前提として進行する。資料の持参を忘れた者や未読の者は原則として当日の受講を認めない。②第2回までに重要不可欠な点を説明するうえ、連続性を重視した積み上げ型の講義であるため、第1回と第2回の講義に連続して出席しなかった者、さらに合計で欠席3回を超えた者は、本講座の履修を認めない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 サブカルチャー論 (Subculture Theory)**サブタイトル** 日本のサブカルチャー**担当教員** 中澤 弥**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

海外からも注目される日本のサブカルチャー。マンガやアニメを通して日本に興味を持つ外国人も多く、日本へのツーリズムの目玉ともなっている。本講義では、日本のサブカルチャーの歴史をひもとくとともに、その問題点をすくい取り、今後の可能性を探っていく。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

日本のサブカルチャーの流れを理解するとともに、メディアに対する思考力・判断力を得て、課題を解決する能力を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

日本のサブカルチャーの歴史を理解し、現代のメディアにおけるサブカルチャーの位置を修得する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

「サブカルチャー論」では、アクティブ・ラーニングとして「ワークシート」による講義内容の理解をすすめ、問題の発見をはかる。本活動に主体的・能動的に参加することにより、「問題発見力と問題解決力」を養成することが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

日本のサブカルチャーの歴史について調べておく。各回の講義に備えて 1.5 時間程度の学習が必要となる。さらに問題意識を深めるための復習として 1.5 時間程度の学習を課す。

■授業の概要

- 第1講 サブカルチャーとは何か？
- 第2講 サブカルチャーを通して見る世界の中の日本
- 第3講 欧米文化におけるサブカルチャー
- 第4講 カウンターカルチャーとしてのマンガ
- 第5講 〈おたく〉から〈オタク〉へ
- 第6講 怪獣映画と日本の戦後
- 第7講 「シンゴジラ」とオタクのナショナリズム
- 第8講 寺山修司 虚構の自伝
- 第9講 オーガナイザーとしての寺山修司
- 第10講 戦う少女たち
- 第11講 アウトサイダーアートと戦う少女たち
- 第12講 人形とサブカルチャー
- 第13講 〈2・5次元〉の舞台
- 第14講 サブカルチャーの現状
- 第15講 サブカルチャーの可能性

■フィードバックの要領

各回のミニ・レポートにフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 日本のサブカルチャーについて理解し、課題を自ら発見し、解明することができる。
- 評価 A (89~80 点) : 日本のサブカルチャーについて理解し、課題を自ら発見することができる。
- 評価 B (79~70 点) : 日本のサブカルチャーについて理解し、その課題を説明することができる。
- 評価 C (69~60 点) : 日本のサブカルチャーについて、その流れを理解している。
- 評価 F (59 点以下) : 日本のサブカルチャーの流れと課題について理解することができていない。

■評価方法

各回の講義内容に基づく小レポート、小テスト 50%、OFFICE (Word) を使用した課題レポート 50%

■留意点

科目名 スポーツⅡ (シェイプアップフィットネス) (Sports II-Fitness)**サブタイトル** シェイプアップフィットネス**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

スポーツの諸側面を学ぶことによって、(1)自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。(2)生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力(「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります)を身につけること。(3)スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。(4)スポーツの価値についての知見を深めることを目的としています。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

「講義目的」に記載されている目的に即した、個々人の発展が見られることが目標であり、学生一人ひとりの状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力を身につける。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

本講義は、アクティブ・ラーニングとして個人ワーク、ペアワーク、グループワークを行う。活動に主体的・能動的に参加することにより身体の構造と機能を理解し、協力し合いながら効果的な身体トレーニング方法を習得することが目標である。尚、新型コロナウイルス感染症の影響により内容が変更になる場合がある。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

健康、身体運動、スポーツの意義について広く理解すべく、参考文献、報道、その他の情報を十分に蒐集し理解しておくこと。(各1.5時間)

■授業の概要

第1講 本講義の目的、到達目標、受講にあたっての注意点等について説明する。

第2講 身体測定①・体力測定

第3講 ストレッチと身体ほぐし①

第4講 ストレッチと健康トレーニング①

第5講 ストレッチと健康トレーニング②

第6講 ストレッチと健康トレーニング③

第7講 ストレッチと健康トレーニング④

第8講 ストレッチと健康トレーニング⑤

第9講 有酸素運動の理論と実践

第10講 有酸素運動と健康トレーニング

第11講 有酸素運動を体験する

第12講 身体測定②

第13講 3日間の食生活調査表に関する説明

第14講 3日間の食生活調査表の作成②

第15講 振り返りとディスカッション

■フィードバックの要領

トレーニング日誌の確認とコメント記載によるコミュニケーション等

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 本講義の到達目標に十分達している。

評価 A (89~80点) : 技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができています。

評価 B (79~70点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められる。

評価 C (69~60点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められる。

評価 F (59点以下) : 講義目的に沿った活動ができなかったとみられる。

■評価方法

・平常点(参加への意欲、姿勢等):60%(各回の講義内容と目標を理解し身体運動を行ったかを3段階で評価します)・課題の提出:40%(指定された内容について課題を作成し提出してもらいます。)

■留意点

①講義と実技を組み合わせ実施する。②受講希望者が多数の場合は抽選となる。③欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しない。また就職活動による欠席は考慮しない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 スポーツⅡ（フットサル）（Sports II-Futsal）**サブタイトル** フットサルと出会い、その奥深さをしるための入門スクール**担当教員** 福角 有祐**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

①人生を豊かにするためのスポーツ教養の一つとして、フットサルの知識と技能を身に着けること②フットサルを実践することを通じて、社会人として求められる基礎能力であるコミュニケーションや判断力、実行力、協同する力を育成すること。③フットサルを通じて、競技者へのシンパシーを獲得し、観戦する（応援する）価値について知ること

■科目分類

顧客理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

競技のルールやマナーの概要を知り、その面白さ、楽しさについて十分理解し他人にもそれを伝えることができる。フットサルゲームに参加し協同者と協力して楽しむことができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

フットサル競技の特性は、そのスピード感であり、判断力、決断力、実行力がきわめて大切であり、社会人力育成につながる

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

フットサルゲームの戦略・戦術を考案・実践し学ぶ。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に収集し、理解しておくこと。（1.5 時間）

■授業の概要

- 第1講 クラスメンバーの決定
- 第2講 フットサルに出会う！
- 第3講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得①
- 第4講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得②
- 第5講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得③
- 第6講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ①
- 第7講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ②
- 第8講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ③
- 第9講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ④
- 第10講 フットサル競技の実践①
- 第11講 フットサル競技の実践②
- 第12講 フットサル競技の実践③
- 第13講 フットサル競技の実践④
- 第14講 フットサル競技の実践⑤
- 第15講 全体の振り返り

■フィードバックの要領

担当教員から学びの状況と今後の方向性について直接アドバイスします。

■評価基準

- 評価 A+（90 点以上）：スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
- 評価 A（89～80 点）：技能の開発が十分行われ、将来行かされる準備ができていること。
- 評価 B（79～70 点）：技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。
- 評価 C（69～60 点）：一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。
- 評価 F（59 点以下）：「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法

平常点 100%

■留意点

高い競技レベルを前提としてはいない。むしろ、初心者や、スポーツ未経験者にスポーツ体験をしてもらうことを重視している。経験者には、これまでの経験を踏まえて、初心者受講生へのコーチングなどを通じてよりスポーツへの理解を深めてもらうことを期待する。

科目名 スポーツと健康 (Sports and Health)**サブタイトル** スポーツ文化と健康に関する基礎知識を学ぶ**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

健康の保持増進のために身体運動は不可欠である。身体との関わり方を間違えると逆効果となり、健康を損ねてしまうことになりかねない。人生100年時代を迎える学生の皆さんが、健康に関する知識やスポーツ文化を学び、実践することで充実した生活を送ってくれるよう願っている。講義では、①健康の保持増進のための3大条件(身体運動・栄養・休養)に関する基本的な知識、②身体運動やスポーツを安全に効果的に行うための基本的知識、③産業社会における健康やスポーツの意味や価値等々、幅広い知識を学ぶことを目的としている。

■科目分類

ビジネス創造／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

1. 現代社会における健康課題を理解し自ら対策に取り組める能力を身につける。2. 健康管理方法、身体運動、スポーツとの関わり方を正しく理解する。4. 運動、スポーツ、レジャー、レクリエーションの享受能力を高める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会の発展に積極的に関与し問題解決に向かう姿勢。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク

本講義は、アクティブ・ラーニングとしてペアワークを予定している。但し、新型コロナウイルス感染症の感染状況により講義形態が制限される場合もある。上述したアクティブ・ラーニングに取り組むことにより、健康管理やスポーツに関する社会的課題を理解することが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

事前に予習のための用語やポイントを説明するので指定図書等で予習すること。講義後は、講義資料とノートを参考に復習を行うこと。(各1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 講義の目的、内容、予習・復習の仕方、評価基準、評価の方法等についての説明
- 第2講 世界保健機構(WHO)の健康定義、健康問題、問題解決の現状
- 第3講 日本国内の健康課題と取り組み、健康産業、健康ビジネスについて
- 第4講 ライフステージにあった身体運動と健康管理①
- 第5講 ライフステージにあった身体運動と健康管理②
- 第6講 ライフステージにあった身体運動、健康管理③
- 第7講 ライフステージにあった身体運動、健康管理④
- 第8講 ライフステージにあった身体運動、健康管理⑤食の重要性について
- 第9講 身体運動・トレーニングの基礎理論①
- 第10講 身体運動・スポーツの起源、文化としてのスポーツ
- 第11講 スポーツとは何か・近代・現代社会とスポーツ
- 第12講 社会的からだについて
- 第13講 まとめ
- 第14講 授業内テスト
- 第15講 全体のまとめ、試験の解答と解説

■フィードバックの要領

次の講義での回答、メールでの対応。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 講義内容について十分に理解し、オリジナリティが発揮されている。
- 評価 A (89~80点) : 授業の内容について十分に理解し、自分の考えもまとめて表現できている。
- 評価 B (79~70点) : 授業の内容について理解しているが、その内容の表現が不十分である。
- 評価 C (69~60点) : 学んだ内容について理解していない。
- 評価 F (59点以下) : 著しく理解が不十分である。

■評価方法

講義内の課題提出による評価が40%、試験または課題が60%を基本とする。絶対評価方法にて評価する。

■留意点

出席は評価のための前提条件である。欠席が3分の1を越えた場合、原則として単位を付与しない。就職活動による欠席は考慮しない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データサイエンス I (Data Science I)**サブタイトル** データ利活用の基礎的スキル**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

ビジネスのインターネット化、ハードウェアの低廉化、デバイスやセンサーの多様化 (IoT 含む) により、データの利活用は現在のビジネスに欠くべからざるものとなっている。本講義では、データ利活用の基礎力の習得を目指し、データ分析の入門を取り扱う。具体的には、データ分析プロセスについていくつかのフレームワークを学び、データの要約と可視化、データの比較と関係性の分析、因果関係の検証の実際的手法についての知識習得と実践を行ってもらう。このようなスキルは現在のビジネスでは会社のどの部署でも必要とされるものであるため、受講をお勧めする。

■科目分類

ビジネス環境理解

■到達目標

データを活用して、データの加工・変換、特徴の解明、関係性の把握、グループ間の差異の検出、複数の変数感の傾向を説明など、基礎的な考え方やスキルの修得を目標とする。学修の内容としては統計検定3級程度を目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

データ分析の基礎技術の学習により、産業社会における課題に数理的にアプローチする技能を習得する

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

データサイエンスIではアクティブ・ラーニングとして、実際のデータをつかった演習を JASP というアプリケーションで実施します。また、統計検定3級程度の問題演習を通じて、統計的思考力を養います。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

統計的な考え方について該当する項目をあらかじめ調べる (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション。データの種類、グラフ表現、統計資料の整理
- 第2講 データの種類とグラフの表現・演習
- 第3講 量的変数の要約方法
- 第4講 量的変数の要約方法
- 第5講 1変数データの分析
- 第6講 1変数データの分析・演習
- 第7講 2変数データの分析
- 第8講 2変数のデータの分析・演習
- 第9講 回帰直線と予測
- 第10講 回帰直線と予測・演習
- 第11講 確率
- 第12講 確率・演習
- 第13講 確率変数と確率分布
- 第14講 確率変数と確率分布・演習
- 第15講 データの収集：実験・観察・調査

■フィードバックの要領

授業の中で典型的な方法や誤りについて紹介する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：課題解決のためのデータ分析を行い、結果を正しく表現して価値ある考察ができる
- 評価 A (89~80 点)：データ分析プロセスのフレームワークに従って分析を実践することができる
- 評価 B (79~70 点)：データ分析プロセスのフレームワークと、統計の基礎を理解している
- 評価 C (69~60 点)：データ分析プロセスのフレームワークと、統計の基礎をある程度身に付けている
- 評価 F (59 点以下)：データ分析プロセスのフレームワークの要点について説明できない

■評価方法

平常点 50% (練習問題 10%×5 回)、レポート (JASP によるデータ分析 10%×5 回) (統計検定試験に合格した場合は、成績の一部として評価する)

■留意点

①必ず PC を持参すること。②本講義は毎回、前回講義の内容を理解していることを前提として行う。また、個人ワークとしてデータ分析やレポート作成などのアクティブラーニングを行うので、1 回目の講義から欠席せず受講すること。社会調査士科目のため、第1,3,5,7,9,11,13,15 講には、「基本的な資料とデータの分析」の内容を含む (詳細を参照)

科目名 データサイエンス II (Data Science II)**サブタイトル** 実践的統計学入門**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

ビジネスでの高度情報化により、情報が数量として扱われるデータを扱う必要性はますます高まっている。本講義では、データに基づく課題解決や問題解決に必須の統計学に関して、その基礎概念の理論的な理解を深め、社会現象を確率モデル・統計モデルとして扱うために必要な統計的方法を利活用できることを目標としている。

■科目分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

(1) 基礎的な確率分布について理解し、適用できる (2) 標本抽出について理解できる (3) 平均の推定問題が理解でき、適用できる (4) 検定問題が理解でき、適用できる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP2 思考と判断：ビジネス環境で必須の統計的思考力と課題解決のための統計分析プロセスを計画実行することができる。
DP1 知識と理解：統計モデルを用いて仮説を検証できる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク

与えられ課題について、データを収集して、分析し、提案する。その場合、他者に自分の仮説を根拠を説明し、さらに相手の仮説を検討してみずらの仮説について検討する

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

統計学に関する知識の理解だけではなく、実際の問題解決を求める。実際のデータから解を求めるので 1.5 時間程度の復習時間を必要とするので余裕を持ってあたること。

■授業の概要

- 第1講 統計学の基礎
- 第2講 データの整理：ヒストグラム、折れ線グラフ、棒グラフなど統計グラフ
- 第3講 平均値や中央値などの統計量によるデータ要約
- 第4講 相関関係と相関係数
- 第5講 質的変数と量的変数の関係：クロス表や連関係数
- 第6講 正規分布の活用
- 第7講 平均値の分布
- 第8講 母集団の平均値と分散の推定
- 第9講 平均値の区間推定と仮説検定
- 第10講 平均値の差の検定
- 第11講 因果分析のための単回帰モデル
- 第12講 単回帰分析での決定係数
- 第13講 単回帰での係数の検定
- 第14講 残差分析
- 第15講 重回帰分析入門

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：到達目標 (4) 検定問題が理解でき、適用できる
- 評価 A (89~80 点)：到達目標 (3) 平均の推定問題が理解でき、適用できる
- 評価 B (79~70 点)：到達目標 (2) 標本抽出と平均の性質について理解している
- 評価 C (69~60 点)：到達目標 (1) 基礎的な分布の性質を理解している
- 評価 F (59 点以下)：上記のいずれも理解しておらず、適用もできない

■評価方法

講義中のレポート提出 (50%)、最終期末レポート (50%) により行う。統計的なものの考え方・データをもとにした統計処理の仕方ができているかどうかを評価する。統計検定試験の結果を成績評価の一部として評価する。

■留意点

本講義は、毎回の講義の内容を前提として講義を行う。また、講義ではチーム毎のデータ収集、レポート提出のアクティブラーニングを行うので、1 回目の講義から欠席せずに受講すること。PC 必携である。「データサイエンス III」、「データサイエンス IV」、「経営科学 I」、「経営と意思決定」の履修には本講義を履修しておくことが望ましい。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データベース I (DataBase System I)**サブタイトル** データベースの作成と管理**担当教員** 後藤 涼子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

データベースシステムは、実社会のあらゆる組織の基幹業務や意思決定にとって必要不可欠なものとなっている。本講義では、大量データを効率よく管理し必要な情報を簡単かつ高速に検索するデータベース管理システムに関し、データ構造、データ操作、データ管理法、データ分析法などの基盤技術を講述する。リレーショナルデータベース管理システム (RDBMS: Relational DataBase Management System) について、Microsoft Access を使用した演習により経験を重ねることで、リレーショナルデータベースの構築やデータ管理についてのビジネス ICT および社会人育成を目的とする。

■科目分類

ビジネス環境理解 / 社会人育成 / ビジネス ICT

■到達目標

データベースに関する基礎知識、リレーショナルデータベース設計の基本概念、およびリレーショナルデータベースの基本となる「テーブル」「クエリ」「フォーム」「レポート」の4つのオブジェクトによるデータベースの作成について、Microsoft Access を通じて理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

データベースに関する基礎知識を養い、演習により作成・構築における技能的手法とその応用となるデータベース管理システムの基盤技術について修得する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク

データベース I では、アクティブ・ラーニングとしてグループワークを行う。実社会におけるデータベースの使用例について考える。主体的・能動的に取り組むことで、身近な分類された書類や住所録などもその一種であることを認識し、その必要性を把握することで、データベース構築の基礎知識を身に付けることが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に前講までの学習内容を理解しておくこと。毎授業後には練習問題を行い提出すること。(90分)

■授業の概要

- 第1講 データベースの概要
- 第2講 リレーショナルデータベース管理システムと Access の基本操作
- 第3講 データベースとテーブルの作成
- 第4講 データのインポート、エクスポート
- 第5講 リレーションシップの作成
- 第6講 テーブルの正規化
- 第7講 クエリの作成、データの並べ替え
- 第8講 データの抽出 (1) _単一条件、複合条件、部分一致条件
- 第9講 データの抽出 (2) _Between~And 演算子、パラメータクエリ
- 第10講 フォームの作成と編集
- 第11講 フォームによるデータの入力、コントロールの編集
- 第12講 レポートの作成と編集
- 第13講 各種帳票と宛名ラベルの作成と編集
- 第14講 試験課題_「得意先売上情報管理」データベースの作成
- 第15講 総合演習_「会員管理管理」データベースの作成

■フィードバックの要領

課題に対し、処理条件に従って正しく処理されているか採点してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
 評価 A (89~80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
 評価 B (79~70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
 評価 C (69~60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 点未満

■評価方法

平常点: 10%、課題: 20%、授業内試験: 70%

■留意点

各自のノート PC に MS Access Ver.2019 または 2016 がインストールされていること。演習中心の授業につき、授業には毎回各自のノート PC を必ず持参すること。課題に対して積極的に取り組み、MS Access の操作に慣れること。

科目名 データベース II (DataBase System II)**サブタイトル** SQLを用いたデータベースの作成と管理**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

データベースは、大量データを管理し、容易にデータの検索や更新などを行うための技術である。本講義は、データベース管理の概念やしぐみについて、データベース管理システム (DBMS: DataBase Management System) の操作を通じて学習することを目的とする。

■科目分類

ビジネスマネジメント/ビジネス ICT

■到達目標

リレーショナルデータベース管理システム (RDBMS: Relational DataBase Management System) を使って、SQL (Structured Query Language) による①データ検索、②テーブルへの行の追加・削除・更新、③データベース作成やテーブルの追加・設定変更・削除、テーブル間の関係の定義・削除、④データベースを問題解決の手段として利用できることを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

RDB の操作や管理に関する技能をもとに、RDB を活用して問題解決する力を身につける。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/その他: データベース作成

ALとして、各自でデータベース作成を行う。データベースの構築を通じて、データベースのしくみや SQL について理解を深め、データベースを活用した問題解決のスキルを身につけることを目標とする。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

前講までの学習内容を理解しておくこと。また、ほぼ毎時課題を出すので、その課題作成を通じて SQL の記述方法について必ず復習すること。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度 (合計 3 時間程度) である。

■授業の概要

- 第1講 データベースの概念
- 第2講 リレーショナルデータベースと SQL の概要
- 第3講 SELECT 文を利用したデータ検索 (1) 検索、並び替え
- 第4講 SELECT 文を利用したデータ検索 (2) 集合関数
- 第5講 SELECT 文を利用したデータ検索 (3) 条件による抽出
- 第6講 SELECT 文を利用したデータ検索 (4) 述語を用いた抽出
- 第7講 行の集約
- 第8講 副問合せの基本と集合関数の利用
- 第9講 表結合の基本と集合関数の利用
- 第10講 行の追加、更新、削除
- 第11講 データ定義文 (1) 表の作成
- 第12講 データ定義文 (2) 制約、ビューの作成
- 第13講 データベースを活用した問題解決演習 (1) 問題の把握と解決案の策定
- 第14講 データベースを活用した問題解決演習 (2) データベース設計と表の作成
- 第15講 データベースを活用した問題解決演習 (3) ビューの作成

■フィードバックの要領

第3講以降、各講義回で全体に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 到達目標①～③が全てできる。④の考え方を理解し、合目的に実践できる。
- 評価 A (89～80 点) : 到達目標①～③が全てできる。④の考え方を理解し、実践できる。
- 評価 B (79～70 点) : 到達目標①ができ、②と③のどちらかができる。④の考え方を理解し、実践できる。
- 評価 C (69～60 点) : 到達目標①ができる。④の考え方を理解し、実践できる。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末試験 50%、課題 50%に授業への参加態度などを加味する。

■留意点

- ・「データベース I」で習得した知識と技能をもとに行われる講義であるため、「データベース I」は必ず履修しておくこと。
- ・各回の講義は、前回の講義内容を下敷きに行っているため、第1講から欠席せずに履修すること。
- ・特に初回は教科書の指示と受注、必要なアプリケーションのインストールと設定を行うので必ず出席すること。

一般科目 1年生以上

一般科目 2年生以上

一般科目 3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビジネスコミュニケーション II (Business Communication II)**サブタイトル** 多摩や地元の魅力を発信して自己プロデュース。地域要人と SNS で交流する実践法**担当教員** 久米 信行**対象学年** 2 年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

現代はチャンスに満ちています。SNS 活用で、無名の個人が一夜にして有名になり、世界中から観光客が押し寄せることさえあるのです。私は中小国産 T シャツメーカーの経営者ですが、SNS で人生が好転して、各界で活躍する数千人のネット友達ができました。おかげさまで本業以外にも、全国の観光地域づくりやブランディング、企業経営者・NPO リーダー向けの研修講師、ビジネス書や記事の執筆、美術館・オーケストラ・バレエ団の支援などで、学生時代には想像しなかった楽しい毎日を送っています。多摩大生にも同じように予想を超えるような明るくて楽しい未来を切り開いて欲しいのです。この講義では SNS を友人との連絡だけでなく、有用な情報を広く発信して縁を広げる技術を学びます。多摩のお薦め情報を発信＝勝手に観光協会しながら自分と地域をプロデュースします。

■科目分類

顧客理解／社会力育成／ビジネス ICT

■到達目標

就活に役立つ facebook 投稿を毎週行いながら、次の 3 大スキルを磨き「友達」と「いいね」を増やしてネット上の評価を高めます。1) 毎日ひとつは SNS でシェアしたくなるモノ・店・風景などを発見する「脳のパラボラカ×心のズーム力」2) 記事を見た人が思わず「いいね」を押したくなる「写真撮影・加工×キャッチコピー作成センス」3) シェアしたお店の店主など地元キーパーソンと楽しいご縁を結び「友達申請×名刺活用×メール術」

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスコミュニケーションを円滑にする SNS 活用法として、プロフィール作成、記事投稿時の写真撮影・文章作成、友達申請・フォロー、コメント・メッセージ・メール・名刺作成交換の技術や作法を学ぶ。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク

毎週、多摩（地元）の絶景やおすすめスポットなど、1 テーマ（全 10 テーマ）の課題に従い、各自が授業前までに facebook に写真付きの記事投稿を行う。各自が投稿した facebook 投稿の中から、毎週、順番に数名ずつが発表し、その中から一番印象に残った記事を選んでコメントする。その内容は次回の授業で全員にフィードバックされ、お互いに切磋琢磨する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎週の課題（例：通学路の美味しいパン屋）に合わせ、講義前に facebook で魅力的な写真と短い文章で投稿します。講義や優秀投稿記事からの学び（数行程度）を講義ブログや Facebook にコメントします。（1.5 時間）

■授業の概要

- 第 1 講 講師紹介とガイダンス：インスタグラムの開設 & 活用、講義ブログ & Facebook への投稿
- 第 2 講 教科書マンガ版「すぐやる技術」の感想発表と SNS 開設 & 投稿講座
- 第 3 講 スマホでお気に入りのお店やスポットを見つけるコツ
- 第 4 講 インスタグラム映えする写真の撮り方と加工法
- 第 5 講 記事で紹介した店主などへのメッセージの出し方つながり方
- 第 6 講 多くの人の興味を惹くタイトルやキャッチコピーの付け方
- 第 7 講 多くの人に検索され見てもらえるハッシュタグの付け方
- 第 8 講 Facebook で目立って信用される自己紹介文の作り方
- 第 9 講 Facebook 向きのプロフィール写真とカバー写真の撮り方選び方
- 第 10 講 自分らしさをアピールする独自のこだわりテーマの見つけ方
- 第 11 講 リアルなおつきあいから SNS へと導く個人名刺の作り方と活用法
- 第 12 講 就活にも生きる SNS 記事の蓄積法とアピール法
- 第 13 講 最終レポートと全員 1 分プレゼンテーションの準備
- 第 14 講 最終レポート提出と全員 1 分プレゼンテーション 1
- 第 15 講 最終レポート提出と全員 1 分プレゼンテーション 2

■フィードバックの要領

講義レポートに寄せられた質問については講義とブログで回答する

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：下記、配分により 90 点以上
 評価 A (89～80 点)：下記、配分により 80 点以上 89 点以下
 評価 B (79～70 点)：下記、配分により 70 点以上 79 点以下
 評価 C (69～60 点)：下記、配分により 60 点以上 69 点以下
 評価 F (59 点以下)：下記、配分により 59 点以下

■評価方法

毎回講義中の 5 分間レポート (30%) 毎回の事前課題：facebook 投稿 (30%) 期末レポートと課題ページ作成 (20%) 最終プレゼンテーション (20%)

■留意点

受講の条件 > 1) facebook を活用できるスマートフォンを所有していること 2) SNS に自分の顔写真やプロフィールを公開して、記事を投稿して自分をブランド化する覚悟があること 3) 多摩地域（地元）の美味しいお店やおもしろスポットを探して発信する覚悟があること

科目名 ビジネス数学 I (Business mathematics I)**サブタイトル** 行列の演算とそのビジネス利用**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

ビジネスの現場で使える数学の基礎的な実力、特に、数学で物事を考える力と自ら計算しうるスキルを養います。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

ビジネスに利活用できる数的処理力や情報収集力を養う。また、プログラミング言語 Python のスキルやそれをレポートとしてまとめるためのスキルを養う。データ分析を用いてマーケティング戦略の立案と提案するための数学の基礎力をつけ、自ら問題を設定し数的処理により解決できるように学修する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

ビジネス数学 I では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。Colaboratory をもちいて、各自で Python のコードを実行し、授業の中で習得する線形代数の演習を実施する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

初回までに、四則演算、割合の計算等、特に、ビジネス数学基礎の内容を復習のこと。また各授業においては、内容についての復習 (1.5 時間)、次回内容について予習 (1.5 時間) を実行すること。

■授業の概要

- 第 1 講 オリエンテーション、Python の基礎
- 第 2 講 Python の基礎
- 第 3 講 配列について
- 第 4 講 数学の基礎その 1
- 第 5 講 数学の基礎その 2
- 第 6 講 数学の基礎その 3
- 第 7 講 スカラー、ベクトル、行列、テンソル
- 第 8 講 ベクトルの内積とノルム
- 第 9 講 行列の積
- 第 10 講 転置
- 第 11 講 行列式と逆行列
- 第 12 講 線形変換
- 第 13 講 固有値と固有ベクトル
- 第 14 講 コサイン類似度
- 第 15 講 最終課題

■フィードバックの要領

課題等に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 最終課題提出者のうち、最終課題とミニレポートの合計点で 90 点以上
- 評価 A (89~80 点) : 最終課題提出者のうち、最終課題とミニレポートの合計点で 80 点以上 89 点以下
- 評価 B (79~70 点) : 最終課題提出者のうち、最終課題とミニレポートの合計点で 70 点以上 79 点以下
- 評価 C (69~60 点) : 最終課題提出者のうち、最終課題とミニレポートの合計点で 60 点以上 69 点以下
- 評価 F (59 点以下) : 最終課題未提出者もしくは、最終課題とミニレポートの合計点で 59 点以下

■評価方法

最終課題 30%、ミニレポート 70% (5%×14 回)。10 回以上出席 (もしくは欠席回数が 5 回未満) の者で、最終課題を提出した者に対して評価を行う。

■留意点

Python を用いた演習を実施するため、毎回 PC を持参してください。指定図書の「Introduction to Linear Algebra, Strang, Gilbert」については購入する必要はない (授業の中で参考資料や参考ページを示す)。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビジネス数学Ⅱ (Business mathematics II)**サブタイトル** ビジネスのための微分・積分入門**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

経営上では、情報を活用して、未来の状態を予測し、そこで発生する問題を事前に対応できるようにすることは重要である。本講義では、ビジネス課題の解決のために数学的知識を用いたモデル構築のための基礎としての、数学的な考察およびモデルの構築を目指し、関数の概念とその応用、微分積分の概念と応用について、基礎的な概念についての理解と実際の計算方法についての習得を目指す。できるだけ、実際の問題解決のための数学と位置づけて講義を行う。

■科目分類

ビジネスICT

■到達目標

(1) 初等関数について微分積分を理解して行える (2) 多変数関数の微分を理解して行える (3) 関数近似について理解して行える

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP1 知識と理解：ビジネスの中で必要な基礎的な学力を養い、産業社会での問題を数学モデルを用いて理解する
DP2 実際の問題から数理モデルを構築でき、それを用いて課題解決を図れる

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク

実際の問題を数学的に表現し、その解を求め、さらに実際に適用できるかを検討する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各講義回において出される経営に関する実際の問題を次回までに解いて整理しておくことが求められる。問題の理解と解を求め整理する時間としては 1.5 時間以上必要となるので余裕を持って準備すること。

■授業の概要

- 第1講 グラフから学ぶ 1次関数
- 第2講 グラフから学ぶⅡ 2次関数
- 第3講 微分の基本となる差分について講義するⅠ 差分
- 第4講 微分の基本となる差分について講義するⅡ 基本的な関数の微分法
- 第5講 1次関数と2次関数の微分
- 第6講 関数の和や差の部分
- 第7講 置換微分について
- 第8講 関数の積の微分Ⅰ
- 第9講 関数の積の微分Ⅱ 置換
- 第10講 微分 演習
- 第11講 不定積分の基本 微分との対応
- 第12講 不定積分の基本 Ⅱ 初等関数
- 第13講 置換積分と部分積分
- 第14講 偏微分入門
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：学習した内容について理解して実際の問題に適用し、解を求めることができる。

評価 A (89～80 点)：学習した内容について理解して解を求めることができる。

評価 B (79～70 点)：学習した内容について理解して少なくとも 2 つの内容に関する解を求めることができる。

評価 C (69～60 点)：学習した内容について理解して少なくとも 1 つの内容に関する解を求めることができる。

評価 F (59 点以下)：学習した内容について理解が不十分で解を求めることができない。

■評価方法

通常の課題等による平常点 (60%) と学期末の試験結果 (40%) により総合評価

■留意点

科目名 ビジネス法 (Business Law)**サブタイトル** 企業における法務およびビジネスを取り巻く法**担当教員** 樋笠 茂士**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

本講義は、ビジネス活動に関わる法律の中で、会社法、民法、労働法、独占禁止法、著作権法、不正競争防止法、景品表示法、刑法等に触れることによって、法的観点から企業の行うさまざまな活動とそのリスクを把握することを目的とする。そして、企業目的の実現を阻害する「リスク」に対応するためのリスクマネジメント体制について学習する。また、企業活動においては、仕入先・消費者・行政などの多様な相手方との関係が発生するため、企業として最低限度守るべき法令ないし義務がある。法令を遵守し、適切な企業経営を行うために、実務に携わるうえで知る必要がある法律の基礎知識や法律の趣旨・目的などを大局的な視点で学習し、法令違反リスクを察知できる力を養う。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

企業における経営者と機関の関係から、適切な経営の仕組みを学習する。そして、組織に属する人間として内部統制の意義を理解し、リスクマネジメント体制の構築ができるような知見を身に付ける。企業の実務に携わるうえで知る必要がある法律の基礎知識や法律の趣旨・目的などを大局的な視点で学習し、法令違反リスクを察知するために必要な知見を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

企業活動に内在するリスクや、企業を取り巻く法規制の趣旨を理解し (DP1 知識と理解)、具体的な事案・事件を介して、犯罪発生を回避する力・リスクを管理する力を身に付ける (DP2 思考と判断)。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

「ビジネス法」では、アクティブ・ラーニングとして「判例・事例分析研究」を行う。具体的には、独占禁止法違反、不正競争防止法違反、景品表示法違反の事例を自分で調査し、その違法性及び適法性を検討する課題に取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、「問題解決力」を得ることが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前に指定される「事件・法律」について調べてから講義に参加する (1 時間)。講義後には、レジュメと、ワークで書いた内容で学んだ情報を補う (0.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 ビジネス法ガイダンス～コンプライアンス～
- 第2講 貸したお金はどうなる?～民法・民事訴訟法～
- 第3講 自動車事故を起こしてしまったら?～民法上の損害賠償責任～
- 第4講 労働法～「雇用契約」と「三六協定」～
- 第5講 会社法～株式会社とは～
- 第6講 会社法～取締役の義務～
- 第7講 絶対痩せるサプリって本当?～景品表示法～
- 第8講 類似商品って大丈夫?～不正競争防止法～
- 第9講 勝手に音源を使って良い?～著作権～
- 第10講 レポート講評・相互評価会
- 第11講 カルテル～独占禁止法～
- 第12講 私的独占～独占禁止法～
- 第13講 不公正な取引方法①～独占禁止法～
- 第14講 不公正な取引方法②～独占禁止法～
- 第15講 確認テスト

■フィードバックの要領

「T-NEXT」の課題機能により、課題への回答や教員への質問を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容に関して、完全に近い理解度に達している。
- 評価 A (89～80 点) : 講義内容に関して、優れた理解度に達している。
- 評価 B (79～70 点) : 講義内容に関して、平均的な理解度に達している。
- 評価 C (69～60 点) : 講義内容に関して、最低限の理解度に達している。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容に関して、最低限の理解度に達していない。

■評価方法

平常点 (30%)、レポート (20%)、【授業内試験】最終回の確認テスト (50%) 確認テストは、指定された (手書きの) 持ち込みペーパーのみ持ち込み可能。

■留意点

特になし。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ プログラミング入門 I (Introduction to Programming Language I)

サブタイトル ▶▶▶ C#プログラミング

担当教員 ▶▶▶ 彩藤 ひろみ

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春学期

■授業目的

本講義は、C# 言語を中心に、プログラミング言語を学ぶ。基礎からきちんと積み上げることが実力となって跳ね返ってくる。コンピュータにどうやってこちらの考えを伝えるのか、そのアルゴリズムを学び、実践する。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

アルゴリズムの理解、プログラミングの組み立て、結果の予測とバグフィックス。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク

コンピュータにさせたい内容を自ら考え、設計し、動かす。その過程でうまくいかない部分をどうやったら効率的に発見して解決できるのかを習得する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

オンラインチュートリアルを利用する。予習に 1.5 時間以上、復習に 1.5 時間以上かかる。

■授業の概要

- 第 1 講 C# とは
- 第 2 講 C# の基本形 クラスと計算
- 第 3 講 クラスの理解
- 第 4 講 メソッドの定義
- 第 5 講 アルゴリズムの理解その 1 条件分岐
- 第 6 講 アルゴリズムの理解その 2 繰り返し
- 第 7 講 配列変数 複数のデータを扱う
- 第 8 講 前半まとめ ミニテスト
- 第 9 講 C# で入出力操作
- 第 10 講 データの加工
- 第 11 講 アルゴリズム理解
- 第 12 講 配列データの読み解き
- 第 13 講 三角関数と波
- 第 14 講 復習と自由課題
- 第 15 講 プレゼンテーションと期末テスト準備

■フィードバックの要領

毎回の演習の進捗を確認し、正しい解法や考え方をフィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : C# プログラミングの基礎を深く理解し、応用問題を自力で解答できる
- 評価 A (89~80 点) : 解説書がある状態で C# プログラムを正しく組むことができる
- 評価 B (79~70 点) : 授業で習う範囲で C# プログラムを組むことができる
- 評価 C (69~60 点) : チュートリアル通りに C# プログラムを組んで動かすことができる
- 評価 F (59 点以下) : C# プログラミングで何ができるのか理解しない

■評価方法

学期末試験 50% レポートなど平常点 50%

■留意点

オンラインで C# プログラムを記述・実行できるサイトも適宜利用する

科目名 ▶▶▶ **プログラミング入門 II (Introduction to Programming Language II)****サブタイトル** ▶▶▶ **Java 言語によるプログラミング入門****担当教員** ▶▶▶ **中村 有一****対象学年** ▶▶▶ **2年生以上****区分** ▶▶▶ **春学期****■授業目的**

本講義は、Java 言語によるプログラミングの入門コースである。将来 SE などを目指し、職業的なプログラミング技術を身につけたい学生には、この科目を受講することを強く勧める。Java 言語は、最近広く普及しているプログラミング言語であり、この言語を一通り習得していると、さまざまな場面で役に立つ。また「情報処理技術者試験」などの資格試験を受ける場合にも有効である。授業は、基礎的なプログラミングの構造の説明と、その演習の繰り返しで行っていく。単元ごとにレポートの提出を求めるため、各自、空き時間にはしっかりと復習をすることが必要である。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

Java 言語を一通り使いこなせるようになることが最終目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

Java 言語を基礎から学ぶことにより、プログラミング言語に特有の知識を身に付け、将来 SE などの職種で活躍できるようにする。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

アクティブ・ラーニングとしてワークシートや簡単なクイズを行う。講義内容に関連する課題を出題して、講義時間内に Form で答えたり、当日中に T-Next で提出する。解答例などは時間内あるいは後日解説し、知識を実感として身に付ける。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5 時間) 復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 Java 言語入門：プログラム・プログラミング・プログラミング言語
- 第2講 開発環境の整備：Java の開発環境を整備し、使い方を学ぶ。
- 第3講 入出力と変数：変数名のつけ方、変数の型
- 第4講 四則演算と代入：計算式の書き方
- 第5講 枝分かれ：if 文と switch 文の違い
- 第6講 for 文による繰り返し：回数が決まっている繰り返し、漸化式
- 第7講 while 文、do while 文による繰り返し：条件が成り立っているあいだ繰り返しを行う構文
- 第8講 配列：規則的に並んだデータを扱う場合に使われるデータ構造
- 第9講 関数：ひとまとまりの処理に名前を付け部品として呼び出す
- 第10講 GUI の利用：GUI 機能を使ったプログラミング手法
- 第11講 乱数とグラフィクス：Java における乱数生成とグラフィクス機能
- 第12講 タイマーとサウンド：Java におけるタイマーとサウンド出力の機能
- 第13講 イベント処理：Java におけるイベント処理の機能を取り上げる。
- 第14講 レポート作成：ある程度の大きさの実用的なプログラムを作成する。
- 第15講 レポート作成：ある程度の大きさの実用的なプログラムを作成する。

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：100 点～90 点
- 評価 A (89～80 点)：89 点～80 点
- 評価 B (79～70 点)：79 点～70 点
- 評価 C (69～60 点)：69 点～60 点
- 評価 F (59 点以下)：59 点以下

■評価方法

学期末試験 50% レポートなど平常点 50%

■留意点

①プログラミング言語の学習においては、面倒がらずに自分でプログラムを打ち、実行して確認していくことが重要である。いろいろなエラーを経験すること、つまり失敗することが、成功すること以上に意味を持っている。わからないことは、できるだけ授業中に質問して解決するように心がけよう。②授業には、毎回各自のノート PC を必ず持ってくる。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶ **プログラミング入門 III (Introduction to Programming Language III)****サブタイトル** ▶▶ Python プログラム入門**担当教員** ▶▶ 今泉 忠**対象学年** ▶▶ 2年生以上**区分** ▶▶ 秋学期**■授業目的**

この講義ではビジネス ICT で必須のプログラム言語【Python】について学ぶ。Python は、オブジェクト指向、命令型、手続き型、関数型などのスタイルでプログラムを書くことができる。開発効率が高く、フリーの優秀なフレームワークや開発環境が揃っている。何らかのプログラミング言語で、自ら構想したアルゴリズムの実装が可能になりたいなどの将来 SE などを目指し、職業的なプログラミング技術を身につけたい学生やには、この科目を受講することを強く勧める。本講義の前半では順次処理、分岐処理、繰り返し処理について学び、Python のコーディングスキルを確かなものにする。後半では、データの作成や集計、並び替えのプログラミングを実践して、データを処理するアルゴリズムの基礎について理解を深める。自分の頭で考えて、アイデアを表現する力を身につける。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

Python のプログラミングと、アルゴリズムの基礎を身につけることを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP1：アルゴリズムを実現できるための論理力などを習得する
 DP4：ビジネス環境で必須の課題解決のためのプログラミング力を修得する

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク

与えられた課題に関するプログラムを作成する。また、そのプログラムについて自ら説明できる。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義で課されたプログラム課題について次回までに実行し確認しておくこと。プログラムの説明なども記入するので復習時間として 1.5 時間以上必要となるので余裕を持って行うこと。

■授業の概要

- 第 1 講 開発環境の確認と入出力
- 第 2 講 Google Classroom のセットアップと復習
- 第 3 講 変数の型と四則演算と余りの復習
- 第 4 講 if 文について
- 第 5 講 if 文の復習
- 第 6 講 繰り返し
- 第 7 講 for を用いる
- 第 8 講 リストの扱いについて学ぶ
- 第 9 講 配列を利用した分岐
- 第 10 講 配列の処理について学ぶ
- 第 11 講 関数の表現について学ぶ
- 第 12 講 複数の戻り値がある関数
- 第 13 講 ファイルを扱う I 入力
- 第 14 講 ファイルを扱う II 入力と出力
- 第 15 講 学期末レポート

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：平常点、課題、テストを総合して、90%以上の高得点を獲得している。
 評価 A (89～80 点)：Python の応用的なプログラムを書くことができる。
 評価 B (79～70 点)：Python の簡単なプログラムを書くことができる。
 評価 C (69～60 点)：Python のプログラムを読んで理解することができる。
 評価 F (59 点以下)：プログラミングへの意欲が不足、あるいは、基本的な Python の文法が理解できていない。

■評価方法

日常課題 50%、期末レポート 50%。平常点が 80%を満たさない場合は減点する。

■留意点

・講義と日常の課題を通して、Python を身につける努力をしたかを学期末レポートで問う。

科目名 ベンチャー企業論 (Venture Company Theory)**サブタイトル** 企業家精神の習得**担当教員** 小林 英夫**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

付加価値や雇用の創出においてベンチャー企業の果たす役割は非常に大きい。また、ベンチャー企業を興し発展させていくことを司る精神—企業家精神—は、創業に携わるかどうかにかかわらず、創造的なビジネス活動を行っていく上で重要なものである。本講義では、組織のマネジメントとそれを支える行動規範としての企業家精神について包括的に学ぶとともに、現在活躍中の企業家や事業家の生き方を知ることを通じて、ベンチャー企業の経営やベンチャー企業への参画について学び、自らのライフマネジメントについて考える。

■科目分類

ビジネス創造/ビジネスマネジメント/グローバルビジネス

■到達目標

①ベンチャーと企業家精神とは何かを理解することを通して、自らのキャリアデザインを考えられるようになる、②事業立ち上げや発展に必要な知識を習得し、事業創業や急成長時に特有の課題や戦略を理解する、③ベンチャー企業創造につながるアイデアを発見し、それを具体化させられるようになる、の3点を到達目標とする。これを通じ、社会発展に貢献する力や高い志を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

起業家精神を持ち新しいことに取り組むことを促して、ベンチャー参画を通じキャリアを築いていくことを自らの選択肢とすることができる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

ベンチャー企業論では、アクティブラーニングとして起業のための事業計画の立案と想定事業計画書のエクゼクティブサマリー作成を行う。履修者は、自らが何かしらのベンチャー企業を立ち上げることを考え、事業計画の要旨をまとめたエクゼクティブサマリーを作成する。何もない所から事業を生み出そうとすることに真剣に取り組むことで、社会問題の解決力を身につけることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする（1.5 時間）。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する（1.5 時間）。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション—ベンチャーの概念と意義
- 第2講 ベンチャーの定義と事例
- 第3講 ベンチャーの歴史
- 第4講 キャリア形成手段としてのベンチャー
- 第5講 ベンチャー経営チーム
- 第6講 起業プロセス—楽天
- 第7講 事業計画書
- 第8講 リンズスタートアップ
- 第9講 資本政策
- 第10講 ストックオプション、創業支援
- 第11講 学生起業と就業後起業
- 第12講 世界の起業家
- 第13講 連続起業家
- 第14講 まとめ—ベンチャーへの転換
- 第15講 学習成果の確認—授業内期末試験

■フィードバックの要領

ミニッツペーパーの講評と質問・コメントへの回答を翌回講義で行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業貢献点と期末試験の合計が 90 点以上
- 評価 A (89~80 点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79~70 点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69~60 点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 授業貢献点と期末試験の合計が 60 点未満

■評価方法

授業貢献点 (59%)、期末試験 (41%)。授業貢献点は、ミニッツペーパーや T/F テストから受講への取り組みを評価する。アクティブラーニングとして作成するエクゼクティブサマリーは、期末試験の一部として評価する。

■留意点

①授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業においてミニッツペーパーの提出あるいは T/F テストの受験を求め、その内容を—4~6 点で評価し、累積する (上限 59 点)。通常 4 点以上であるが、受講態度が悪い場合は—4 点となり欠席 (0 点) 以下の評価となる。②講義内容は、学生からのコメントや要望、関連項目の最新動向や時事問題を踏まえて変更することがある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 マーケティング・リサーチ (Marketing Research)**サブタイトル** 基礎からはじめるマーケティングリサーチ**担当教員** 加藤 みずき**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

初めてマーケティングリサーチに関して学ぶ人を主な対象とし、消費(者)行動に焦点を当てながら、マーケティングリサーチの重要性、活用の仕方を理解する。また、統計の基礎的な知識および分析法(具体的には、データの数値要約、サンプリング法、相関、t検定など)や質問紙の作成法を修得した上で、それらの統計的手法を用いたマーケティングリサーチの調査計画の立て方を学ぶ。

■科目分類

顧客理解/ビジネス環境理解

■到達目標

基礎的な統計の知識を活用し、身近な消費行動を数値で表すための適切なデータ収集計画を立てることができる。収集したデータについて適切な手法を用いて分析し、結果を正しく解釈した上で、報告書の形でわかりやすくまとめることができる。授業で学んだ統計手法を組み合わせることで応用的な調査計画を立てることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

提示されたデータについて、目的に沿った分析方法を考え、解釈することができるようになる。またその結果をわかりやすく表現することができるようになる。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク

個人で授業内容の理解確認のための課題に取り組み、用語や理論が説明できるようになることを目指す。模擬データに対し、Excelを使用しながら数値要約、分析を行う。講義内容の疑問点などは翌週の授業でフィードバックを行う。必要に応じてペアワークを通じて理解確認、理解深化を行う。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

予習と復習合わせて1.5時間。事前、事後学習ポイントの詳細については前の授業で指示するので事前に調べてくること。その他、模擬的な調査に回答し、得られたデータを集計する作業も必要に応じ行う。

■授業の概要

- 第1講 <第1講> ガイダンス・代表値の使い分け方
 第2講 <第2講> 代表値の使い分け方・平均値と標準偏差、正規分布の理解
 第3講 <第3講> データの数値要約
 第4講 <第4講> 様々な調査方法と実施における注意点
 第5講 <第5講> 四つの尺度・統計的仮説検定
 第6講 <第6講> 相関①:二つの変数間の関連について知ろう
 第7講 <第7講> 相関②:相関分析の方法を学ぶ
 第8講 <第8講> 二つの平均値の差の検定①:t検定の実施
 第9講 <第9講> 二つの平均値の差の検定②:対応の有無による結果の違い
 第10講 <第10講> 分析ソフトを使って様々なデータを分析しよう
 第11講 <第11講> アンケートを作成しよう
 第12講 <第12講> 調査計画案を作ろう①:与えられたテーマから調査目的や方法について考える
 第13講 <第13講> 調査計画案を作ろう②:与えられたテーマから
 第14講 <第14講> 調査計画案を作ろう③:個人で問いから調査計画を立て、最終計画書を作成
 第15講 <第15講> 統括とまとめ

■フィードバックの要領

翌週の授業で配付する授業通信の中で回答することでフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上):各評価対象において、顕著にすぐれた水準に達している
 評価 A (89~80点):各評価対象において、到達すべき水準を十分に超えている
 評価 B (79~70点):各評価対象において、到達すべき水準に達している
 評価 C (69~60点):各評価対象において、十分とは言えないが最低限の水準を満たしている
 評価 F (59点以下):いずれの評価対象においても得点が十分ではなく、到達すべき水準に達していない

■評価方法

平常点(30%):授業内課題への記入・提出などを含めた参加点小テスト(20%):統計の運用に関する正しい理解の確認のために実施調査計画書作成課題(50%):個人で考えた調査計画案をシートにまとめる。

■留意点

- ・到達目標にも示したように、様々なワークを通して理解を深めることを目指しているため、授業中・授業外ともに積極的な参加を行うことが望ましい。
- ・本講義は社会調査士取得のための認定科目(B分野)に該当する。

科目名 韓国ビジネスコミュニケーション I (Korean Business Communication I)**サブタイトル** 中級韓国語 (ハングル能力検定試験 4 級取得を目指す)**担当教員** 高 昌弘**対象学年** 2 年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

この講義では、1 年間初級韓国語を学習した学生 (2 年生以上) を対象に、次のステップである中級韓国語 (ハングル検定 4 級レベルの文法や語彙など) を学び、ハングル能力検定試験 4 級レベルの実力を身につけることを目的としている。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

春学期の前半は 2022 年 06 月に行われる予定のハングル能力検定試験 5 級の合格を目指し、過去問を使って模擬試験を行うなど試験対策をし、後半では 2023 年 06 月にあるハン検 4 級に向けて 4 級レベルの語彙や文法表現を学習していく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

様々な韓国語表現を学習することでコミュニケーション能力を高め、より明確な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

韓国ビジネスコミュニケーション I では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。具体的には、ハングル能力検定試験 5 級の試験対策に取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、6 月に行われるハングル能力検定試験 5 級を目指し、その実力をつけることが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

復習に必要な時間は 2 時間以上。前回到学んだ内容をしっかり覚えているかどうかを確認するために毎回小テストを行う。

■授業の概要

- 第 1 講 オリエンテーション及び自己紹介
- 第 2 講 試験対策 (1) 「発音の変化」の総復習
- 第 3 講 試験対策 (2) 「語彙①」と「模擬試験」
- 第 4 講 試験対策 (3) 「語彙②」と「模擬試験」
- 第 5 講 試験対策 (4) 「語彙③」と「模擬試験」
- 第 6 講 試験対策 (5) 「語彙④」と「模擬試験」
- 第 7 講 試験対策 (6) 「語彙⑤」と「模擬試験」
- 第 8 講 試験対策 (7) 「語彙⑥」と「模擬試験」
- 第 9 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (1) ・文法 [-고 있다]
- 第 10 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (2) ・文法 [- ㄹ까요?]
- 第 11 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (3) ・文法 [- ㅂ니다]
- 第 12 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (4) ・文法 [-기 위해서]
- 第 13 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (5) ・文法 [- ㄹ 생각이다]
- 第 14 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (6) ・文法 [- 서]
- 第 15 講 映画鑑賞・面談

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 平常点と小テストの合計が 90 点以上であること。
- 評価 A (89~80 点) : 平常点と小テストの合計が 89 点から 80 点の間であること。
- 評価 B (79~70 点) : 平常点と小テストの合計が 79 点から 70 点の間であること。
- 評価 C (69~60 点) : 平常点と小テストの合計が 69 点から 60 点の間であること。
- 評価 F (59 点以下) : 平常点と小テストの合計が 59 点以下であること。

■評価方法

平常点 50% 小テスト 50%

■留意点

韓国語 I ・ II を履修していなくてもハングルが読めて初級レベルの単語や文法表現を知っていれば受講できる。すでにハングル検定 5 級を持っている人は試験対策をやっている間 (4 月・5 月) は作文 (会話練習) を書く時間にする。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 韓国ビジネスコミュニケーション II (Korean Business Communication II)**サブタイトル** 中級韓国語 (ハングル能力検定試験 4 級取得を目指す)**担当教員** 高 昌弘**対象学年** 2 年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

この講義では、1 年間初級韓国語を学習した学生 (2 年生以上) を対象に、次のステップである中級韓国語 (ハングル検定 4 級レベルの文法や語彙など) を学び、ハングル能力検定試験 4 級レベルの実力を身につけることを目的としている。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

2023 年 06 月に行われる予定のハングル能力検定試験 4 級を受けるためにハングル検定 4 級レベルの語彙や文法表現を学習していく。秋学期では過去問を使って実際に模擬試験を行うなど試験対策をし、できるだけ試験問題に慣れるようにしていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

様々な韓国語表現を学習することでコミュニケーション能力を高め、より明確な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

韓国ビジネスコミュニケーション II では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。具体的には、ハングル能力検定試験 4 級の試験対策に取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、来年度に行われるハングル能力検定試験 4 級を目指し、その実力をつけることが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

復習に必要な時間は 2 時間以上。前日に学んだ内容をちゃんと覚えているかどうか毎回テストを行うのでしっかり復習してくること。

■授業の概要

- 第 1 講 オリエンテーション
- 第 2 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (7) ・文法 [-고 있는 중이다]
- 第 3 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (8) ・文法 [-ㄴ 적이 있다]
- 第 4 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (8) ・文法 [-주세요]
- 第 5 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (9) ・文法 [-지 마세요]
- 第 6 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (10) ・文法 [-니까]
- 第 7 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (11) ・文法 [-야 돼요]
- 第 8 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (12) ・文法 [-겠습니다]
- 第 9 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (13) ・文法 [-르 수 있다]
- 第 10 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (14) ・文法 [-버렸다]
- 第 11 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (15) ・文法 [-지요]
- 第 12 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (16) ・文法 [-러]
- 第 13 講 ・意味を考えながら覚える韓国語単語 4 級 (17) ・文法 [-보여요]
- 第 14 講 模擬試験 (聞き取り・筆記) と解説
- 第 15 講 映画鑑賞・面談・願書作成

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 平常点と小テストの合計が 90 点以上であること。
- 評価 A (89~80 点) : 平常点と小テストの合計が 89 点から 80 点の間であること。
- 評価 B (79~70 点) : 平常点と小テストの合計が 79 点から 70 点の間であること。
- 評価 C (69~60 点) : 平常点と小テストの合計が 69 点から 60 点の間であること。
- 評価 F (59 点以下) : 平常点と小テストの合計が 59 点以下であること。

■評価方法

平常点 50% 小テスト 50%

■留意点

韓国語 I・II と韓国ビジネスコミュニケーション I を履修していなくてもハングルが読めて初級レベルの単語や文法表現を知っていれば受講できる。

科目名 業界研究 I (Industry Research I)**サブタイトル** 産業界・経済界の構造を知る**担当教員** 浜田 正幸**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

世界にはいろいろな産業・ビジネスがあり、経済や政治が回っている。どれひとつとして不要な業界などなく、その業界がなくなれば、現在の経済社会は停止してしまう。ならばどのような産業や業界があり、それが社会の中でどのような役割を担っているのかを知る必要がある。それを自ら探索し、分析できるようになることが、本講の目的である。興味・関心のある業界を調査し、将来の就職につながることを期待する。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／グローバルビジネス

■到達目標

どのような業界であっても、どのような新規のビジネスや企業であっても、それを自ら、グローバルな視点で捉え、分析できることが目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

産業界の構造を自ら調べる能力を習得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] ペアワーク／グループワーク

業界・企業情報にアクセスし、ペアで相互に分析・確認する。つまり自ら調べ、ペアに対して口頭でアウトプットする。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

自ら担当する業界について深掘りし、何を聞かれても答えられるよう準備する (1.5h)。各回で取り上げる業界についてリサーチし、わからないこと（質問）を明確にし、のちにそれらを整理する (1.5h)。

■授業の概要

第1講 本講の内容と進め方とルールの説明。業界地図の全体像を俯瞰する。

第2講 総合会社について研究する。

第3講 金融業界の研究

第4講 不動産業界の研究

第5講 建設業界の研究

第6講 ホテル・旅行業界の研究

第7講 エネルギー業界の研究

第8講 化粧品・トイレタリー業界の研究

第9講 運輸・物流業界の研究

第10講 食品業界の研究

第11講 エンターテインメント業界の研究

第12講 アパレル業界の研究

第13講 IT サービス・クラウド業界の研究

第14講 広告業界の研究

第15講 達成度確認テスト

■フィードバックの要領

毎回の課題に対するフィードバックを次の授業で解説する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 毎回の課題の点数と達成度確認テストの点数 90~100 点

評価 A (89~80 点) : 毎回の課題の点数と達成度確認テストの点数 80~89 点

評価 B (79~70 点) : 毎回の課題の点数と達成度確認テストの点数 70~79 点

評価 C (69~60 点) : 毎回の課題の点数と達成度確認テストの点数 60~69 点

評価 F (59 点以下) : 毎回の課題の点数と達成度確認テストの点数 59 点以下。

■評価方法

毎回の課題点数 75%。達成度確認テスト 25%

■留意点

毎回 PC 必須。ペアワーク必須。スマホ厳禁。私語厳禁。遅刻厳禁。以上遵守できないものは受講できない。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 金融論 (Finance)**サブタイトル** 金融論 (Finance)**担当教員** 下井 直毅**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

この講義では、金融の理論と仕組みの基礎知識について学ぶ。また、産業社会にとっても重要である金融の役割を理解することを目的としている。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

日本の金融の現状と課題についての基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることができる。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

金融論では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。具体的には練習問題等を解くというものだが、こうした活動に主体的・能動的に取り組むことで、授業内容をより一層理解し、興味関心を高めることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。毎授業後には、授業内で配布された資料に再び目を通し、理解の定着をはかること。これらの準備には、1.5時間以上の取り組みが必要である。

■授業の概要

- 第1講 金融の基本的な機能—金融の基本的な機能を理解する
- 第2講 金融の基本的な機能—金融とは何か、金融の役割とは何か
- 第3講 企業と政府のファイナンス—企業や政府がどう資金調達をするのか
- 第4講 日本の金融機関—金融機関には何があるのか
- 第5講 金融市場—金融市場の分類
- 第6講 貨幣とインフレ—貨幣とは何か、インフレ・デフレの問題点とは何か
- 第7講 金融政策の運営—金融政策は誰が担っているのか
- 第8講 債券市場と金利—債券には何があるのか、債券価格と金利の関係はどういうものか
- 第9講 株式市場と株価—株式市場はどこにあるのか、上場することのメリットとデメリット
- 第10講 金融危機の発生—金融危機の発生について理解する
- 第11講 株価の決定—株価はどのように決まるのか
- 第12講 国際金融—為替レートの基本知識、国境を越える金融取引
- 第13講 金融派生商品とリスク・ヘッジ—金融派生商品とリスク・ヘッジについて理解する
- 第14講 講義の復習—金融の基本的な機能や金融市場について復習する
- 第15講 授業内試験

■フィードバックの要領

授業内試験に関して、希望者に対してはコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をほぼすべて修得できている。
- 評価 A (89~80 点) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をかなり修得できている。
- 評価 B (79~70 点) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識を十分に修得できている。
- 評価 C (69~60 点) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をある程度修得できている。
- 評価 F (59 点以下) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識を修得できていない。

■評価方法

授業の平常点 (30%)、試験 (70%)。合計 100%。

■留意点

事前学修として、オープンな教育リソースとして、JMOOC を受講することを薦める (無料)。詳しくは、「JMOOC 受講案内」 (<https://www.jmooc.jp/about/>) を確認すること。これは、1 週間が基本的な学習の単位となっており、1 週間で見るべき講義が 5 本から 10 本公開される。各講義は 10 分程度の短い動画で構成されている。経済にまつわるものであれば何でもかまわない。実際に開講されている講座は、上記の HP サイトで確認できる。

科目名 経営シミュレーションゲーム (Management Simulation Game)**サブタイトル** 経営シミュレーションゲームを通じたアクティブラーニング経営体験プログラム**担当教員** 出原、落合、木村、小林 (英) **対象学年** 2年生以上 **区分** 秋学期**■授業目的**

多摩大学式経済経営シミュレーションゲームを通して企業経営の基本を理解する。ゲームでは、ゲーム上の仮定の市場で、企業経営を経験する。講義では、ゲームをベースに、経営の基本および企業経営の計数的理解を深めることを目指す。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／ビジネス ICT

■到達目標

企業経営の基本を理解すること。企業経営の計数的理解を深めること。コンピュータを使用しての学習経験を深めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

本講義では、シミュレーションゲームを通じた会計の実践的な知識の獲得と戦略決定を通じて、企業経営の基本を理解し、実践できるようにする。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] その他：シミュレーション

シミュレーションゲームへの参加（製品投入、購買行動）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義外の時間で、シミュレータは継続的に動作する。常に市場動向に気を配り、競合製品の価格や消費者の動きに対して対応し、それを記録すること（15分×6日）。最終レポートに、この記録が重要である。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション・経営シミュレーションゲームの説明
- 第2講 お試し1期
- 第3講 お試し2期
- 第4講 お試し3期
- 第5講 お試し4期
- 第6講 お試し5期・比率で考える(1) 利益率
- 第7講 ゲーム第1期・市場調査
- 第8講 ゲーム第2期・目標利益からの価格決定
- 第9講 ゲーム第3期・比率で考える(2) 対前期比
- 第10講 ゲーム第4期・表計算ソフトの活用
- 第11講 ゲーム第5期・グラフで伝えよう(1) グラフの選択
- 第12講 ゲーム第6期・グラフ演習
- 第13講 ゲーム第7期・グラフで伝えよう(2) 円グラフ・帯グラフ・積み上げ棒グラフ
- 第14講 ゲーム第8期・機会損失
- 第15講 講義内でのテスト、理解のみきわめを行う。

■フィードバックの要領

課題や試験等に対するフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で 90 点以上
 評価 A (89~80 点) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で 80 点以上
 評価 B (79~70 点) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で 70 点以上
 評価 C (69~60 点) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で 60 点以上
 評価 F (59 点以下) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件に達しない。または、数値評価で 60 点未満。

■評価方法

(1) 平常点 (講義中の課題への取り組み、ゲームへの参加度等) 35% (2) レポート 15% (3) 最終試験 50%

■留意点

初回講義出席者の中から、教室定員にもとづいて履修許可者を選抜する。講義開始後、受講生の理解や興味・関心に応じて、講義内容を変更する場合がある。変更も含む講義内容や進行予定の詳細は、講義開始後指示する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営学概論 (Introduction to Management)**サブタイトル** 経営とは何か、企業とは何か、戦略と組織を理解する (経営学の基礎・中級レベル)**担当教員** 野坂 美穂**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

日頃の私達の生活と企業は、密接な関わりがある。本講義では、経営学とは何か、企業とは何かを理解し、「経営学」という学問を身近に感じ、関心を高めてもらうことを目的とする。経営学という学問の二本柱である「戦略論」と「組織論」の導入科目と位置づけ、企業はどのような活動を行い、どのように企業のパフォーマンスを高めるのか、その全体像を理解する。より理解を深めるために、企業の事例紹介や学生自らが理論やフレームワークに基づき、ケース分析を行う。

■科目分類

顧客理解／ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント

■到達目標

①「グローバル社会に対する理解」：企業の全体的なイメージを持つとともに、国内外で活動を行う企業の実態を理解する。②「社会の発展に貢献する力」：様々な企業の特徴や強みおよび課題を自分なりに見つけ出すこと。③「役割分担により組織目標の達成に貢献する力」：企業のケースについて、自分の言葉で説明することができ、プレゼンテーション能力を高めること。資格：経営学検定

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP2: 企業内での様々な問題がなぜ生じるのかについて、因果関係（原因と結果）を明らかにし、理論を用いて説明することができる。
DP1: 経営学の基本的な知識を身につける

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク

経営学概論では、個人ワークを中心に、習得した知識や理論（フレームワークを含む）を用いて、自身の関心のある企業を対象に分析を行う。これにより、習得した知識及び理論（フレームワークを含む）を活用できる、応用できるという実践的な能力を身につけることができる。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の講義では、レジュメまたはワークシート等を配布します。そのワークシートを埋める形で、予習・復習を行ってください。(1.5 時間) 予習復習について提出を求める場合、成績評価に反映します。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション：経営学とは、企業とは、企業の使命、外部環境分析（PEST 分析）
- 第2講 戦略とは何か：経営理念、経営戦略とは（定義）
- 第3講 産業についての理解、企業を取り巻く環境についての理解（ファイブ・フォース分析）
- 第4講 内部環境分析：戦略グループとは、バリューチェーン分析とは
- 第5講 内部・外部環境分析：SWOT 分析、3C 分析とは何か
- 第6講 内部環境分析：VRIO 分析、戦略論の二つの考え方の違い、全社戦略（企業戦略）とは
- 第7講 多角化の手法：外部資源を調達する M & A と提携
- 第8講 株主・株式会社とは何か、企業は誰のものか（コーポレートガバナンス）
- 第9講 コーポレートガバナンスとは
- 第10講 ビジネスモデルとは
- 第11講 昨今、我々の日常で身近なサブスクリプションの収益モデルを経営学的視点から分析する
- 第12講 マクロ組織論：組織デザインと組織構造
- 第13講 組織とは何か：組織のインセンティブシステム
- 第14講 ミクロ組織論：モチベーション理論、コミットメント等
- 第15講 期末テストの実施

■フィードバックの要領

課題に対する評価を返却する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：戦略と組織の全体像を的確に捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。
 評価 A (89～80 点)：戦略と組織の全体像を捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。
 評価 B (79～70 点)：戦略と組織の全体像をある程度捉えることができ、自分の言葉で説明することができる。
 評価 C (69～60 点)：戦略と組織の全体像をある程度捉えているが、自分の言葉での説明が不十分。
 評価 F (59 点以下)：戦略と組織の全体像をほとんど捉えておらず、自分の言葉で説明もできていない。

■評価方法

平常点 50%（毎回の小テストまたは小課題の合計点）、レポート 20%、テスト 30%

■留意点

なし

科目名 経営思想史 (History of Management Thought)**サブタイトル** 江戸時代から戦後日本社会に至るまでの日本のマネジメント**担当教員** 高橋 恭寛**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

現代社会における経営思想は、マネジメントにせよ戦略論にせよイノベーションにせよ、グローバルビジネスの時代において、様々な角度から語られており、それ自体経営学として体系的に学ぶものだと思う。ただ、それらを教科書的に学ぶだけでは机上の空論で終わってしまう。日本における経済活動がどのようなものであり、ビジネス環境がどのようなものだったのかを理解しなければ、知識も実地で活用する効果が薄まってしまいます。そこで本講義では、江戸時代から近現代に至るまでの日本の経済世界や経営思想を唱えた人物を中心に学んでいく。昔の経営理念とはいえ、その特色を知ること、どこかしら現代のビジネス環境にも引き継がれている文化的土壌が見えてくることもあるだろう。そのような日本の経営に関する風土の伝統を知ることが出来れば、ビジネスマネジメントについてより深い理解を得られるのだ。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

商活動のハンドルの操作に関する日本独特の多彩な考え方があったことを理解する。それによって、現代の様々な経営思想に関わる知識が日本の風土でどのように活かせるのかを自分なりに考えることが出来るようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネス環境、そしてビジネスマネジメントへの知識を深めることになり、今後実社会で自らが活動する際、自らが置かれた環境の背景を理解したうえで積極的に行動する高い志を養う

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

経営思想史では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。具体的には、テストと授業内課題に取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、より深く授業内容を理解することが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

1.5時間。各講義で取り上げる人物やテーマについて、授業最初に内容確認テストを実施する予定なので、前回の授業の復習をしていくこと。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクションー経営についての考えを、歴史的に見ることは出来るのか。
- 第2講 江戸時代の武家社会には経営感覚がなかったのか
- 第3講 江戸時代の経営コンサルー荻生祖徠と海保青陵ー
- 第4講 石田梅岩と通俗道徳
- 第5講 江戸時代の商家の経営理念
- 第6講 二宮尊徳の思想
- 第7講 幕末維新期にかけての組織改革
- 第8講 福沢諭吉の実業論
- 第9講 渋沢栄一と実業界
- 第10講 三井と明治の企業運営
- 第11講 20世紀の近代工業と企業運営
- 第12講 昭和恐慌と日本型経営
- 第13講 財閥解体と戦後復興
- 第14講 現代に目を向けるーマックスウェーバー・ゾンバルト・ドラッカーなどー
- 第15講 まとめー前近代～近代の日本型経営思想の着眼点おさらいー

■フィードバックの要領

授業中の前回の復習テストは、その場で点数が出て、フィードバックを行う

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 評価点 100 点のうち 90 点以上
- 評価 A (89~80 点) : 評価点 100 点のうち 89 点~80 点
- 評価 B (79~70 点) : 評価点 100 点のうち 79 点~70 点
- 評価 C (69~60 点) : 評価点 100 点のうち 69 点~60 点
- 評価 F (59 点以下) : 評価点 100 点のうち 59 点以下

■評価方法

評価点 100 点は、授業内試験 (40%)、各回の授業内課題とテストによる授業の理解度をみる平常点 (60%) の合計点で換算。各回の授業内課題は、全て授業時間内に出さなければ、平常点として加点しない。

■留意点

授業中における制限事項：(1) 授業中の食事は厳禁。(2) 20 分以上の遅刻、不要不急の途中退出は認めない。(3) 不必要な私語は控えること。(4) 座席指定に対して無断で席の移動は禁止。以上の違反に対し教員による注意を受けても是正されない場合、退室を求められることがある。また、授業単位の取得に対してペナルティを付けることがある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営情報論 I (Management Information Systems I)**サブタイトル** 経営情報の基本を学ぶ**担当教員** 菅沼、新西**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

経営情報学科の共通リテラシーの内容として、論理的思考とプログラミングの基本的事項、および、企業・社会が何を目的として情報システムを活用するのか、どんな情報システムを活用しているのか、経営情報システムはどのように発展してきたのか、今後の情報社会がどのようになっていくのかを理解する。

■科目分類

顧客理解/ビジネスマネジメント/ビジネス ICT

■到達目標

①企業や社会が、何を目的として情報システムを利用しているのかを、具体的に理解する。②企業や社会が目的達成のために利用している情報システムのポイント・核心を知る。その結果、ICTに関する基礎的な学力、課題発見力等を修得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

経営情報学を事例を知り理解することにより、経営情報の学びの関心を高め、より深く知る意欲を喚起する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク

経営情報論 I では、アクティブラーニングとして自ら内容を考えた上でのプログラム作成や、ミニッツペーパー提出とフィードバックを行う。単に指定された演習課題をこなすのではなく、立案からインプリメンテーションまでを実施する過程や、教員との双方向コミュニケーションを通じて、情報技術を活用して主体的に産業社会の問題解決に取り組む力を身につけていくことが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする (1.5 時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 イン트로ダクション
- 第2講 アルゴリズム
- 第3講 アルゴリズム 2
- 第4講 プログラミング 1 Scratch の ID 登録と基本操作
- 第5講 プログラミング 2 おにごっこゲームの作成
- 第6講 プログラミング 3 スターキャッチ・ゲームの作成
- 第7講 プログラミング 4 自分で工夫して作ってみる
- 第8講 情報システムの事例
- 第9講 経営情報システムの歴史
- 第10講 IT エンジニアの仕事
- 第11講 IT 系キャリアと通信システム
- 第12講 人工知能
- 第13講 デジタルトランスフォーメーション
- 第14講 授業のまとめと振り返り
- 第15講 期末レポート提出

■フィードバックの要領

ミニッツペーパーもしくは T/F テストの講評と、質問への回答を翌回講義で行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 90 点以上
- 評価 A (89~80 点) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79~70 点) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69~60 点) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 60 点未満

■評価方法

授業貢献点 40%、プログラミング課題 20%、期末レポート 40%。プログラミング基礎を既に習得していると考えられる者は、自分のスキル説明文書提出と第 7 講課題の提出を以て第 4~7 講の出席の代替とすることを認める。

■留意点

①授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業での受講態度や提出物の品質を評価し累積する (上限 40 点)。受講態度が悪い場合はマイナスとなり、欠席以下の評価となる場合がある。プログラミング課題は第 4~7 講の成果を Scratch 上で公開することを評価する。②講義内容は、学生からのコメントや要望、関連項目の最新動向や時事問題を踏まえて変更することがある。

科目名 経営情報論 II (Management Information Systems II)**サブタイトル** 最新の情報技術サービスの理解**担当教員** 出原、菅沼**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

企業活動を効果的に行うには顧客嗜好や社会動向をタイムリーかつ的確につかむ必要がある。IoT、Web システム、ビッグデータ、人工知能、シミュレーションなどの技術の発達によって、人間の行動や感情、意見を企業活動に活かすことが可能となってきた。実例を通じて、これらの技術と応用について学ぶ。また、思考を整理し伝達するための手法として、さまざまな図化技術をまなび、局面によって適切に使い分けられるようになる。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

最先端の情報処理技術について学び、次の4点を理解する。(1) 最新技術の動向を理解する。(2) 活用方法を理解する。(3) 社会全体の変化を理解する。(4) 企業と顧客の関係について理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

経営情報学科の学生として必要な知識を広く身につけ、専門教育の基礎とする。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク

各回で課題提出

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義外の時間で、最先端の情報技術の動向を継続的に捉えることが求められる。情報技術サイトの巡回 (15分*4回)、講義で説明した技術や手法の復習 (30分) 程度の講義外の学習を求める。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 図化技術 (1) フローチャート
- 第3講 図化技術 (2) 状態遷移図
- 第4講 図化技術 (3) その他の UML
- 第5講 図化技術 (4) 発想法と図化技術
- 第6講 センサ・インタフェース
- 第7講 IoT とビッグデータ
- 第8講 人工知能
- 第9講 マルチエージェントシミュレーション
- 第10講 複雑系
- 第11講 スポーツと情報技術
- 第12講 情報セキュリティ
- 第13講 ウェブサービスの展開
- 第14講 ICT ビジネス最前線
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

提出されたレポートに対して、コメントの形でフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 総合評価で 90 点以上
- 評価 A (89~80 点) : 総合評価で 80 点以上
- 評価 B (79~70 点) : 総合評価で 70 点以上
- 評価 C (69~60 点) : 総合評価で 60 点以上
- 評価 F (59 点以下) : 総合評価 59 点以下

■評価方法

講義中の理解度確認テストおよびレポート課題 (60%)、期末レポート (40%)

■留意点

・先端事例を紹介するため、各回の講義内容・順序は、適宜変更する場合がある。・パソコンを持参しないものの受講を認めない場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営分析 (Business Analysis)**サブタイトル** 企業および事業に関する情報の分析**担当教員** 落合 孝彦**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

この授業は、財務諸表を用いた安全性・収益性・生産性等の分析をコアとする財務分析に加え、環境変化に適応するために企業が採った経営戦略・業務改善手法が業績に与える影響についても説明する。よって授業の前半は財務分析の説明が中心となり、後半については事例に基づく財務分析の応用、現実世界における企業の取った経営戦略・手法が業績に与えた影響についての説明が中心となる。

■科目分類

ビジネス環境理解/ビジネスマネジメント

■到達目標

1. 財務諸表分析における初歩的な分析手法を理解する。
2. 財務諸表以外の基礎的な企業データ・事業データを読む力を備える。
3. PLAN (戦略) や DO (組織づくり) が業績 (目標達成度) に影響を及ぼすことを理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP1: 財務分析の基礎的な知識と手法を理解する。

DP2: 企業の戦略がどのようなプロセスを経て業績に影響を与えるかについて深考してもらう。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

この授業は講義形式であるため、アクティブ・ラーニングの活動形態は個人ワークとなる。具体的には毎回配布されるワークシートへの記入、練習問題 (4 択問題・正誤テスト) の解答作業を行ってもらい、基礎知識の習得を促すことが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習: 授業前に指定された箇所の内容確認等を教科書等で行う (1.5h)

復習: 事後の学習ポイントを確認/理解が不十分な箇所の抽出と解消 (1.5h)

■授業の概要

- 第1講 経営分析とは何か
- 第2講 決算書の仕組みと見方
- 第3講 貸借対照表 (B/S) を用いた安全性分析
- 第4講 損益計算書 (P/L) を用いた収益性分析
- 第5講 貸借対照表 (B/S) と損益計算書 (P/L) を用いた資産 (資本) 収益性の分析
- 第6講 キャッシュフロー計算書 (C/S) を用いた財務分析
- 第7講 損益分岐点分析の意義と役割
- 第8講 自己資本利益率 (ROE) を用いた収益性分析
- 第9講 企業業績 (経営成績) と株価
- 第10講 「セグメント情報」と「一人当たり」分析
- 第11講 同業他社の財務分析～全社レベルの安全性・収益性・生産性比較～
- 第12講 同業他社の財務分析～セグメント情報に基づく事業・戦略分析～
- 第13講 財務諸表から会社の特徴をつかむ
- 第14講 環境変化と経営分析
- 第15講 授業内容の総復習

■フィードバックの要領

復習・練習問題の正誤確認は授業中に行う。レポート課題等については別途連絡する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上): 到達目標すべてについての高い理解度。

評価 A (89~80 点): 到達目標ごとにムラはあるものの、平均して高い理解。

評価 B (79~70 点): 到達目標について、平均的な理解度。

評価 C (69~60 点): 到達目標すべてについて要求される、最低限度の理解度。

評価 F (59 点以下): 到達目標すべてについて、要求される理解度がない。

■評価方法

期末試験: 70% 課題レポート: 20% 授業内課題: 10%

■留意点

授業中の食事、授業進行を妨げる行為に対しては相応に対処する。

科目名 原価計算 (Cost Accounting)**サブタイトル** 管理会計入門**担当教員** 木村 太一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

製品を製造する場合、その製品がいくらで作られたのかを把握することは、経営を行う上で不可欠である。本講義では、どのような計算を行えば、製品がいくらで作られたのかを正確に計算できるのかを考える。また、製品がいくらで作られたのかに関する情報が、どのような形で経営に活かされているのかも考える。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

①大量生産を前提とする総合原価計算の方法を理解する。②原価計算の結果を経営に活かす、管理会計の考え方に触れる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

原価計算手法に関しての理解と、それを経営の場面でどのように活かすかを考える。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

実践上の論点や実例を紹介することで、学んだ知識が社会でどのように活かされているのかを理解することが期待される。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習よりも復習に重きを置いて、その回に用いられたテキストやレジュメの数値例で何度も計算をすること（各 1.5 時間）。

■授業の概要

- 第1講 原価計算とは / 原価計算の流れ①—各費目の集計
- 第2講 原価計算の流れ②—仕掛品、製品原価、売上原価の算定
- 第3講 費目別計算①—材料費の計算
- 第4講 費目別計算②—労務費の計算
- 第5講 費目別計算③—経費の計算
- 第6講 総合原価計算
- 第7講 実際 / 全部原価計算のまとめ
- 第8講 標準原価計算と原価差異分析①—直接材料費の分析
- 第9講 標準原価計算と原価差異分析②—直接労務費の分析
- 第10講 標準原価計算と原価差異分析③—製造間接費の分析
- 第11講 標準原価計算のまとめ
- 第12講 直接原価計算と CVP 分析①—変動固定分類
- 第13講 直接原価計算と CVP 分析②—短期利益計画
- 第14講 直接原価計算と CVP 分析③—CVP 分析
- 第15講 これまでのまとめ

■フィードバックの要領

練習問題を 3 週に 1 回ほどのペースで解き、それを基にした指導を行なう。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業内試験と課題の総合計のうち 90%以上を獲得した場合に付与する。
- 評価 A (89~80 点) : 授業内試験と課題の総合計のうち 80%以上 90%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 B (79~70 点) : 授業内試験と課題の総合計のうち 70%以上 80%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 C (69~60 点) : 授業内試験と課題の総合計のうち 60%以上 70%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 F (59 点以下) : 授業内試験と課題の総合計のうち獲得したのが 60%未満であった場合に付与する。

■評価方法

授業内試験 90%、課題 10%

■留意点

電卓を使用するので各自購入のこと。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 国際ビジネス論 (Global Business)**サブタイトル** ビジネスとは時代のニーズに対する産業的解決策**担当教員** 中湊 晃**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

「ビジネスとは時代のニーズ（ビジネス環境）に対する産業的解決策」という基本的な考え方に立ち、国際ビジネスが直面する重要なビジネス環境と、その解決策である国際ビジネスの実体を学ぶ。更に今後予想される環境変化に対し、企業はどのようなビジネスに取り組むべきかを、一人一人が考察しレポートを作成し、更にチームで議論、発表を行う双方向の授業である。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／グローバルビジネス

■到達目標

① 国際ビジネスが直面しているビジネス環境を理解し、同環境に対する産業的解決策としての国際ビジネスの最前線の事例を習得する。② ビジネス環境の変化に対し自らがビジネスを構想できる力を養う。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

最前線で起きているビジネス環境とその解決策であるビジネスの取り組み事例を習得し、更に自らが国際ビジネス構想に取り組むことで、将来、国際ビジネスの場で活躍するための意欲と能力を滋養する。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

受講生は「直面しているビジネス環境に対しどのようなビジネスで解決を図るか」につき課題レポートを2本纏める。その意見を念頭に「取り組むべき国際ビジネス」のプレゼンテーションを纏め、授業で発表する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

予習：課題レポート2本提出（第7回後、第10回後）、協働プレゼンテーションの準備（調査、考察、協議、プレゼンペーパー作成、発表練習等）

復習：授業資料の読み込み、疑問点の解消（各1.5時間）

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション
- 第2講 総合商社マンとしての世界地図—国際ビジネスの現場—
- 第3講 世界経済の構造—国際ビジネスの前提となるもの—
- 第4講 国際ビジネスが直面する課題 (1) ウィズコロナ
- 第5講 国際ビジネスが直面する課題 (2) 米中対立
- 第6講 国際ビジネスが直面する課題 (3) 気候変動問題①
- 第7講 国際ビジネスが直面する課題 (3) 気候変動問題②
- 第8講 国際ビジネスが直面する課題 (4) アジアダイナミズム
- 第9講 国際ビジネスが直面する課題 (5) 高齢社会
- 第10講 国際ビジネスが直面する課題 (6) DX
- 第11講 SDGsとビジネスポテンシャル
- 第12講 今、取り組むべき国際ビジネス（グループ発表）①
- 第13講 今、取り組むべき国際ビジネス（グループ発表）②
- 第14講 世界踏破で発見した新たな国際ビジネス機会
- 第15講 授業の纏めと振り返り

■フィードバックの要領

ミニッツペーパーに記入された質問・意見への回答。課題レポートへのコメント記入。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：平常点、課題レポートの合計が90点以上（完全に理解している）
- 評価 A (89～80点)：平常点、課題レポートの合計が80点以上90点未満（深く理解している）
- 評価 B (79～70点)：平常点、課題レポートの合計が70点以上80点未満（平均的な理解をしている）
- 評価 C (69～60点)：平常点、課題レポートの合計が60点以上70点未満（最低限に理解している）
- 評価 F (59点以下)：平常点、課題レポートの合計が60点未満（理解が十分でない）

■評価方法

平常点（ミニッツ・ペーパー（毎回）、協働プレゼンテーション（第12回、第13回で実施）、授業貢献他）50%、課題レポート2本（第7回後提出、第10回後提出）50%

■留意点

科目名 国際関係論 (International Relations)**サブタイトル** 国際関係はどのような構造なのか**担当教員** 小林 昭菜**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

グローバル化が進み益々国の境なしに経済活動ができる世の中になったが、国際的な舞台で経済活動を行うにはカントリー・リスクはつきものである。本講義はカントリー・リスクとはなにか？どのようなカントリー・リスクがあるのかについて学習する。

■科目分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

国際ビジネスに対するリスク、不可抗力の危険性を理解し、社会人としてそのような世界に飛び込むための知識をつけていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

国際関係がどのようなスキームで動いているのか、国際関係とは何かを理解し、グローバル化時代を生き抜くための教養をつける。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] その他：フィードバック

リアクションペーパーへのフィードバック

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

NHKの経済ニュース、日本経済新聞やその他の新聞を毎日読む習慣をつけること。授業で課す課題を論理的に考察しレポートとして提出すること。(各1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 インTROダクション
- 第2講 カントリー・リスクとはなにか
- 第3講 国際関係とはなにか
- 第4講 冷戦その1
- 第5講 冷戦その2
- 第6講 冷戦その3
- 第7講 リアリズム
- 第8講 リベラリズム
- 第9講 EU
- 第10講 人権と国際規範
- 第11講 近代化論と世界システム論
- 第12講 国際関係の中で経済を問直す
- 第13講 国際関係の中で政治を問直す
- 第14講 エネルギー地政学
- 第15講 これまでの講義のまとめ

■フィードバックの要領

毎回の授業で課す課題や授業のコメントに対して毎週フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が非常に良い。)、試験の出来 9割以上。
- 評価 A (89～80点)：平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が良い。)、試験の出来 8割。
- 評価 B (79～70点)：平常点 (毎週の課題の出来や学習態度がまあ良い。)、試験の出来 6～7割。
- 評価 C (69～60点)：平常点 (毎週の課題の出来や学習態度は良い。)、試験の出来 5割。
- 評価 F (59点以下)：平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が悪い。)、試験の出来 4割以下。

■評価方法

授業内で課す課題の出来：40%、授業への積極的態度や発言：25%、期末試験：35%

■留意点

講義は国際関係論に軸を置いたものである。初回と2回目の講義は講義全体の説明をするため履修希望者は必ず出席すること。欠席の場合は履修許可を出さない場合がある。やる気のある学生を求める。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 国際経済学 (Global Economy)**サブタイトル** 国際経済 (International Economics)**担当教員** 下井 直毅**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

この講義では、最前線事例を紹介しつつ、世界潮流としての国際経済をめぐる問題をとりあげる。国際経済は日本経済に大きな影響を及ぼしている。グローバル化という言葉をよく耳にするが、世界の経済状況がめまぐるしく変わる中で、その動きを理解することはとても大切である。日頃、目や耳にしている出来事や現象を通して、日本や世界を取り巻く産業社会における経済動向の仕組みやメカニズムについて学ぶ。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

世界経済の現状と課題についての基本的な知識の修得をめざす。具体的には、世界経済の貿易状況の把握や、基本的な貿易理論や為替理論に対する理解を深める。また、国際収支表を通じて内外のモノやおカネの流れをつかんだり、自由貿易の潮流に対する理解を深める。最終的には、授業内試験を通して理解の程度をはかる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な知識を修得し、その理解を深め、様々な課題の解決に向けたプロセスを明確にすることができると。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

国際経済学では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。具体的には練習問題等を解くというものだが、こうした活動に主体的・能動的に取り組むことで、授業内容をより一層理解し、興味関心を高めることが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。毎授業後には、授業内で配布された資料に再び目を通し、理解の定着をはかること。これらの準備には、1.5時間以上の取り組みが必要である。

■授業の概要

- 第1講 国際化の中の日本 日本経済の状況を概観する
- 第2講 戦後の国際経済体制の流れについて 戦後の国際経済体制の流れをおさえる
- 第3講 貿易の基本的メカニズムについて 貿易理論の用語を理解する
- 第4講 貿易の基本的メカニズムについて 貿易理論の流れを理解する
- 第5講 保護貿易や自由貿易の功罪 保護貿易や自由貿易とは何かを理解する
- 第6講 外国為替について 外国為替レートとはどういうものかを理解する
- 第7講 為替レートの決定理論 短期の為替レートの決定理論について理解する
- 第8講 為替レートの決定理論 長期の為替レートの決定理論について理解する
- 第9講 為替相場制度について 様々な為替相場制度について理解する
- 第10講 国際収支表の見方 経常収支とは何かを理解する
- 第11講 国際収支表の見方 金融収支とは何かを理解する
- 第12講 貿易摩擦について 貿易摩擦の歴史を振り返る
- 第13講 GATT/WTOの原則と例外について GATT/WTOの原則と例外について理解する
- 第14講 開放経済における経済政策について理解する
- 第15講 授業内試験を行う

■フィードバックの要領

授業内試験に関して、希望者に対してはコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識をほぼすべて修得できている。
- 評価 A (89~80 点) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識をかなり修得できている。
- 評価 B (79~70 点) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識を十分に修得できている。
- 評価 C (69~60 点) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識をある程度修得できている。
- 評価 F (59 点以下) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識を修得できていない。

■評価方法

授業の平常点 (30%)、試験 (70%)。合計 100%。

■留意点

事前学習として、オープンな教育リソースとして、JMOC を受講することを薦める (無料)。詳しくは、「JMOC 受講案内」 (<https://www.jmoooc.jp/about/>) を確認すること。これは、1 週間が基本的な学習の単位となっており、1 週間で見るべき講義が 5 本から 10 本公開される。各講義は 10 分程度の短い動画で構成されている。経済にまつわるものであれば何でもかまわない。実際に開講されている講座は、上記の HP サイトで確認できる。

科目名 財務会計 (Principle of Accounting)**サブタイトル** 会計学の基本問題**担当教員** 木村 太一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

行なわれる経済活動が複雑になっていくにつれて、一つの取引や事象に対して複数の会計処理方法が考えられるようになる。初級簿記や中級簿記でもそうした取引や事象が存在すること、だからこそルール化が必要であることに言及したが、本講義では基本的な会計処理がマスターされていることを前提に、そうした複雑な取引や事象に対する会計処理を検討していく。①複数の会計処理方法が考えられる場合、それぞれの会計処理が帰結される前提としてどのような考え方があるのか、②複数想定される会計処理から特定の会計処理をルールとして選択する際に、どのような考え方に基づいて当該選択が為されるのか、③どのような者が、特定の会計処理がルール化されることにより影響を受け、ルール化に影響を与えるのか、といったことに焦点を当てる。こうした問題意識を基に、高度な会計処理を題材にしながら、現代会計の「存在の理屈」を思量する。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

①会計処理の対象となる取引に対する理解を深める。②会計処理が帰結される際に前提となる会計の基本的な考え方に対する理解を深める。③会計を巡る種々の利害対立と、その影響に対する理解を深める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

高度な会計処理と、それらの会計処理の背後にある考え方を理解する。また、ルール化に伴う種々の論点を整理し、様々な考え方に触れる。こうしたことを通じて、現代会計の「存在の理屈」について思量する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

多くの新聞記事を取り上げ、これを通じて、受講生には、講義の内容が現実社会でどのように活かされているのかを理解する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

新たに学ぶ会計処理に関しては、とにかく復習に力を注いでほしい。新たに学んだ会計処理に関する種々の論点を検討する段階では、事前に資料を配布するのでそれを読んでから講義に臨むこと。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 会計学の基礎
- 第2講 合併①—現金対価による取得
- 第3講 合併②—株式対価による合併
- 第4講 連結会計①—連結の基礎
- 第5講 連結会計②—支配獲得時の会計処理
- 第6講 連結会計—支配獲得後の会計処理
- 第7講 のれん償却に関する議論
- 第8講 現金主義と発生主義
- 第9講 実現主義と対応原則
- 第10講 減損会計①—会計処理
- 第11講 減損会計②—会計処理の根拠
- 第12講 景気変動増幅効果と会計への公的機関の介入
- 第13講 会計基準
- 第14講 会計基準設定に対する利害関係者の介入
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

練習問題や課題、授業中の発言を加味して理解度を測り、講義を進める。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業内試験と課題の総合計のうち 90%以上を獲得した場合に付与する。
- 評価 A (89~80 点) : 授業内試験と課題の総合計のうち 80%以上 90%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 B (79~70 点) : 授業内試験と課題の総合計のうち 70%以上 80%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 C (69~60 点) : 授業内試験と課題の総合計のうち 60%以上 70%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 F (59 点以下) : 授業内試験と課題の総合計のうち獲得したのが 60%未満であった場合に付与する。

■評価方法

課題 20%、授業内試験 80%

■留意点

初級簿記および中級簿記を履修し、かつ、これらの科目で学んだことをきちんと理解していないと厳しい内容である。電卓を使用するので各自購入のこと。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 産業社会特講 (ビジョン・マネジメント論 2022 春) (Special Lecture on Industry Society (Vision Management Theory 2022 Spring))

サブタイトル 一職業の学びを「稼ぐ力」へ変える！【荻阪式 メソッド《飛躍の7力》】

担当教員 荻阪 哲雄 **対象学年** 2年生以上 **区分** 春学期

実務経験のある教員による授業

■授業目的

本特講は「青春したい人が集まる120日のプロジェクト」である。プロジェクトの目的は、連続講義の学びを「真剣勝負アルバイト」で試し、傍を楽にする人間力を磨くことだ。めざすゴールは、あなたが「主人公」となり、真剣になれてワクワクする「志」を定め「将来ビジョン」をアウトプットして、多摩大を「青春する場所へ」変えることである。履修生皆で「人生」と「社会」と「職業」を、真剣に考える授業になる。全15回の講義で学ぶ「思考法」は【荻阪式メソッド《飛躍の7力®》(ななりき)】と呼ばれている。社会に出る前に、知っておきたい！このスキルは、1万2000名以上のリーダーを支援してきた組織開発プロフェッショナルの荻阪哲雄が、コンサルティング・フィールドの最前線で掴み、体系化した「オリジナルの技法」だ。将来の人生で必要となる「プロのノウハウ」を全公開！あなたは「稼ぐ人になる」道を歩める。その自分自身の「志」と「職業ビジョンストーリー」を作って見ませんか？

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

①講義を聴き、自分で考え、内省を行って【実験レポート】を書き、毎週、提出することができる ②講義で学んだ飛躍の7力を使って、相手と対話しながら【現実の行動】へ働きかける事ができる ③講義の智恵を、自らの志と職業ビジョンへ変えて、相手に【自分の言葉】で伝えることができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

①社会と自分の関わりを考え、志を定めて、職業ビジョンを描き、自らで内省する能力を磨く。②自分の言葉で、ビジョンを発信できる技能を修得。③自分の表現と技能を磨き、社会・組織に働きかける人材を育成。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義／演習

【活動形態】 個人ワーク／グループワーク

本特講ではリフレクション(省察)を基本に、履修生は講義で掴んだ智恵を「真剣勝負アルバイト」で試し、能動的に働くことを通して人間力を磨く。その後、自分の行動をよく振りかえり「実験レポート」を書き、履修生皆にシェアして学び方を学ぶ習慣を身につける。成果としてポジティブな自分へ変わり、自らの言葉で「志」と「職業ビジョン」を表現できるようになることが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎週の授業終了日から、講義の復習に1.5時間以上をかけて「実験レポート」を書き、日曜日の朝10時までに、指定の指示方法にて提出。実験レポートは(Word、A4の1枚、400字以上)で書くこと。

■授業の概要

- 第1講 職業の働き方をつくる 「ビジョン・マネジメント論」の全体像を紹介する
- 第2講 働く将来を見つめる 第1の成長技法「熱望力」とは、何か？
- 第3講 なぜ、惹く「熱望力」が、必要なのか？
- 第4講 働く将来を起こす 第2の成長技法「実験力」とは、何か？
- 第5講 なぜ、試す「実験力」が、必要なのか？
- 第6講 働く将来を高める 第3の成長技法「修業力」とは、何か？
- 第7講 なぜ、磨く「修業力」が、必要なのか？
- 第8講 働く将来を変える 第4の成長技法「結果力」とは、何か？
- 第9講 なぜ、生み出す「結果力」が、必要なのか？
- 第10講 働く将来を深める 第5の成長技法「体験力」とは、何か？
- 第11講 なぜ、身につける「体験力」が、必要なのか？
- 第12講 働く将来を強める 第6の成長技法「盟友力」とは、何か？
- 第13講 なぜ、支え合う「盟友力」が、必要なのか？
- 第14講 働く将来を省みる 第7の成長技法「好転力」とは何か。なぜ、必要なのか？
- 第15講 最終回 私の「志」と「職業ビジョンストーリー」とは、何か？

■フィードバックの要領

講義の実験レポートに対し、講師から各履修生へ助言メールでフィードバックを贈る。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 受講姿勢、対話内容、実験レポート、課題の成果物が、到達目標へ達し優れている場合。
 評価 A (89~80点) : 受講姿勢、対話内容、実験レポート、課題の成果物が、到達目標へ達している場合。
 評価 B (79~70点) : 受講姿勢、対話内容、実験レポート、課題の成果物が、到達目標へもう一歩の場合。
 評価 C (69~60点) : 受講姿勢、対話内容、実験レポート、成果物がもうひと踏ん張り今後に期待する場合。
 評価 F (59点以下) : 低い出席率で、実験レポートが出せず、課題成果物を提出できない。

■評価方法

講義の平常点 (15%) 実験レポートの提出 (15%) 対話と働きかけの量 (30%) 課題の成果物 (40%)

■留意点

★講義を履修した多摩大生の感想には『この講義は、自分がヒーローになれる青春の場だ』『何をしたいかが決まっていなかった時に、自分がどんなことをすべきかがわかる講義』『プロになるための道を切り拓く、武器を与えてくれた講義』『生徒ひとり一人の将来を導く、夢の案内人のような講義』『新しい智恵が身につく、自分と世界の価値観が360度、変わる講義』との評価の声があります。

科目名 産業社会特講 (ポストコロナ時代をにらんで) (Special Lecture on Industry Society (Aiming at The Post Corona Era))

サブタイトル ポストコロナ時代をにらんで

担当教員 荻野 博司

対象学年 2年生以上

区分 春学期

■授業目的

コロナ禍は依然として収束に程遠い。これまでも国際社会は大災害や恐慌、戦争などにより大きく方向を変えてきた。米大統領選挙では、各国との協調を揺るがし続けたトランプ氏が敗れ、バイデン政権が誕生したことで、米国が安定を取り戻すことが期待された。しかし、現実には国内の対立が深まる一方である。また習近平主席が率いる中国は強硬姿勢が目立つようになり、将来への懸念はぬぐえない。また、日本との関係が深い韓国で予定されている大統領選挙は今後の日韓関係に大きな影響を及ぼすことだろう。日本が抱える諸問題を中心に今後の国際社会を考えていきたい。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

大きく変わるグローバル社会の現状を理解し、自らの判断能力を高める。幅広い情報を取り込み、分析することに取り組む。具体的には次の通り。①欧米やアジアの変容について歴史的な視点で考える。②メディアの情報を鵜呑みにせず、批判的に吸収するメディアリテラシーを得る。③自らの体験を世界の変化と連動させてとらえ直し、産業や社会の将来像を考える。④自ら資料を読み込み、世界各地で起きている事象への理解を深める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

大きく変動する世界の現状を理解し、その背景にある各地域の経済、政治、社会構造や歴史を深く理解する。日本が抱える諸問題についての理解を深め、解決策を考える。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク。

本講義では、授業の途中で各自が課題に取り組み、結果を記入する時間を設ける。提出された内容は次回講義のなかで共有するとともに講評する。また、授業の内容の理解を深める教材を配布し、リレー形式で読み上げるなど、単なる受け身の講義でない授業運営を心掛ける。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

グローバル経済に関連する事項に関する記事を事前に読んでおくとともに、授業で返された資料を確認する。さらに次回のテーマに関する記事を必ず1本読む (1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 失われた30年、パンデミックに揺れる日本
- 第2講 米国社会と世界
- 第3講 膨張する中国
- 第4講 中国の未来
- 第5講 揺れる隣人、韓国
- 第6講 アベノミクス1
- 第7講 アベノミクス2
- 第8講 外国人労働力
- 第9講 低炭素社会
- 第10講 格差社会
- 第11講 自由貿易の行方
- 第12講 安全保障
- 第13講 自由・民主主義の行方
- 第14講 日本の将来像
- 第15講 補論

■フィードバックの要領

提出されたレポート、リアクションペーパー類はコメントを付して返却する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業に積極的に関与し、試験においてもトップクラスの成績を上げた者。
- 評価 A (89~80 点) : 上記に順ずる成績を取めた者。
- 評価 B (79~70 点) : 授業における関与は物足りないものの、平均レベルの成績を取めた者。
- 評価 C (69~60 点) : 最低限の知識は得たと認められる者。
- 評価 F (59 点以下) : 授業への関与度、試験の成績などから判断し、履修したとは認められない者。

■評価方法

以下のような観点から判定する。

1. 問題の概要を理解しているか。
2. 自らの視点から論じられるか。
3. 説得力のある説明ができるか。

評価の配分は次の通り=授業姿勢 50%、小テスト・レポート 10%、期末試験 : 40%

■留意点

毎回、授業の中で回答し提出する課題を出す。これを提出しない場合、出席とは認めない。積極的に授業に参加する学生を歓迎する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名	産業社会特講（メディアの時代を生きる力）（Special Lecture on Industry Society（The Power to Live in The Age of Media））		
サブタイトル	メディアの時代を生きる力		
担当教員	橘川 幸夫	対象学年	2年生以上
実務経験のある教員による授業		区分	春学期

■授業目的

現代社会において、メディアの役割は大きなものとなっています。本講座においては、私たちをとりまく、さまざまなメディア環境の歴史と構造を示し、最前線事例を紹介しながら、これからの社会のあり方と、実践的知識獲得を目標とします。

■科目分類

顧客理解／ビジネス環境理解／ビジネス創造

■到達目標

社会に出るにあたり、自分の役割や方向性を見出す、手がかりを見つけ出すこと。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

自分の頭で考え、自分の言葉で語ることの楽しさ。新しい情報を提供し、コミュニケーション能力の向上をはかる。

■授業形態 AL 手法

〔授業形態〕 講義

〔活動形態〕 個人ワーク

メディアに関する質疑応答を行う。生活者の気分を探るマーケティング調査を実施し、分析する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

日ごろから接しているメディア（テレビ、ネット、新聞、雑誌、書籍など）について、自覚的にその役割を認識すること。予習、復習に各 1.5 時間をあてる。

■授業の概要

- 第1講 個人的メディア体験論
- 第2講 出版のメディア史
- 第3講 見ること・伝えること
- 第4講 映像のメディア史
- 第5講 人間と社会の変遷
- 第6講 音楽のメディア史
- 第7講 商品の文化史
- 第8講 ゲームのメディア史
- 第9講 戦後日本の文化変遷史
- 第10講 放送のメディア史
- 第11講 メディアとしての教育
- 第12講 インターネットの意味
- 第13講 参加型メディア論
- 第14講 アフターコロナの社会論
- 第15講 森を見る力

■フィードバックの要領

毎回の講義で提出される課題に対し、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+（90 点以上）：期末試験と課題の得点が 90 点以上
- 評価 A（89～80 点）：期末試験と課題の得点が 80 点以上 90 点未満
- 評価 B（79～70 点）：期末試験と課題の得点が 70 点以上 80 点未満
- 評価 C（69～60 点）：期末試験と課題の得点が 60 点以上 70 点未満
- 評価 F（59 点以下）：期末試験と課題の得点が 60 点未満

■評価方法

平常点 50%、課題 20%、試験 30%

■留意点

社会の中での自分の役割や、自分と社会の関係のとり方に関心のある学生の受講を希望します。

科目名	産業社会特講 (企業を取り巻く環境の変化) (Special Lecture on Industry Society (The Changing Environments of the Business in Japan))		
サブタイトル	企業の役割、取り巻く環境の変化について様々な事例を参考に理解を深める		
担当教員	青木 克彦	対象学年	2年生以上
実務経験のある教員による授業		区分	秋学期

■授業目的

これから社会に出て様々な挑戦をしていこうと考える時、実際の企業は何を考へて、どう運営されているのかを理解することは大変重要である。特に、企業の活動を理解するには、企業を取り巻く環境の変化を理解すること、ファイナンスの視点が重要である。この講義では、講師本人が長年勤務したグローバルにビジネスを展開している総合商社の事例を参考にしながら、ファイナンスの視点を中心に、企業が環境が変化する中で、何を考へ、何に挑戦しているのかについて、解りやすく理解していきたい。

■科目分類

ビジネスマネジメント／グローバルビジネス

■到達目標

企業活動の現場、そこで働く人たちの志を理解し、企業現場で様々な課題に挑戦する面白さを感じることを通じて、自らのキャリアイメージを形成する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会、企業現場で起こっていることを幅広い視点から自ら関心を持って理解し、卒業後のキャリアイメージを形成する

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

産業社会特講 (企業を取り巻く環境の変化) では、講義のテーマごとに、学生にメモ、レポートを作成させ、その中で、優れたもの、面白い着眼点をもったものを、講義の中で共有し、必要に応じて学生から補足説明させることで、講義に参加している学生がより主体的にテーマについての理解を深めていくことを狙う。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

参考書、事例を中心に講義内容に即した予習と講義の際に示す課題につき考察する (1 回につき 1.5 時間程度)

■授業の概要

- 第1講 本講義の概要、目的 (ガイダンス)
- 第2講 企業の活動目的について
- 第3講 企業の運営について (その1) = 会社の組織を中心に =
- 第4講 企業の運営について (その2) = ESG、コーポレートガバナンス改革を中心に =
- 第5講 企業活動を支えるもの、ヒト、モノ、カネ、特に金融の視点から
- 第6講 = 予定 = 現場経営者の視点、何を考へ、何に挑戦しているのか
- 第7講 現場経営者の視点をどう捉えるのか
- 第8講 ファイナンスの考へ方を理解する
- 第9講 CFO の役割について
- 第10講 企業の資金調達について
- 第11講 = 予定 = 現場 CFO の視点、何を考へ、何に挑戦しているのか
- 第12講 現場 CFO の視点をどう捉えるのか?
- 第13講 M&A について (その1) = 何故 M&A を実行するのか? =
- 第14講 M&A について (その2) = 何に留意して進めるのか? =
- 第15講 本講義のまとめ

■フィードバックの要領

講義時に提出するレポート等に対してフィードバックを行う

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 企業の活動、仕組みについて深く理解し、課題を様々な局面から考察できる
- 評価 A (89~80 点) : 企業の活動、仕組みについて深く理解している
- 評価 B (79~70 点) : 企業の活動、仕組みについて一定の理解をしている
- 評価 C (69~60 点) : 講義のいくつかのキーワードについて理解をしている
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容への理解がない

■評価方法

ミニレポート 30%、最終レポート 40%、平常点 (講義への積極的な参加度合い等) 30%

■留意点

会計、法律関連の基礎知識を前提にした講義となるので、2年生の参加が望ましい。

科目名	産業社会特講 (脅威と共栄の中国～変るビジネス環境) (Special Lecture on Industry Society (China: Threat & Co-prosperity ~ Changing Business World))		
サブタイトル	複眼で見る中国と世界		
担当教員	結城 隆	対象学年	2年生以上
実務経験のある教員による授業		区分	秋学期

■授業目的

日本を含め世界経済に対する中国の影響は無視できないものとなっている。現在中国には約1万4千社の日本企業が進出し、約14万人の日本人が生活している。それらの一方で、中国について知られていることは限られており、誤解や曲解あるいは偏見も少なくない。本講義は、「虫の目」、「鳥の目」、「地球儀の目」、「時間の目」によるアプローチにより、①多様かつ縦深的な中国のありのままの姿を現地の生情報を含む様々な最新情報源をもとに理解し、②それをグローバルビジネスの文脈の中でリスクとチャンスの双方から捉える視点を養い、③左記を通じて得た知識と知見を職業人として活かすための複眼的なものの見方を身に付けることを目的とする。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／グローバルビジネス

■到達目標

①中国の経済・産業・社会の実像を理解する。②中国と日本をはじめとする世界各国・各地域との関わりの実態を把握する。③諸々の事象について左記の二点をもとに自分なりの解釈が出来るようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

中国と日本や世界との関わりについて基礎的な知識を得、知ることの楽しさを通じ、中国とそれに関わる事象への高い関心を喚起することにより、実社会で直面する様々な壁と境界を乗り越えて活躍する意欲を涵養する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義
[活動形態] 個人ワーク

今の中国を伝える現地発の様々ビデオクリップを紹介し、生の中国の理解を促進する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義内容に関連した情報の収集・分析を行う習慣を体得する。情報は日本語に限定せず、中国語、英語情報等にも挑戦する。予復習時間は各 1.5 時間以上。

■授業の概要

- 第1講 「中国とは何か」 講義の目的・内容の説明、受講上の心得
- 第2講 パンデミック後の中国と世界
- 第3講 中国経済の成長の軌跡と今の姿
- 第4講 経済・社会 1 経済成長をリードする巨大テック企業の実相
- 第5講 経済・社会 2 巨大な生産力がもたらしたものの
- 第6講 経済・社会 3 進む少子高齢化と変わる若者の意識
- 第7講 産業・企業 1 急速に進む EV 化と CASE
- 第8講 産業・企業 2 日本を圧倒した中国家電産業
- 第9講 産業・企業 3 「新小売革命」により変わる流通業界
- 第10講 産業・企業 4 世界を目指す中国型ビジネスモデル
- 第11講 国際関係 1 一体化する中国と中央アジア・ロシア
- 第12講 国際関係 2 三次方程式の米中関係
- 第13講 国際関係 3 経済的利害と価値観相違の狭間の欧州
- 第14講 国際関係 4 RCEP 発効とアジア経済
- 第15講 「まとめ」 日本の「志」～相互理解・相互尊重を支える「志」

■フィードバックの要領

毎回の講義レポートを添削し、コメントを付与しフィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 100 点満点中 90 点以上
 評価 A (89~80 点) : 100 点満点中 80~89 点
 評価 B (79~70 点) : 100 点満点中 70~79 点
 評価 C (69~60 点) : 100 点満点中 60~69 点
 評価 F (59 点以下) : 100 点満点中 59 点以下

■評価方法

毎回講義レポート 60% (15 回×4%)、履修レポート 30%、質問・コメント 10% (1~10 点) の 100% で絶対評価する。

■留意点

講義資料は各講義の前日に T-NEXT に掲載する。講義レポートの用紙は教師が用意し当日配布し次回の講義時に返却する。レポートに加え、講義の理解度を確認するための 3 問程度の選択式設問も加える。講義レポートの内容については、履修者の考え方、ロジック、伝える力を重視する。

科目名	産業社会特講 (地域の歴史と偉人から教訓を学ぶ) (Special Lecture on Industry Society (Learn Lessons from Regional History And Great Men))		
サブタイトル	地域の歴史と偉人から教訓を学ぶ		
担当教員	河合 敦	対象学年	2年生以上
		区分	春学期

■授業目的

史跡・遺物、史資料を用いて偉人や地域の歴史を学ぶことで、大きな志を養うとともに、問題解決の方法や実践的知識を獲得する。

■科目分類

社会人力育成/地域ビジネス

■到達目標

本講義で学んだ偉人の生き方や地域の歴史を、自己や現代社会の課題と関連付けて捉え、問題解決のための理論や教訓として役立てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

多摩の歴史や偉人を学ぶことで地域の伝統や先人の偉業を把握し、歴史的な遺産を多摩地域の活性化に活かそうとする意識、日本全体に幸福に活用するグローバルな視点を有するようにする。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク/グループワーク

本講義では学生のプレゼンテーション(個人ワーク)を実施し、発表後、自由に話し合う討議(グループワーク)を行う。これにより、地域の歴史や偉人の業績を自己や現代社会の課題と関連付けて捉えるスキルをみがき、最終的には課題解決に取り組むことができるようにする。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

学外学習で入念な下調べを行い、事後に小レポートを提出する。後半は各自がプレゼンテーションを行って、各回平均 1.5 時間の準備学習が必要。なお、学外学習は新型コロナウイルス感染症の状況で中止もあり得る。

■授業の概要

- 第1講 「オリエンテーション」
- 第2講 「歴史学とは何か。なぜ人は歴史に学ばなくてはならないのか」を学ぶ。
- 第3講 「幕末の志士の生き方から学ぶ問題解決のための理論」 1.3 時間
- 第4講 「校外学習 地域にある資料館・博物館を見学する」
- 第5講 「実際の遺物・史料に触れてみよう」
- 第6講 「武蔵地域(東京周辺)で活躍した人物」
- 第7講 「多摩から出た偉人たち―新選組を中心に」
- 第8講 「次回の校外学習の事前学習」
- 第9講 「校外学習① 新撰組の活動拠点・日野を歩く」
- 第10講 「校外学習② 新撰組の活動拠点・日野を歩く」
- 第11講 「校外学習③ 新撰組の活動拠点・日野を歩く」
- 第12講 「プレゼンテーションの準備学習」
- 第13講 「学生によるプレゼンテーション①」
- 第14講 「学生によるプレゼンテーション②」
- 第15講 「学生によるプレゼンテーション③」

■フィードバックの要領

学生のレポートやプレゼンに対しコメントを記入したり述べる。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計が 90% 以上
 評価 A (89~80 点) : 平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 80~89%
 評価 B (79~70 点) : 平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 70~79%
 評価 C (69~60 点) : 平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 60~69%
 評価 F (59 点以下) : 平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 59% 以下

■評価方法

平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25%

■留意点

新型コロナウイルス肺炎の流行状況により、校外学習を中止し、講義をすべて教室で行う場合もある。そのさい評価基準は変更になる。本講義の受講希望者は、初回の授業までに履修登録を終え、必ず初回の授業に出席すること。初回授業日までに履修登録をしていない学生は本講義を受けることはできない。場合によっては、抽選によって受講者を決定することがあるので、あらかじめ了承しておくこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 事業構想論 I (Business Concept Theory I)**サブタイトル** 創造的問題解決の理論・事例紹介**担当教員** 松本、長島**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

事業構想とは、社会の不条理に立ち向かい問題解決するためのビジネスにあって、様々な障壁、ルールによる制約、環境変化などの困難を克服するために行われる取り組みを含む事業活動全般のことをいう。本学ではこれを「創造的問題解決」と呼び、問題解決力、事業構想力を身に付けるために本講義を開講している。学生の「事業を構想する力」が育まれることにつながるよう、本講義においては、「事業構想（創造的問題解決）とは何か」「どのようにしてそれは起こるのか」について、基本的な考え方や方法を本学教員が講義するとともに、実際の「事業構想事例」を、その実践者から直接聞くことによって幅広く知り、自分の将来を構想する糧としてもらうことを意図している。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／ビジネスマネジメント

■到達目標

教員による基礎的な理論の講義とゲストによる講演（事例）を聞き、多摩大学における「事業構想とは何か」を説明できるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

事業構想の理論（考え方）と実践事例から事業構想とは何かという基礎的な認識と知識について理解する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

事業構想論 I では、アクティブ・ラーニングとして、ゲスト講師への質問、関連するワークをリアルタイムで実施、主体的・能動的に取り組むことで、事業構想という概念をより深く理解することをが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前回に話された内容を自分のメモを元にまとめ、講演者にとっての事業構想とは何か、事業構想に関わる考え方の重要な論点、事例における成功ポイントについて整理しておく（90分程度）

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 事業構想論の基礎①～アントレプレナーシップと事業構想
- 第3講 事業構想論の基礎②～事業構想をとらえる枠組み
- 第4講 外部講師による講演（卒業生の事業構想）
- 第5講 外部講師による講演（事業構想の起点）
- 第6講 外部講師による講演（事業構想の持続力）
- 第7講 外部講師による講演（ICTと事業構想）
- 第8講 外部講師による講演（グローバルビジネスと事業構想）
- 第9講 外部講師による講演（地域での事業構想）
- 第10講 外部講師による講演（事業構想と企画力）
- 第11講 外部講師による講演（多摩ブルー・グリーン倶楽部会員企業①）
- 第12講 外部講師による講演（多摩ブルー・グリーン倶楽部会員企業②）
- 第13講 外部講師による講演（多摩ブルー・グリーン倶楽部会員企業③）
- 第14講 事業構想論の基礎③～ふりかえり
- 第15講 最終試験（授業内試験）

■フィードバックの要領

ふりかえりの回を設けて、フィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+（90点以上）：事業構想について特筆すべき説明をすることができる。
- 評価 A（89～80点）：事業構想についてよく説明することができる。
- 評価 B（79～70点）：事業構想について一定の説明をすることができる。
- 評価 C（69～60点）：事業構想について拙いが断片的な説明はできる。
- 評価 F（59点以下）：事業構想についてほとんど説明することができない。

■評価方法

平常点 40%、ミニレポート 30%、最終試験 30%

■留意点

本講義は、多摩ブルー・グリーン倶楽部や各登壇企業の寄附講座として開講する。

科目名 事業構想論 II (Business Concept Theory II)**サブタイトル** 創造的問題解決の理論・事例紹介**担当教員** 松本、長島**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

事業構想とは、社会の不条理に立ち向かい問題解決するためのビジネスにあって、様々な障壁、ルールによる制約、環境変化などの困難を克服するために行われる取り組みを含む事業活動全般のことをいう。本学ではこれを「創造的問題解決」と呼び、問題解決力、事業構想力を身に付けるために本講義を開講している。学生の「事業を構想する力」が育まれることにつながるよう、本講義においては、「事業構想（創造的問題解決）とは何か」「どのようにしてそれは起こるのか」について、基本的な考え方や方法を本学教員が講義するとともに、実際の「事業構想事例」を、その実践者から直接聞くことによって幅広く知り、自分の将来を構想する糧としてもらうことを意図している。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／ビジネスマネジメント

■到達目標

毎回異なる教員による講義を聞き、多摩大学における「事業構想とは何か」を説明できるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

事業構想の理論（考え方）と実践事例から事業構想とは何かという基礎的な認識と知識について理解する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

事業構想論IIでは、アクティブ・ラーニングとして、講師の講義内容に関連するアンケートやワークを実施、主体的・能動的に取り組むことで、各講師が解説する事業構想の概念をより深く理解することが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前回に話された内容を自分のメモを元にまとめ、講演者にとっての事業構想とは何か、事業構想に関わる考え方の重要な論点、事例における成功ポイントについて整理しておく（90分程度）

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 事業構想学科教員による講義（グローバルビジネス関連）
- 第3講 事業構想学科教員による講義（ICTビジネス関連）
- 第4講 事業構想学科教員による講義（地域ビジネス関連）
- 第5講 事業構想学科教員による講義（グローバルビジネス関連）
- 第6講 事業構想学科教員による講義（ICTビジネス関連）
- 第7講 事業構想学科教員による講義（地域ビジネス関連）
- 第8講 事業構想学科教員による講義（グローバルビジネス関連）
- 第9講 事業構想学科教員による講義（ICTビジネス関連）
- 第10講 事業構想学科教員による講義（地域ビジネス関連）
- 第11講 事業構想学科教員による講義（グローバルビジネス関連）
- 第12講 事業構想学科教員による講義（ICTビジネス関連）
- 第13講 事業構想学科教員による講義（地域ビジネス関連）
- 第14講 講義のふりかえり①～各講義のポイント解説
- 第15講 講義のふりかえり②～事業構想論としてのまとめ

■フィードバックの要領

ふりかえりの回を設けて、フィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+（90点以上）：事業構想について特筆すべき説明をすることができる。
- 評価 A（89～80点）：事業構想についてよく説明することができる。
- 評価 B（79～70点）：事業構想について一定の説明をすることができる。
- 評価 C（69～60点）：事業構想について拙いが断片的な説明はできる。
- 評価 F（59点以下）：事業構想についてほとんど説明することができない。

■評価方法

平常点 40%、ミニレポート 30%、最終レポート 30%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 社会心理 (Social Psychology)**サブタイトル** 歴史に残るさまざまな心理学実験を通じ、人間の本質について考える**担当教員** 良峯 徳和**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

人間は「社会的動物である」と言われるように、私たちの意識や行動は、家族、学校、職場、地域、国など、さまざまな集団・社会を抜きにしては考えられない。この授業では、個人と社会の関わり合いについて実証的に研究する社会心理学の成果を、具体的な事例や有名な実験などを紹介しつつ、社会的な存在としての人間の行動や認知、他者と共に生活することの意味やその影響について、理解を深める。

■科目分類

顧客理解／社会人力育成

■到達目標

①社会心理学の方法論や実証研究の成果について理解し、基本的な知識を身に付けること。②自分の考え方や周りの人達の生き方や行動が、さまざまな社会的要因の影響を受けていることを理解できるようになる。③この授業で学んだことを、よりよい自分の生き方、他者への理解、対人関係や集団、社会のなかでの活動のあり方に活かせるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

心理学に関する基礎的な学力を養い、社会生活で発生するさまざまな問題に心理学の観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

社会心理では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。毎時間ごとに前の週の授業で学んだ社会心理学に関する実験方法や結果、その意義に関する復習小テストを実施する。また社会状況に起因するさまざまな認知バイアスを意識することで、バイアスに惑わされない意志決定や行動について考察する機会を設ける。これにより実際の社会生活に役立つ心理学的な知見の修得を行う。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業の開始時に毎回内容理解を確認する復習テストを行う。その準備として、1.5 時間以上の復習を行ってこよう。

■授業の概要

- 第1講 社会心理学とは何か。この授業での学習内容の全体像、授業方針
- 第2講 人間の心の性質は生物の進化の過程で獲得されてきたことをさまざまな事例を通して学ぶ
- 第3講 社会行動と脳の発達について
- 第4講 集団的手抜きとは何か。リングelmanが行った実験をもとに、原因と対策を考える。
- 第5講 同調行動とそれを成立させる心理的メカニズム
- 第6講 傍観者効果がどのような状況下でおこるか、具体的な経験や事件を例に考える。
- 第7講 ひとを説得する技術とその心理
- 第8講 対人認知・印象形成の心理
- 第9講 ダットンとアロンの「吊り橋実験」を例に感情が起きるメカニズムについて考える
- 第10講 恐怖心を例に感情の社会的役割を考える。
- 第11講 ひとを感情を隠すことができるか。「微表情」と感情の関係
- 第12講 ミルグラムのアイヒマン実験を通して、人間の行動と状況との関係を考える
- 第13講 認知的不協和によって生じる「不合理」な行動はどのように説明されるか
- 第14講 厳しい禁止と穏やかな禁止で心理的な効果が高いのはどちらか
- 第15講 スタンフォード監獄実験：権力がいかにひとを変えてしまうのか

■フィードバックの要領

復習テスト、レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：社会心理学に関する理論をよく理解し、具体的な状況でそれを応用することができる。
- 評価 A (89～80 点)：社会心理学に関する理論をよく理解し、授業への取り組みが熱心で、積極的である。
- 評価 B (79～70 点)：社会心理学に関する理論をおおまかに理解しており、授業への取り組みもまじめである。
- 評価 C (69～60 点)：社会心理学に関する基本的な知識を有しているが、授業への取り組みがやや不足。
- 評価 F (59 点以下)：社会心理学に関する基本的な知識も理解十分でなく、授業への取り組みが不真面目。

■評価方法

小テストおよび期末試験 50%、レポート 30%、平常点 20%。ただし、授業参加は全体の 2/3 以上、小テストも全体の 2/3 以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

小テストは毎回の授業の開始時に実施するため、遅刻・欠席の場合は受験できない。忌引き、就職の面接試験、インターンシップなどの理由で欠席した場合のみ、復習テスト実施後の 1 週間以内に限り、追試を受けることができる。詳細については、授業内で説明する。

科目名 消費心理 (Consumer Psychology)**サブタイトル** 消費者の購買行動理解と、それを仕掛ける企業側の心理学**担当教員** 浜田 正幸**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

① 消費者の心理を理解するための、消費者行動を調べることができるようになる② 商品やその価格づけ、広告などで、消費者の心理と購買行動を動かすことができるようになる③ ビジネスの世界で、心理学を応用することができるようになる。新しい価値を創造できるようにする

■科目分類

顧客理解/ビジネスマネジメント

■到達目標

①消費心理に関する一般的テーマや理論を把握する ②消費心理を把握する方法を身につける ③消費心理や消費行動の分析方法を知り、応用できるようにする

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

産業社会で発生する消費購買行動に関する専門知識を体系的に修得、これを持って産業社会の発展に創造的に貢献する能力を修得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] ペアワーク

ペアワークでは、消費心理に関する理論やモデルを調べ、それをペアにわかりやすく説明する (アウトプット) Question が数問出されるので、そのことについて自ら調べ、思考を深め、Answer をレポートする (アウトプット)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前にキーワードについて調べたり、フィールド (店舗など) 調査を行う (1.5 時間)。事後にワークシートの完成、あるいはレポートを提出する (1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 「消費心理」とは何か説明する
- 第2講 購買行動から消費者の心理を知る ABC 分析
- 第3講 購買行動プロセス AIDMA AISAS
- 第4講 流行の心理 イノベーター理論
- 第5講 消費心理を利用した売り手の戦術 1
- 第6講 おカネの心理 1 プロスペクト理論
- 第7講 おカネの心理 2 売り手の戦術
- 第8講 コンビニエンスストアの心理学
- 第9講 消費心理を利用した売り手の戦術 2 WEB
- 第10講 装いの心理 1
- 第11講 装いの心理 2 (被服)
- 第12講 広告の心理
- 第13講 ディズニーランドの心理学 1
- 第14講 ディズニーランドの心理学 2
- 第15講 これまでの全体の振り返りと到達度確認テスト

■フィードバックの要領

毎回の課題レポートに対し、翌週にフィードバックを行い、理解を促進する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 毎回の課題レポートと達成度確認テストの得点合計が 90 点以上。
 評価 A (89~80 点) : 毎回の課題レポートと達成度確認テストの得点合計が 80~89 点。
 評価 B (79~70 点) : 毎回の課題レポートと達成度確認テストの得点合計が 70~79 点。
 評価 C (69~60 点) : 毎回の課題レポートと達成度確認テストの得点合計が 60~69 点。
 評価 F (59 点以下) : 毎回の課題レポートと達成度確認テストの得点合計が 60 点未満。

■評価方法

毎回の課題レポート 70% (5 点×14 回)。達成度確認テスト 30%。

■留意点

毎回 PC 必須。ペアワーク必須。他の受講者に迷惑となる行為の禁止 (私語厳禁。遅刻厳禁。スマホ厳禁)。以上遵守できないものは受講できない。座席指定。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報法 (Information Law)**サブタイトル** 情報をめぐる法的問題を把握する**担当教員** 樋笠 堯士**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

①情報やメディアの特性を踏まえ、情報と情報技術を活用して問題を発見・解決する方法を身に付ける。②情報に関する法規や制度、情報セキュリティの重要性、情報社会における個人の責任及び情報モラルについて理解する。③情報技術が人や社会に果たす役割と及ぼす影響について理解する。これら①②③により、情報社会で生き抜くために必須の法的知識・経験・倫理的思考を養う。

■科目分類

ビジネス環境理解/ビジネス ICT

■到達目標

①情報の取り扱いの目的や状況に応じて、情報と情報技術を適切かつ効果的に活用して問題を発見・解決する方法について考えること。②情報に関する法規や制度及び情報・プライバシーを巡るマナーの意義、情報社会において個人の果たす役割や責任、情報モラルなどについて、それらの背景を科学的に捉えて考察すること。③情報と情報技術の適切かつ効果的な活用と望ましい情報社会の構築について考察すること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

基礎的な学力を養い、企業活動の様々な情報問題に対処していきける専門的能力を体系的に修得する。(DP1)

情報の取り扱いの目的や状況に応じた問題を解決するための判断力と思考力を体得する。(DP2)

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク

「情報法」では、アクティブ・ラーニングとして「判例・事例分析研究」を行う。具体的には、独占禁止法違反、著作権法違反、特許法違反の事例を自分で調査し、その違法性や適法性を検討する課題（学生による相互評価も行う）に取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、「問題解決力」を得ることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業内容を復習して理解すること（各 1.5 時間）

■授業の概要

- 第1講 情報法とは ガイダンス
- 第2講 デジタル情報とインターネット
- 第3講 インターネット規制と表現の自由
- 第4講 インターネットと通信の秘密
- 第5講 情報化と官公庁
- 第6講 名誉毀損と情報
- 第7講 知的財産と情報法
- 第8講 判例検索レポート相互評価会・講評
- 第9講 情報漏洩
- 第10講 サイバー犯罪と捜査
- 第11講 プロバイダ責任法
- 第12講 個人情報保護法
- 第13講 最新時事問題
- 第14講 最新時事問題 2
- 第15講 確認テスト

■フィードバックの要領

普段の課題で質問に答えます。レポートには講評を行います。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を正確に理解し、積極的に掘り下げた調査を自ら行い、成果をあげている。

評価 A (89~80 点) : 講義内容を正確に理解している。

評価 B (79~70 点) : 講義内容をほぼ理解できているが、一部に理解できていない点がある。

評価 C (69~60 点) : 講義された事項について、基礎的な最低限の事項を理解している。

評価 F (59 点以下) : 講義内容の理解が不十分である。

■評価方法

平常点 (30%)、レポート (20%)、【授業内試験】最終回の確認テスト (50%) 確認テストは、指定された (手書きの) 持ち込みペーパーのみ持ち込み可能。

■留意点

授業の進行によってシラバスを修正することがあり、授業中に変更後内容を説明します。

科目名 情報倫理 (Information Ethics)**サブタイトル** 情報社会における諸問題と倫理**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

本講義は、情報通信技術と人々の倫理観についての関わり、社会生活における情報の価値、情報通信技術の役割や影響力などを理解し、情報社会における望ましい態度やあり方、情報倫理の必要性を理解することを目的とする。現代の社会において、情報通信技術は必要不可欠な存在である。情報通信技術の進展によって生じた諸問題について把握するとともに、それらの問題を解決するひとつの緒として情報倫理という考え方やその必要性について考える。また、情報関連の法律や規制、最前線事例についても学習する。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス ICT

■到達目標

次の①～④を説明できる、⑤を身につける。①個人情報やプライバシー、②コミュニケーションの変化、③情報通信技術の発達による生活や社会の変化、④知的財産や著作権、⑤情報社会における倫理観

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

情報倫理に関わる問題に対し、その原因を分析し、問題解決に向けた自己の考えを他者に対して説明し、説得する能力、他者の考えを汲み取り、互いの意見を擦り合わせて新たな考えや解決方法を生み出せる能力を養う。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク／その他：ディベート

ALとしてペアワーク・グループワーク・ディベート等を行う。情報倫理に関する諸問題についてテーマを設定し、各自の考えをまとめた後、ペアやグループ内で考えを共有しあう、見解を統一する、改善策を話し合う、ディベートを行うなどの活動を行う。これにより他者の考えを汲み取り、互いの意見を擦り合わせて新たな考えや解決方法を生み出せる能力を養う。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。また、講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度（合計 3 時間程度）である。

■授業の概要

- 第1講 法と法律と倫理
- 第2講 プライバシーの概念
- 第3講 プライバシーの侵害とは
- 第4講 SNS とプライバシー
- 第5講 忘れられる権利と知る権利
- 第6講 忘れられる権利と肖像権
- 第7講 忘れられる権利と SNS
- 第8講 虚偽情報の拡散
- 第9講 SNS における誹謗中傷
- 第10講 SNS におけるヘイトスピーチ
- 第11講 知的財産と知的財産制度
- 第12講 著作権制度
- 第13講 労働環境の変化
- 第14講 匿名性の問題と対策
- 第15講 情報社会における倫理観

■フィードバックの要領

各講義において T-NEXT を通してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 到達目標①～④を関連づけ、自分の考察を含めて的確に説明できる。⑤が十分である。
- 評価 A (89～80 点) : 到達目標①～④を個別に、自分の考察を含めて説明できる。⑤が十分である。
- 評価 B (79～70 点) : 到達目標①～④のうち 2 つ以上を説明できる。⑤が十分である。
- 評価 C (69～60 点) : 到達目標①～④のうち 1 つ以上を説明できる。⑤が十分である。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

レポート 40%、授業内の課題 60%に授業への参加態度を加味する。

■留意点

- ①著作権検定、個人情報保護法検定の内容に一部対応。②状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えを行う場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 地域ビジネスプランニング (Regional Business Planning)**サブタイトル** 都市・地域活性化の経営戦略論**担当教員** 中庭 光彦**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

地域ビジネス論では日本・世界各地に、地域・歴史特有の事業（ビジネス）があると考える。そして、事業を課題解決手法として捉え、事業内、事業間の多様な差異を比較し、国内外の課題解決手法として事業を考える。地域・歴史毎に特徴のある事業を捉えるために、地域ビジネスプランニングでは、企業活動を主体とした課題解決戦略について理論と事例の両面から解説する。

■科目分類

顧客理解／ビジネス環境理解／地域ビジネス

■到達目標

- ・知識、考え方を覚え理解できる。
- ・知識、考え方を言葉で説明でき、自分で長文情報を調査できる。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

- ・知識、考え方を覚え理解できたか。
- ・知識、考え方を言葉で説明できるか。自分で長文情報を調査できるか。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できるか。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

その日の内に必ず授業についてのミニレポートを提出させる。授業内容について、傾聴力、表現力、論理構成力を主体的に高めることが目的である。翌週にフィードバックを行う。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義内容のまとめ直しと次回レジュメを調べ、予習復習を行う（3時間）。15回のPPT資料を初回に配付するので、それを元に学習する。

■授業の概要

- 第1講 地域ビジネスのフレーム① 課題・ビジネスモデル・外部環境
- 第2講 地域ビジネスのフレーム② 便益とリスクのバランス
- 第3講 地域ビジネスのフレーム③ 差別化、比較指標、解釈
- 第4講 地域ビジネスで取り組む課題①
- 第5講 地域ビジネスで取り組む課題②
- 第6講 立地戦略
- 第7講 ビジネスモデル① 基本的サプライチェーン
- 第8講 ビジネスモデル② プラットフォームビジネスモデル
- 第9講 ビジネスモデル③ シェアリングビジネスモデル
- 第10講 移動と交通のイノベーション
- 第11講 都市再開発
- 第12講 観光地づくり
- 第13講 水ビジネス
- 第14講 企業による課題解決の限界
- 第15講 コロナ後の地域ビジネス

■フィードバックの要領

ミニレポート（平常点、毎回提出）は翌週に配付する。

■評価基準

- 評価 A+（90点以上）：キーワードをつなげ多様な問題を理解し、客観的に他例の応用説明と意見を表現できる。
- 評価 A（89～80点）：キーワードを元に問題を理解し、客観的に他例を理解し応用説明ができる。
- 評価 B（79～70点）：キーワードを理解し、説明ができ、他例を理解し応用説明ができる。
- 評価 C（69～60点）：キーワードは書けるが理解が不十分で、他例の理解と応用説明も不十分。
- 評価 F（59点以下）：キーワードが書けず、他例も説明できない。

■評価方法

平常点 40%（出席：20%／授業後に提出するミニレポート：20%）／到達度テスト・応用力レポート：30%／文献レポート：30%（指定文献を2冊読み、レポート作成し7回目までに T-Next で提出。）

■留意点

1. 第1回目に必ず出席すること。

科目名 地域政策プランニング (Regional Policy Planning)**サブタイトル** 都市・地域活性化の政治経済学・公共政策論**担当教員** 中庭 光彦**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

地域の課題解決には、市場を中心とする手法だけではなく、政府・企業・市民等が連携して課題対策を立案する公共政策による方法がある。地域政策プランニングでは主に国や地方政府が中心となる課題解決手法を取り扱う。この場合、問題を捉えるフレームと因果関係の理解が重要なため、本講義では政治学の側面から地域活性化の課題・フレーム・政策デザインについて事例と理論の両面から考える。

■科目分類

顧客理解／ビジネス環境理解／地域ビジネス

■到達目標

- ・知識、考え方を覚え理解できる。
- ・知識、考え方を言葉で説明でき、自分で長文情報を調査できる。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

- ・知識、考え方を覚え理解できたか。
- ・知識、考え方を言葉で説明できるか。自分で長文情報を調査できるか。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できるか。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

その日の内に必ず授業についてのミニレポートを提出させる。授業内容について、傾聴力、表現力、論理構成力を主体的に高めることが目的である。次回、フィードバックを行う。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義内容のまとめ直しと次回レジュメを調べ、予習復習を行う (3時間)。初回に 15 回分の PPT 資料を配付するので、それを元に学習する。

■授業の概要

- 第1講 公共政策とは何か
- 第2講 公共政策の構造と類型
- 第3講 政策問題の構造化
- 第4講 問題の特定と構造化①
- 第5講 問題の特定と構造化②—社会と組織をシステムとして認識する
- 第6講 問題の特定と構造化③—因果関係図、システム図
- 第7講 政策のプランニング①
- 第8講 政策のプランニング② 情報の非対称性
- 第9講 政策のプランニング③ 事業評価
- 第10講 政策の視点から解釈する① 日本の地域政策と人口減少問題
- 第11講 政策の視点から解釈する② 中心市街地問題、コンパクトシティ
- 第12講 政策の視点から解釈する③ 地方創生
- 第13講 政策の視点から解釈する④ 地域活性化の実例
- 第14講 政策の視点から解釈する⑤ 景観まちづくり
- 第15講 まとめ—公共政策、都市政策、地域政策

■フィードバックの要領

毎回提出のミニレポート (平常点) について、次回に講評ペーパーを配付する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : キーワードをつなげ多様な問題を理解し、客観的に他例の応用説明と意見を表現できる。

評価 A (89~80 点) : キーワードを元に問題を理解し、客観的に他例を理解し応用説明ができる。

評価 B (79~70 点) : キーワードを理解し、説明ができ、他例を理解し応用説明ができる。

評価 C (69~60 点) : キーワードは書けるが理解が不十分で、他例の理解と応用説明も不十分。

評価 F (59 点以下) : キーワードが書けず、他例も説明できない。

■評価方法

平常点 40% (出席 : 20%、毎回提出のミニレポート : 20%) / 到達度テスト・応用力レポート : 30% / 文献レポート : 30% (テーマを設定し関連文献を 2 冊読み、レポート作成し 7 回目までに T-Next で提出。)

■留意点

1. 第 1 回目は必ず出席すること。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中級簿記 (Intermediate Level Bookkeeping)**サブタイトル** 複式簿記の基礎と会計理論**担当教員** 木村 太一**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

本講義では、「初級簿記」に取り扱った会計処理に加えて、種々の取引に対する会計処理を学んでいく。前半は「初級簿記」の内容を補うような位置づけであり、「初級簿記」の内容に加えて本講義の内容を学ぶことで、基礎的な取引を一通りマスターすることになる。また、講義の後半は発展的な会計処理を学びこれを題材とした会計理論を取り扱う。「初級簿記」や本講義の前半で取り扱うような取引や事象の場合、考え方に応じて会計処理が変化することは減多にないが、現代会計が取り扱う多くの取引や事象は、考え方に応じてその処理が変化するのが多くある。こうした取引や事象を取り扱い、会計を取り巻く様々な問題を考えていきたい。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会力育成

■到達目標

①「初級簿記」に引き続いて、複式簿記において取引をどのように記録していくかを学んでいく。なお、本講義前半にて扱う会計処理は、東京商工会議所が主催する日商簿記検定試験3級の内容をカバーしている。②現代会計がどのような考え方の下に成立しているのか、どのような問題を抱え、解決が模索されているのかを理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

商業簿記に関する一通りの知識を得るとともに、企業が行う様々な取引や企業を取り巻く経済事象に関する理解を得ることや簿記の構造に関する理解を得る。また、現代会計の「存在の理屈」について思量する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

新聞記事や実践での問題点などを交えて講義することで、学修者自身が、講義の内容が現実社会でどのように活かされているのかを理解することが期待される。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習よりも復習に重きを置いて、その回に用いられたテキストやレジユメの数値例で何度も計算をすること。また、新聞やニュースに注意を向けてみて欲しい。きっと学んだ用語や比率を見つけることができるはずである。(各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 会計学の基礎
- 第2講 商品売買①—掛取引/手付金/内金/商品券
- 第3講 商品売買②—現金・預金
- 第4講 小口現金/受取手形/クレジット売掛金/電子債権債務
- 第5講 信用取引と補間金融
- 第6講 金銭貸借
- 第7講 固定資産
- 第8講 仮払金・仮受金/訂正仕訳
- 第9講 給与と社会保障制度
- 第10講 税金
- 第11講 現金過不足/貯蔵品・当座借越/貸倒れ
- 第12講 減価償却/経過勘定
- 第13講 商品有高帳
- 第14講 資本取引と会社法による配当規制
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

練習問題を解き、それを基にした指導を行なう。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業内試験と課題の総合計のうち 90%以上を獲得した場合に付与する。
- 評価 A (89~80 点) : 授業内試験と課題の総合計のうち 80%以上 90%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 B (79~70 点) : 授業内試験と課題の総合計のうち 70%以上 80%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 C (69~60 点) : 授業内試験と課題の総合計のうち 60%以上 70%未満を獲得した場合に付与する。
- 評価 F (59 点以下) : 授業内試験と課題の総合計のうち獲得したのが 60%未満であった場合に付与する。

■評価方法

授業内試験 100%

■留意点

本講座は「初級簿記」の単位を有する者のみを対象とする。電卓を使用するので各自購入のこと。また、教科書は指定した本の最新の版を用いるので、表記に関わらず最新版を用意すること。

科目名 中国ビジネスコミュニケーション I (Chinese Business Communication I)**サブタイトル** 中国人と中国のビジネス事情及びビジネス中国語会話について**担当教員** 田 園**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

中国人の行動上の特徴、思考様式を理解し、変化しつつある新しい中国ビジネス事情を知ったうえで、簡単なビジネス中国語会話の練習を通して、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。

■科目分類

ビジネス環境理解／グローバルビジネス

■到達目標

①ビジネスに特化したスキルと知識の習得。②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

現代中国の社会と経済の現状を理解した上で、ビジネス場面におけるコミュニケーションの能力を向上する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] ペアワーク／グループワーク

中国ビジネスコミュニケーション I では、アクティブ・ラーニングとしてペアワークまたはグループワークを行う。具体的には、ペアで中国語で簡単なビジネス会話文を作り、または日中の差異についてグループで議論し、発表する。主体的・能動的に取り組むことにより、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させることが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、キーワードとなっている専門用語を事前に調べて、理解しておく。(1.5 時間) 授業後、中国経済に関連する記事を日本経済新聞などで目を通す。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 中国人について：①メンツを重んじるビジネス中国語会話：空港
- 第3講 中国人について：②輸の文化ビジネス中国語会話：空港・応用編
- 第4講 中国人について：③年功序列ビジネス中国語会話：飛行機内
- 第5講 中国人について：④「80 後」の中国人ビジネス中国語会話：飛行機内・応用編
- 第6講 中国ビジネステーブルマナー
- 第7講 実践：ビジネス連絡文書の書き方
- 第8講 中国の産業について：①その展開ビジネス中国語会話：出迎え
- 第9講 中国の産業について：②産業構造の変化ビジネス中国語会話：出迎え・応用編
- 第10講 事例研究：アリババの事業展開ビジネス中国語会話：ホテル
- 第11講 中国の企業ビジネス中国語会話：ホテル・応用編
- 第12講 日本企業の中国進出ビジネス中国語会話：打ち合わせ
- 第13講 中国ビジネスのリスクとチャンスビジネス中国語会話：打ち合わせ・応用編
- 第14講 復習 & 総括
- 第15講 授業内試験

■フィードバックの要領

課題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：特に優れているもの
- 評価 A (89～80 点)：優れているもの
- 評価 B (79～70 点)：一応の努力が認められるもの
- 評価 C (69～60 点)：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
- 評価 F (59 点以下)：C の水準に達しないもの

■評価方法

授業内試験 60%、課題達成状況 20%、平常点 20%による総合評価

■留意点

実際の状況により、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国ビジネスコミュニケーションⅡ (Chinese Business Communication II)**サブタイトル** 中国人と中国のビジネス事情及びビジネス中国語会話について**担当教員** 田 園**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

中国ビジネスコミュニケーションⅠに続き、中国人の行動上の特徴、思考様式を理解し、変化しつつある新しい中国ビジネス事情を知ったうえで、簡単なビジネス中国語会話の練習を通して、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。

■科目分類

ビジネス環境理解／グローバルビジネス

■到達目標

①ビジネスに特化したスキルと知識の習得。②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

現代中国の社会と経済の現状を理解したうえで、ビジネス場面におけるコミュニケーションの能力を向上する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] ペアワーク／グループワーク

中国ビジネスコミュニケーションⅡでは、アクティブ・ラーニングとしてペアワークまたはグループワークを行う。具体的には、ペアで中国語で簡単なビジネス会話文を作り、または日中の差異についてグループで議論し、発表する。主体的・能動的に取り組むことにより、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させることが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、キーワードとなっている専門用語を事前に調べて、理解しておく。(1.5 時間) 授業後、中国経済に関連する記事を日本経済新聞などで目を通す。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス及び春学期に習った内容を顧みる
- 第2講 中国人の伝統的な消費意識ビジネス中国語会話：工場視察
- 第3講 「80 後」たちの消費意識ビジネス中国語会話：工場視察・応用編
- 第4講 中国人は最も気前よく金をかけるものビジネス中国語会話：品質管理
- 第5講 中国人の金銭感覚ビジネス中国語会話：品質管理・応用編
- 第6講 中国人の資産運用と投資についてビジネス中国語会話：移動
- 第7講 「11. 11」についてビジネス中国語会話：移動・応用編
- 第8講 プレゼンテーションの作成についてビジネス中国語会話：食事
- 第9講 タクシーの乗り方ビジネス中国語会話：食事・応用編
- 第10講 法定の祝祭日ビジネス中国語会話：電話
- 第11講 縁起の良い数字ビジネス中国語会話：電話・応用編
- 第12講 贈り物ビジネス中国語会話：会社訪問
- 第13講 中国ビジネスの在り方ビジネス中国語会話：会社訪問・応用編
- 第14講 復習及び総括
- 第15講 授業内試験

■フィードバックの要領

課題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：特に優れているもの
- 評価 A (89～80 点)：優れているもの
- 評価 B (79～70 点)：一応の努力が認められるもの
- 評価 C (69～60 点)：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
- 評価 F (59 点以下)：C の水準に達しないもの

■評価方法

授業内試験 60%、課題達成状況・レポート 20%、平常点 20%による総合評価。

■留意点

授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

科目名 哲学入門 (Introduction to Philosophy)**サブタイトル** 東洋思想と西洋思想から見る考え方の多様性**担当教員** 高橋 恭寛**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

グローバルビジネスへのアプローチには、様々な価値観を理解することが大切である。そのためには、まず「日本」における伝統思想を学び、近代社会の成立に大きな影響を与えた西洋思想についての基礎的知識も学ぶことが重要だ。有史以来、どのような哲学・思想があったのか、そして、どのような倫理・道徳が重視されてきたのかを見る事は、現代日本を生きる我々の生活に結び付く。伝統的な道徳・思想を学ぶことは、現代日本で活動するなかで、自分や他者が、どのような判断を下して自らの生き方を形作っているのかを気付くことに繋がる。哲学・思想を学ぶことが、現代を生きるための実践的知識獲得の基礎となることでしょう。自らが社会生活を送る上で、自らがどのような価値観で生きていくのかを考えることが出来るような材料を与えるのが本講義の目的である。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

今後、実社会で様々な人と交流するとき、誰もがそれぞれの背景を背負っており、価値観にも多様性が存在していることに思いをさせることが出来るようになる。また、是非判断や自己決定をせねばならないときに、自らの考えを自分なりに説明出来るようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

実社会に出て多くの人と交流する際、他者理解ひいては顧客理解には様々な判断材料が必要である。まずはそのための知識を身に付け、問題解決のための理論を学び、自らの発想力へと活かすことを求める。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

哲学入門では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。具体的には、クリッカーやアンケートに取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、価値観の違いを共有し、自他の違いに対する意識を高めて自ら思索する力を高めることが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

1.5時間。各講義で取り上げる人物やテーマについて、事前に理解を深めておくことが求められる。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクションー「哲学」・「思想」とは何かー
- 第2講 日本に「哲学」はあるのか? ー西田幾多郎ー
- 第3講 ギリシア哲学の世界
- 第4講 「正直」と「誠実さ」
- 第5講 キリスト教の登場とギリシア哲学との出会い
- 第6講 イスラーム世界の誕生
- 第7講 I.カントと〈動機の純粋性〉
- 第8講 J.S.ミルと〈結果の重視〉
- 第9講 自由主義と自己決定権
- 第10講 哲学の世界では「正義」とはどのような意味で使われているのか
- 第11講 現代哲学の応用その1ー「人間」・「生命」の理解ー
- 第12講 インド仏教の誕生と死生観
- 第13講 「神道」について
- 第14講 21世紀における環境思想
- 第15講 まとめー現代哲学のゆくえー

■フィードバックの要領

授業内課題は、基本的に次の授業回にフィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 評価点 100点のうち 90点以上
- 評価 A (89~80点) : 評価点 100点のうち 89点~80点
- 評価 B (79~70点) : 評価点 100点のうち 79点~70点
- 評価 C (69~60点) : 評価点 100点のうち 69点~60点
- 評価 F (59点以下) : 評価点 100点のうち 59点以下

■評価方法

評価点 100点は、授業内試験 (40%)、各回の授業内課題による授業の理解度をみる平常点 (60%) の合計点で換算する。各回の授業内課題は、全て授業時間内に出さなければ、平常点として加点しない。

■留意点

授業中における制限事項: (1) 授業中の食事は厳禁。(2) 20分以上の遅刻、不要不急の途中退席は認めない。(3) 不必要な私語は控えること。(4) 座席指定に対して無断で席の移動は禁止。以上の違反に対し教員による注意を受けても是正されない場合、退室を求められることがある。また、授業単位の取得に対してペナルティを付けることがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 特別講座Ⅰ・Ⅱ (Consideration RevolutionⅠ・Ⅱ)**サブタイトル** 寺島実郎学長監修リレー講座**担当教員** 寺島実郎(退)、湯谷加穂、金小西小枝(退)、新西智恵、高橋田中(友)、
千原真、西藤中津、長島中隆、野坂勲、前田ハートウ、藤原泰貴**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

寺島実郎学長が提唱してきた「世界潮流と日本の進路」を軸に、国際情勢、経済、歴史、社会、AI、IoTなど各分野における精鋭の専門家を講師として招き、通年の体系的なプログラムを開催する。現代世界は、単なる同時不況、経済危機を超え、本質的な意味での構造転換に直面している。「外は広く、内は深い」、このことを知るだけで人間の重心は下がる。鈴木大拙の言葉のごとく、より広い視野で世界を見渡し、より深く自らの立脚点を見つめる視座が求められている。この連続講義では、我々が生きている時代を的確に把握し認識するために、世界から見た日本、また日本国内の諸問題について複数回にわたり多面的に取り上げることで、問題意識の提起と深化を目指す。時代に発信する識者の生の声を聞いて現代世界を生きるヒントを得てもらいたい。

■科目分類

グローバルビジネス／ビジネスICT／地域ビジネス

■到達目標

自分自身が生きている時代を把握し認識するために、連続講座を通じて提起される数々の問題や課題について自身なりの解決策を考える。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

国際情勢、経済、歴史、日本社会、企業、AI、IOT、多摩地域などグローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処している専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

特別講座では、アクティブラーニングとして専用ノートを用いたワークシート作業を実施し、提出物に対して教員からのフィードバックを行う。社会の第一線で活躍するゲスト講師の講演を一方的に聞くのではなく、ワークシートを用いて講演内容を理解し、疑問を投げかけ、自ら調べ考えることにより、世界潮流を理解し展望する視座を深め、全体知を身につけていくことが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前に、パンフレットのテーマに従いキーワードを調べる(1時間)。授業後に、講義において生じた疑問、感じた問題点について調べた上で、気付きや自分なりの意見を専用ノートの右側のページに記述する(2時間)。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 外部講師による講演
- 第3講 外部講師による講演
- 第4講 外部講師による講演
- 第5講 外部講師による講演
- 第6講 外部講師による講演
- 第7講 外部講師による講演
- 第8講 前半6講演の内容を基に中間レポートを作成
- 第9講 外部講師による講演
- 第10講 外部講師による講演
- 第11講 外部講師による講演
- 第12講 外部講師による講演
- 第13講 外部講師による講演
- 第14講 外部講師による講演
- 第15講 後半6講演の内容を基に最終レポートを作成する。

■フィードバックの要領

講義専用ノートに対してコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 平常点、講義専用ノート、中間および最終レポートの合算点が、90%以上であること。
- 評価 A (89~80点) : 平常点、講義専用ノート、中間および最終レポートの合算点が、89~80%であること。
- 評価 B (79~70点) : 平常点、講義専用ノート、中間および最終レポートの合算点が、79~70%であること。
- 評価 C (69~60点) : 平常点、講義専用ノート、中間および最終レポートの合算点が、69~60%であること。
- 評価 F (59点以下) : 平常点、講義専用ノート、中間および最終レポートの合算点が59%以下は不合格とする。

■評価方法

平常点(40%)、講義専用ノート(30%)、中間および最終レポート(30%)の割合で評価する。

■留意点

①第1回目のガイダンスに出席しない場合、履修できない。尚、履修希望者が多い場合は履修者を選抜することがある。②地域住民をはじめとする一般参加者約も外部講師の講演を聴講するため、受講ルールを厳守すること。③コロナ感染防止のため、講演実施会場(001教室)ではなく他教室(101教室、201教室等)でのリアルタイム・ライブ配信の視聴となる場合がある。

科目名 Web サービス開発 (Web Service Building)**サブタイトル** JavaScript + Web API**担当教員** 出原 至道**対象学年** 3 年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

本講義は、「Web プログラミング」と並んで、開発系科目の最上位に位置づけられる。開発の分野を志す学生にとって、大きな武器となる科目である。「Web プログラミング」がサーバサイドのアプリケーション開発を行うのに対し、本講義では、Web ページに埋め込まれる形で実行されるクライアントサイドアプリケーション開発を実践する。具体的には、ウェブ上で提供されている様々なデータを API (Application Programming Interface) を通してリアルタイムで自動的に収集し、それに基づいたサービスを利用者に提供するアプリケーションを開発する。講義では、最先端の API を実装実験するため、実際に取り上げる API は変更される場合がある。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

- ・クライアントサイドアプリケーションが実装できるようになる。
- ・XML 形式のデータ構造が理解できる。
- ・Web API の概念を理解し、自力で自由に使える。
- ・新しい Web サービス提案ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

Web API の概念を理解し、自力で自由に使えるようになることで、新しい Web サービス提案ができるようになる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] その他: 相互レビュー

git による vcs とレビュー

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義内では、API の概要を説明し、簡単な実験を行う。実装は、各自が次回講義までに行い、課題として提出すること。(事後学習 3 時間) この課題提出がない場合、単位の取得を認めない。

■授業の概要

- 第1講 インTRODクション (基本技術の確認・開発環境の整備)
- 第2講 JavaScript 入門
- 第3講 変数
- 第4講 属性の書換と CreateElement
- 第5講 外部スクリプトの利用 (1)
- 第6講 外部スクリプトの利用 (2)
- 第7講 JSON の処理
- 第8講 JSON の処理 (演習)
- 第9講 JSON の処理 (解説)
- 第10講 Google Maps API (1)
- 第11講 Google Maps API (2)
- 第12講 Google Maps API (演習)
- 第13講 仮想 API
- 第14講 仮想 API (演習)
- 第15講 全講義の復習とまとめ

■フィードバックの要領

試験の模範解答を受講生に公開する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
 評価 A (89~80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
 評価 B (79~70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
 評価 C (69~60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 点未満

■評価方法

中間発表・最終発表を前提として、以下の配分で評価する。授業内レポート (30%)、作品 (20%)、試験 (50%)

■留意点

ウェブデザイン・プログラミングの能力を当然に要求する科目である。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 Webプログラミング (Web Programming)**サブタイトル** サーバサイドプログラミング**担当教員** 出原 至道**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

この講義は、ビジネスICTの開発系スキルの集大成として、実践を通じて、Webプログラミング環境構築、HTML、CSS、PHPプログラミング、データベースシステムとの連携を習得し、Webプログラミングの全体像を理解することを目的とする。これにより、受講生は、さまざまなシーンで高度にWebを活用して問題解決に資する能力を得ることができ、実社会で高く評価される。講義にはPCを持参すること。受講生の技術レベル・進度に応じて、講義内容を調整することがある。

■科目分類

ビジネスICT

■到達目標

(1) Webプログラミング環境を構築できる (2) HTMLを使ったWebページを作成できる (3) HTMLにCSSを組み込んでWebページを作成できる (4) PHPプログラムを作成できる (5) PHPプログラムによりHTMLのフォームを作成し処理できる (6) PHPプログラムによりウェブデータベースシステムが構築できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

さまざまなシーンで高度にWebを活用して問題解決に資する能力を得る。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/その他: git による vcs

バージョン管理ソフトウェア git による結果の共有、レビュー

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

各回の講義では、実習時間が不十分であるので、各回 90 分程度の実習を通して、説明した要素技術について習熟を深めること。

■授業の概要

- 第1講 Webの基礎と環境構築
- 第2講 HTMLの基礎 (復習)
- 第3講 HTMLの基礎 (アンカー)
- 第4講 CSS
- 第5講 PHPの基礎の習得
- 第6講 FORMによるデータの送信・PHP側での受信
- 第7講 二重配列
- 第8講 データベースの基礎
- 第9講 PHPとデータベース
- 第10講 サニタイズ
- 第11講 セッション管理
- 第12講 掲示板からのデータ取得
- 第13講 掲示板の実装
- 第14講 独自機能の実装
- 第15講 試験準備

■フィードバックの要領

試験結果の講評をウェブ上で行う。提出されたレポートをオンラインで添削する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
 評価 A (89~80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
 評価 B (79~70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
 評価 C (69~60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 点未満

■評価方法

講義内で複数回出題される課題提出 (60%)、試験 (40%)。

■留意点

・コンピュータを持参すること。前提知識として、① Webの使い方、②基礎的なプログラミングの知識・能力を持っていること。扱う内容が多岐にわたり (HTML、CSS、PHP など)、それらの知識を積み上げていく必要があるため、理解が難しいと感じた場合は自ら Web や参考書籍などで調べてフォローする必要がある。github の利用が前提である。

科目名 アジア経済論Ⅰ (Asia EconomyⅠ)**サブタイトル** アジア・ユーラシアダイナミズムと企業戦略、そして起業家精神**担当教員** 金 美徳**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

21世紀は、アジア・ユーラシアダイナミズムの時代である。換言すれば「ビジネス＝アジア」、「人生＝アジア」の時代と言っても過言でない。今や日本企業は、アジアの成長やエネルギーを取り込むため躍起になっている。本講義では、アジア経済の体系的な知識・理論やアジアの企業・産業・市場・情勢に関する情報の収集・分析方法を学ぶ。また、「アジア」をキーワードにして、日本企業の経営戦略・商品開発・経営企画・ビジネスモデルや日本経済の課題を考察する。さらに、アジア経済論Ⅰで学んだことを就活・ビジネス・起業に活かす方法も考える。本講義のキーワードは、アジア・ユーラシアダイナミズム、グローバルビジネス、アジアビジネス、アジアマーケティング、インバウンド(外国人観光客)、新興国ビジネスモデル、アジアの知恵と日本の知恵の融合、地政学的知と地政学的戦略、アジアマインド、アジアセンスである。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／グローバルビジネス

■到達目標

①アジアの政治外交・経済ビジネス・文化社会に関する基礎的な知識・理論を習得する。②アジア発のビジネス情報の収集力・分析力・発信力を身に付ける。③アジア・ユーラシアの潮流・論理・視点に基づく経営戦略力、ビジネスモデル構築力、起業力を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

アジア・ユーラシアダイナミズムに向き合う姿勢や勇気を育み、グローバルビジネスの場で活躍すると共にわが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようにする。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

「アジア経済論Ⅰ」では、アクティブ・ラーニングとして「個人ワーク」を行う。具体的には、「リサーチ内容や問題意識を教員・学生間で議論する形式」で取り組む。この議論に主体的・能動的に参加することにより、「思考力や論理力を身に付けさせる」ことが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

アジア情勢やアジアビジネスに関するニュースやネット情報を調べる(1.5時間)。授業開始時に2~3名の学生に報告してもらう(30分)。

■授業の概要

- 第1講 アジア経済論Ⅰガイダンス
- 第2講 アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか (1)
- 第3講 アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか (2)
- 第4講 アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか (3)
- 第5講 ビジネスに重要な平和に対する敏感さ (1)
- 第6講 ビジネスに重要な平和に対する敏感さ (2)
- 第7講 ビジネスに重要な平和に対する敏感さ (3)
- 第8講 日本企業の現状と課題 (1)
- 第9講 日本企業の現状と課題 (2)
- 第10講 アジア市場とアジア戦略 (1)
- 第11講 アジア市場とアジア戦略 (2)
- 第12講 アジア市場とアジア戦略 (3)
- 第13講 アジア市場とアジア戦略 (4)
- 第14講 アジア戦略レポートのテーマ発表①
- 第15講 アジア戦略レポートのテーマ発表②

■フィードバックの要領

レポートのテーマや設定理由について、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 毎回提出の講義メモなど平常点と最終レポートの合算点が、90%以上であること。
- 評価 A (89~80点) : 毎回提出の講義メモなど平常点と最終レポートの合算点が、89~80%であること。
- 評価 B (79~70点) : 毎回提出の講義メモなど平常点と最終レポートの合算点が、79~70%であること。
- 評価 C (69~60点) : 毎回提出の講義メモなど平常点と最終レポートの合算点が、69~60%であること。
- 評価 F (59点以下) : 平常点と最終レポートの合算点が、59%以下の場合は、不合格とする。

■評価方法

評価は、毎回提出の講義メモなど平常点(70%)と最終レポート(30%)の割合で行う。①講義メモは、採点后、講義の最終段階で返却する。②最終レポートは、A4用紙3枚以上とする。

■留意点

- ①携帯電話・パソコンは、使用を禁止する。②私語、帽子着用、飲食は、禁止する。③遅刻および途中退室は、厳禁とする。途中退室は、必ず入退室を記録(日付・時間・学籍番号・氏名)すること。④就職活動による欠席は、公平性を保つため欠席扱いとする。⑤講義メモの不正提出は、即刻、不合格とする。⑥最終レポートの不正提出は、不合格とする。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 アジア経済論Ⅱ (Asia EconomyⅡ)**サブタイトル** 日本と中国・中華圏の架け橋となる人材を目指そう**担当教員** パートル**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。本講義では、世界経済の牽引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を中心としながら、大中華圏（中国・台湾・香港・シンガポール）や中国の「一帯一路」構想の最新動向を踏まえ中国の辺境経済圏を立体的かつ複眼的な視点で理解するための基礎知識の習得と知見の広がり、そして日本をめぐる世界潮流、日本企業のビジネス環境を「読む」力の養成を目指す。具体的には最前線事例を取りあげながら産業界が求める問題発見能力と問題解決能力及び高度なコミュニケーション能力を備えた人材育成を念頭に置いた講義を行う。受講生は、本講義を通じて修得した知識を自分の将来に向けて活用できるようにすることが求められる。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏・中国辺境経済圏のビジネスに関する基礎的な知識の修得。②中国・大中華圏・中国辺境経済圏の特徴と関連企業の経営戦略を分析し、日本企業の新たな経営戦略・ビジネスモデルの立案、企業間の協力の可能性について考える。③講義で修得した知見を就職活動で活用できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

中華圏・中国辺境経済圏に関する基礎的な学力を養い、グローバル（中華圏・中国辺境経済圏）とローカル（日本）の関係を意識しながら産業界に発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

「アジア経済論Ⅱ」では、アクティブラーニングとして受講生による「課題解決のための提案」を行う。具体的には、アジア地域の諸問題をビジネスの視点から解決するための具体的な提案を講義レポートにまとめる。受講生が本活動に主体的・能動的に参加することにより、講義内容をまとめるだけのレポートに留まらず、問題の発見と課題解決に取り組むスキルを向上させることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

大中華圏や中国の辺境経済圏に関する時事問題をはじめ、講義内容の中で自分自身に関心をもった分野についての情報の収集、分析、調査を行う習慣をつけること。予習復習に要する時間は各 1.5 時間以上とする。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス、講義目的、内容、受講上の心得について解説。
 第2講 大中華圏 (1)～台湾編：台湾の歴史、文化、経済状況
 第3講 大中華圏 (2)～香港編：香港の歴史、文化、華人財閥
 第4講 大中華圏 (3)～シンガポール編：シンガポールの歴史、文化、経済状況
 第5講 中国の「辺境経済圏」(1)：「新シルクロード経済圏」
 第6講 中国の「辺境経済圏」(2)：「グレーターメコン経済圏」
 第7講 中国の「辺境経済圏」(3)：「東北アジア経済圏」
 第8講 中国の「辺境経済圏」(4)：「ヒマラヤ経済圏」
 第9講 中国企業の対外投資の現状と課題：中国企業の海外進出の目的と成果
 第10講 中国の対外関係 (1)～米中関係
 第11講 中国の対外関係 (2)～中露関係：中国とロシア両国の経済・外交関係、SCO
 第12講 中国の対外関係 (3)中国と中東・アフリカ関係：中国と中東アフリカ関係の現状
 第13講 中国の対外関係 (4)～中国と欧州関係：中国と欧州関係の現状
 第14講 日中経済関係の現状と課題：日中経済関係の最新状況
 第15講 秋学期の総括：大中華圏・中国の辺境経済圏・「一帯一路」・AIIBの最新動向。

■フィードバックの要領

毎回の講義レポートに対しコメントをつけてフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：100 点満点中 90 点以上。
 評価 A (89～80 点)：100 点満点中 89～80 点。
 評価 B (79～70 点)：100 点満点中 79～70 点。
 評価 C (69～60 点)：100 点満点中 69～60 点。
 評価 F (59 点以下)：100 点満点中 59 点以下。

■評価方法

毎回の講義レポート 60% (15 回×4 点/回=60 点)、最終レポート 30%、授業への参画度 10% (1～10 点) の 100% で絶対評価。

■留意点

採点配分は、講義レポート 60 点、最終レポート 30 点 (A4 用紙 2 枚以上)、授業への参画度 10 点。参画度とは、アクティブラーニングとして課題解決のための提案を行った場合、一提案につき 1 点、最大 10 点の加点を行う。講義レポートは、講義内容を理解し、かつ独自の問題意識を持ち、課題解決に向けての取り組み姿勢が顕著に表れているのかを重視する。採点后、返却してフィードバックを行う。

科目名 キャリア・デザイン III (Career Design III)**サブタイトル** 社会の変化を知る・自己を知る・業界と企業を知る**担当教員** 初見、浜田**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

本講義を通して、自己の将来を考え、卒業後の職業生活（キャリア）の方向性を検討する。具体的には、(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解することの3点を通して、将来のキャリアデザインを設計していく。キャリア・デザインⅢでは、特に「履歴書・エントリーシートの書き方」、「筆記試験」、「面接」、「業界・企業研究」について学んでいく。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解する、の3点を通して、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

(1) 社会の変化、(2) 自己理解、(3) 業界・企業の分析を通して、職業観の育成を図ると共に、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク

キャリア・デザインⅢでは、アクティブ・ラーニングとしてフィールドワークを行う。6月に開催される Web インターンシップ EXPO に参加し、興味のある業界・企業を3社以上回る必要がある。主体的・能動的に参加することにより、自己の職業適性や興味のある仕事を見つけ出すことが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

講義テーマに対する事前学習（1.5時間）。講義後の振り返りシート（本日の学び）の作成と内容の復習、指定図書の読書など（1.5時間）。

■授業の概要

- 第1講 キャリア・デザインⅢガイダンス
- 第2講 履歴書・エントリーシート①（形式・書き方の基本を学ぶ）
- 第3講 履歴書・エントリーシート②（自己PR等を書いてみる）
- 第4講 筆記試験について（SPI 模擬試験の受験）
- 第5講 面接について①（集団面接について）
- 第6講 面接について②（個人面接について）
- 第7講 マナー講座（インターンシップ・就職活動に必要なマナーを学ぶ）
- 第8講 業界・企業研究①（招聘企業による業界・企業研究）
- 第9講 業界・企業研究②（多摩地域の招聘企業による業界・企業研究）
- 第10講 フィールドワーク①（就職サイトへの登録・興味ある業界・企業の探索）
- 第11講 フィールドワーク②（振り返り・夏季休業中のインターンシップの検討）
- 第12講 キャリア・デザインⅢまとめ（ES・筆記試験・面接のまとめ）
- 第13講 予備日（振り替え休講①）
- 第14講 予備日（振り替え休講②）
- 第15講 キャリア・デザインⅢまとめ②（夏季休業中の行動計画の作成）

■フィードバックの要領

「本日の学び」の小レポート提出を行い、評価・フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：フィールドワークに参加し、提出物について大変優れている場合
- 評価 A (89～80点)：フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達している場合
- 評価 B (79～70点)：フィールドワークに参加し、提出物について一定の到達度に達している場合
- 評価 C (69～60点)：フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達していない場合
- 評価 F (59点以下)：フィールドワークに不参加、もしくは提出物について最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

「本日の学び」および講義で指示された課題の提出物（40%）フィールドワークへの参加（40%）履歴書・エントリーシートの提出（20%）

■留意点

本講義は主に3年生を対象とした科目である。本科目と共にキャリア・デザインⅣ（秋学期）やインターンシップⅠ・Ⅱの履修を推奨する。また、本科目では Web 上でのフィールドワーク（6月予定）への参加が必須となる。土日に開催される予定のため、事前のスケジュール調整を行うこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 コンピュータネットワーク活用 (Utilization of Computer Network)**サブタイトル** インターネットの仕組みを理解し活用する**担当教員** 中村 有一**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

ネットワーク技術は、いま世の中でもっとも必要とされる技術の1つである。単に概念を理解するだけでなく、具体的にネットワークにコンピュータを接続し、システムとして機能するようにしなければならない。さらに安定してネットワークを利用するには、セキュリティや信頼性の面にも配慮しておく必要がある。これらのことを、1つ1つ意味を理解しながらできるようにしていくのがこの講義の目的である。受講にあたっては、基本的な用語とその概念を理解し、実習を通して、具体的なネットワーク構築に必要な知識を習得する。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

現在主流として使われているネットワーク技術 TCP/IP の基礎的な仕組みを理解し、実際にネットワークを利用したり、トラブルに対処したりできるように、知識とスキルを身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

コンピュータネットワークの基礎的な用語を理解し、実際に活用するために演習を通して経験を深める。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

アクティブ・ラーニングとしてワークシートや簡単なクイズを行う。講義内容に関連する課題を出題して、講義時間内に Form で答えたり、当日中に T-Next で提出する。解答例などは時間内あるいは後日解説し、知識を実感として身につける。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5 時間)

復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ネットワークとプロトコルの話
- 第2講 物理層の話
- 第3講 無線ネットワークとデータリンク層の話
- 第4講 インターネット層の話 (1)：IP アドレス、2進数や16進数
- 第5講 インターネット層の話 (2)：CIDR とネットワークの分割
- 第6講 インターネット層の話 (3)：インターネット層における補完的なプロトコル
- 第7講 トランスポート層の話：TCP と UDP の違い、ポート番号
- 第8講 ドメイン名と DNS の話：アプリケーション層、ホスト名・ドメイン名、DNS
- 第9講 DHCP と文字端末の話：DHCP、TELNET、SSH
- 第10講 ウェブとファイル転送の話：HTTP、FTP
- 第11講 電子メールとネットワーク管理の話：SMTP、POP、IMAP、SNMP、NTP
- 第12講 ルーティングとアドレス変換の話：ルーティングプロトコル、アドレス変換
- 第13講 インターネットセキュリティの話：プロキシサーバ、ファイアウォール
- 第14講 情報システムとネットワークの話：データの蓄積とサービス
- 第15講 暗号と認証の話：公開鍵暗号の基本的な仕組み

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：100 点～90 点
- 評価 A (89～80 点)：89 点～80 点
- 評価 B (79～70 点)：79 点～70 点
- 評価 C (69～60 点)：69 点～60 点
- 評価 F (59 点以下)：59 点以下

■評価方法

学期末試験 70% レポートなど平常点 30%

■留意点

コンピュータを使った演習については、自分で必ず実際に動かしてみることを。単に本を読むだけでは得られない知識が得られるはずである。

科目名 サービス産業論 (Service Industry)**サブタイトル** サービスの市場創造とマネジメント**担当教員** 杉田 文章**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

「サービス」のプロダクトとしての本質を理解するとともに、狭義の「サービス」製品のみならず、サービス化したといわれるあらゆる産業分野におけるサービスの側面にも着目し、「サービス」産業経済の成長に資する知見を身につける。

■科目分類

顧客理解/ビジネス環境理解/ビジネスマネジメント

■到達目標

- ① 産業経済におけるサービス産業の必要性和有効性について理解していること。
- ② プロダクトとしてのサービスの概念について深く理解すること。
- ③ ①②をふまえて、サービス産業のマネジメントの課題を知り、これを解決する方法論を論じることができること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

サービス産業分野が、国際競争力の確保の上からも、国内市場の成長の観点からも重要な課題であることを深く理解した上で、今後のサービス市場分野の発展に対する知見を説明できる

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

サービスビジネスの現場をめぐる情報をもとに、サービス産業論の視点から課題点を抽出し、諸理論を援用して解決策について考察、可視化する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

提示されたテキスト、参考書を中心に、講義内容に即した予習と、講義後に示された課題を講義ごとに行うこと。(1回につき合計1.5時間程度以上)

■授業の概要

- 第1講 本講義の概要、目的、意味を理解する (ガイダンス)
- 第2講 製品 (product) としての「サービス」について学ぶ
- 第3講 社会の「サービス化」と産業の「サービス化」
- 第4講 サービスと「おもてなし」 ～グローバル市場における日本文化と産業のマッチング～
- 第5講 サービスを含んだプロダクト分析
- 第6講 サービス製品の構成要素について知る
- 第7講 サービス・エンカウンターについて学ぶ
- 第8講 サービスエンカウンターにおける、従業員の役割
- 第9講 カスタマー・ハラズメントを考える
- 第10講 サービス製品市場のマーケティング① サービス製品の「構成要素」
- 第11講 サービスの品質
- 第12講 顧客満足と顧客価値
- 第13講 サービスシステムの経営と革新① サービス産業のマーケティングミックス
- 第14講 サービス価値向上のための SPC を学ぶ
- 第15講 まとめと振り返り (授業内テスト)

■フィードバックの要領

講義時に提出するミニレポート等に対して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : サービス市場を深く理解し、問題解決を提案できる
 評価 A (89~80 点) : サービス産業や市場、製品について深く理解している
 評価 B (79~70 点) : サービス産業や市場、製品について一定の理解をしている
 評価 C (69~60 点) : サービス業と製造業の違いやそれぞれの特徴について説明できる
 評価 F (59 点以下) : 「サービス産業」「サービス製品」について説明できない

■評価方法

平常点および講義内で課されるミニレポート 3 割、最終レポート 3 割、講義内試験 4 割 の割合で評価する。

■留意点

サービス業に従事しようと考えている学生を想定し、そのキャリア形成に資することを意図して講義を行う予定です。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データサイエンス III (Data Science III)**サブタイトル** 経営情報のための統計学 / Applied Statistics for Management & Information Sciences**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

「IoT」に代表されるような高度情報化社会となり、問題解決のためにはデータを収集して、それをもとに考えることが当然となった。この講義では、データサイエンスの枠組みから経営情報におけるデータを活用するための基本力の習得を目指し、統計的データ分析を取り扱う。具体的には、データの要約と因果関係の検証のためのデータ分析を内容とする。このようなスキルは、共通のスキルであるので、受講しておくことをすすめる。なお、講義では実際に検討し、理解を深める事が重要であるので、コンピュータソフトを用いてデータ分析の基礎をも習得する。適宜、グループレポートなどを作成する。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

(1) 基礎的な離散分布と連続分布について理解し、統計的思考をもとに実際の場面で活用できる。(2) 平均の区間推定や仮説が行える。実際の問題解決問題を、統計的な枠組みで表現し分析できる。(3) 分散分析や重回帰モデルを適切に活用できる。因果関係について推測できる。(4) 意思決定に役立つ表現ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP2 思考と判断および DP3 関心と意欲：ビジネス環境で必須の課題解決のためのプロセスとデータをもとにした統計的分析力とを学習し、他者ともに社会や企業での課題を解決する力を修得する

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク

与えられた課題について、その解決のために仮説を設定しデータを収集する。仮説の根拠をチーム内で討議し、自らの仮説を検討する。統計的分析結果をまとめ、チーム内およびチーム間で発表する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

課される課題について、データを用いて分析すること。データを整備や分析やレポート作成などに 1.5 時間を費やされるので十分余裕を持ち完了して、指定した期限までに提出すること。

■授業の概要

- 第1講 二項分布再入門
- 第2講 離散型でもっとも基本的な二項分布に関して講義する。
- 第3講 正規分布再入門
- 第4講 標本分布について 標本平均とその分散
- 第5講 一元配置分散分析Ⅰ 正規分布 t検定との違い
- 第6講 一元配置分散分析Ⅱ 変動
- 第7講 分散分析モデル 演習
- 第8講 重回帰モデル 相関係数と決定係数
- 第9講 重回帰モデルでのパラメータの推定 質的説明変数
- 第10講 回帰分析 モデルの選択
- 第11講 重回帰分析 残差の評価
- 第12講 重回帰モデル 演習
- 第13講 二元配置分散分析
- 第14講 二元配置分散分析 演習 二元配置分散分析に関する演習を行う
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

提出されたリフレクションシートにもとづき、LMS 上で対応する

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：目的に応じた統計モデルを選択して、分析を実施、その結果を評価できる。
- 評価 A (89~80 点)：因果関係に関するモデルを適切に適用できる
- 評価 B (79~70 点)：確率分布をもとにしたモデルを適用できる
- 評価 C (69~60 点)：統計モデルを適用できる。
- 評価 F (59 点以下)：評価 A+~C までのいずれもできない。

■評価方法

通常課題提出 60% 期末課題提出 40% 統計検定 2 級または 3 級合格については評価で加点する

■留意点

本講義は、毎回の講義の内容を前提として講義を行う。また、講義では各回各人のワークシートの提出やチーム毎のデータ収集、レポート提出のアクティブラーニングを行うので、1 回目の講義から欠席せずに受講すること。各回で PC などを利用するので、その準備をすること。データサイエンス II を履修していること

科目名 データサイエンス IV (Data Science IV)**サブタイトル** ビジネスで活かすための多変量解析・分類**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

さまざまな問題解決のために必要なデータ解析の基礎的な内容を習得し、さらに自ら問題を考えそれを解決できる能力を養います。講義のなかでは、実際のデータを用い、JASPにより解析を行いワード等でレポートを作成します。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

データ解析の考え方と手法を十分に理解し様々な問題に対して実際に解析を行い解決につなげることが出来る。手法については、具体的に次の4つの項目について習得していること。1. 多変量データを用いて、単純集計・クロス集計ができる 2. 回帰分析 3. 主成分分析 4. クラスタ分析さらに、自ら問題を設定し、本講義で学んだ手法によってそれを解決できることがさらに望ましい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

データ分析に関する基礎的な学力を養い、産業社会で発生する問題にデータサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

データサイエンス IV では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。授業の中では毎回課題を設定し、それを JASP などを使用して分析し、その結果をレポートする。それによりビジネスに生かすデータサイエンスの知識を習得すると共に、実際に自ら分析できるスキルを獲得する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前：内容についてあらかじめデータを思い浮かべてイメージする。事後：授業でやった内容を復習する。事前 1.5 時間、事後 1.5 時間程度。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 重回帰分析 1
- 第3講 重回帰分析 2
- 第4講 重回帰分析 3
- 第5講 レポート (1)
- 第6講 ロジスティック回帰分析 1
- 第7講 ロジスティック回帰分析 2
- 第8講 ロジスティック回帰分析 3
- 第9講 レポート (2)
- 第10講 主成分分析 1
- 第11講 主成分分析 2
- 第12講 レポート (3)
- 第13講 クラスタ分析 1
- 第14講 クラスタ分析 2
- 第15講 まとめとレポート (4)

■フィードバックの要領

課題に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : レポート点で 90 点以上
- 評価 A (89~80 点) : レポート点で 80 点以上 89 点以下
- 評価 B (79~70 点) : レポート点で 70 点以上 79 点以下
- 評価 C (69~60 点) : レポート点で 60 点以上 69 点以下
- 評価 F (59 点以下) : レポート点で 59 点以下

■評価方法

レポート 4 回 (各 10%)、毎回のミニレポート (各 4%)。10×4+4×15=40+60=100

■留意点

PC は必携である。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビッグデータ活用法 (Utilizing Method of Big Data)**サブタイトル** ビッグデータの理解と具体的な活用法を企業に提案する**担当教員** 西村 公児**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

自分で問題解決の仮説・検証できる実践力を身につける

■科目分類

顧客理解／ビジネス創造／ビジネス ICT

■到達目標

ビッグデータの理論とビッグデータを活かしたビジネスへの実践学習

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、問題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク

ビッグデータの活用では、アクティブ・ラーニングとして実際のビジネスで売れる商品企画の立案を行います。具体的には、楽天市場の悪いレビューから改善のヒントをデータマイニングの手法を使って改善案の提案に取り組みます。本活動に主体的・能動的に参加することにより、就職後の企画立案ができるスキルを身に付ける目標です。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎授業後にはレポートを提出すること（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

- 1) 本日のキーワードを調べる
- 2) プレゼンテーション用の資料作成

■授業の概要

- 第1講 概要・イントロダクション平常点・キーワード・プレゼンする資料の内容
 第2講 AI（人工知能）とは
 第3講 AI（人工知能）を実際に活用するには
 第4講 ビッグデータとは
 第5講 ビッグデータがあるから AI は学習できるとは？
 第6講 顕在化した需要に応えるためのプロセスの概要とは
 第7講 分析・プランニングを支える基盤とは
 第8講 「知ってもらおう」ためのビッグデータの活用法
 第9講 「興味を持ってもらう」ためのビッグデータの活用法
 第10講 「調べてもらう」ためのビッグデータの活用法とは
 第11講 「買ってもらう」ためのビッグデータの活用法とは
 第12講 「ファンになってもらう」ためのビッグデータ活用法とは
 第13講 ビッグデータ活用を支える知識（ツール&分析手法）
 第14講 企業に提案するプレゼンテーション（個人立案）
 第15講 企業に提案するプレゼンテーション（個人立案）

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：知識・応用力（置換能力）・洞察力（展開力）を身に着けている（実践への応用が可能）
 評価 A (89～80 点)：知識・応用力（置換能力）を身に着けている。（実践に向けた取り組みが可能）
 評価 B (79～70 点)：最低限の知識を身に着けている。（勉強レベル）
 評価 C (69～60 点)：最低限の知識をつけるには取り組み姿勢の改善が必要である
 評価 F (59 点以下)：C に達しない程度的大幅な改善を要する

■評価方法

- 1) 理解習得・平常点…15% (15 点)
- 2) 課題図書から選定したキーワードを 300 字で説明する…15% (15 点)
- 3) プレゼンする資料作成…70% (70 点)

■留意点

科目名 ブランドマネジメント (Brand Management)**サブタイトル** 商品企画**担当教員** 内藤 旭恵**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

本講義では、地域をブランド化するための商品企画の基礎を学習する。

■科目分類

地域ビジネス

■到達目標

商品企画の基礎を理解するとともに地域をブランド化する手法を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

実際に、商品を企画してもらうため、どのような商品にすれば良いか自ら考えてもらう能力を養う。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

各チーム毎に多摩地域をPRする商品のサンプルを開発する。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

具体的には、街にあふれている様々な商品を見てくること。(各2時間程度)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 商品開発の事例紹介
- 第3講 商品企画とは
- 第4講 商品企画の概要
- 第5講 企画書の作り方(基礎)
- 第6講 企画書の作り方(応用)
- 第7講 企画書の作り方Ⅲ(実践)
- 第8講 ビジネスモデルを考えよう
- 第9講 顧客や競合他社についてリサーチする
- 第10講 アイデアから商品を試作する
- 第11講 商品コンセプトを明確にしよう
- 第12講 具体的な商品テーマを決めよう
- 第13講 差別化ポイントを明確にする
- 第14講 商品やサービスのパッケージの確定
- 第15講 まとめと課題提出

■フィードバックの要領

15回目の講義において、講評を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 平常点が良好で、完成した商品サンプルも優秀作品であった場合
- 評価 A (89~80点) : 平常点が良好で、完成した商品サンプルが良い作品であった場合
- 評価 B (79~70点) : 平常点が普通で、完成した商品サンプルも普通の作品であった場合
- 評価 C (69~60点) : 平常点が低いまたは、完成した商品サンプルが不出来であった場合
- 評価 F (59点以下) : 平常点が悪く、完成した商品サンプルが未提出または不出来であった場合

■評価方法

毎週配布する提出課題 50%、レポート点 15%、発表点 15%、作品点 20%

■留意点

特になし。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ **ロシア経済論 (Russian Economy)****サブタイトル** ▶▶▶ 外国の経済システムを理解しよう**担当教員** ▶▶▶ 小林 昭菜**対象学年** ▶▶▶ 3年生以上**区分** ▶▶▶ 秋学期**■授業目的**

日本の隣国であり、BRICsのうちの一国であるロシアについて経済の側面から学習する。日本と異なり天然資源が豊富なロシアは、国の根幹を担う経済に特別な「配慮」をしている。外国の経済システムや経済の流れを学習し、今後のアジア、ユーラシアにおける経済のダイナミズムについて想像を凝らしていくことを目的とする。

■科目分類

ビジネス創造／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

日本と異なる海外の経済事情について学習し、日本の見方・視点から脱し相手の国の立場に立って出来事を理解できるようにする。ロシアと日本との経済協力が可能なのか、ロシアとアジア諸国との経済協力は可能なのか、何ができて何が困難かを理解できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ロシアの経済システムを理解することは、他国、異文化理解である。社会で経験を積むためには、まず知識をつけそれを理解したのち、理解した内容に思考を重ね物事を判断していく必要がある。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] その他：フィードバック

課題に対するフィードバックを実施する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

ロシアに関するニュースを定期的に収集すること。授業で指示するプリントや新聞記事を事前に読み、感想を 1000 字程度で記入し授業に持参すること。（各 1.5 時間）

■授業の概要

- 第1講 インTRODakション ロシアってどんな国
- 第2講 ロシア経済の位置づけ①
- 第3講 ロシア経済の位置づけ②
- 第4講 ロシア経済の歴史と政治システム①
- 第5講 ロシア経済の歴史と政治システム②
- 第6講 ロシアの財政制度
- 第7講 中央アジア、コーカサスの市場経済化
- 第8講 ロシアと中国との経済関係
- 第9講 ロシアの労働人口
- 第10講 ゲスト講師による講演（ロシア経済、石油、天然ガスについて）（予定）
- 第11講 マクロ経済・産業構造
- 第12講 民営化と企業システム
- 第13講 国民の暮らし
- 第14講 開発と環境
- 第15講 ロシア極東地域、これまでの講義のまとめ

■フィードバックの要領

授業内で課す課題の回答は毎回授業で回収。翌週の授業で複数名の回答を紹介する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：平常点（毎週の課題の出来や学習態度が非常に良い）。中間レポートと試験の出来 9 割以上。

評価 A（89～80 点）：平常点（毎週の課題の出来や学習態度が良い）。期末試験の出来 8 割。

評価 B（79～70 点）：平常点（毎週の課題の出来や学習態度がまあ良い）。期末試験の出来 6—7 割。

評価 C（69～60 点）：平常点（毎週の課題の出来や学習態度は良い）。期末試験の出来 5 割。

評価 F（59 点以下）：平常点（毎週の課題の出来や学習態度が悪い）。期末試験の出来 4 割以下。

■評価方法

授業内で毎回課す課題（プリントを読んでの感想）：40%、授業への積極的態や発言：25%、期末試験：35%。

■留意点

初回及び第2回目の授業は、本講義の目的、目標、今後の方針について説明するため、その説明を理解した者に履修してもらいたい。従って、初回と第2回目の講義に欠席した場合は履修登録から削除する場合がある。本講義では毎回課題を課すが、その課題に対してきちんと論理的にまとめることができている、回答になっていない提出物はその回の出席の取消しを検討することもある。試験は筆記の記述式で実施する。

科目名 韓国経済論 (Korean Economy)**サブタイトル** 日韓ビジネス**担当教員** 金 美徳**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

1つは、韓国企業について学ぶ。日本企業（中小・ベンチャー企業含む）が韓国進出するか否か、韓国企業をライバルにするかパートナーにするか、韓国人観光客や韓国企業の日本への誘致策を考える。また、韓国企業と日本企業の経営スタイルやグローバル戦略を比較研究することにより、新たな経営戦略やビジネスモデルを考察する。さらに、韓国企業を通じて、アジア企業やアジアビジネスについて学ぶことである。2つ目は、朝鮮半島情勢を知る。朝鮮半島は、韓国と北朝鮮、南北に分断されており、緊迫かつ不安定な情勢である。そのため、日本の平和や企業のリスクマネジメントを考える上で、朝鮮半島情勢分析は必要不可欠である。本講義のキーワードは、日韓ビジネスと日韓企業連携、韓国企業とアジア企業、韓流マーケティングとアジアマーケティング、アジアビジネスと新興国ビジネス、激動する朝鮮半島とアジアダイナミズムである。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／グローバルビジネス

■到達目標

①韓国と北朝鮮の政治外交・経済ビジネス・文化社会に関する基礎知識を習得する。②韓国企業の経営スタイルやグローバル戦略などの特徴を分析し、日本企業の新たな経営戦略やビジネスモデルを立案する。または日韓ビジネスのアイデアを考える。③朝鮮半島問題に対する問題意識の向上を図り、国際情勢や平和に敏感になる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

平和に敏感なビジネスパーソンや経済人として、日韓ビジネスの場で活躍するとともにわが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようにする。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

[韓国経済論]では、アクティブ・ラーニングとして「個人ワーク」を行う。具体的には、「リサーチ内容や問題意識を教員・学生間で議論する形式」で取り組む。この議論に主体的・能動的に参加することにより、「思考力や論理力を身に付けさせる」ことが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

朝鮮半島情勢や日韓ビジネスに関するニュースやネット情報を調べる（1.5時間）。授業開始時に3～5名の学生に報告してもらう（30分）。

■授業の概要

- 第1講 韓国経済論ガイダンス
- 第2講 韓国政治の基礎 (1)
- 第3講 韓国政治の基礎 (2)
- 第4講 韓国政治の基礎 (3)
- 第5講 韓国政治の基礎 (4)
- 第6講 韓国経済の基礎 (1)
- 第7講 韓国経済の基礎 (2)
- 第8講 韓国経済の基礎 (3)
- 第9講 韓国経済の基礎 (4)
- 第10講 北朝鮮の政治・経済の基礎 (1)
- 第11講 北朝鮮の政治・経済の基礎 (2)
- 第12講 北朝鮮の政治・経済の基礎 (3)
- 第13講 北朝鮮の政治・経済の基礎 (4)
- 第14講 最終レポートのテーマ、設定理由、目次の発表①
- 第15講 最終レポートのテーマ、設定理由、目次の発表②

■フィードバックの要領

レポートのテーマと設定理由は、フィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 平常点、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、90%以上であること。
- 評価 A (89～80点) : 平常点、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、89～80%であること。
- 評価 B (79～70点) : 平常点、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、79～70%であること。
- 評価 C (69～60点) : 平常点、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、69～60%であること。
- 評価 F (59点以下) : 平常点、講義メモ、最終レポートの合算点が59%以下の場合は、不合格とする。

■評価方法

①平常点 (35%)、毎回提出の講義メモ (35%)、最終レポート (30%) の割合で評価する。②講義メモは、最低限の記述内容が記載されていない場合は、減点する。③最終レポート (30%) は、A4用紙3枚以上とする。

■留意点

①携帯電話・パソコンは、使用を禁止する。②私語、帽子着用、飲食は、禁止する。③遅刻および途中退室は、厳禁とする。④就職活動による欠席は、公平性を保つため欠席扱いとする。⑤講義メモの不正提出は、即刻、不合格とする。⑥最終レポートの不正提出は、不合格とする。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営とセキュリティ (Management and Security)**サブタイトル** 情報化社会に対応する企業活動の変化と情報セキュリティ**担当教員** 内藤 旭恵**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

情報通信技術の急激な進展により、社会、経済、生活が大きく変化して情報社会 (Society 4.0) となった。さらに「頭脳としての AI、筋肉としてのロボット、神経としての IoT」を活用した「Society 5.0」の到来も考えられている。インターネット上の情報やサービスを調査したり、実際に体験したりすることを通して、私たちの暮らしの変化、今後の方向について考える。また、サイバー犯罪やサイバーテロ、個人情報の扱いなど、情報社会において問題となってくる影の部分とその対応について学ぶ。

■科目分類

ビジネス環境理解/ビジネス ICT

■到達目標

経営とセキュリティの基礎知識を理解し、サイバーテロやサイバー犯罪の脅威を認識し、再発防止や対応策を理解してもらうことにある。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

企業経営にとっての情報セキュリティとは何かを理解し、情報セキュリティ対策の必要性について理解する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

本講義では、経営用語やセキュリティ用語を調べてもらい、毎回の講義で数名に発表してもらう。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。また、講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度 (合計 3 時間程度) である。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：情報社会と IT 政策
- 第2講 ワークスタイルの変化
- 第3講 行政の情報化 (1)
- 第4講 行政の情報化 (2)
- 第5講 健康・医療分野の情報化 (1)
- 第6講 健康・医療分野の情報化 (2)
- 第7講 防災・安全分野の情報化
- 第8講 教育の情報化
- 第9講 家庭の情報化と社会の変化
- 第10講 サイバー犯罪、サイバーテロ (1)
- 第11講 サイバー犯罪、サイバーテロ (2)
- 第12講 情報セキュリティ対策
- 第13講 個人情報の保護と活用 (1)
- 第14講 個人情報の保護と活用 (2)
- 第15講 まとめと今後の課題

■フィードバックの要領

中間期末レポートに対するフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：講義に参加する態度が 50%、中間レポートが 25%、期末レポートが 25%となる。
 評価 A (89~80 点)：講義に参加する態度が 40%、中間レポートが 20%、期末レポートが 20%となる。
 評価 B (79~70 点)：講義に参加する態度が 30%、中間レポートが 15%、期末レポートが 15%となる。
 評価 C (69~60 点)：講義に参加する態度が 20%、中間レポートが 10%、期末レポートが 10%となる。
 評価 F (59 点以下)：講義に参加する態度が悪いまたは、中間・期末レポートの提出がない場合は F となる。

■評価方法

講義に参加する態度が 50%、中間レポートが 25%、期末レポートが 25%となる。

■留意点

科目名 経営と意思決定 (Decision Making for Management Sciences)**サブタイトル** 量的意思決定支援の方法**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

ビジネス環境を含めた経営には、競争があり、そこではさまざまな問題解決のためには戦略的なアプローチが必要である。それは、これらがリスク下での意思決定問題として表現できることからわかる。本講義では、さまざまな状況下で適切に判断できる能力や技法などの意思決定の基礎について合理的な解決に活用しうる定量的方法について例を交えながら学ぶ。いくつかの課題については、グループ課題として行う。1. 意思決定とは、2. 確実性のもとでの意思決定、3. 不確実性のもとでの意思決定、4. ベイズ意思決定。

■科目分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

ビジネス環境での意思決定に関して次の項目について講義する。1. 意思決定とは、2. 確実性のもとでの意思決定、3. 不確実性のもとでの意思決定、4. ベイズ意思決定。特に次の習得を目標とする。(1) 定量的意思決定 (2) Decision Tree について理解している、(3) ベイズ意思決定について理解している。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP2: 思考と判断 意思決定に関して、その問題や課題での状況と目的に応じてモデル化できる能力を修得するまた、DP4: 意思決定をわかりやすく伝え、相手の意見をもとによりよい意思決定を実践できるようにする

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク

意思決定の問題について、計算を行い、意思決定を行う。各自の意思決定結果とその結果をまとめ、他の人の意思決定に比較検討する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義での課題を次回の演習時間に提出することを想定している。課題を解くには、1 時間程度、レポートとしてまとめるのに 0.5 時間ほど必要と考えられるので十分余裕をもっておくこと

■授業の概要

- 第1講 意思決定を考える：何故定量的な意思決定が必要かについて講義する
- 第2講 確実性のもとでの意思決定
- 第3講 確実性のもとでの意思決定
- 第4講 確実性のもとでの意思決定 代替案の選択 I 選択基準
- 第5講 確実性のもとでの意思決定 演習
- 第6講 選択基準 効用を評価する
- 第7講 選択基準 期待値
- 第8講 期待値による意思決定
- 第9講 不確実性での意思決定 演習
- 第10講 分岐型の意思決定
- 第11講 不確実性のもとでの意思決定 ディジションツリー I
- 第12講 不確実性のもとでの意思決定 ディジションツリー II 条件付確率の応用
- 第13講 ディジションツリーとベイズ意思決定 I
- 第14講 ディジションツリーとベイズ意思決定 II ベイズモデル
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

講義をもとに提出されたリフレクションシートをもとに行う

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 学習した方法を理解して、問題解決に適用し提案できるか。
- 評価 A (89~80 点) : 学習した方法を理解して、問題解決に適用できるか
- 評価 B (79~70 点) : 学習した手法のうち、すくなくとも 2 つの手法について問題解決に適用できるか
- 評価 C (69~60 点) : 学習した手法のうち、1 つの手法について問題解決に適用できるか
- 評価 F (59 点以下) : 学習した手法について、理解不十分で問題解決に適用できない

■評価方法

平常点 20%、講義内レポート 40%、最終課題 40%

■留意点

この講義では定量的意思決定を扱うので、数理的処理に関する科目 (データサイエンス、経営科学) などの事前履修が必要となる。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営組織 (Management Organization)**サブタイトル** 組織理論の理解と実践**担当教員** 小林 英夫**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

企業は最も重要な経営資源である人を一つの組織としてまとめあげ、直面する内外の課題を解決し、成果をあげ続けることを目指す存在である。時代とともに変貌する組織のあり方、組織を構成する人的資源を最大に発揮する方法などを考える科目である。この問題に対してこれまでの学術的成果を踏まえ理論的側面からの検討を行うとともに、理論を実務に適用する際の考慮点を学び、実践的行動ができる能力を獲得する。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／グローバルビジネス

■到達目標

①組織とは何で企業組織はどのように運営されているのかを理解し説明できる、②組織の主要構成要素である人的資源が組織の中でどのように活かされているのかを理解し説明できる、③自らが組織を通じてキャリアを築き産業社会へ貢献するイメージを描くことができる、の3点を到達目標とする。これらを通じ、社会に貢献していくための知識や意欲、および組織の中で役割分担により組織目標の達成に貢献する力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

組織理論を体系的に学び理論を用いて実務的な問題解決方法を考えることができるとともに、組織的課題への対処を事例から学び、思考力や判断力、状況対応力を習得する。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

経営組織では、アクティブラーニングとしてミニッツペーパー提出とフィードバックによる教員との双方向コミュニケーションを行う。アルバイト等を通じて感じている組織とフルタイム正社員として経験したことの異なる組織の違いを意識し、組織が果たす機能や役割を分析・考察して記述しフィードバックを受けることを通じ、組織人として働く資質を身につけていくことが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする（1.5 時間）。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する（1.5 時間）。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション
- 第2講 人の欲求と労働
- 第3講 組織構造と分業
- 第4講 経営組織論における組織と官僚制
- 第5講 古典的管理論
- 第6講 新古典派組織論
- 第7講 近代組織論
- 第8講 コンティンジェンシー理論と行動科学的管理論
- 第9講 モチベーション
- 第10講 人的資源管理
- 第11講 リーダーシップ
- 第12講 キャリアマネジメント
- 第13講 企業理念と組織文化
- 第14講 ゲスト講演
- 第15講 学習成果の確認－授業内期末試験

■フィードバックの要領

ミニッツペーパーもしくは T/F テストの講評と、質問への回答を翌回講義で行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：授業貢献点と期末試験の合計が 90 点以上
- 評価 A (89～80 点)：授業貢献点と期末試験の合計が 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79～70 点)：授業貢献点と期末試験の合計が 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69～60 点)：授業貢献点と期末試験の合計が 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下)：授業貢献点と期末試験の合計が 60 点未満

■評価方法

授業貢献点 (59%)、期末試験 (41%)。授業貢献点は、ミニッツペーパーや T/F テストから受講への取り組みを評価。期末試験は、経営組織の知識、組織理論の理解、組織を通じた自らのキャリア形成への理解を評価する。

■留意点

①授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業においてミニッツペーパーの提出あるいは T/F テストの受験を求め、その内容を 4～6 点で評価し、累積する (上限 59 点)。通常 4 点以上であるが、受講態度が悪い場合は 4 点となり欠席 (0 点) 以下の評価となる。②講義内容は、学生からのコメントや要望、関連項目の最新動向や時事問題を踏まえて変更することがある。

科目名	現代メディア論 (Contemporary Media Studies)		
サブタイトル	メディアを読む、世界を読む		
担当教員	中澤 弥	対象学年	3年生以上
		区分	秋学期

■授業目的

メディアは変化の時代を迎えている。現代社会を生きるためには、情報を読み解き、判断していく力が求められている。そのためには、情報の受け手として、メディアを批判的にとらえていく必要がある。その出発点は、それぞれのメディアの成り立ちを知り、その成長の跡をたどることである。その上立って未来のメディアのありようを想像し、さらには SNS など新しいメディアに対処していく知見を得なくてはならない。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

現在のメディア状況を理解し、深い問題意識を持つことができる。問題発見能力、問題解決能力を身に付け、自分の言葉で語るができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

大量の情報のなかから正しい情報を選び取り、読み解く思考力を鍛え、自らの判断と決断でビジネスや暮らしに活かしていく力、メディアとのかかわりが不可欠な現代社会における生きる力を修得する。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

「現代メディア論」では、アクティブ・ラーニングとして「ワークシート」による講義内容の理解をすすめ、問題の発見をはかる。本活動に主体的・能動的に参加することにより、「問題発見力と問題解決力」を養成することが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の予習課題には最低限 1.5 時間程度の学習が不可欠となる。さらに教室で学んだ事柄について知見を広げ、問題意識を深めるための復習として 1.5～2 時間程度の学習を課す。

■授業の概要

- 第1講 現代メディアの風景ー活字からデジタルへ
- 第2講 新聞の歴史と展望
- 第3講 放送メディアについて (ラジオ・テレビ)
- 第4講 スポーツとメディア 1ーメディアスポーツ
- 第5講 スポーツとメディア 2ーオリンピックと映像
- 第6講 スポーツとメディア 3ースポーツと物語
- 第7講 映画とプロパガンダ ナチス、ソビエト連邦の例と日本の国策映画
- 第8講 現代とプロパガンダ アメリカのプロパガンダ映画から現代におけるプロパガンダへ
- 第9講 メディアパニックについて
- 第10講 デジタル時代のメディア 1 雑誌の世界
- 第11講 デジタル時代のメディア 2 音楽メディア
- 第12講 デジタル時代のメディア 3 映画産業
- 第13講 デジタル・メディアの展望
- 第14講 歴史意識とメディアリテラシー
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

ミニ・レポートの内容についてコメント、疑問点などへの回答を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義による知見をもとに、メディアについてオリジナリティーに富む考えを提示できる。
- 評価 A (89～80 点) : 現代のメディアについて、自らの視点、自らの発想で考ようとする意識がうかがえる。
- 評価 B (79～70 点) : 現代のメディアについて知見の獲得に努力したことがうかがえる水準に達してる。
- 評価 C (69～60 点) : 最低限の知見の獲得努力はうかがえるが、それを表現する水準に到達できていない。
- 評価 F (59 点以下) : レポートが提出されていない。講義による知見獲得への真摯さと努力がうかがえない。

■評価方法

学期末の課題レポート：40%、それぞれのテーマに対するミニレポート：40%、平常点 20%

■留意点

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 事業デザイン論 I (Business Design Theory I)**サブタイトル** 事業開発 (business creation) の方法論**担当教員** 松本 祐一**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

企業、行政、NPO等、様々な組織が行う営みを、「事業」という同じ枠組みでとらえ、その歴史や特徴を理解し、自分で事業をデザインするための方法論を学ぶ。

■科目分類

顧客理解/ビジネス創造/ビジネスマネジメント

■到達目標

事業開発に関する理論と方法を理解し、自分で事業をデザインできるようになること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

具体的な事業開発の方法を習得し、自分でプランを構想することができる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク

事業デザイン論Iでは、アクティブラーニングとしてビジネスプランを策定する。具体的にはテーマに関するデータ収集、顧客候補へのインタビューやチラシの作成などに取り組む。主体的・能動的に参加することで、事業開発の手法を理解することを目標とする。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

最低 1.5 時間以上のビジネスプランを立案するための情報収集等

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 「事業」とは何か?～事業の定義と類型
- 第3講 「事業」とは何か?②～経営学における事業
- 第4講 「事業開発」の起点
- 第5講 「事業開発」の枠組み～戦略とは何か
- 第6講 「事業開発」の枠組み②～枠組みの活用法
- 第7講 環境：どうなるべきか?～環境変化
- 第8講 環境：どうなるべきか?②～現場の構造の把握
- 第9講 顧客・市場の設定：どうなるべきか?③
- 第10講 使命：どうなりたいか?
- 第11講 能力：どうなれるか?
- 第12講 統合：コンセプト
- 第13講 仕組み：どうやるか?
- 第14講 仕組み：プロトタイピング
- 第15講 まとめとふりかえり

■フィードバックの要領

提出された各自のアウトプット（課題）に対する評価・アドバイスを実施する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：課題をすべて提出し、自分でビジネスプランを組み立てられて独自性がある。
- 評価 A (89～80 点)：課題をすべて提出し、自分でビジネスプランを組み立てることができる。
- 評価 B (79～70 点)：課題を 8 割以上提出し、ビジネスプランももれなく作成できる。
- 評価 C (69～60 点)：課題を 6 割以上提出し、要求されていることにある程度答えられている。
- 評価 F (59 点以下)：課題の提出が 5 割以下で、要求されていることに答えられていない。

■評価方法

講義中後の課題・平常点 50%、中間レポート 20%、最終レポート 30%

■留意点

講義を受けながら、同時進行で各自でビジネスプランを企画してもらうアクティブラーニング形式の講義です（グループワークではありません）。

科目名 事業デザイン論 II (Business Design Theory II)**サブタイトル** 多摩大学の先輩が就職した会社を研究して、将来の自分の仕事や就職に役立たせよう**担当教員** 長島 剛**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

昨年の就職先データから、企業概要を調べ会社案内を作成する。互いに会社を紹介しあい、普段なじみのない地域やBtoBの企業を理解する。活きた情報を利用することで、現場感覚を養うと同時に、事業デザインの重要性を体感する。ピクト図やビジネスモデルキャンパスを学び、ディスカッション、プレゼンを通じて事業デザインへの理解を深める。

■科目分類

ビジネス創造／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

①企業の経営情報を自分の言葉で説明できるようにする ②企業のビジネスモデルをピクト図で描けるようになる ③企業のビジネスモデルキャンパスを書けるようになる ④質問力をつける

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

様々な企業の事例から、いま直面している課題解決の現状を理解し、課題に対処できる専門的能力の修得のきっかけにする。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

昨年の就職先リストを活用し、ピクト図やビジネスモデルキャンパスの作り方を習得する。企業研究を行うなかで、互いに研究した企業を紹介しあい、幅広い企業の理解を進めるとともに質問力を養う。学生による人気投票を行いゲストに登壇していただく。企業の前で事業計画書をプレゼンする。授業全体で幅広い社会人基礎力を学びながら、事業デザインの概要を学ぶ。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義中に説明した事前学習を 1.5 時間以上行い、講義後は、配布資料、映写資料をもとに 1.5 時間以上の事後学習を行うこと。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション・確認アンケート
- 第2講 企業分析の方法を学ぶ① 対象企業リストを確認する
- 第3講 企業分析の方法を学ぶ② 経営情報をどう捉えるか
- 第4講 企業分析の方法を学ぶ③ 企業分析の実際
- 第5講 まとめ・授業内試験
- 第6講 企業研究① 授業内試験の振り返りと企業研究3社
- 第7講 企業研究② ピクト図について
- 第8講 企業研究③ ピクト図の活用
- 第9講 企業研究の共有&質問力をつける① プレゼン力
- 第10講 企業研究の共有&質問力をつける② 質問力
- 第11講 ビジネスモデル・キャンパス
- 第12講 事業企画書① アナロジー発想法・ダイアグラム発想法
- 第13講 事業企画書② 事業企画書の完成
- 第14講 ゲストスピーカーへの事業企画提案
- 第15講 まとめ・授業内試験

■フィードバックの要領

提出されたレポートに対し特徴的なものや疑問点などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 様々な事例を学び、事業デザインの重要性を理解し、自分の事業アイデアを立案できる。
 評価 A (89~80 点) : 様々な事例を学び、事業デザインのツールを深く理解している。
 評価 B (79~70 点) : 様々な事例を学び、事業デザインのツールについて一定の理解をしている。
 評価 C (69~60 点) : 一部不十分な点はあるものの、事業デザインのツールについて理解している。
 評価 F (59 点以下) : 事業デザインのツールについて理解していない。

■評価方法

課題シート（講義終了時提出するシート）30%、宿題シート30%、確認テスト30%、平常点10%で評価。

■留意点

現場のヒアリングを行いながら講義を作る予定（ヒアリングへの同席可）。積極的な対応を期待する。授業の内容はヒアリングの進捗状況により変更の可能性がある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報と職業 (Information and Profession)**サブタイトル** 情報社会における職業人に求められる勤労観と職業倫理**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

本講義は、情報と職業についての関わり、情報に関係する職業人（情報処理技術者、ネットワーク技術者など）の役割と責任について理解することを目的とする。現代の社会において、IT（情報技術）は必要不可欠な存在である。情報技術の進展によって生まれた産業の特徴や情報システムが一般社会生活のなかでどのように使われているかなど、情報技術の現状を把握するとともに、私たちの生活や既存の産業が受けた情報化の影響などについても学習する。また、情報システムを構築し運用する上で、情報処理技術者やネットワーク技術者が果たすべき役割や責任について理解し、情報技術の専門家に求められる勤労観や職業観を身につけることも目的のひとつである。さらに本講義によって、将来、情報に関係する職業人を目指す高校生に対して、適切な教育指導が出来るようになることを目指す。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人育成／ビジネス ICT

■到達目標

次の①～④を説明できる、⑤を身につける。

①産業社会の変遷、②人々の勤労観や職業観の変化、③情報産業の特徴、④リスクマネジメント・CSR、⑤職業人としての責任感、倫理観

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

情報と職業の関わり、情報化の影響、情報に関わる職業人の役割と責任について理解する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク／グループワーク

ALとして個人ワークおよびグループワークを行う。個人ワークでは確認テストを通じて復習と自己評価を行うことが目標である。また、グループワークでは企業のCSRに対する取組を調べ、発表を行うことを通じて企業で働く職業人としての倫理観を身につけること、グループ活動のスキルを向上させることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。また、講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度（合計 3 時間程度）である。

■授業の概要

- 第1講 情報社会までの歴史の変遷
- 第2講 戦後の産業構造の変化
- 第3講 1990年代までの雇用環境・就業形態と人々の勤労観
- 第4講 1990年代以降の雇用環境・就業形態の変化と人々の勤労観
- 第5講 情報社会と職業教育
- 第6講 情報産業における職業教育と資格
- 第7講 情報産業の誕生と発展
- 第8講 情報産業の実像
- 第9講 企業における情報化
- 第10講 情報化の進展とリスクマネジメント
- 第11講 リスクマネジメントの背景
- 第12講 リスクマネジメントとCSR
- 第13講 CSRと企業の取り組み
- 第14講 情報に関わる職業人として必要な倫理観
- 第15講 情報社会における職業人として必要な勤労観と倫理観

■フィードバックの要領

T/F テスト及び最終講義で全体に対するフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 到達目標①～④に関連づけ、自分の考察を含めて的確に説明できる。⑤が十分である。

評価 A (89～80 点) : 到達目標①～④を個別に、自分の考察を含めて説明できる。⑤が十分である。

評価 B (79～70 点) : 到達目標①～④のうち 2 つ以上を説明できる。⑤が十分である。

評価 C (69～60 点) : 到達目標①～④のうち 1 つ以上を説明できる。⑤が十分である。

評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末試験 60%、レポートや課題 40%に参加態度を加味する。

■留意点

状況によって、講義内容や扱う回の入替えを行う場合がある。

科目名 情報ネットワーク (Networking System)**サブタイトル** 社会における情報ネットワークについて学習する**担当教員** 内藤 旭恵**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

社会における情報ネットワークの概念と役割、基礎技術、インターネットの概要について学ぶ。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

IT パスポート試験の「社会と情報」の分野の問題を解くことができるレベルに到達することを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的なネットワークの知識を身に着けることができる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

本講義では、実際に稼働しているシステムについて調査してもらい、毎週のコメントシートで報告する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

この授業の資料は PDF 形式で共有する。各自予習 1.5 時間以上、授業後パワーポイント資料を見ながら、復習に 1.5 時間以上かけること。

■授業の概要

- 第1講 コンピュータの基礎
- 第2講 コンピュータでの情報の表し方
- 第3講 情報の形態
- 第4講 情報システム
- 第5講 情報収集
- 第6講 インターネットの概要
- 第7講 インターネットの通信機能の仕組み
- 第8講 インターネットの通信規約
- 第9講 クラウドコンピューティング
- 第10講 データの共有と再利用の仕組み
- 第11講 セキュリティと法令順守
- 第12講 今後の情報技術の動向調査
- 第13講 今後の情報技術の動向について
- 第14講 これからの情報技術
- 第15講 まとめと今後の課題

■フィードバックの要領

レポートに対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 平常点が良好で、毎回の確認問題や中間期末レポートが優秀であった場合

評価 A (89~80 点) : 平常点が良好で、毎回の確認問題や中間期末レポートのいずれかが優秀であった場合

評価 B (79~70 点) : 平常点が普通で、毎回の確認問題や中間期末レポートが普通であった場合

評価 C (69~60 点) : 平常点が低い又は、毎回の確認問題や中間期末レポートのいずれかが不出来であった場合

評価 F (59 点以下) : 平常点が悪く、毎回の確認問題や中間期末レポートが未提出または不出来であった場合

■評価方法

毎週配布する課題 50%、中間レポート 25%、期末レポート 25%

■留意点

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報工学概論 (Information Engineering)**サブタイトル** 情報技術と情報社会**担当教員** 中村 有一**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

20世紀後半からコンピュータや通信の技術が急速に発達し、情報技術が社会や産業に大きなインパクトを与えるようになってきた。さらに21世紀になって、それまで予測されていたことがほぼ現実のものとなり、本格的な情報社会が到来した。これに伴って、これまでの工業社会とは異なる考えかたやモラルが必要とされる時代となった。また個人の生活の中にもパソコンなどの情報機器が普及し、それらの原理や役割を正しく把握し、うまく利用することが求められるようになってきた。この講義の目的は、現代の情報社会で必要とされる知識やモラルを身につけ、情報産業などの分野で活躍できる基礎をつくることである。また、本講義によって情報通信の分野に、より興味をもってもらい、将来の就職にも参考になるようにしたい。

■科目分類

ビジネスICT

■到達目標

情報技術の概略を理解すること。情報化にともなう社会変化、産業構造の変化など、大きな流れを把握した上で、さまざまな課題を自分の頭で考えられるような能力を身につける。また情報社会で生きていくうえで必要なモラルについても習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

情報技術と情報社会の分野で、広く重要な用語を理解し、新たな知識を身につけるための基礎とする。また最近のトピックを通して、社会の現状を把握できるようにする。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

アクティブ・ラーニングとしてワークシートや簡単なクイズを行う。講義内容に関連する課題を出題して、講義時間内にFormで答えたり、当日中にT-Nextで提出する。解答例などは時間内あるいは後日解説し、知識を実感として身に着ける。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5時間)

復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 情報とは？：情報とは何か、さまざまな視点から考察する。
- 第2講 ハードウェア：マイクロな仕組みとマクロな設計思想について学ぶ。
- 第3講 ソフトウェアの基礎：OSの仕組みと代表的なアプリケーションソフト
- 第4講 ワードプロセッサ：仕組みと役割、関連する用語について取り上げる。
- 第5講 表計算ソフト：仕組み、使い方、MOS試験対策
- 第6講 データベース：データベースの仕組み、役割などについて話す。
- 第7講 ネットワーク技術の基礎：インターネット、携帯電話
- 第8講 インターネット：インターネットとは何か？さまざまな視点から考察する。
- 第9講 情報化と社会生活の変化：通信手段の発達史、社会変化と問題点
- 第10講 情報産業の発展：産業構造の変化、新しい情報産業の発展
- 第11講 情報産業と政策：通信放送分野の自由化・規制緩和について考える。
- 第12講 情報社会におけるモラル：情報化によって新しいモラルの考え方が必要になった。
- 第13講 暗号と認証の話：情報社会の基盤として公開鍵暗号の仕組みを理解する。
- 第14講 人工知能の話：トピック的に人工知能の技術を展望する。
- 第15講 ロボットの話：その現状と問題点を考察する。

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+ (90点以上)：100点～90点
 評価A (89～80点)：89点～80点
 評価B (79～70点)：79点～70点
 評価C (69～60点)：69点～60点
 評価F (59点以下)：59点以下

■評価方法

学期末試験70% レポートなど平常点30%

■留意点

①スライドの資料は、概略を示したもので、これだけを読んでも理解できないだろう。復習するときに、内容を整理するために使う。②授業中に適宜紹介する参考文献を読むことにより、授業内容をより深く理解できるようにすることが望ましい。

科目名 地域観光論 (Regional Tourism Theory)**サブタイトル** 持続可能な観光地マネジメント**担当教員** 中庭 光彦**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

都市・地域政策の手段として観光は大きな期待を集めてきた。しかし、一方で人気観光地に容量を超える観光客が押し寄せ住民が不利益を被っている事例もある。ここ数年で、観光は集客産業という枠組を超え、サステナブルな地域形成の手法という考え方が世界的に広がっている。それに伴い、多様なツーリズムが生まれている。しかし、コロナショックが襲い、観光の考え方もさらに変わりつつある。地域観光論では、観光地経営の事例、マネジメントの考え方を紹介し、地域のサステナビリティと文化のつながり、コロナショック後の観光ビジネスについて考える。

■科目分類

顧客理解／ビジネス環境理解／地域ビジネス

■到達目標

- ・知識、考え方を覚え理解できる。
- ・知識、考え方を言葉で説明でき、自分で長文情報を調査できる。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

- ・知識、考え方を覚え理解できたか。
- ・知識、考え方を言葉で説明できるか。自分で長文情報を調査できるか。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できるか。

■授業形態 AL手法

〔授業形態〕 講義

〔活動形態〕 個人ワーク

その日の内に必ず授業についてのミニレポートを提出させる。授業内容について、傾聴力、表現力、論理構成力を主体的に高めることが目的である。次回、フィードバックを行う。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義内容のまとめ直しと次回レジュメを調べ、予習復習を行う (3時間)。15回のPPT資料は初回に配付する。それを予習・復習すること。

■授業の概要

- 第1講 観光まちづくりの入り口
- 第2講 観光のビジネスモデル①
- 第3講 観光のビジネスモデル②
- 第4講 MICE ビジネス
- 第5講 観光立国の推移と課題
- 第6講 ホテル、ホスピタリティビジネス
- 第7講 テーマパークと観光地の関係
- 第8講 ポストマスツーリズムからサステナブルツーリズムへ
- 第9講 観光地ブランド化①
- 第10講 観光地ブランド化②
- 第11講 世界遺産、エコツーリズム
- 第12講 まなごしの重要性
- 第13講 DMOによる観光地経営
- 第14講 メディアイベントと都市の賑わいについて
- 第15講 コロナ後の観光産業から戦略へ

■フィードバックの要領

文献レポートについては、講評を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : キーワードをつなげ多様な問題を理解し、客観的に他例の応用説明と意見を表現できる。
 評価 A (89~80 点) : キーワードを元に問題を理解し、客観的に他例を理解し応用説明ができる。
 評価 B (79~70 点) : キーワードを理解し、説明ができ、他例を理解し応用説明ができる。
 評価 C (69~60 点) : キーワードは書けるが理解が不十分で、他例の理解と応用説明も不十分。
 評価 F (59 点以下) : キーワードが書けず、他例も説明できない。

■評価方法

平常点 40% (出席:20%/毎回提出のミニレポートテスト20%) / 到達度テスト・応用力レポート:30% / 文献レポート:30% (テーマを設定し関連文献を2冊読み、レポート作成し7回目までに T-Next で提出。)

■留意点

1. 第1回目の講義に必ず出席すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 地域金融論 (Local Finance)**サブタイトル** 社会に出て必要な金融の基礎/地域金融機関のつなぐ力**担当教員** 長島 剛**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

前半では社会に出て必要な金融の基礎を学ぶ。FP 技能検定の試験科目であるライフプランと資金計画、リスク管理、金融資産運用、タックスプランニング、不動産、相続・事業承継はもちろん、企業評価についても学ぶ。自らの将来のことを想像しながら、手と頭を動かして学びを深めていく。後半では、銀行や信用金庫等の地域金融機関について学び、自治体や企業、NPO などと連携しながら地方創生を行っている事例を研究し、地域の未来を創造する。

■科目分類

ビジネス環境理解/社会人育成/地域ビジネス

■到達目標

①自分のお金について関心を持ち、具体的な取扱いについての知識を持つ②地域を構成する様々な主体の課題解決について、関心を持つ③地域金融機関における課題解決の現状を検証、地域の未来を創造する

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

たくさんの事例から、金融や地域に関心を持ち、現在起きている課題解決や共創の現状を理解し、課題に対処できる専門的能力の獲得のきっかけにする。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク

地域金融論では、アクティブ・ラーニングとしてグループワークを行う。具体的にはライフプランや給与明細、相続税評価などのワークを実施。また、後半の講義では最新の活動事例をもとに事例研究を行う。本活動に主体的・能動的に参加することにより、地域金融機関を通じた社会課題の解決について学ぶことが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義中に説明した事前学習を 1.5 時間以上行い、講義後は、配布資料、映写資料をもとに 1.5 時間以上の事後学習を行ってください。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 社会に出て必要な金融の基礎① ライフプランをつくろう
- 第3講 社会に出て必要な金融の基礎② 資産運用をしてみよう
- 第4講 社会に出て必要な金融の基礎③ 給与明細書をつくろう
- 第5講 社会に出て必要な金融の基礎④ 企業評価をしてみよう
- 第6講 社会に出て必要な金融の基礎⑤ 担保評価をしてみよう
- 第7講 社会に出て必要な金融の基礎⑥ 相続税を計算してみよう
- 第8講 中間まとめ・授業内試験
- 第9講 地域金融機関とは① 地方銀行の歴史とこれから
- 第10講 地域金融機関とは② 信用金庫の歴史とこれから
- 第11講 地域金融機関とは③ 地域金融機関の現状とこれから (ゲスト)
- 第12講 地域金融機関のつなぐ力① 創業支援の現状
- 第13講 地域金融機関のつなぐ力② 事業承継の現状
- 第14講 地域金融機関のつなぐ力③ 地方創生の現状
- 第15講 まとめ・授業内試験

■フィードバックの要領

提出されたレポートに対し講義内で特徴的なものや疑問点などのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 事例をよく学び、課題解決の現状を理解し、地域の未来を考察することができる。
- 評価 A (89~80 点) : 事例をよく学び、課題解決の現状について深く理解している。
- 評価 B (79~70 点) : 事例をよく学び、課題解決の現状について一定の理解をしている。
- 評価 C (69~60 点) : 一部不十分な点はあるものの、課題解決の現状について理解している。
- 評価 F (59 点以下) : 課題解決の現状について理解していない。

■評価方法

課題シート(講義終了時提出するシート) 30%、宿題シート 30%、確認テスト 30%、平常点 10% で評価

■留意点

現場のヒアリングも同時に実施(カバン持ち可)。積極的な対応を期待する。授業の内容は進捗状況により変更の可能性あり。

科目名 地域産業論 (Local Industry Theory)**サブタイトル** 地域と共に生きる中小企業の役割と地域産業の発展に向けた方策を考える**担当教員** 野坂 美穂**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

本講義では、地域経済を支える地域産業の意義、地域産業の主な担い手である中小企業の役割について理解することを目的とする。本授業では、地域経済における地域産業の重要性についての理解を深め、課題解決に向けた自分なりの考えや具体的な方策を示すことができるようになることを目指す。将来的な地域産業の一担い手として、自身のあるべき姿（どのような形で地域産業に貢献する人材になりたいかというビジョン）を描けるようにする。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／地域ビジネス

■到達目標

①二次資料（官公庁の報告書や統計データ等、新聞記事・雑誌等）の活用による分析を行い、情報リテラシーと数量スキルを身につける。②ケース・スタディを通じて、論理的思考力および問題解決力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域の課題を発見し、その課題に対して自分なりの解決策を提案できるという、「課題解決力」の養成とともに、基本となる知識を身につけ適切に理解することができる。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク

地域産業論では、個人ワークを中心に、官公庁のデータ等を用いたグラフの作成や分析を行う。これによって、地域の課題が何かを統計データから見出す能力を養うことができる。また、地域産業の事例分析を行うことで、地域産業の再生・発展に向けた方策を考える力を養うことができる。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

新聞（or 雑誌）記事やケース等を読み、ワークシートに穴埋めするまたは要約するなど（1.5時間）

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション：地域経済における地域産業の意義と役割
- 第2講 東京一極集中と過疎地域
- 第3講 地域産業の担い手としての中小企業の役割
- 第4講 中小企業の抱える課題と生き残り策
- 第5講 中小企業の抱える課題と生き残り策②廃業・倒産、事業承継
- 第6講 中小企業のイノベーションと海外展開
- 第7講 産業集積とは何か
- 第8講 地域産業の衰退と再生
- 第9講 地域資源と地域ブランド
- 第10講 地域産業と地域経済
- 第11講 地域経済循環分析Ⅰ
- 第12講 地域経済循環分析Ⅱ
- 第13講 CSV 経営と官民連携
- 第14講 道の駅の経済学
- 第15講 期末テストの実施

■フィードバックの要領

提出したレポートに対して、評価を返却する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：基礎的な知識の習得が十分かつ、理論の応用及び二次資料に基づく分析が十分にできる。
- 評価 A (89～80 点)：基礎的な知識の習得が十分かつ、理論の応用及び二次資料に基づく分析ができる。
- 評価 B (79～70 点)：基礎的な知識を習得しており、理論の応用及び二次資料に基づく分析ができる。
- 評価 C (69～60 点)：基礎的な知識の習得がやや不十分、理論の応用・二次資料に基づく分析が不十分。
- 評価 F (59 点以下)：基礎的な知識の習得が不十分、理論の応用及び二次資料に基づく分析も不十分。

■評価方法

平常点 50%（毎回の小テストまたは小課題の合計）、レポート 20%、期末テスト 30%

■留意点

日常生活において出来る限り、新聞記事（できれば日本経済新聞）や雑誌記事（できれば東洋経済、日経ビジネス等）を読み、中小企業の動向を把握するようにしてください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国経済論 (Chinese Economy)**サブタイトル** 日本と中国・大中華圏の架け橋となる人財を目指す**担当教員** パートル**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■授業目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。本講義では、国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を立体的かつ複眼的な視点で理解を深めるための基礎的な知識の修得と知見を広げると共に日本をめぐる世界潮流、日本企業のビジネス環境を正しく「読む」力の養成を目指す。具体的には、中国や日中間のビジネスの最前線事例を取りあげながら産業社会が求める問題発見能力と問題解決能力及び高度なコミュニケーション能力を備えた人材育成を念頭に置いた講義を行う。受講生は、本講義を通じて修得した知識や得た知見を自分の就職や将来に向けて活用できるようにすることが求められる。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

①中国経済に関する基本的な知識を修得し知見を広げ、中国の実像を把握できるようにする。②中国経済の現状と課題を分析し、中国における日本企業のビジネス戦略・ビジネスモデルの構想、日中間の協力の可能性について独自の問題意識を持てるようにする。③講義で修得した知見を就職活動で利活用できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

中国経済に関する基礎的な知識を吸収し、グローバル（中国）とローカル（日本）の関係を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク

「中国経済論」では、アクティブラーニングとして受講生による「課題解決のための提案」を行う。具体的には、中国に関する諸問題をビジネスの視点から解決するための具体的な提案を講義レポートにまとめる。受講生が本活動に主体的・能動的に参加することにより、講義内容をまとめるだけのレポートに留まらず、問題の発見と課題解決に取り組むスキルを向上させることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

中国や日中経済関係に関する時事問題を始め、講義内容の中で自分自身が関心を持った分野に関する情報を収集、分析、調査する習慣をつけることが必須。予習復習時間は各 1.5 時間以上とする。

■授業の概要

- 第1講 「中国」とは～ガイダンス 講義の目的・内容の説明、受講上の心得
- 第2講 「世界の工場」と「世界市場」の両方の視点から「中国像」を提示する。
- 第3講 毛沢東時代の中国の政治、経済、社会体制と鄧小平時代の改革開放政策の成果と課題
- 第4講 中国の「光」と「影」(1) 一エネルギー需給状況、環境問題を中心に
- 第5講 中国の「光」と「影」(2) 一食料問題を中心に～中国の食料需給状況と今後の見通し～
- 第6講 中国の「光」と「影」(3) 一格差問題を中心に～中国の格差問題の現状と対策～
- 第7講 中国の「光」と「影」(4) 一人口問題を中心に～中国の人口構造の現状と今後の見通し
- 第8講 中国の「光」と「影」(5) 一産業構造の転換を中心に～「中国製造 2025」戦略
- 第9講 中国の「光」と「影」(6) 一民族問題の歴史的背景と現状、今後の展望を中心に
- 第10講 中国の「光」と「影」(7) 一中国の政治体制と中国共産党を中心に
- 第11講 中国の広域経済圏構想 (1) 「一帯一路」戦略
- 第12講 中国の広域経済圏構想 (2) 「一帯一路」戦略
- 第13講 中国の広域経済圏構想 (3) ～「一帯一路」戦略～
- 第14講 日中経済関係の現状と課題～日中経済関係の最新状況～
- 第15講 中国経済の最新動向と春学期の講義内容についての総まとめ

■フィードバックの要領

毎回の講義レポートのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 100 点満点中 90 点以上。
- 評価 A (89～80 点) : 100 点満点中 89～80 点。
- 評価 B (79～70 点) : 100 点満点中 79～70 点。
- 評価 C (69～60 点) : 100 点満点中 69～60 点。
- 評価 F (59 点以下) : 100 点満点中 59 点以下。

■評価方法

毎回講義レポート 60% (15 回×4 点=60 点)、最終レポート 30%、授業への参画度 10% (1～10 点) の 100% で絶対評価。

■留意点

採点配分は、講義レポート 60 点、最終レポート 30 点 (A4 用紙 2 枚以上)、授業への参画度 10 点。参画度とは、アクティブラーニングとして課題解決のための提案を行った場合、一提案につき 1 点、最大 10 点の加点を行う。講義レポートは、講義内容を理解し、かつ独自の問題意識を持ち、課題解決に向けての取り組み姿勢が顕著に表れているのかを重視する。採点后、返却してフィードバックを行う。

科目名 認知心理 (Cognitive Psychology)**サブタイトル** 個人の認識と問題解決・意思決定**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

認知心理学は、人間の心のしくみを学ぶ心理学の一分野である。人間が外部の環境や刺激をどう感じ、どう理解しているのかといったしくみを様々な角度から考察する。講義中に自分自身についても当てはめ、実験演習も行う。

■科目分類

顧客理解／ビジネス創造／ビジネス ICT

■到達目標

この授業で学んだことを日常世界の中においても理解・応用できるか、経済・経営活動においてこの知識を応用・適用できるか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

人間の思考を個人の視点から学び、問題解決や意思決定に生かす。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク

毎回の授業において、自分自身を対象とした実験・調査を行う。授業内に出される問題に対し、その場で回答し、インターネットを用いて回答するものについては即時のフィードバックを行う。全体の結果を見ながら自分自身の結果と照らし合わせ、人間の認知処理過程について考察する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎回のトピックスに関して、参考図書等の当該部分を事前に読しておくこと (1.5 時間)。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 概論
- 第2講 記憶と忘却
- 第3講 知覚と認識
- 第4講 顔表情の認識と感情表出
- 第5講 概念と言語
- 第6講 知識と表象
- 第7講 イメージと空間の情報処理
- 第8講 認知の制御過程
- 第9講 文章理解
- 第10講 推論
- 第11講 問題解決
- 第12講 意思決定
- 第13講 日常世界と認知心理学 (1)
- 第14講 日常世界と認知心理学 (2)
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

授業中に調査や心理実験を実施し、即座に結果を示し、個人の思考の評価を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を完全に理解できている
- 評価 A (89~80 点) : 講義内容を理解できている
- 評価 B (79~70 点) : 講義内容をおおよそ理解できている
- 評価 C (69~60 点) : 最低限の理解ができている
- 評価 F (59 点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

■評価方法

授業内試験 (100%) により評価する。

■留意点

- ①本講義は、幅広い心理学のうちの一分野である。「消費心理」、「社会心理」等の他の心理学の講義も聴講するとより理解が深まる。
- ②「経営と意思決定」の講義にも関連がある。
- ③講義途中で心理実験やそのレポート提出を求められることがあるので、毎回の出席及び PC の持参は必須。
- ④私語、飲食、授業と関係のない PC 操作、携帯電話操作、帽子・サングラス着用等禁止する。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 問題解決学特講 I (Complex Problem Solving Lecture on a Special Topic I)**サブタイトル** 「問題解決能力」を鍛える**担当教員** 久保田 ほか**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

これまでの多摩大学での様々な学びの中で、問題解決の様々な手法を学んできた。卒業の前に、これまでの学びで得た問題解決能力を実社会で発揮していくための準備をして、社会人としての活躍につなげていかなければならない。そこで、これまでの学びを振り返り、学びのなかで得てきた「問題解決能力」を教員による個別指導の下でブラッシュアップして、実社会での問題解決能力の発揮につなげていく。この講義では、正解のない問題によりよい答えを導き出せるスキルを確実なものとするため、教員が設定した「問題」に対して、課題の分析、解決策の探索、評価、解決策の選択という問題解決の実践演習を行うことを通じて、社会人として要求される「社会人基礎力」を高めていくことを目指す。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

実社会で使える「問題解決能力」を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会人として活躍するための問題解決について学ぶことで、社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができるようになる。また、ルールや約束を守ることができる規律性を身につけることができる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク/その他: ケーススタディ等

アクティブ・ラーニングとしてペアやグループでディスカッションや共同作業、発表、ケーススタディ、ロールプレイング、ジグソー法など何らかの手法を用いることがある。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、概ね 1 時間 30 分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

- 第1講 1 大学生生活の振り返り (1)
- 第2講 1 大学生生活の振り返り (2)
- 第3講 2 問題解決の実践演習 (1)
- 第4講 2 問題解決の実践演習 (2)
- 第5講 2 問題解決の実践演習 (3)
- 第6講 2 問題解決の実践演習 (4)
- 第7講 2 問題解決の実践演習 (5)
- 第8講 2 問題解決の実践演習 (6)
- 第9講 2 問題解決の実践演習 (7)
- 第10講 2 問題解決の実践演習 (8)
- 第11講 2 問題解決の実践演習 (9)
- 第12講 2 問題解決の実践演習 (10)
- 第13講 2 問題解決の実践演習 (11)
- 第14講 2 問題解決の実践演習 (12)
- 第15講 3 今後も問題解決能力を高めていくための方策を考える

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 革新性を持った確実性のある解決策を提案できた。
- 評価 A (89~80 点) : 革新性はないものの確実性のある解決策を提案できた。
- 評価 B (79~70 点) : 実現可能性に疑義があるが、概ね問題解決策をとりまとめることができた。
- 評価 C (69~60 点) : 解決策はまとめられたものの、問題の解決に結びつく蓋然性が低い。
- 評価 F (59 点以下) : 考察能力の不足から、有効な問題解決策を提案できていない。

■評価方法

平常点 (評価割合 50%) と問題解決の実習でとりまとめた問題解決策の評価 (評価割合 50%) の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が 6 単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとめた後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。シラバスの内容に加えて、担当教員からあらたな内容を教授することがある。

科目名 問題解決学特講 II (Complex Problem Solving Lecture on a Special Topic II)**サブタイトル** 「問題解決能力」を鍛える**担当教員** 久保田 ほか**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

これまでの多摩大学での様々な学びの中で、問題解決の様々な手法を学んできた。卒業の前に、これまでの学びで得た問題解決能力を実社会で発揮していくための準備をして、社会人としての活躍につなげていかなければならない。そこで、これまでの学びを振り返り、学びのなかで得てきた「問題解決能力」を教員による個別指導の下でブラッシュアップして、実社会での問題解決能力の発揮につなげていく。この講義では、正解のない問題によりよい答えを導き出せるスキルを確かなものとするため、教員が設定した「問題」に対して、課題の分析、解決策の探索、評価、解決策の選択という問題解決の実践演習を行うことを通じて、社会人として要求される「社会人基礎力」を高めていくことを目指す。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

実社会で使える「問題解決能力」を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会人として活躍するための問題解決について学ぶことで、社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができるようになる。また、ルールや約束を守ることができる規律性を身につけることができる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク/その他: ケーススタディ等

アクティブ・ラーニングとしてペアやグループでディスカッションや共同作業、発表、ケーススタディ、ロールプレイング、ジグソー法など何らかの手法を用いることがある。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね 1 時間 30 分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

- | | | |
|------|---|--------------------------|
| 第1講 | 1 | 大学生生活の振り返り (1) |
| 第2講 | 1 | 大学生生活の振り返り (2) |
| 第3講 | 2 | 問題解決の実践演習 (1) |
| 第4講 | 2 | 問題解決の実践演習 (2) |
| 第5講 | 2 | 問題解決の実践演習 (3) |
| 第6講 | 2 | 問題解決の実践演習 (4) |
| 第7講 | 2 | 問題解決の実践演習 (5) |
| 第8講 | 2 | 問題解決の実践演習 (6) |
| 第9講 | 2 | 問題解決の実践演習 (7) |
| 第10講 | 2 | 問題解決の実践演習 (8) |
| 第11講 | 2 | 問題解決の実践演習 (9) |
| 第12講 | 2 | 問題解決の実践演習 (10) |
| 第13講 | 2 | 問題解決の実践演習 (11) |
| 第14講 | 2 | 問題解決の実践演習 (12) |
| 第15講 | 3 | 今後も問題解決能力を高めていくための方策を考える |

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 革新性を持った確実性のある解決策を提案できた。

評価 A (89~80 点) : 革新性はないものの確実性のある解決策を提案できた。

評価 B (79~70 点) : 実現可能性に疑義があるが、概ね問題解決策をとりまとめることができた。

評価 C (69~60 点) : 解決策はまとめられたものの、問題の解決に結びつく蓋然性が低い。

評価 F (59 点以下) : 考察能力の不足から、有効な問題解決策を提案できていない。

■評価方法

平常点(評価割合 50%)と問題解決の実習でとりまとめた問題解決策の評価(評価割合 50%)の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が 6 単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。シラバスの内容に加えて、担当教員からあらたな内容を教授することがある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 問題解決学特講 III (Complex Problem Solving Lecture on a Special Topic III)**サブタイトル** 「問題解決能力」を鍛える**担当教員** 久保田 ほか**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

これまでの多摩大学での様々な学びの中で、問題解決の様々な手法を学んできた。卒業の前に、これまでの学びで得た問題解決能力を実社会で発揮していくための準備をして、社会人としての活躍につなげていかなければならない。そこで、これまでの学びを振り返り、学びのなかで得てきた「問題解決能力」を教員による個別指導の下でブラッシュアップして、実社会での問題解決能力の発揮につなげていく。この講義では、正解のない問題によりよい答えを導き出せるスキルを確かなものとするため、教員が設定した「問題」に対して、課題の分析、解決策の探索、評価、解決策の選択という問題解決の実践演習を行うことを通じて、社会人として要求される「社会人基礎力」を高めていくことを目指す。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

実社会で使える「問題解決能力」を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会人として活躍するための問題解決について学ぶことで、社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができるようになる。また、ルールや約束を守ることができる規律性を身につけることができる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク/その他: ケーススタディ等

アクティブ・ラーニングとしてペアやグループでディスカッションや共同作業、発表、ケーススタディ、ロールプレイング、ジグソー法など何らかの手法を用いることがある。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、概ね 1 時間 30 分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

- 第1講 1 大学生生活の振り返り (1)
- 第2講 1 大学生生活の振り返り (2)
- 第3講 2 問題解決の実践演習 (1)
- 第4講 2 問題解決の実践演習 (2)
- 第5講 2 問題解決の実践演習 (3)
- 第6講 2 問題解決の実践演習 (4)
- 第7講 2 問題解決の実践演習 (5)
- 第8講 2 問題解決の実践演習 (6)
- 第9講 2 問題解決の実践演習 (7)
- 第10講 2 問題解決の実践演習 (8)
- 第11講 2 問題解決の実践演習 (9)
- 第12講 2 問題解決の実践演習 (10)
- 第13講 2 問題解決の実践演習 (11)
- 第14講 2 問題解決の実践演習 (12)
- 第15講 3 今後も問題解決能力を高めていくための方策を考える

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 革新性を持った確実性のある解決策を提案できた。
- 評価 A (89~80 点) : 革新性はないものの確実性のある解決策を提案できた。
- 評価 B (79~70 点) : 実現可能性に疑義があるが、概ね問題解決策をとりまとめることができた。
- 評価 C (69~60 点) : 解決策はまとめられたものの、問題の解決に結びつく蓋然性が低い。
- 評価 F (59 点以下) : 考察能力の不足から、有効な問題解決策を提案できていない。

■評価方法

平常点 (評価割合 50%) と問題解決の実習でとりまとめた問題解決策の評価 (評価割合 50%) の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が 6 単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。シラバスの内容に加えて、担当教員からあらたな内容を教授することがある。

科目名 立志特講 I (Aspiration Lecture on a Special Topic I)**サブタイトル** 「志」の実現のためのロードマップづくり**担当教員** 久保田 ほか**対象学年** 3 年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

実社会で活躍する大人たちは、様々な経験を積み重ねて、自らを成長させ、社会において必要な存在になることで、安定した生活を確保している。大学での4年間は、大人となって実社会に飛び立つための滑走路であり、この4年間に、まず卒業後の進路を見いだし、それらにむかって加速をして、社会人として飛び立っていかなければならないのである。この講義では、多摩大学で学びのなかで醸成してきた「志」について、卒業を前に整理をして、教員による個別指導の下、その実現のための経路を「ロードマップ」としてとりまとめしていく。このとりまとめを通じて、社会人として飛躍していくために、自らの可能性と向き合い、「成長する自分」を創り上げるために、大学の卒業を前に、自分の「人格」を子どもモードから大人モードに切り替えを行うことを目指していく。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

「志」を実現するためのロードマップをとりまとめる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

多摩大学で醸成した志の実現のためのロードマップをまとめ成長する自分を創り上げるために人格形成させる

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク/その他：ケーススタディ等

アクティブ・ラーニングとしてペアやグループでディスカッションや共同作業、発表、ケーススタディ、ロールプレイング、ジグソー法など何らかの手法を用いることがある。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね 1 時間 30 分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

- | | | |
|------|---|------------------|
| 第1講 | 1 | 大学生生活の振り返り (1) |
| 第2講 | 1 | 大学生生活の振り返り (2) |
| 第3講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (1) |
| 第4講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (2) |
| 第5講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (3) |
| 第6講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (4) |
| 第7講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (5) |
| 第8講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (6) |
| 第9講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (7) |
| 第10講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (8) |
| 第11講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (9) |
| 第12講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (10) |
| 第13講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (11) |
| 第14講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (12) |
| 第15講 | 3 | ロードマップをとりまとめる |

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 実現可能性の高いロードマップが完成できた。
 評価 A (89~80 点) : 成長の道筋が概ねまとまったロードマップが作成できた。
 評価 B (79~70 点) : さらなる考察が必要だが、一応、今後の目標が発見できた。
 評価 C (69~60 点) : 今後、具体性を伴うように見直しが必要だが、一応、目標は発見できた。
 評価 F (59 点以下) : 明確な目標の記載があるロードマップが完成できていない。

■評価方法

平常点 (評価割合 50%) と完成したロードマップの評価 (評価割合 50%) の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が 6 単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 立志特講Ⅱ (Aspiration Lecture on a Special Topic Ⅱ)**サブタイトル** 「志」の実現のためのロードマップづくり**担当教員** 久保田 ほか**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

実社会で活躍する大人たちは、様々な経験を積み重ねて、自らを成長させ、社会において必要な存在になることで、安定した生活を確保している。大学での4年間は、大人となって実社会に飛び立つための滑走路であり、この4年間に、まず卒業後の進路を見いだし、それらにむかって加速をして、社会人として飛び立っていかねばならないのである。この講義では、多摩大学で学びのなかで醸成してきた「志」について、卒業を前に整理をして、教員による個別指導の下、その実現のための経路を「ロードマップ」としてとりまとめていく。このとりまとめを通じて、社会人として飛躍していくために、自らの可能性と向き合い、「成長する自分」を創り上げるために、大学の卒業を前に、自分の「人格」を子どもモードから大人モードに切り替えを行うことを目指していく。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

「志」を実現するためのロードマップをとりまとめる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

多摩大学で醸成した志の実現のためのロードマップをまとめ成長する自分を創り上げるために人格形成させる

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク/その他：ケーススタディ等

アクティブ・ラーニングとしてペアやグループでディスカッションや共同作業、発表、ケーススタディ、ロールプレイング、ジグソー法など何らかの手法を用いることがある。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間30分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

- 第1講 1 大学生生活の振り返り (1)
- 第2講 1 大学生生活の振り返り (2)
- 第3講 2 自分の可能性と向き合う (1)
- 第4講 2 自分の可能性と向き合う (2)
- 第5講 2 自分の可能性と向き合う (3)
- 第6講 2 自分の可能性と向き合う (4)
- 第7講 2 自分の可能性と向き合う (5)
- 第8講 2 自分の可能性と向き合う (6)
- 第9講 2 自分の可能性と向き合う (7)
- 第10講 2 自分の可能性と向き合う (8)
- 第11講 2 自分の可能性と向き合う (9)
- 第12講 2 自分の可能性と向き合う (10)
- 第13講 2 自分の可能性と向き合う (11)
- 第14講 2 自分の可能性と向き合う (12)
- 第15講 3 ロードマップをとりまとめる

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：実現可能性の高いロードマップが完成できた。
- 評価 A (89～80 点)：成長の道筋が概ねまとまったロードマップが作成できた。
- 評価 B (79～70 点)：さらなる考察が必要だが、一応、今後の目標が発見できた。
- 評価 C (69～60 点)：今後、具体性を伴うように見直しが必要だが、一応、目標が発見できた。
- 評価 F (59 点以下)：明確な目標の記載があるロードマップが完成できていない。

■評価方法

平常点(評価割合 50%)と完成したロードマップの評価(評価割合 50%)の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。

科目名 立志特講 III (Aspiration Lecture on a Special Topic III)**サブタイトル** 「志」の実現のためのロードマップづくり**担当教員** 久保田 ほか**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

実社会で活躍する大人たちは、様々な経験を積み重ねて、自らを成長させ、社会において必要な存在になることで、安定した生活を確保している。大学での4年間は、大人となって実社会に飛び立つための滑走路であり、この4年間に、まず卒業後の進路を見いだし、それらにむかって加速をして、社会人として飛び立っていかなければならないのである。この講義では、多摩大学で学びのなかで醸成してきた「志」について、卒業を前に整理をして、教員による個別指導の下、その実現のための経路を「ロードマップ」としてとりまとめしていく。このとりまとめを通じて、社会人として飛躍していくために、自らの可能性と向き合い、「成長する自分」を創り上げるために、大学の卒業を前に、自分の「人格」を子どもモードから大人モードに切り替えを行うことを目指していく。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

「志」を実現するためのロードマップをとりまとめる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

多摩大学で醸成した志の実現のためのロードマップをまとめ成長する自分を創り上げるために人格形成させる

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク/その他：ケーススタディ等

アクティブ・ラーニングとしてペアやグループでディスカッションや共同作業、発表、ケーススタディ、ロールプレイング、ジグソー法など何らかの手法を用いることがある。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間30分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

- | | | |
|------|---|------------------|
| 第1講 | 1 | 大学生生活の振り返り (1) |
| 第2講 | 1 | 大学生生活の振り返り (2) |
| 第3講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (1) |
| 第4講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (2) |
| 第5講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (3) |
| 第6講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (4) |
| 第7講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (5) |
| 第8講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (6) |
| 第9講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (7) |
| 第10講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (8) |
| 第11講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (9) |
| 第12講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (10) |
| 第13講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (11) |
| 第14講 | 2 | 自分の可能性と向き合う (12) |
| 第15講 | 3 | ロードマップをとりまとめる |

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 実現可能性の高いロードマップが完成できた。
 評価 A (89~80 点) : 成長の道筋が概ねまとまったロードマップが作成できた。
 評価 B (79~70 点) : さらに考察が必要だが、一応、今後の目標が発見できた。
 評価 C (69~60 点) : 今後、具体性を伴うように見直しが必要だが、一応、目標は発見できた。
 評価 F (59 点以下) : 明確な目標の記載があるロードマップが完成できていない。

■評価方法

平常点(評価割合 50%)と完成したロードマップの評価(評価割合 50%)の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 プレゼミ I (Pre-seminar I)**サブタイトル** アクティブラーニング基礎&ホームルーム**担当教員** 専任教員、高瀬、葛本**対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

第一に、多摩大学経営情報学部学びの特徴は、「4年間ゼミ」と「アクティブラーニング」にある。2年生からのホームゼミで本格的に展開されるアクティブラーニングの学びの事前準備として、ノートテイキングやレポートの作成法、さらにはメールの書き方など大学生活において必要不可欠とされる基礎的スキルを習得する。第二に、プレゼミでは、「仲間づくり」を通じて協調性を養うこと目的とする。本学のアクティブラーニングでは、グループワークを中心に他者との協調によって成果を出すという機会があるが、まずはプレゼミ生同士のコミュニケーションを密に図り、誰一人取り残さないことが重要である。また、プレゼミ担当教員は大学生活で必要なことを確認する、「ホームルームとしての機能」を果たす。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

- ①大学に必要な知識を習得するための技法：ノートの取り方やレポートの作成方法など基礎的スキルの習得
②ホームルーム：協調性を身に着ける。通学習慣と学習習慣を継続し、4年間の体系的学びの基礎とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

多摩大学経営情報学部で、主体的に学ぶための「関心や意欲」を育むことを目標とする。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

プレゼミIでは、アクティブラーニングとして、ペアワークやグループワークを中心にディスカッションや作業を行う。これにより、まずはプレゼミのメンバーを中心とする「仲間づくり」を行うことで、協調性を養い、困った時にはお互いに助け合うなどして、今後の大学生活を円滑に過ごせるようにする。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

ホームルーム・模擬ホームゼミ・各教員によるコンテンツ、いずれも事前の予習と、事後の復習が重要である。グループワークにおいては、授業間の空きコマに集まって、予・復習をすることが求められる。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション&ガイダンス
第2講 入学前教育の振り返り
第3講 ①書評コンクールについての説明 ② ZOOM の演習など
第4講 ノートのとり方についての講義①
第5講 ノートのとり方についての講義②
第6講 ① PROG テストの実施（リテラシーテスト） ②アイスブレイク
第7講 ① PROG テストの実施：コンピテンシーテスト ②アイスブレイク
第8講 Word 機能をつかいこなす①
第9講 Word 機能をつかいこなす②
第10講 各プレゼミの独自コンテンツ①（または EXCEL 課題）
第11講 各プレゼミの独自コンテンツ②（または EXCEL 課題）
第12講 各プレゼミの独自コンテンツ③（または EXCEL 課題）
第13講 ① PROG テストの解説②プレゼミ独自コンテンツの実施
第14講 各プレゼミで独自コンテンツの実施④
第15講 秋学期の時間割とホームゼミ選抜についての説明

■フィードバックの要領

オフィスアワーによる面談やメール等によって、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）：総合評価が 60 点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。

評価 F（不合格）：総合評価が 60 点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

■評価方法

- ①平常点（50%）②課題提出（50%）

■留意点

- (1) 講義の中で課題を課す場合が多くあり、その課題提出が成績評価に結びつくため、講義を欠席しないこと。
(2) かならず各自が用意したパソコンを持参すること。それ以外の持参物や、予習等については、各担当教員の指示に従うこと。

科目名 プレゼミ II (Pre-seminar II)**サブタイトル** 「社会人マイナス四年生」のゼミ入門**担当教員** 専任教員、高瀬、葛本**対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

秋学期に開講する「プレゼミII」では、自らの成長の方向性を見いだすことを中心テーマに、今問題になっている実践的な課題を題材にした「ゼミ形式による学び」を行うことで、問題解決力に磨きをかけていく。そして、見いだした方向性を2年次から所属する「ホームゼミ」の選択につなげていく。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

①就業意識に基づいた4年間の学修イメージが確立すること。②学びの対象を主体的に見出せるようになること。③学びの成果に対する現実的期待を抱くことができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

「問題」の「発見・分析・解決」に必要なコミュニケーションスキルを習得する。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

プレゼミIIでは、アクティブラーニングとして、グループワークを中心に多摩祭やAL発表祭での発表に向けた活動を行う。これにより、次年度以降のホームゼミで必要とされる「協調性」を養うことができる。この他に、自分の主張したいことを他者にわかりやすく伝えるためのスキル（プレゼンテーションスキルを含む）を養う。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

この講義では、自らの成長を促すため、講義や演習で学んだことをしっかり身につけるために復習に多くの時間を割く必要がある。復習として概ね2時間程度の取り組みが必要となる。

■授業の概要

- 第1講 ホームゼミの説明会
- 第2講 ホームゼミの説明会②
- 第3講 多摩祭に向けた準備①
- 第4講 多摩祭に向けた準備②（グループワーク）
- 第5講 多摩祭に向けた準備②（グループワーク）
- 第6講 多摩祭に向けた準備③（グループワーク）
- 第7講 多摩祭に向けた準備④（グループワーク）
- 第8講 各プレゼミで独自コンテンツの実施①
- 第9講 各プレゼミで独自コンテンツの実施②
- 第10講 各プレゼミで独自コンテンツの実施③
- 第11講 各プレゼミで独自コンテンツの実施④
- 第12講 各プレゼミで独自コンテンツの実施⑤
- 第13講 学科選択説明会
- 第14講 各プレゼミで独自コンテンツの実施⑥
- 第15講 各プレゼミで独自コンテンツの実施⑦

■フィードバックの要領

オフィスアワーによる面談やメール等によって、フィードバックを行う。

■評価基準

評価P（合格）：総合評価が60点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。

評価F（不合格）：総合評価が60点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

■評価方法

①すべてに出席すること。②積極的な受講態度。③クラス毎に指定された最終課題の提出。上記①②③の総合評価（100点満点で、配分は平常点50%、受講態度30%、最終課題20%）によって、成績評価を決定する。

■留意点

(1) 講義の中で課題を課す場合が多くあり、その課題提出が成績評価に結びつくため、講義を欠席すると単位取得に大きな影響を与えることとなるため、すべての回に必ず出席すること。

(2) 必ずパソコンを持参すること。それ以外の持参物や、予習等については、各担当教員の指示に従うこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 石川 晴子**サブタイトル** 英語・異文化コミュニケーション・地域社会活動**担当教員** 石川 晴子**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

石川ゼミは、英語、異文化コミュニケーション、地域社会活動をテーマに、自分の個性や持ち味を生かしながら地域社会、国際社会で社会貢献ができる人材を育てることを目標に活動しています。活動内容は、地域小学校の放課後子ども教室での英語活動、地域・国際交流イベント、学内イベントの企画・運営、英語スピーチ、プレゼンテーション、グループディスカッション、ムービー制作など多岐にわたります。学生はこれらの活動を通して体験的にチームワーク、コミュニケーション力、自主性を磨き、そこで生じる様々な問題の解決に取り組んでいます。また、そこで出会う子どもから社会人まで様々な背景を持つ人々との交流を通して、社会と自らの在り方について学んでいます。

■科目分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

ゼミで行う学内、学外の様々な活動を通して、社会人に必要なスキルおよびマナーを身に着ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

学外・学内活動、グループワークを通して、対人間力および状況を的確にとらえ適切な行動をとることのできる力を身に着ける。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義／演習

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

上記「授業目的」に記載されている活動を、個人またはペア、グループで行う。自らが考え、行動し、またそれを他者と共有することで、社会や自身に対する理解を深め、社会人として必要となる力を養うことが目的である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

レポートの提出、発表準備、資料の作成、小学校訪問の準備等、その都度指示する。（各 1.5 時間）

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション（ゼミの目標の確認と共有、活動内容・ルール説明等）
- 第2講 小学校放課後子ども教室におけるゼミ活動についてのオリエンテーション
- 第3講 効果的なプレゼンテーションの作り方
- 第4講 プレゼンテーション実践
- 第5講 発表用パワーポイント資料作成時に気を付けること
- 第6講 英語（自己紹介、初対面の人へのアプローチ法について学ぶ）
- 第7講 英語（英語を読む力を身に着ける）
- 第8講 英語（一分間スピーチの作り方、例、実践）
- 第9講 英語（TOEIC の概要と演習）
- 第10講 英語（スモールトーク）
- 第11講 国際交流イベント準備（グループでイベント企画のアイデアを出す）
- 第12講 国際交流イベント準備（アイデアをより具体的にする、資料等の作成）
- 第13講 英語によるプレゼンテーション準備
- 第14講 英語によるプレゼンテーション
- 第15講 まとめと振り返り

■フィードバックの要領

課題等に対して行う。

■評価基準

評価 P（合格）：課題への取り組みの総合点が 60%以上である。

評価 F（不合格）：課題への取り組みの総合点が 59%以下である。

■評価方法

毎回の出席を前提とし、課題への取り組み（100%）で評価する。

■留意点

上記の授業概要、学習のポイント、詳細は暫定的なものであり、履修する学生の興味や目標に応じて授業内容、活動内容は変えていく予定です。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 出原 至道		
サブタイトル	実装技術の習得		
担当教員	出原 至道	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期
■授業目的	このゼミナールは、社会に出て通用するシステム構築能力を身につけることを目的とする。ゼミナール開始時のスキルは特に必要としないが、未知の領域に対する旺盛な好奇心、自発的学習能力、平均的な社会性・コミュニケーション能力については既に身につけていることを求める。2年次では、まず、手法を指定して機能を実現する練習を行う。3年次には、自力で独自の実装手法を探索できるようになることが求められる。4年次では、研究の意義・課題を意識しながら、卒業論文にまとめる。講義時間は週1回である。この時間は、それまでに行った研究の発表の場であり、成果を全体で共有し、次回までの目標を明確にすることが求められている。作業時間は各自が別に確保すること。積極的に外部に成果を応募・発表することを奨励する。目標とする代表的な場として、IVRC (日本)、Laval Virtual (フランス)、SIGGRAPH (アメリカ)、SIGGRAPH ASIA (日中韓など)がある。		
■科目分類	社会人力育成/ビジネス ICT		
■到達目標	プロジェクトベースでシステム開発能力を持つ社会人として、社会性・人間性を含めて評価される。「大学で何を勉強したか」ではなく「大学で何を生み出したか」を語るができる。共通の目的を持つ他国の学生との交流を通じて、単なる言語や文化的興味にとどまらない、高いレベルの国際意識を身につける。		
■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項	2番目に身につけられる事項		
DP2 思考と判断	DP1 知識と理解		
■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細	大学において実現する目標の計画を立て、必要なスキルを明確化する。		
■授業形態	AL 手法		
[授業形態]	演習		
[活動形態]	個人ワーク/グループワーク		
個別の研究テーマについて、各自、研究を進め、共有し、議論する。			
■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容	講義時間 (原則週1回) は基本的に、それまでに行った研究の発表の場である。作業時間 (毎回 1.5 時間以上) は各自が別に確保すること。発表の場では、成果を全体で共有し、次回までの目標を明確にすること。		
■授業の概要	第1講 研究計画の発表と議論を行う。 第2講 研究発表と議論 第3講 研究発表と議論 第4講 研究発表と議論 第5講 研究発表と議論 第6講 研究発表と議論 第7講 研究発表と議論 第8講 研究発表と議論 第9講 研究発表と議論 第10講 研究発表と議論 第11講 研究発表と議論 第12講 研究発表と議論 第13講 研究発表と議論 第14講 研究発表と議論 第15講 研究発表と議論		
■フィードバックの要領	毎週、次週への課題を指示する。期末には、休暇期間中の目標を指示する。		
■評価基準	評価 P (合格) : F 以外 評価 F (不合格) : 以下のいずれかの場合 : <ul style="list-style-type: none"> ・数値基準で 60 点未満 ・無断欠席 ・その他信義に反する場合 		
■評価方法	平常点 (60%)・期末レポート (40%) (絶対基準)。ただし、期末レポートへの取り組みに応じて、期末レポートの評価の一部を平常点によって評価することがある。		
■留意点	学生の到達レベル・意欲によって、別の課題を与えることがある。		

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 今泉 忠

サブタイトル ▶▶▶ データ分析

担当教員 ▶▶▶ 今泉 忠

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■授業目的

近年、ビジネスにおける問題解決において、データにもとづく解決案提案は必須になってきている。また、当然、コンピュータを利用する場面が多くなってきている。本演習では、これを、「データ (もの)」という観点から見た場合のデータ分析法やモデル構成法について学ぶ。定量的データ処理能力および統計的分析手法を習得することを目標とする。統計的データ解析やデータマイニングや意思決定問題についても学ぶ。最終的には卒論の提出を行う。基礎知識の習得については履修者全員に必須とする。

■科目分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

ビジネス環境における課題・問題についてデータに基づいて問題解決を行えるようになることが目標である。
 ・統計的データ解析 主として、多変量解析の分野での手法を学ぶ。回帰分析、主成分分析、判別分析について習得する。
 ・データプレゼンテーション解決案提案のためのプロセスにおいて、グラフ、チャート、センテンスを利活用して提案できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

産業社会での出来事に関心を持ち、そこで発生するであろう問題や課題を発見したり、解決案をデータにもとづいて提案できる能力を修得する。そのために特に DP2 思考と判断と DP4 表現と技能に関して学修する

■授業形態 AL 手法

〔授業形態〕 演習

〔活動形態〕 個人ワーク/グループワーク

グループや個人で、解決したい課題に関してのデータを収集し、分析し、発表を行う。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

・表計算ソフトを使用するので、EXCEL のピボット計算を利用できるように、予習復習すること。(各 1.5 時間以上)
 ・Jamovi や Exploratory や統計ソフト R をインストールし、ゼミナールで使用できるようにすること。

■授業の概要

- 第1講 基礎知識の習得・学習するのに必要と考えられる基礎を学習する。
- 第2講 基礎知識の習得・学習するのに必要と考えられる基礎を学習する。
- 第3講 統計分析の基礎Ⅰ
- 第4講 統計分析の基礎Ⅱ
- 第5講 統計分析の基礎
- 第6講 統計分析の基礎
- 第7講 統計分析
- 第8講 統計分析
- 第9講 統計分析
- 第10講 データの分析
- 第11講 データの分析
- 第12講 データの分析
- 第13講 データの分析
- 第14講 データの分析
- 第15講 データの分析

■フィードバックの要領

ゼミ中でのリフレクションシートをもとにフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 統計的データ分析の基礎を理解して、実際のデータを分析できるかどうか
 評価 F (不合格) : 上記要件を満たしていない場合

■評価方法

平常点 50%、演習レポートや発表 50%

■留意点

データコンペティションなど外部とのコンペティションに参加する

科目名 ホームゼミ (Seminars) 梅澤 佳子

サブタイトル 課題解決型地域活動を通じて生活者の視点を磨き、実践知を鍛える。

担当教員 梅澤 佳子 **対象学年** 2年生以上 **区分** 春・秋学期

■授業目的

本ゼミは文献研究とフィールドワーク、地域活動を3つの柱としています。3年間のゼミ活動を通じて、人生100年を豊かに生きるためのライフ・デザインの考え方を身につけ生活者としての視点、グローバルな視点を養い、課題解決能力を身につけることを目的としています。

■科目分類

ビジネス創造／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

①文章の読解力、理解力、表現力、②コミュニケーション能力、③実践知、④社会力、⑤コミュニティデザイン、プロジェクトマネジメントの手法を身につけること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会の発展に貢献する力

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク／グループワーク／その他：PBL型学習

ゼミでは産官学民と協働し地域活動を実施する。そのことを通じて、さまざま人と協働し望ましい社会をつくり、また望ましい社会に向けてつくりかえていく行動力を身につけることを目標としている。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

地域・企業・行政・教育機関等と連携して活動を行っている為、PJ チーム毎にミーティング、外部団体との打合せ、事前準備、事前・事後の活動（企画書・報告書・議事録等の作成）の時間（各回 1.5 時間以上）を必要とします。

■授業の概要

- 第1講 ホームゼミナールの目的、目標、仕組みの理解
- 第2講 ゼミ生による地域プロジェクト紹介
- 第3講 プロジェクトマネジメントの手法について学ぶ
- 第4講 今年度の各地域プロジェクト活動計画の立案
- 第5講 プロジェクトの進捗状況報告
- 第6講 多摩ニュータウンについて学ぶ①
- 第7講 多摩ニュータウンについて学ぶ②
- 第8講 各プロジェクトの活動報告、次回の企画内容の検討、ディスカッション
- 第9講 各プロジェクトの活動報告、次回の企画内容の検討、ディスカッション
- 第10講 各プロジェクトの活動報告、次回の企画内容の検討、ディスカッション
- 第11講 各プロジェクトの活動報告、次回の企画内容の検討、ディスカッション
- 第12講 各プロジェクトの活動報告、次回の企画内容の検討、ディスカッション
- 第13講 休暇中の地域活動に関する打合せ①
- 第14講 休暇中の地域活動に関する打合せ②
- 第15講 休暇中の地域活動についての最終確認

■フィードバックの要領

地域 PBL 型 AL を通じて、常時、フィードバックを行います。

■評価基準

評価 P (合格)：地域連携型 PLB へ積極的に参加し、積極的に役割を果たしていること。
評価 F (不合格)：ゼミや地域活動の参加状況が著しく悪い。

■評価方法

- ・時間割におけるゼミの出席は前提条件です。
- ・平常点 (学内外におけるゼミ活動への意欲的な姿勢等) 50%
- ・課題提出 50%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 大森 拓哉**サブタイトル** 心理情報学**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

生活する社会の中で、情報を的確に収集・分析することは必要不可欠である。本講義では人間行動の調査の方法の習得・データの収集・分析といった一連の流れを経験し、体得することを目的とする。同時に、人間行動のシミュレーションを各自がプログラムを作成することによって行う。最終的には、心理学、統計学、プログラミングの知識と技法を体得し、人間行動の理解とモデリング全般が行えることを目標とする。

■科目分類

ビジネス創造／社会力育成／ビジネス ICT

■到達目標

人間行動全般の理解と、情報の処理方法、および物事の客観的な判断・意思決定ができること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

人間の情報処理の過程と仕組みを学び、高度な思考と判断能力を備える。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

個人又はグループワークにより、自ら実験・調査のテーマを設定し、実際に実験・調査を行ってデータを収集し、解析・考察する。その結果をゼミ内・学内発表会等で公表する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

心理学・統計学の学習（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要

- 第1講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第2講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第3講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第4講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第5講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第6講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第7講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第8講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第9講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第10講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第11講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第12講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第13講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第14講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第15講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。

■フィードバックの要領

毎回の授業内において、すべての課題等に対し個別にフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）：各回のゼミ活動における課題の完成、および学期末での総合課題の完成・発表を行うこと
 評価 F（不合格）：上記以外

■評価方法

平常点および各回の課題 50%、学期ごとの最終課題 50%

■留意点

SRC、ゼミ合宿への参加は必須である。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 落合 孝彦		
サブタイトル	財務分析の基礎		
担当教員	落合 孝彦	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■授業目的

この演習の目的は財務分析に関する基礎的な知識・分析手法の習得であり、授業内容を次の3段階に分けている。まず第1段階は「会計・財務に関する基礎的な知識の習得」、次の第2段階は「事例の分析を通じた学習内容の内部化」、最後の第3段階は「データを用いた企業の分析・報告」である。以上の段階的学習を通じて、財務諸表に関する知識と分析技法への理解を深めてもらう。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント

■到達目標

「ビジネス会計検定試験」3級レベルの知識・分析手法の習得が具体的かつ最終的な到達目標となる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

DP1 (知識と理解)：対象企業の会計データだけでなく、それら企業を取り巻く環境も理解する

DP2 (思考と判断)：データを読み、指標を計算し、企業間比較を行うことで、データの解釈・分析力を身に付ける

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク

この授業は財務分析のための基礎的な知識と分析手法の習得に重点を置くため、配布されるワークシートへの記入、練習問題の解答作業という個人ワークが中心となるが、ペアによる「対象企業の財務分析の結果」等を報告してもらうことも計画・予定している。なお可能であれば、学外学習（見学）の実施も視野に入れている。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：指定された箇所のテキスト熟読、テキストのキーワードを調べる（1.5h）

復習：ワークシートの再読、宿題とされた課題を解く（1.5h）

■授業の概要

- 第1講 財務諸表とは何か～財務諸表の意義と役割～
- 第2講 貸借対照表①～資産～
- 第3講 貸借対照表②～負債～
- 第4講 貸借対照表③～純資産～
- 第5講 損益計算書①～損益計算書の仕組み～
- 第6講 損益計算書②～損益計算のルールと各種利益～
- 第7講 キャッシュフロー計算書①～キャッシュとは何か～
- 第8講 キャッシュフロー計算書②～財務三表とキャッシュフローの分析
- 第9講 財務諸表分析①～利害関係者・分析体系・判断基準～
- 第10講 財務諸表分析②～百分比の財務諸表～
- 第11講 財務諸表分析③～安全性分析～
- 第12講 財務諸表分析④～総資本の収益性分析～
- 第13講 財務諸表分析⑤～自己資本の収益性分析～
- 第14講 財務諸表分析⑥～1株当たり分析～
- 第15講 財務諸表分析⑦～会社の規模と一人当たり分析～

■フィードバックの要領

練習問題の解答は原則授業中。メール／面談によるフィードバックも予定している。

■評価基準

評価 P（合格）：無断欠席なし、80%以上の出席率、遅滞なき課題提出、学外学習への参加。

評価 F（不合格）：複数回の無断欠席、80%未満の出席率、課題の未提出、理由なき学外学習の不参加。

■評価方法

平常点（授業態度・取り組み）：80% 課題の提出：20%

■留意点

無断欠席については相応に対処する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 加藤 みずき**サブタイトル** 心理学をベースとした研究法を学ぶ**担当教員** 加藤 みずき**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

心理学の基礎的な知識や、データのとり方・分析法など、研究活動に必要な基礎的な知識を習得する。また、先行研究を参考にしながら個人あるいはグループで研究計画を立て、調査を実施しデータを実際にとって分析し、結果を解釈しまとめることを目指す。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

基礎的な心理学の知識に触れながら、主に調査法について学び、それらを活用した先行研究について理解できるようになる。統計的な分析法について学び、先行研究を参考にした調査計画に沿って調査データを収集し、適切に分析して結果を導き出すことができるようになる。得られた結果について解釈し、それをわかりやすく資料にまとめ他者に伝えることができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

自分の興味・関心に沿った研究計画を立案できるようになる。得られたデータについて目的に沿って分析し、結果を解釈できるようになる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク/グループワーク

グループに分かれてアンケートの作成および調査の実施・分析を行う。ディスカッションを通して変数を選択し、それに沿った質問項目をつくる。調査実施後はデータを分析し、結果をまとめてゼミ内で発表する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習+復習 1.5 時間。シラバス記載の事前、事後学習ポイントや授業で指示することについては調べてくれることが望ましい。また、調査実施や分析・発表準備などは授業時間外でも行うこと。

■授業の概要

- 第1講 〈第1講〉 ガイダンス
- 第2講 〈第2講〉 心理学における調査①
- 第3講 〈第3講〉 心理学における調査②
- 第4講 〈第4講〉 調査法について学ぶ①
- 第5講 〈第5講〉 調査法について学ぶ②
- 第6講 〈第6講〉 先行研究を参照し調査計画を立てる①
- 第7講 〈第7講〉 先行研究を参照し調査計画を立てる②
- 第8講 〈第8講〉 調査準備と分析方法の確認
- 第9講 〈第9講〉 調査実施と進捗状況報告①
- 第10講 〈第10講〉 調査実施と進捗状況報告②
- 第11講 〈第11講〉 調査データの分析と解釈①
- 第12講 〈第12講〉 調査データの分析と解釈②
- 第13講 〈第13講〉 調査結果の最終報告準備
- 第14講 〈第14講〉 最終報告会
- 第15講 〈第15講〉 振り返りと総括

■フィードバックの要領

基本的に授業内、もしくは翌週授業においてフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 各評価対象において、到達すべき水準に達している。

評価 F (不合格) : 本講義で到達すべき水準に達していない。

■評価方法

平常点 (50%) : 授業内課題への記入・提出など含めた参加点発表 (50%) : 研究結果の発表点 (研究の実施とデータ分析、結果の解釈などを含む)

■留意点

グループでの活動を予定しているため、授業には積極的な参加を行うことが望ましい。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 金 美徳**サブタイトル** 「経営・起業」と「情報・戦略」**担当教員** 金 美徳**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

①経営の知識や企業・業界・情勢の情報の収集・分析を通じて、就活力・働く力・経営戦略力・起業力を身に付ける。②学生が興味のあるテーマについて調べたり、関心をもてそうなテーマを探し出し、それを自らの専門・得意・強みとする。③プレゼン力、ディスカッション力、コミュニケーション力などのスキルを習得する。④ゼミ合宿、企業訪問、社会人との交流などの学外学習や国内外のフィールドワーク（現地調査）を通じて、多くの社会体験やネットワーク作りを行う。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／社会人育成

■到達目標

2年時は、各自の関心のあるテーマ・キーワード・業界・企業を探し出す過程を通じて、情報収集力や現地調査力を身に付ける。3年時は、各自のテーマについて分析力やグループディスカッション力を身に付ける。4年時は、各自のテーマについて伝える・表現する・プレゼンする力を身に付ける。また、得意や強みを明確にし、専門分野を確立する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

学生が設定したテーマにしたがって課題を発見し、その課題を体系的かつ実践的に解決できる課題解決力を修得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク

「ホームゼミ」では、アクティブ・ラーニングとして「個人ワーク」を行う。具体的には、「研究テーマや卒論を教員・学生間で議論する形式」で取り組む。この議論に主体的・能動的に参加することにより、「実践力や研究力を身に付けさせる」ことが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各自のテーマにしたがって書籍・資料・ニュース・時事情報の収集や現地調査を行う。（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
 第2講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第3講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第4講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第5講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第6講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第7講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第8講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第9講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第10講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第11講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第12講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第13講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第14講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
 第15講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

■フィードバックの要領

レポートの報告や論文作成の進捗状況にしたがってフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）：平常点 40%、報告 30%、ディスカッション 30%の合算点が 60%以上の場合、合格とする。

評価 F（不合格）：平常点 40%、報告 30%、ディスカッション 30%が 59%以下の場合、不合格とする。

■評価方法

平常点 40%、報告 30%、ディスカッション 30%の割合で評価する。また、学外学習に参加した場合に加点する。

■留意点

ホームゼミでは、3年間、大学生活、学修、専門教育、留学、進路・就職・人生などの指導を行う。

一般科目 1年生以上

一般科目 2年生以上

一般科目 3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 木村 太一

サブタイトル ▶▶▶ 会計学演習

担当教員 ▶▶▶ 木村 太一

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■授業目的

議論の基本的な形に習熟し、会計学の基本的な考え方を理解する。

■科目分類

ビジネス環境理解

■到達目標

議論の基本的な形に習熟し、会計学の基本的な考え方を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

輪読やディスカッションを通じて、「論理的」といわれる文章を読み、書くことができるように訓練する。会計学の基本的な考え方について、自らの意見を持てるようになる。

■授業形態 AL手法

〔授業形態〕 演習

〔活動形態〕 ペアワーク/グループワーク

輪読やディスカッションを通じて、受講生には、「論理的」といわれる文章を読み、書くことができるようになること、会計学の基本的な考え方について、自らの意見を持てるようになることが期待される。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

輪読やディスカッションの準備

■授業の概要

- 第1講 輪読とディスカッション
- 第2講 輪読とディスカッション
- 第3講 輪読とディスカッション
- 第4講 輪読とディスカッション
- 第5講 輪読とディスカッション
- 第6講 輪読とディスカッション
- 第7講 輪読とディスカッション
- 第8講 輪読とディスカッション
- 第9講 輪読とディスカッション
- 第10講 輪読とディスカッション
- 第11講 輪読とディスカッション
- 第12講 輪読とディスカッション
- 第13講 輪読とディスカッション
- 第14講 輪読とディスカッション
- 第15講 輪読とディスカッション

■フィードバックの要領

輪読やディスカッションの状況を見て、適宜指導する。

■評価基準

評価 P（合格）：毎回、輪読やディスカッションに積極的に参加した者を合格とする。

評価 F（不合格）：輪読やディスカッションの参加に消極的な者を不合格とする。

■評価方法

輪読とディスカッション：100%

■留意点

特になし

科目名	ホームゼミ (Seminars) 久保田 貴文		
サブタイトル	データサイエンティストの養成		
担当教員	久保田 貴文	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■授業目的

世の中にある様々な課題をビッグデータの解析により、さらに統計的に思考することにより解決することを目的とするデータサイエンスのゼミである。手法としては、以下を想定する。

- ・データの視覚化・空間データと地図との連携による可視化
- ・SNS データを用いたネットワーク分析
- ・スマホアプリや Web アプリの作成

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

自らデータ解析を行うことにより、世の中のさまざまな問題について解決を行うことが出来る。さらに、その方法について説明し、データやデータ解析の結果もしくは作成したアプリケーションによってその正当性を説明し説得することが出来る。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

データサイエンスに関する基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関連性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題にデータ分析の結果をエビデンスとして対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク/その他：プレゼンテーション

久保田の担当するホームゼミでは、アクティブ・ラーニングとして、個別に課題を与え、それを解決するための方法を考察する。また、同一データを用いて、ペアもしくはグループで分析を実施し、最終的にスライドにまとめて報告する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎授業後には学修した内容をまとめ、また次回の学修内容についてデータ解析の準備を進めること。(1.5 時間+ 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 データ分析のスキル
- 第3講 データ分析のスキル
- 第4講 データ分析のスキル
- 第5講 データ分析のスキル
- 第6講 データ分析のスキル
- 第7講 データ分析のスキル
- 第8講 中間の報告会
- 第9講 データ分析の結果をプレゼン
- 第10講 データ分析の結果をプレゼン
- 第11講 データ分析の結果をプレゼン
- 第12講 データ分析の結果をプレゼン
- 第13講 データ分析の結果をプレゼン
- 第14講 データ分析の結果をプレゼン
- 第15講 最終報告

■フィードバックの要領

ゼミの内容について、プレゼンや報告書のフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格)：データ解析により、さまざまな問題について解決できる。

評価 F (不合格)：データ解析により、さまざまな問題について解決できない。データ解析すらできない。

■評価方法

平常点 (50%)：授業内課題への記入・提出など含めた参加点課題レポート等 (50%) なお 15 回の出席 (または同等の活動等) および次のいずれか 1 つを必須とする統計グラフコンクールに出席・データ解析コンペで発表・SRC で報告

■留意点

2年生春学期はグラフコンクールへの出席 2年生秋学期はデータ解析コンペへの参加・報告 3年生春学期は SRC での報告 3年生秋学期はデータ解析コンペへの参加・報告 4年生春学期は卒業研究のテーマ決めと外部発表 (学会の大会・シンポジウム) 4年生秋学期は卒論を最終到達目標とする。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 小西 英行**サブタイトル** マーケティング基礎**担当教員** 小西 英行**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

本ゼミでは、マーケティングの基本をしっかりと学び、各種プロジェクトを通じて学んだマーケティングの実践を通じて、応用力を養います。

小西ゼミの3つの柱＝①ビジネス系資格取得、②社会人基礎力、③ゼミ生の親睦→就職活動に役立つスキルを磨きます!!

①ビジネス系資格取得：日商流通マーケティング（販売士）検定・日商簿記検定・秘書検定・ITパスポート、宅地建物取引士

→合格に向けサポートします!!

②社会人基礎力（ア）商工会議所等主催の、まちづくりコンペティションへの参加

→企業とのタイアップによる、製品企画、販売実習など（イ）大学祭模擬店参加

③ゼミ生の親睦（ア）春・夏のゼミ合宿（イ）各種親睦会：新ゼミ生歓迎会、懇親会（3密を避けたオンライン式も含む）etc

■科目分類

ビジネスマネジメント／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

マーケティングに関する文献を毎年1冊以上読破して「マーケティング基礎知識」を理解するとともに、まちづくりコンペや大学祭模擬店等を通じて「マーケティング実践力」を身につけることを目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

マーケティングの基礎知識に基づいて、ビジネス環境を理解し、判断することができる。

■授業形態 AL 手法

〔授業形態〕 演習

〔活動形態〕 個人ワーク／グループワーク

テークルクラスルームとテークルドライブを利用し、ゼミ活動の成果を共有しながら、グループワークを行う。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

テキスト学習及びフィールドワークそれぞれにおいて、予習1時間以上、復習1時間以上が必要

■授業の概要

- 第1講 マーケティングとは何か
- 第2講 顧客価値と顧客満足
- 第3講 マーケティング戦略の構図
- 第4講 マーケティング環境の分析
- 第5講 消費者情報処理
- 第6講 購買行動
- 第7講 マーケティング・リサーチ
- 第8講 製品戦略
- 第9講 ブランド戦略
- 第10講 価格戦略
- 第11講 流通戦略
- 第12講 マーケティング・コミュニケーション
- 第13講 サービスマーケティング
- 第14講 リレーションシップ・マーケティング
- 第15講 ソーシャル・マーケティング

■フィードバックの要領

メールや個人面談にてフィードバックを行います。

■評価基準

評価 P（合格）：講義・合宿・模擬店等の全員活動への100%参加（欠席分はレポート等の課題）

評価 F（不合格）：講義・合宿・模擬店等の全員活動への参加が100%未満（欠席はレポート等の課題）

■評価方法

平常点（100%）

■留意点

- ・よく遊ぶよく学ぶ、個性的な学生の参加を期待します。
- ・3年間の大学生活を、とことん充実させましょう!!

科目名	ホームゼミ (Seminars) 小林 昭菜		
サブタイトル	海外の経済事情に強くなろう		
担当教員	小林 昭菜	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■授業目的

グローバル化の時代を生き抜くための知識、教養をつけ海外の経済事情に強くなる。

■科目分類

顧客理解／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

本ホームゼミは、①社会生活を豊かに生きていける知識、教養を養う、②データ処理、分析能力をつける、③問題解決能力を身に着けるためのトレーニングを行う。ゼミ生には沢山のデータ、資料、本を読み、大事なところを自分の力で見つけ分析することを推奨する。研究は、各自で丁寧にしあげる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

各自の能力を最大限に発揮できるような環境を整える。学生同士のフィードバックを行う。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] その他：フィードバック

発表に対するフィードバックを毎週実施する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

2022年度のテーマは「コロナ」について。ゼミ生各自の関心のある国を一つ取り上げ、1年間その国の事情を毎週調査し、授業で発表、調査内容を積み上げていき資料の完成を目指す。（各 1.5 時間）

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その1
- 第3講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その2
- 第4講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その3
- 第5講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その4
- 第6講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その5
- 第7講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その6
- 第8講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その7
- 第9講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その8
- 第10講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その9
- 第11講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その10
- 第12講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その11
- 第13講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その12
- 第14講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その13
- 第15講 これまでのまとめ。

■フィードバックの要領

学生同士、学生と教員とのディスカッションを通してフィードバックを毎週実施する。

■評価基準

評価 P (合格)：総合評価が 8 割以上、課題の出来、発表態度、ゼミへの貢献。

評価 F (不合格)：総合評価が 50%未満、上記目的を達成できていない場合。

■評価方法

平常点：50%、発表：20%、課題：30%

■留意点

一般科目 1年生以上

一般科目 2年生以上

一般科目 3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶ ホームゼミ (Seminars) 小林 英夫

サブタイトル ▶ 組織マネジメントと企業家精神

担当教員 ▶ 小林 英夫

対象学年 ▶ 2年生以上

区分 ▶ 春・秋学期

■授業目的

本ゼミの目的は、ゼミ活動を通じてゼミ生のキャリアの礎を築いていくことである。本ゼミは「組織マネジメント」を対象領域とする。その中で、「組織行動」と「企業家精神」の2つの分野を基本の研究対象としているが、人が社会で生きていく限り様々な組織との繋がりは欠かせないものであり、何らかの創造的活動を行っている。従って研究テーマはゼミ生の関心に応じて幅広く設定することを可能とするが、設定したテーマに対しては真剣に取り組むことを要求する。また、大学時代は人格形成においても人間関係形成においても非常に重要な時期である。ゼミはコミュニティとしての役割を果たすものであり、社会活動を学ぶ場としても位置付けられる。大学生生活、ゼミ活動、設定したテーマに対する取り組みを通じて、良き人生を送るための土台を築くことを本ゼミの狙いとする。

■科目分類

ビジネス創造/ビジネスマネジメント/社会人力育成

■到達目標

- ・社会人としての仕事をしていく際に大切な常識と物事に対する真摯な取り組み姿勢を身に付ける。
- ・社会人として、課題を発見し問題解決を行っていくための方法、理論、科学を身に付ける。
- ・キャリア選択の判断基準ともなり、その選択肢を広げることに役立つ知識を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

知識獲得や問題解決の前提となる取り組み姿勢としての真摯さを重視して習得する。

■授業形態 AL手法

〔授業形態〕 講義/演習

〔活動形態〕 個人ワーク/グループワーク

小林英ホームゼミでは、アクティブラーニングとして個人研究および共同研究の発表プレゼンテーションやフィールドワークを行う。学生は自らの興味に基づいた課題設定を行い、それについて調査した結果をゼミにおいて発表しフィードバックを受ける。このプロセスを繰り返すことにより、興味関心を深耕する力や物事に真摯な姿勢で取り組む力を身につけることが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

事前アサインされた課題項目を学習し、発表資料を準備してくること。ゼミ後には、発表内容への教員および他ゼミ員からのコメントを取りまとめ、次回発表資料改善に活かすこと。(1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 ゼミ活動の計画策定とメンバーの相互理解
- 第2講 研究計画書の立案と更新
- 第3講 ゼミ研究活動
- 第4講 前講に同じ
- 第5講 前講に同じ
- 第6講 前講に同じ
- 第7講 前講に同じ
- 第8講 前講に同じ
- 第9講 前講に同じ
- 第10講 前講に同じ
- 第11講 前講に同じ
- 第12講 前講に同じ
- 第13講 前講に同じ
- 第14講 前講に同じ
- 第15講 前講に同じ

■フィードバックの要領

ゼミナール活動全般に対し毎回のクラス内でコメントを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 下記配点で 60 点以上を合格とする。
評価 F (不合格) : 下記配点で 60 点未満を不合格とする。

■評価方法

平常点 (ゼミ活動への積極的な取組姿勢と建設的意見や質問によるゼミの品質向上への貢献)、ゼミにおける発表内容や提出物の質を評価する。平常点 (30%)、ゼミ活動への貢献 (30%)、ゼミ発表、提出物 (40%)

■留意点

木曜 5 時限に 4 時限にリレー講座を受講した近隣高齢者との交流を T-Studio2 階にてサロン形式で行う際の会場運営や近隣高齢者との交流を、ゼミ活動の一環として実施する場合がある。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 齋藤 S. 裕美

サブタイトル 情報社会における倫理観やメディアリテラシーの研究

担当教員 齋藤 S. 裕美

対象学年 2年生以上

区分 春・秋学期

■授業目的

現代社会において、情報倫理にかかわる問題の解決は急務の課題となっている。このゼミでは、情報モラルやセキュリティ、メディアについて、知識の修得、問題意識の醸成と問題の発見・分析、問題解決方法の考察を行うことを通じて、各個人の知的な判断に基づいて内的規制・自己統制が行なえるようにすること、すなわち知的論理に基づく判断能力を習得できること、情報社会に必要な倫理的態度とは何かを理解することを目標とする。また、ゼミを進めていく際に用いるグループディスカッションやブレインストーミング、KJ法、アンケート調査、資料調査、データ分析、レポート作成などを通じて、社会に出て必要となる基礎的理論や考える手法、文章力を身につけることも目標のひとつである。また、2月にはゼミ内研究発表会において、2・3年生はグループ研究の成果を、4年生は卒業研究の成果を発表する。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／ビジネス ICT

■到達目標

①情報倫理の分野に関する知識の習得 ②情報倫理の分野に関する問題意識の醸成、問題発見・分析、問題解決方法の考察 ③グループディスカッション、ディベート、ブレインストーミング、KJ法、アンケート調査、資料調査、データ分析、論理的な文章の論述ができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

情報倫理に関わる問題に対し、問題を発見し、その原因を分析し、問題解決に向けた自己の考えを他者に対して説明する能力を養う。また他者との意見交換を通じて新たな考えや解決方法を生み出せる能力を養う。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 ペアワーク／グループワーク／その他：ディベート、調査等

ゼミでの演習として、グループディスカッション、ディベート、ブレインストーミング、KJ法、アンケート調査、資料調査、データ分析、レポートの相互添削、グループ研究など様々なアクティブ・ラーニングを取り入れる。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

報告準備、レジュメ作成、発表資料作成等適宜指示する課題について取り組むこと。(授業前後併せて3時間以上学習)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス (ゼミで学修する内容、到達目標など)
- 第2講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第3講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第4講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第5講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第6講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第7講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第8講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第9講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第10講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第11講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第12講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第13講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第14講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など
- 第15講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、研究など

■フィードバックの要領

活動の単元ごとに個別または全体に対するフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : ・積極的参加、意欲的取組み・課題、レポートの内容、記述方法上記で 60 点以上

評価 F (不合格) : 上記評価で評価点 60 点未満

■評価方法

期末レポート 40%、期中のゼミ活動の状況、レポートや課題、発表など 60%に参加態度などを加味して総合的に評価する。

■留意点

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶ ホームゼミ (Seminars) 彩藤 ひろみ

サブタイトル ▶▶ 3DCG ゼミ

担当教員 ▶▶ 彩藤 ひろみ

対象学年 ▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶ 春・秋学期

■授業目的

3DCG をメインに、マルチメディアのスキルを高め、自己表現の手段として使えるようにする。また、プロジェクトを企画実践することにチャレンジする。個人発表もグループ発表も恐れなく、こなせるようになってもらいたい。キーワードは次のとおり。問題解決のための科学ビジネス ICT クリエイティブデザインユーザエクスペリエンスアプリ開発 IoT (INTERNET OF THINGS)

■科目分類

社会人力育成 / ビジネス ICT

■到達目標

3DCG 技術以外の何らかの「スペシャリスト」になること。資格試験はいろいろあるので、各自目標をもって精進すること。3DCG 検定、色彩検定、マルチメディア検定

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク / グループワーク

彩藤ゼミは、「コンテンツビルダー集団として、地域素材を利用したデジタルコンテンツを作り、その結果を地域に還元することで社会に活力を与える」ことをゼミ理念として掲げている。この趣旨に沿うよう、グループワーク、個人ワークともども邁進する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には、Blender ソフトウェアを起動し、使い方に習熟してくること授業後は、プロジェクトの完成のために自ら努力すること（授業前後併せて 1.5 時間以上学習）

■授業の概要

- 第1講 アイスブレイク
- 第2講 プロジェクト発表
- 第3講 プロジェクト進行
- 第4講 プロジェクト進行
- 第5講 モーションコントロール
- 第6講 ポーズづくりと物理演算シミュレーション
- 第7講 キネクトと 3DCG の関係を理解する
- 第8講 プロジェクト中間成果会の準備
- 第9講 プロジェクト中間発表
- 第10講 データ変換
- 第11講 プロジェクト進行
- 第12講 Unity ゲームアプリの作成
- 第13講 プロジェクト成果報告会
- 第14講 最終発表会準備
- 第15講 成果発表会

■フィードバックの要領

ゼミ活動については、すべての努力と成果に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 目標に沿って、よく努力したかどうか
 評価 F (不合格) : 目標に到達できない

■評価方法

平常の取り組み態度 50%、課題や発表など定められたアウトプット 50%の割合で、総合的に評価する。学期ごとに 2 回の発表会があり、そこの作品発表を重視する。

■留意点

・普段から積極的にパソコンに親しみ、表現することが好きな人。使う楽しみを知っている人を求める。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 下井 直毅		
サブタイトル	経済学を学ぶ		
担当教員	下井 直毅	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■授業目的

この講義では、産業社会における基礎的な政治経済について学ぶ。その際、時事的な経済問題を取りあげ、経済学的に捉えて理解することをめざす。この演習を通じて、経済の表面的な動きに惑わされることなく、変化の本質を見る目が育ち、物事を考える力がついて問題解決ができるようになることをめざす。

■科目分類

グローバルビジネス

■到達目標

経済学的なものの考え方の修得をめざす。Word、Excel (マクロ関数を含めて) 等のソフトを活用できるようになることをめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることができる。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

ホームゼミでは、アクティブ・ラーニングとして個人ワーク・ペアワーク・グループワークを行う。こうした活動に主体的・能動的に取り組むことで、課題解決に取り組むスキルを向上させることが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。毎授業後には、授業内で配布された資料に再び目を通し、理解の定着をはかること。これらの準備には、1.5 時間以上の取り組みが必要である。

■授業の概要

第1講	日本経済の歩み	景気循環を中心に日本の経済成長の歴史を振り返る
第2講	日本経済の歩み	日本のこれまでの貿易状況の歴史について振り返る
第3講	日本経済の成長	経済成長に必要な要素とは
第4講	日本経済の成長	経済成長に必要な要素の賦存量について
第5講	日本の経済政策	成長政策、財政政策、金融政策について
第6講	日本の経済政策	これからの日本経済の成長について
第7講	世界経済の歩み	戦後の世界経済体制について
第8講	世界経済の歩み	世界経済の課題について
第9講	世界経済の成長	先進国と途上国について
第10講	世界経済の成長	先進国や途上国が抱える課題について
第11講	演習 (発表)	グループ課題の作成
第12講	演習 (発表)	グループ課題の推敲
第13講	演習 (発表)	グループ課題の事前発表
第14講	演習 (発表)	グループ課題の事前発表を受けての修正
第15講	演習 (発表)	グループ課題の最終発表

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : ゼミに積極的に参加して発言し、経済学的なものの考え方を修得できている。
 評価 F (不合格) : ゼミへの参加意欲が乏しく、経済学的なものの考え方が修得できていない。

■評価方法

ゼミへの参加 (100%)

■留意点

一般科目 1年生以上

一般科目 2年生以上

一般科目 3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 杉田 文章**サブタイトル** スポーツやレジャーのマネジメントを通じて、社会に貢献する方法を模索する**担当教員** 杉田 文章**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

この演習の目的として、2つのことをかかげたい。第1は、レジャーやスポーツ分野の職業を志望する学生を前提に、これらの分野で提供される製品（財やサービス）のうちの何を大切にすべきか、またそのためには、レジャー産業に関わるためにはどのような能力や知識が必要かについての全体的認識を育ててもらうことである。第2は、レジャー産業分野における経営一つの社会現象と捉え、経済現象の一つのケーススタディとして、学習していくことである。これらの目的を達成するために、以下のような方法、内容によって演習を行う。

■科目分類

顧客理解／社会人力育成

■到達目標

ビジネスに従事する人として社会に対する行為的な態度と理解を持ち、社会に貢献する意欲や能力を持って社会に出ることが、最終的な到達目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会への理解、洞察と、これに基づく意見表明、他者との調整などの力をはぐくむことを強く意図します。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

自分が追求すべき課題の発見に重点を置く。レジャー分野に留まらない、広い視野で文献等を検索し、それらをつなぎ合わせることで、独自性を持った課題を抽出し可視化できるように活動する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

自分のメインテーマとなるものを発見し、課題を構造化し、他者にこれを説明できるようになるために、論理的整理と、これをプレゼンテーションする諸技法について学んでいく。（予習・復習 1.5 時間以上）

■授業の概要

第1講 ICE BREAK

第2講 研究・プロジェクト方法論①

第3講 研究・プロジェクト方法論②

第4講 研究・プロジェクト方法論③

第5講 研究・プロジェクト方法論④

第6講 研究・プロジェクト方法論⑤

第7講 研究・プロジェクトの実行①

第8講 研究・プロジェクトの実行②

第9講 研究・プロジェクトの実行③

第10講 キャリア学習①

第11講 キャリア学習②

第12講 キャリア学習③

第13講 プロジェクト例（フットサルのプロモーション）

第14講 プロジェクト例（フットサルのプロモーション）

第15講 外部への発表とその振り返り、総括

■フィードバックの要領

課題に対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）：ゼミ内での活動を完遂し成果を上げた場合

評価 F（不合格）：上記のいずれかを満たしていない場合 F とする。

■評価方法

評価項目すべて満たした場合に P とする。総合評価となる（100%）。

■留意点

ゼミによる学習は、講義よりもより主体的、積極的な取り組みが重要となる。当事者意識を持って、同志となった他のゼミ生と互いに影響し合って成長するという強い意思を持った（またはそうなりたいと強く望んでいる）学生の参加を希望します。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 高橋 恭寛		
サブタイトル	日本の文化・伝統を学ぶ		
担当教員	高橋 恭寛	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■授業目的

日本を飛び出してグローバルビジネスを手がけるにしても、地域で活躍するにしても、自分の足元について無自覚のままではいけない。日本を知るなかで自分の立ち位置に自覚することができるのではないのでしょうか。そのような学びを通過して社会人基礎力を身に付けていく。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

資料を調べたり読んだりまとめていく資料整理と読解の力を身に付ける。また、まとめたことを言語化して理解してもらうようにする。また、資料読解をアウトプットのなかで、自らの立ち位置について考察を深めることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

資料を調べることで日本に関わる知識を広げ、それらアウトプット出来るようになることで、より深い学びを得ることができる。その知識を下敷きに自らを律することのできる人材となることを目指す。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク/グループワーク

ホームゼミでは、アクティブ・ラーニングとして個人ワーク及びグループワークを行う。具体的には、個別発表やグループでの課題報告に取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、調査・報告能力を身に付けることが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前に提示した資料について内容をまとめてレジメしておく。また、指定した図書についてあらかじめ読解しておく。(各授業 1.5 時間以上)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 文献の調べ方と選び方
- 第3講 個別事例について学ぶ①
- 第4講 個別事例について学ぶ②
- 第5講 資料調査と紹介①—1
- 第6講 資料調査と紹介①—2
- 第7講 個々のテーマについて報告①—1
- 第8講 個々のテーマについて報告①—2
- 第9講 課外調査①
- 第10講 課外調査②
- 第11講 個別事例について学ぶ③
- 第12講 個別事例について学ぶ④
- 第13講 個々のテーマについての報告②—1
- 第14講 個々のテーマについての報告②—2
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

毎回提出されたものに対しての赤入れやコメントを付すかたちでフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 課題として出した発表をおこない、提出物を出すこと。
 評価 F (不合格) : 課題として出した発表をおこなわず、提出物も出さない。

■評価方法

課題報告 70%、提出物 30%

■留意点

フィールドワークをすることがある

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 趙 佑鎮**サブタイトル** 「環境と経営」の総合的理解 / マーケティング知識と大局観の涵養**担当教員** 趙 佑鎮**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

本演習では「マーケティング」、「経営組織論」、「ベンチャー企業経営」、「流通」、「教養と歴史観」をテーマとして「環境と戦略」の具体的なケースを扱いながら企業経営の現実を理解することを目的とする。最前線事例としての具体的なケースをもとにグループディスカッション及び問題解決に関連するプレゼンテーションを通じて、経営における「智者は未萌にみる」とは何かを互いに意識できること（学生も教員に気づきを与える）を期待するものである。

■科目分類

顧客理解 / ビジネス環境理解 / ビジネスマネジメント

■到達目標

「環境と経営」の総合的理解・「マーケティング」・「ベンチャー企業経営」・「経営組織論」の3つのテーマにおける基礎知識の理解・学生と教員、ゲスト講演者（経営者等）との活発な発言、ディスカッションを通じてのコミュニケーション力の向上・教養知識と歴史観の涵養

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

マーケティング知識と大局をみる教養・歴史観の涵養を通じて、社会の問題発見と解決に関与していく高い志と社会変革への関心を確立する

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義 / 演習

[活動形態] 個人ワーク / ペアワーク / グループワーク

ホームゼミでは、アクティブ・ラーニングとしてグループディスカッションや個人ワークを行う。個人ワークでは教員が示した講義内容の中で印象深い箇所を中心に感想レポートをTNEXTに提出し、教員の評価あるいはコメントを受ける。授業内容の理解を深め、志を向上させることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

ケーススタディー資料を授業前に読んでくる。授業前に同じグループの学生がゼミ時間外でミーティングし、協力してWORD, POWERPOINTを用いてレポート、プレゼン・発表資料をつくってこること（1.5時間以上学習）。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション、ケーススタディー・ディベートとは
- 第2講 キャリアとは
- 第3講 やる気が出ることは、動機付け・官僚制
- 第4講 個人の自己実現とプロジェクトドライブ制度
- 第5講 松下幸之助と松下イズム
- 第6講 マーケティングコンセプトの実践
- 第7講 新製品開発のマーケティング
- 第8講 マーケティング組織論
- 第9講 流通とは何か
- 第10講 チャンネルの組織化とパワー関係
- 第11講 大規模小売業のケーススタディー
- 第12講 中小小売商業の問題
- 第13講 流通と公共政策
- 第14講 論文の書き方
- 第15講 総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価P（合格）：良好な受講態度とレポート・プレゼン資料提出、「環境と経営」の総合的理解

評価F（不合格）：レポートの未提出、不誠実な受講態度の結果による不合格

■評価方法

平常点と授業態度（80%）（グループディスカッションとプレゼンテーション）+小テスト（10%）+レポート（10%）

■留意点

無断欠席は絶対不可

科目名	ホームゼミ (Seminars) 内藤 旭恵		
サブタイトル	情報、地域、写真、商品開発		
担当教員	内藤 旭恵	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■授業目的

ホームゼミであるため、基本的には、各学生の能力向上と成長を促すことを主な目的とする。また、今年度は、情報、地域、写真、商品開発と幅広い専門分野に対して横断的かつ学際的な教育を展開するため、オールラウンダー的な存在を要請することを目的とする。

■科目分類

ビジネス創造／ビジネス ICT／地域ビジネス

■到達目標

情報、地域、写真、商品開発において、それぞれ、ある程度のモノが完成することを目標とする。情報は、情報処理をメインとし、地域情報の収集や発信を主な目的とする。地域は、地域課題解決に向けた方法論の洗い出しを行う。写真は、実際に地域に飛び出して行って、個人の作品作りを中心に行う。商品開発は、多摩地域をPRするための商品開発をし、サンプルを完成させることを最初の目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

各班ともに成果物を提出してもらうため、あらゆる表現方法を検討してもらう計画である。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義／演習

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

実際にフィールドに出て研究を実施する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

情報、地域、写真、商品開発において、各班それぞれ、週に 5 時間程度は、講義時間とは別に準備の時間を要する。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 事前準備
- 第3講 実施計画の策定
- 第4講 プロジェクトの実施。
- 第5講 プロジェクト進行。
- 第6講 プロジェクト進行。
- 第7講 プロジェクト進行。
- 第8講 プロジェクト進行。
- 第9講 プロジェクト進行。
- 第10講 プロジェクト進行。
- 第11講 プロジェクト進行。
- 第12講 プロジェクト進行。
- 第13講 プロジェクト進行。
- 第14講 まとめと今後の課題。
- 第15講 まとめと今後の課題。

■フィードバックの要領

反省会を実施する。

■評価基準

評価 P (合格) : 完成した作品に対する評価とゼミ活動への参加状況を総合的に判断して決定する。

評価 F (不合格) : ゼミ活動への参加の態度が悪いまたは作品が完成しないなどの場合には不合格となる。

■評価方法

参加姿勢 50% 完成作品 50%

■留意点

一般科目 1年生以上

一般科目 2年生以上

一般科目 3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶ ホームゼミ (Seminars) 中澤 弥

サブタイトル ▶▶ メディア研究

担当教員 ▶▶ 中澤 弥

対象学年 ▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶ 春・秋学期

■授業目的

今日の我々は多様なメディアに囲まれて生きている。本ゼミでは、特にマスメディアについて、その歴史的背景を探り、そのコンテンツ(内容)がどのような影響・効果を受容者に与えるのかを考えていく。マスメディアにおいては、我々は多くの場合受容者であるわけだが、単にコンテンツを消費するだけでなく、発信者(作者)からいかなる媒介(=これがまさにメディアである)を通して伝えられるのか、まずはそれを意識することが重要である。そしてそれぞれのメディアの特性を知り、その環境に着目することで、メディアを介したコミュニケーションの可能性を探る。

■科目分類

ビジネス環境理解/地域ビジネス

■到達目標

メディア研究の基礎をふまえ、対象となるコンテンツについて資料を読み込んだうえで課題を発見し、問題を提起できる。同時に、プレゼンテーションの方法を身に付け、自分の考えを論理的に文章化できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

メディアの特性を理解し、課題を分析した上で新たな価値や創造性を生み出す。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 グループワーク

グループの研究テーマは、各グループにおいて決定し、調査・研究にあたる。研究テーマによっては、必要に応じてフィールドワークを各グループで企画し、実施する。中間発表として、パワーポイントを用いた口頭発表を必須とし、レポートの提出に備える。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

作品(コンテンツ)の読解。プレゼンテーション資料の作成。レポートの作成。(各授業毎 1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 メディアについて
- 第2講 メディア研究の方法 1
- 第3講 メディア研究の方法 2
- 第4講 メディア研究の対象を選ぶ
- 第5講 作品(コンテンツ)研究
- 第6講 個別のメディア研究
- 第7講 資料調査
- 第8講 資料調査の結果
- 第9講 フィールドワークの計画
- 第10講 フィールドワークの実施
- 第11講 プレゼンテーション資料の作成
- 第12講 プレゼンテーション
- 第13講 レポートのアウトラインの決定
- 第14講 レポートの作成
- 第15講 レポートの完成

■フィードバックの要領

レポートについて、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格): 資料調査、フィールドワークを適正に行い、課題レポートが十分な内容となっている。

評価 F (不合格): 課題レポートが未提出、または十分な内容を備えていない。

■評価方法

資料調査・フィールドワーク 40% 課題レポート 60%

■留意点

科目名 ホームゼミ (Seminars) 長島 剛**サブタイトル** プロデュース力をつける**担当教員** 長島 剛**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

本ゼミのテーマはプロデュース力をつけること。名刺作成をして、企業や行政の現場を回りながら、プロデュース力や課題解決力をつけていく。テーマ研究や地域研究を通して基礎を学び、イベントや企業との共同研究を通して実践力もつけていく。社会の最前線で、具体的なプロデュースをおこない企画力を試す。

■科目分類

ビジネスマネジメント／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

社会に出たときに必要となるプロデュース力をつけること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

課題に対し、つなぐ力を活用したプロデュース力を習得する

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

ホームゼミ会議の中で、企画書の書き方、社会人とのコミュニケーション手法、グループワークなど基礎的なことを習得する。つなぐカプロジェクトとして、企業や行政との課題解決プロジェクトに主体的に参加して、様々なアウトプットを行う。豊かな地域を作っていくことを目的とする。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

企業や行政の企画案作りや事前資料づくりなど (各授業ごと 2 時間以上)

■授業の概要

第1講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第2講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第3講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第4講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第5講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第6講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第7講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第8講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第9講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第10講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第11講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第12講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第13講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第14講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第15講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施

■フィードバックの要領

ゼミ、フィールドワーク、メール、LINEWORKS などで都度フィードバックする

■評価基準

評価 P (合格) : ひとつでも多くの地域の人や団体をつなぎ、課題解決ができたかどうか
 評価 F (不合格) : 途中で投げ出した場合

■評価方法

ゼミやフィールドワークの関わり方により総合的に判断 (100%)

■留意点

特になし

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 中庭 光彦

サブタイトル ▶▶▶ 都市・地域活性化研究

担当教員 ▶▶▶ 中庭 光彦

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■授業目的

都市・地域活性化、観光まちづくり等を専門的に学ぶ。地域活性化政策をリスク対策の手法と捉え、地域活性化、観光まちづくり、水文化、流通とモビリティ、大規模災害、の五領域で、課題検討、対策シナリオを政策として提案する。本ゼミでは、現地に行き、企業や行政への取材・調査を行い、リスク対応の複雑な現場を読み解き、現場に即した地域政策のシナリオプランニングを行う。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／地域ビジネス

■到達目標

1. 個人研究をSRCで発表。2. グループ研究をAL祭で発表。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

- ・知識、考え方を覚え理解できたか。
- ・知識、考え方を言葉で説明できるか。自分で長文情報を調査できるか。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できるか。

■授業形態 AL手法

〔授業形態〕 演習

〔活動形態〕 個人ワーク／グループワーク

グループワーク、フィールドワークを行い、主体的に課題把握、構造化、提案へのプロセスを実践させる。個人・グループ両方で課題解決能力を高めることが目的である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

ゼミで課した課題を行う事。(1.5時間以上)

■授業の概要

- 第1講 ゼミの方針と進め方
- 第2講 研究計画書作成
- 第3講 研究計画書作成
- 第4講 グループ研究の研究計画作成
- 第5講 クリティカル・リーディング①
- 第6講 クリティカル・リーディング②
- 第7講 クリティカル・リーディング③
- 第8講 クリティカル・リーディング④
- 第9講 個人研究の発表指導①
- 第10講 個人研究の発表指導②
- 第11講 個人研究の発表指導③
- 第12講 グループテーマについて討議
- 第13講 グループテーマについて討議
- 第14講 グループテーマについて討議
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

各学生に対し適時フィードバックを行う。

■評価基準

評価P（合格）：ゼミに積極的に参加し、個人研究、グループ研究の成果を残す。
評価F（不合格）：ゼミ参加が不十分で、個人研究、グループ研究の成果も不十分。

■評価方法

平常点：40％／個人研究：30％／グループ研究貢献度：30％

■留意点

科目名 ホームゼミ (Seminars) 中村 その子**サブタイトル** 地域企業と連携した 広告・宣伝・PR・情報発信ゼミナール**担当教員** 中村 その子**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

(活動内容) ラジオ番組企画と出演ラジオコマーシャル研究・制作 映像・静止画コマーシャル研究・制作ポスター、ピラやポップなどの広告印刷物研究・制作 ネーミングとキャッチコピーの手法を学ぶ 世界、そして地域をPRする＝シティブロモーション、地方公共団体や非営利組織、福祉関連団体、ボランティア活動などの広報マスコットキャラクターやアニメキャラクターによるセールスプロモーション活動 イベント活動と企業PRの関係を探る 上記に関連する懸賞やコンテストへの応募 コミュニティラジオ局やケーブルテレビ局など、広告に関連の深い企業の見学やインターンシップ その他企業や製品、サービスに関するPR活動全般に目を向ける自分のアイデアを製品開発に結び付けるための研究とそのPR

■科目分類

顧客理解／ビジネス創造／社会人力育成

■到達目標

講義目的に書かれている項目において、関連する社会の現場で、自分の志を実現すべく、革新的で創造的な役割を果たして仕事をしていくことができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

自ら動くことのできる主体性や周囲の人を動かす巻き込み力、企画やアイデアを現実のものとする実行力をゼミ活動を通して身に付ける。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク／その他：PBL LTD ジグソー

ホームセミナールでは、アクティブ・ラーニングとしてPBLを行う。具体的には外部組織と連携してアイデア提案、プロジェクト企画制作、商品開発などに取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、産業社会の最前線で問題解決にあたり、常に革新的な視野で事業構想できるようになることが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

毎週教員から告知される学習テーマについて基礎的な知識を検索しておくこと、また授業後は授業内容に関して自分の意見や提案、アイデアなどをまとめておくこと(プレゼンテーションできるようにしておくこと)(1.5時間以上)

■授業の概要

- 第1講 ゼミってなに？
- 第2講 コマーシャルとはそもそもなに？
- 第3講 営利活動とは関係のないコマーシャルもある
- 第4講 コマーシャルとことば力
- 第5講 世の中のすべてのものがPRになる可能性がある
- 第6講 ことば力で社会を動かせ～キャッチコピーとネーミング
- 第7講 商品名と消費者への訴求効果
- 第8講 コマーシャルテクニックと人間力
- 第9講 人間がコマーシャルから受ける影響とその結果取る行動
- 第10講 セミナール活動とコンテスト、懸賞応募
- 第11講 自分のアイデアや企画、プロジェクトを効果的に情報発信する、プレゼンテーションする
- 第12講 人を引き付ける力とイベント企画運営
- 第13講 日本と海外のCM比較
- 第14講 行動経済学から見るコマーシャル
- 第15講 アイデアと商品企画

■フィードバックの要領

ゼミ活動の後には、その成果について学生と十分に話し合い、評価を伝える。

■評価基準

評価P(合格)：上記活動項目について、十分な成果を出すこと
 評価F(不合格)：上記活動項目について、成果が出せなかった場合

■評価方法

ゼミは毎回出席することがあたりまえである
 テストや授業内課題 20パーセント
 ゼミの教室内外での活動の成果 60パーセント
 レポート提出 20パーセント

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶ ホームゼミ (Seminars) 中村 有一

サブタイトル ▶ 情報技術による価値の創造

担当教員 ▶ 中村 有一

対象学年 ▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■授業目的

情報系のゼミで、主に、コンピュータ、ネットワーク、情報社会、数理モデルなどの分野で研究を進めている。内容的には理科系・工学系であるが、それほど前提となる知識は必要としない。情報系の分野において各自テーマを決め、研究を通して実際のな知識を身に付けることを目的とする。また最終的には卒業論文または卒業製作の形に成果をまとめる。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

自分で研究テーマを決め、研究していく能力を身につける。プログラミングや電子工作などにより、自分のアイデアを実現していくこと。成果を論文や研究発表の形で表現する能力を習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

情報技術に関して意欲的で実際に役立つ研究に取り組む。

■授業形態 AL 手法

〔授業形態〕 演習

〔活動形態〕 個人ワーク

アクティブ・ラーニングとして各自の研究テーマについて研究成果の発表、質疑などを行う。またプログラミングやサーバ管理に関する演習をグループで行い、様々なスキルを実感として身に付ける。情報系の図書を図書館で借りて読み、紹介する演習も行う。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各自研究を進め、レポート・卒業論文などを書く。（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要

- 第1講 各自選んだ研究テーマについて、研究計画を作成し、発表を行う。
- 第2講 情報系の図書を読みこなす
- 第3講 研究テーマの選び方
- 第4講 文献の選び方
- 第5講 研究を進める
- 第6講 進捗状況の報告
- 第7講 発表資料の作成
- 第8講 中間発表会を開催
- 第9講 プログラミング演習 (1)
- 第10講 プログラミング演習 (2)
- 第11講 プログラミング演習 (3)
- 第12講 プログラミング演習 (4)
- 第13講 MOS 試験対策 (1)
- 第14講 MOS 試験対策 (2)
- 第15講 最終発表会を開催

■フィードバックの要領

研究の中間発表、最終発表において、成果を講評し、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格)：研究発表を行い、レポート・卒業論文を提出すること

評価 F (不合格)：研究発表を行わない場合、レポート・卒業論文などを提出しない場合

■評価方法

平常点 30%、レポート・発表 70%

■留意点

やる気をもって積極的に参加することが重要である。自分でテーマを探し、自分で研究を進めていくという自己解決能力を養うことが目標である。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 野坂 美穂**サブタイトル** 地域を元気にするための仕組みについて考え、活動する～地方創生に向けて～**担当教員** 野坂 美穂**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

本ゼミでは、フィールドでの活動と知識・理論の習得の双方を重視します。①フィールド(学外)での活動：主に地方創生をテーマとした活動、特に第一次産業(農業・林業・漁業)の振興を目指した活動を行います。活動後は、必ず「振り返り」を行います。②知識や理論の習得：基本的な経営学の文献を読み、問題を分析するための知識や枠組みを学びます。地方創生や地域活性化に関連する文献を輪読します。事例分析やディスカッションも行います。③研究手法の習得：フィールドでの調査方法の文献を読み、研究方法や現場での作法を学びます。実践として、フィールドでのインタビュー等を行います。④就職に向けた準備：働くことの意味(なぜ人は働くのか)や、基本的な社会人としてのマナー、新聞の読み方などを学びます。就職のための業界分析や企業研究も行います。

■科目分類

ビジネス環境理解/社会人育成/地域ビジネス

■到達目標

①自ら進んで行動する「主体性」と、自分の頭で考えていることを形にする「表現力」を身につける。②ゼミの仲間や様々な地域の人々と共に活動することで、「協調性」や「対話力」を養う。③教室内で学んだ知識と教室外(地域等)で学んだ体験を結び付け、理解を深める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

地域で活動を行いながら、主体性や目的を持ち、地域の人々と共に課題解決に努める力、そしてリーダーシップや協調性を身につける。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク/グループワーク

ホームゼミでは、アクティブラーニングとして、グループワークを中心にを行います。テーマを決めて活動を行います。基本的には、自分達でスケジュールを決めて、自分達で作業の進捗を確認しあい、自分達で運営します。学外での活動も盛んに行います。これにより、地域の方々との交流を通じて、地域の課題解決に努めます。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

適宜、指示します。(各授業毎 1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 インTRODククション
- 第2講 フィールドで活動を行う上での心構えや注意点。振り返りについて
- 第3講 文献研究①
- 第4講 フィールドワークの方法と事前準備
- 第5講 文献研究②
- 第6講 フィールドワーク①(予定)
- 第7講 振り返り、新聞の読み方
- 第8講 地方創生に関するドキュメンタリーの視聴
- 第9講 フィールドワーク②(予定)
- 第10講 フィールドワーク③(予定)
- 第11講 振り返りと文献研究③
- 第12講 文献研究④
- 第13講 文献研究⑤
- 第14講 フィールドワーク④(予定)
- 第15講 前期の振り返り

■フィードバックの要領

提出したものについては、必ずコメント、アドバイスを添えて返却します。

■評価基準

評価P(合格)：ゼミに貢献している。意欲を持って、ゼミの活動に取り組んでいる。

評価F(不合格)：いかなる理由にせよ、5回休んだ場合は、不可とします。

■評価方法

平常点30%、成果物30%、グループワークやフィールドでの活動の貢献度40%

■留意点

ゼミは欠席をするとチームのメンバーに迷惑がかかります。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) パートル**サブタイトル** 日本とアジアの「架け橋」になる次世代ビジネス・リーダー養成塾**担当教員** パートル**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析して、未来を洞察していくことが求められている。本ゼミでは、中国を含めた大中華圏を立体的かつ複眼的な視点で理解するための基礎的な知識の修得と産業界が求める問題発見・解決能力、高度なコミュニケーション能力を備えた「グローバル人材の育成」を念頭に置いた各種調査活動に基づいたプレゼンテーションおよびディスカッションを積極的に行う。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

春学期は、日本やアジアに関する時事問題を中心とした「Asian Weekly News (毎週)」、業界・企業研究に関する報告ができるようにし、日本をはじめ、大中華圏・アジア地域に関する知見を深める。秋学期は、チーム分けしてグループワークを行う。研究テーマを設定し、文献研究やフィールドワークを通じて情報の調査、収集、分析を行い、研究成果をゼミだけでなくAL発表祭もしくはSRC(学生発表会)で発表できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

グローバル社会において最低限必要な基礎的なグローバルな知識と思考力を基に、現状を分析して課題の発見と解決に向けた構想力、計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

ホームゼミでは、アクティブラーニングとして外部のビジネスパーソン中心の研究会に参加する活動を行う。具体的には、ビジネスパーソンの講演の聴講に加え、社会人との交流を通じて時代の流れと企業や産業界の最新動向を把握する。本活動に主体的・能動的に参加することにより学生の学修意欲の向上と人生観・就業観の醸成に寄与することが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

日頃から時事問題や関心を持つ特定の領域、業界や企業に関する情報の収集、分析、調査する習慣(予習・復習に要する時間は各1.5時間以上)をつけ、問題の発見・解決力・コミュニケーション能力を身につける努力をすること。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス、個人面談。Microsoft Officeの活用を強く推奨。
- 第2講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第3講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第4講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第5講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第6講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第7講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第8講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第9講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第10講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第11講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第12講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第13講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第14講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
- 第15講 ①今学期の総括②次の学期の実施方針について意見交換③個人面談の実施

■フィードバックの要領

毎回の報告に対しアドバイスを行うほか、提出されたレポートへのフィードバックも行う。

■評価基準

評価P(合格):総合点が60点以上で合格。
評価F(不合格):総合点が59点以下は不合格。

■評価方法

プレゼンテーション(30%)・ディスカッション(20%)、グループワーク(30%)、期末レポート(発表会)(20%)により行う。

■留意点

①ゼミのルール(時間厳守・課題提出期限厳守など)を厳格に順守すること。②ゼミ内での報告等はペーパーレスで行うため、GoogleclassroomとLineグループへの登録が必須。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 初見 康行**サブタイトル** 「仕事・働くについて考える」**担当教員** 初見 康行**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

本講義の目的は、自分にとっての「仕事・働くとは何か」を探求していくことである。本目的を達成するために、主に (1) 文献調査、(2) インタビュー調査、(3) 就業体験 (インターンシップ) の3点を行っていく。これらの活動を通して、自分なりの仕事観、職業観、労働に対する姿勢 (スタンス) を養っていく。

■科目分類

ビジネス環境理解/社会人力育成

■到達目標

①文献調査や社会人へのインタビューを通して、「仕事・働くこと」を知る ②インターンシップを通して仕事を疑似体験し、自分に合った職業選択ができる ③自分にとっての「仕事・働くとは」を言語化することができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

講義を通して、「仕事・働くこと」に関する知識と理解を深めていく。社会人インタビューやインターンシップによって、自己の将来のキャリア選択に対する関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

ゼミ活動では、アクティブ・ラーニングとしてインターンシップへの参加を行う。夏季・冬季の長期休暇中にインターンシップに参加し、就業体験をする。インターンシップに主体的・能動的に参加することにより、自己の職業適性や興味のある仕事を見つけ出すことが目標である。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

仕事・働くことに関する参考図書を事前に読んでくる (1.5 時間) 講義・フィールドワーク・インターンシップ参加後、そこでの学びを整理し、パワーポイント等にまとめる (1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ホームゼミ オリエンテーション
- 第2講 研究計画の立案・報告・更新① (研究テーマを考える)
- 第3講 研究計画の立案・報告・更新② (研究テーマを絞り込む)
- 第4講 研究計画の立案・報告・更新③ (研究テーマを発表する)
- 第5講 研究計画の立案・報告・更新④ (研究テーマをブラッシュアップする)
- 第6講 研究計画の立案・報告・更新⑤ (研究計画を立案する)
- 第7講 研究計画の立案・報告・更新⑥ (研究計画をまとめる)
- 第8講 研究計画の立案・報告・更新⑦ (研究計画を発表する)
- 第9講 研究計画の立案・報告・更新⑧ (研究計画をブラッシュアップする)
- 第10講 研究計画の立案・報告・更新⑨ (研究計画を実行する)
- 第11講 研究計画の立案・報告・更新⑩ (研究計画の進捗を報告する)
- 第12講 研究計画の立案・報告・更新⑪ (研究計画の改善・修正をする)
- 第13講 研究計画の立案・報告・更新⑫ (修正後の研究計画の進捗を報告する)
- 第14講 研究計画の立案・報告・更新⑬ (研究成果をまとめる)
- 第15講 研究計画の立案・報告・更新⑭ (研究成果を発表する)

■フィードバックの要領

研究成果のレポートやプレゼンテーションに対して、適時フィードバックを行う

■評価基準

評価 P (合格) : ①ゼミ発表 (60%) ②インターンシップへの参加 (40%) の合計が 60%以上を合格とする
 評価 F (不合格) : ①ゼミ発表 (60%) ②インターンシップへの参加 (40%) の合計が 60%未満を不合格とする

■評価方法

①ゼミ発表 (60%) ②インターンシップへの参加 (40%)

■留意点

本ゼミを履修する学生は、夏季休暇・冬季休暇中にインターンシップに参加することが必要となる。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 浜田 正幸**サブタイトル** 組織マネジメント、組織心理学**担当教員** 浜田 正幸**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

産業社会で活躍する社会人を育成する。

■科目分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／社会人力育成

■到達目標

2年時は、ビジネスレポートを書くことができるレベル。またフィールドワークの手法を適切に使うことができるレベル。3年時は、組織運営ができるレベル。また就職活動と内定を獲得できるレベル。卒業時には、「社会人3年目」を目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

社会人として必須の、高度な思考力と判断力を身につける。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 演習

[活動形態] グループワーク

グループで業界研究。それを基にプレゼンテーションとディスカッションを進化・深化させる。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回課題が出され、次回までに完遂しなければならない。（各授業毎 1.5 時間以上）QCD は MUST である。

■授業の概要

- 第1講 ゼミナールの進め方説明浜田ゼミナールの理念、行動規範の説明
- 第2講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第3講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第4講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第5講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第6講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第7講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第8講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第9講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第10講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第11講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第12講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第13講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第14講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第15講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

■フィードバックの要領

授業、課題の提出、ゼミ活動、ゼミイベント等、都度フィードバックする。

■評価基準

評価 P（合格）：授業全出席 MUST 浜田ゼミ公式イベントに全出席課題の QCD を満たしている
 評価 F（不合格）：上記要件を満たしていない場合

■評価方法

平常点（授業、イベント）60%、課題の QCD を 40%として評価する。

■留意点

ゼミの授業は無遅刻無欠席であること。その他のゼミ活動（ゼミ合宿、イベント等）も出席することが必須である。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 樋笠 堯士**サブタイトル** 社会環境構築 ～AI自動運転・防犯設計・防災～**担当教員** 樋笠 堯士**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

社会の問題点を見つけ出して、原因を分析し、解決策を具体的に練る力が身につける。多摩市役所・警察署等へのパブリックコメントや企業へのビジネス提案をみんなで行うことで、プレゼンテーションの力はもちろん、対人ビジネススキルの経験を得る。また、何より、社会の役に立ったという有益な経験することも可能である。また、法律の知識で問題を解決する段階的思考である法的思考力(リーガルマインド)を身につけ、企業活動において、問題点・トラブルの背後にある法的状況を把握して、最適なアプローチを選び出す力を、ゼミで磨く。

■科目分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/地域ビジネス

■到達目標

企業活動において、問題点・トラブルの背後にある法的状況を把握して、最適なアプローチを選び出す力(法律の知識で問題を解決する段階的思考である法的思考力)をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

法律の知識で問題を解決する法的思考力を養うことで、「DP2 思考と判断」を、交通・防災・事故減少の視点で地域研究を行うことで、インフラの在り方および地域特性を理解する(DP1 知識と理解)。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

「ホームゼミ」では、アクティブ・ラーニングとして「ペアワークを中心としたグループワーク」を行う。具体的には、社会環境構築に関する文献研究および発表に取り組む。本活動に主体的・能動的に参加することにより、「分析的思考力」を養うことが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

週1回のゼミ活動以外に、フィールドワーク(現地調査)や事前準備(文研研究)を行う場合がある。ゼミの予習(次週までの検討・分析)に時間(2時間)を費やす。

■授業の概要

第1講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第2講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第3講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第4講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第5講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第6講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第7講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第8講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第9講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第10講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第11講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第12講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第13講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第14講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。
第15講	①「移動」、②「交通」、③「防犯」	の面で、「より良い社会環境構築」の研究をする。

■フィードバックの要領

各分析に関して授業内でFBを行う各発表内容に対し、講評を行う論文執筆の査読を行う。

■評価基準

評価P(合格):調査・分析の力、提案・企画の力、対外発表・論文執筆の力の全てが7割に届くこと
 評価F(不合格):調査・分析の力、提案・企画の力、対外発表・論文執筆の力の全てが7割に届かないこと

■評価方法

調査・分析=30% 提案・企画=30% 対外発表・論文執筆=40%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶ ホームゼミ (Seminars) 増田 浩通

サブタイトル ▶▶ ホームゼミ

担当教員 ▶▶ 増田 浩通

対象学年 ▶▶ 2 年生以上

区分 ▶▶ 春・秋学期

■授業目的

経営情報の基礎となる書籍を輪講し、その内容を人前でわかりやすく伝えるためのプレゼンテーションの仕方を学ぶ。また MOS 試験や IT パスポート試験を受け、合格できるよう基礎的な勉強をゼミ全体で行う。またプログラミングの基礎を学ぶ。

■科目分類

ビジネス ICT

■到達目標

プレゼンテーション：人前で、自分が調べたことをパワーポイントを用いて発表できるようにする。MOS 試験や IT パスポート試験を受験する。またプログラミングの基礎を理解し、フローチャートを書けるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

ビジネスの中で必要となるシステム思考を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク/グループワーク

Python 言語、Excel 演習をとおして、自力でのパソコンスキルの取得、向上を目指す。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

ワード、エクセル、パワーポイントを使うので、このゼミで基本的な使い方マスターすること。（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）あわせて、MOS 試験や IT パスポート試験の勉強を参考書を使いながら行う。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス。このゼミの半年の目的を説明する。ゼミ生自己紹介。
- 第2講 輪講用の書籍紹介。発表順番の決定。
- 第3講 輪講とプレゼンテーション 1
- 第4講 輪講とプレゼンテーション 2
- 第5講 輪講とプレゼンテーション 3
- 第6講 輪講とプレゼンテーション 4
- 第7講 プログラミング学習 1
- 第8講 プログラミング学習 2
- 第9講 MOS 試験対策の勉強 1
- 第10講 MOS 試験対策の勉強 2
- 第11講 IT パスポートの勉強 1
- 第12講 IT パスポートの勉強 2
- 第13講 防災ゲーミング 1
- 第14講 防災ゲーミング 2
- 第15講 半期のゼミの振り返り

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）：総合評価が 60 点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。

評価 F（不合格）：総合評価が 60 点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

■評価方法

- ・平常点：50%
- ・発表：25%
- ・課題：25%

■留意点

科目名	ホームゼミ (Seminars) 松本 祐一		
サブタイトル	ソーシャルビジネス・コミュニティビジネスの事業開発		
担当教員	松本 祐一	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期
■授業目的	将来、創業・起業したい、お店をやりたい、地域や社会の問題を解決するビジネスをやりたい、NPOの事業をやりたい、企業で商品開発や新規事業開発に携わりたいという学生を対象に、事業開発に関する理論と方法を学ぶとともに、実際に様々なプロジェクトを企画運営しながら事業開発力を養う。		
■科目分類	ビジネス創造／ビジネスマネジメント／地域ビジネス		
■到達目標	事業開発に関する理論と方法を理解し、自分で事業をデザインできるようになること。		
■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項	2番目に身につけられる事項		
DP2 思考と判断	DP3 関心と意欲		
■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細	地域や社会の課題をとらえ、その解決のための仕組みを構想することができる。		
■授業形態	AL手法		
[授業形態]	講義／演習		
[活動形態]	個人ワーク／ペアワーク／グループワーク		
本ゼミでは、アクティブ・ラーニングとして、実際の地域の現場に出かけてのフィールドワーク、イベント企画・運営、ビジネスプラン作成、プロトタイプの開発と実践といった企業と同じような活動を行う。これらの活動に主体的・能動的に参加することで、事業開発の方法論を体得することを目標とする。			
■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容	ビジネスプランのケース分析や自身のビジネスプラン作成 (各授業毎 1.5 時間以上)		
■授業の概要	第1講 2年生時：事業開発の基本とプロジェクトマネジメントの経験 第2講 3年生時：チームによるビジネスプランの作成 第3講 4年生時：卒業作品の制作 第4講 上記参照 第5講 上記参照 第6講 上記参照 第7講 上記参照 第8講 上記参照 第9講 上記参照 第10講 上記参照 第11講 上記参照 第12講 上記参照 第13講 上記参照 第14講 上記参照 第15講 上記参照		
■フィードバックの要領	その時々アウトプットに対してコメント・評価する。		
■評価基準	評価 P (合格)：ゼミに積極的に参加、企画立案を独自の視点で行い、プロジェクトに積極的に貢献した。 評価 F (不合格)：上記を達成できていない場合		
■評価方法	課題等のアウトプットの質 30% 授業中やプロジェクト中の姿勢 40% チームワーク・リーダーシップ 30%		
■留意点			

一般科目 1年生以上

一般科目 2年生以上

一般科目 3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 水盛 涼一

サブタイトル ▶▶▶ 世界経済と移民社会から現代日本を考える

担当教員 ▶▶▶ 水盛 涼一

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■授業目的

日本には以前から多くの在日外国人（日本国籍をもたずに日本に長期で在住する方）がおり、その数は増加傾向にあった。若年労働力不足を背景に2019年4月1日に「改正出入国管理法」が発効すると、その数はさらに増えつつある。我々は身近な異文化を積極的に受容する必要があるのである。また日本は過去に「Japan as Number One」と称揚されたものであったが、現在は各国と並び立って成長する時代にある。それだからこそ日本のビジネスの長所は海外へ輸出し、また短所は外国企業に学び積極的に取り入れる必要がある。このような問題意識に立ち、内発的の自己省察そして外発的の文化理解により深く多角的な思考方法の獲得を目指すものである。

■科目分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

2年次そして3年次には各国あるいは産業別の調査研究を通して新鮮で信頼性の高い情報の捜索法を身に付け、発表活動を通して説得技術や他者理解を獲得する。またグループワークを通して相互教授法に基づく他者領導や消極層説得を経験し、社会での活動に備える。その上で4年次には長文となる研究論文作成を通し、大きなプロジェクト推進に関わる全体構成や時間配分について自己管理技術を習得していく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

異文化を知れば「知識と理解」に繋がり、また異文化を聴衆に平易に伝える「表現と技能」も習得できよう。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク／グループワーク

2年次において、ゼミ生は「東アジア班」「中東南アジア班」「ヨーロッパ班」「アメリカ班」に分かれ、地域の中から一国を選んで観光および投資に関する調査発表を行う。また3年次において志望の産業別に分かれ国際比較を行う。その上で4年次には学修の総決算として個別に卒業論文の完成を目指す。これらは全て自調自考の精神に基づく積極的なアクティブラーニングとなるだろう。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

普段から好奇心を高め、担当する地域あるいは産業の時事問題に鋭敏に反応する。また、その情報を分析する処理能力、そしてその分析結果を伝える交渉能力の習得に努力する。（各講義で1.5時間以上の予習・復習）

■授業の概要

- 第1講 ゼミ開始ガイダンス
- 第2講 プレゼンテーション
- 第3講 グループ発表
- 第4講 フィールドワーク
- 第5講 プレゼンテーション
- 第6講 プレゼンテーション
- 第7講 グループ発表
- 第8講 フィールドワーク
- 第9講 プレゼンテーション
- 第10講 プレゼンテーション
- 第11講 グループ発表
- 第12講 フィールドワーク
- 第13講 ディベート
- 第14講 グループ発表
- 第15講 フィールドワーク

■フィードバックの要領

各班の重要な学修となるフィールドワークには、書面でのフィードバックを行います。

■評価基準

評価 P（合格）：出席時の学修への参加程度（50%）、グループ発表の内容（50%）の総合が60点以上
 評価 F（不合格）：出席時の学修への参加程度（50%）、グループ発表の内容（50%）の総合が59点以下

■評価方法

出席時の発表および質疑の内容（50%）、グループ発表に至る課外の班活動での貢献内容（50%）によります。なお信憑書類のない2回の欠席により転ゼミも視野に入れた面談を行います。

■留意点

以下に全体方針を記す。①、2年春には在日外国人へのインタビューおよび異文化交流、それを踏まえた発表、そして指摘点を踏まえた再発表。②、2年秋には春内容に加えて在外公館への訪問。③、3年春には主に在外公館の訪問を行いつつ発表技術を高める。④、3年秋にはグループで産業別の国際比較を行い4年次の個別執筆卒業研究への道筋をつける。（続きはWebシラバス「参考文献・参考URL」の項目へ）

科目名	ホームゼミ (Seminars) 良峯 徳和		
サブタイトル	脳波を応用したマーケティング、デジタル技術、メンタルトレーニングについて学ぶ		
担当教員	良峯 徳和	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■授業目的

脳波計などの測定装置を用いることで、心の状態をある程度「見える化」できるようになった。心の状態を「見える化」することで、これまでの生活のあり方やマーケティングの方法、コミュニケーションの方法などが変わる可能性がある。こうした可能性について、さまざまな実験を通じて、実践的に学ぶ。またBMI (Brain Machine Interface) を体験して、その実用化の可能性を実験を通して探求する。

■科目分類

ビジネス創造／社会人育成／ビジネス ICT

■到達目標

①脳に関する基本的な知識の習得②脳波計や皮膚電位計、心拍計などを使い、脳と心の状態を実験・計測する手順・方法を学ぶ。③脳波を利用した最新のマーケティングの手法について学ぶ。④実験計画策定→実験実施→実験結果の集計→考察→発表という一連の科学的研究方法を学ぶ。⑤グループワークでの協調性、積極的な発言力、実行力を身につける。⑥効果的なプレゼンテーション資料を制作する力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

脳波などの生体情報の測定方法を実践的に学ぶとともに、データ分析に関する基礎的な学力を養い、最新のマーケティングの手法や脳波を利用したデジタル技術、メンタルトレーニングについての知識や技術を習得する。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 グループワーク

ホームゼミでは、アクティブ・ラーニングとしてグループワークを行う。脳波を利用したさまざまな実験を企画し、実際に実験機材や実験手続きを組み立てて実験を実施する。実験後は脳波解析や統計処理用のソフトウェアを使ってデータ分析を行うとともに、結果を分かりやすくプレゼンテーションする。脳波という生理的のデータを通して、科学的、客観的にものごとを探求する方法の習得を行う。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

実験においては、事前準備がきわめて重要である。メンバーは分担して、実験に必要な試料や実験計画の立案、実験装置の準備などを行う。こうした準備学習 (予習・復習) のため、1.5時間以上かけること。

■授業の概要

- 第1講 セミの概要説明
- 第2講 脳の構造
- 第3講 脳の構造と機能
- 第4講 大脳辺縁系と大脳基底核、脳幹、小脳の構造と機能
- 第5講 脳と視覚情報処理
- 第6講 脳と感情
- 第7講 脳と記憶
- 第8講 脳と体性感覚、皮膚感覚、触覚
- 第9講 脳波とは何か、脳波を使ったニューロマーケティングとは
- 第10講 脳波測定装置を実際に使ってみる
- 第11講 脳波測定による実験計画の策定
- 第12講 脳波測定実験 1
- 第13講 脳波測定実験 2
- 第14講 脳波測定実験 3 (脳波を使ったメンタルトレーニング)
- 第15講 実験報告レポート

■フィードバックの要領

レポートや発表内容に対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 積極的に参加し、プレゼンやデータ分析、実験準備などの役割をこなしている。
評価 F (不合格) : 上記基準を満たしていない場合。

■評価方法

課題や役割分担への取り組み、ゼミへの参加態度 60%、最終レポート 40%

■留意点

野外実習、ゼミ合宿、研究発表会には必ず参加すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (志) (Seminars (Aspiration))**サブタイトル** 実践力養成のため「専門ゼミ」**担当教員** 石川、小林(英)、千ヶ崎、趙、中澤、中村(有)、増田、関 **対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

学生一人ひとりが興味、関心のあるテーマを選択し、専門分野のエキスパートである教員の指導・サポートを受けながら自主的に研究活動を行う。少人数グループでの討論、発表を通じてコミュニケーションとプレゼンテーションの能力を養うとともに、将来の生き方にもつながる「志」を培っていく。

■科目分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/社会人育成

■到達目標

志をもとに、社会における問題を専門分野の方法論にて解決できることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

複雑な経営環境と問題解決の手がかりを理論的に理解させ、各分野の専門の専任教員の講義とグループ討議を通じて、学生の高い志の確立につなげる。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 演習

【活動形態】 個人ワーク/グループワーク

各分野の専門の専任教員の講義とグループ討議を通して課題に取り組む。必要に応じてフィールドワークを行い、その結果を受けてグループ・ワークに取り組む。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

ホームゼミ所属にあたっては、各ゼミに関連する書籍を最低でも3冊程度読み、その概要を確認しておくことが望ましい。各授業の準備として、問題解決のための調べ物やそれを報告するための準備が必要（90分程度）。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 コミュニケーション
- 第3講 問題解決の前提
- 第4講 問題発見
- 第5講 問題設定
- 第6講 問題分析 1
- 第7講 問題分析 2
- 第8講 問題分析 3
- 第9講 問題分析 4
- 第10講 問題解決 1
- 第11講 問題解決 2
- 第12講 問題解決 3
- 第13講 まとめとディスカッション
- 第14講 まとめとプレゼンテーション
- 第15講 最終課題

■フィードバックの要領

複数の教員がレポートに対し、評価あるいはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）：総合評価が 60 点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合
 評価 F（不合格）：総合評価が 60 点未満で、この講義の到達目標に達していない場合

■評価方法

平常点（50%）：授業内での演習・実験・調査の実施課題制作（50%）：授業内での成果物作成及びプレゼンテーション

■留意点

このシラバス（達成目標・評価基準・各々時間割）は例示であり、各教員によって内容は異なる。ホームゼミの内容・場所・時間については、教員に確認のうえ講義に望むこと。

科目名 インターゼミ (Inter Seminars)**サブタイトル** 寺島実郎学長ゼミ (社会工学研究会)**担当教員** 高橋 宗彦、新井 聖博、村田 千太郎、バードル、
高橋 宗彦、高橋 宗彦、CSG、桐原、田中**対象学年** 1年生(秋学期)以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

インターゼミ(寺島学長ゼミ)の目的は、学部生・大学院生・ゼミOB/OGなど40名と寺島学長をはじめとする本学2学部と大学院の教員15名が、現代社会の抱える課題について、塾形式で切磋琢磨しながら多様な要素や手法を組み合わせた柔軟な発想で、体系的・総合的な答を志向する総合設計力を身に付けることである。学生自身による課題の発掘・発見から仮説の提示、そして多様な要素の組み合わせによる問題解決へ至るプロセスの中で、寺島学長以下、学内の教員や社会で活躍する学外の専門家による付加価値を高め、創造的問題解決策を志向する。14年目を迎えるインターゼミは、13年間で59論文を完成させた。テーマは、以下希望する分野・グループから選ぶこと。①多摩学、②アジアダイナミズム、③サービス・エンターテインメント、④DX。

■科目分類

グローバルビジネス/ビジネスICT/地域ビジネス

■到達目標

①産業社会の持つ課題を発見し、解決へのアプローチを目指す論文を作成する。②選択したテーマについて、文献調査とフィールドワーク、考察と執筆を行い、1年後に論文を完成させる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

文献研究とフィールドワークを通じて課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] グループワーク

「インターゼミ」では、アクティブ・ラーニングとして「グループワーク」を行う。具体的には、「文献研究とフィールドワーク」で取り組む。この「グループワーク」に主体的・能動的に参加することにより、「思考力や論理力を身に付けさせる」ことが目標である。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

①各テーマに従って文献一覧を作成する(1時間)。②フィールドワークをアレンジする(1時間)。③年間スケジュールを作成する(1時間)。

■授業の概要

第1講 希望する分野・グループを選ぶ。

第2講 学長講話と自己紹介

第3講 グループ分け作業

第4講 グループの決定と詳細テーマの検討

第5講 学長講話と各グループの担当教員と学生からの進捗報告

第6講 学長講話とグループワーク

第7講 教員講話とグループワーク

第8講 グループワークおよびフィールドワーク

第9講 グループワークおよびフィールドワーク

第10講 学長講話と各グループの進捗状況報告

第11講 研究計画の発表と学長のアドバイス

第12講 学長講話と学長のグループ別指導

第13講 学長講話と学長のグループ別指導

第14講 学長講話グループワーク

第15講 春学期は箱根合宿(8月中旬)での中間発表。秋学期は最終発表と完成論文の提出。

■フィードバックの要領

論文作成の進捗状況に応じてフィードバックする。

■評価基準

評価P(合格):グループワーク貢献度、中間・最終発表の合算点が、60%以上であること。

評価F(不合格):グループワーク貢献度、発表の合算点が、59%以下の場合不合格とする。

■評価方法

グループワーク貢献度(50%)、中間および最終発表(50%)の割合で評価する。

■留意点

①欠席時は、必ず連絡すること。②授業開始時間は、16時20分であるが、原則16時に集合すること。③寺島学長の講演会やセミナーなどに積極的に参加すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 AP 数学 (Advanced Practical Mathematics)**サブタイトル** ビジネス数学応用**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 1 年生以上**区分** 春学期**■授業目的**

経営情報学部においては、複合領域での知識や技術の修得が必要となる。このような複合領域を対象とする分野で必要になるデータを扱う数学的手法の基礎について、演習と講義により身につけることが本講義の目的である。本講義では、課題を解決するためにどのようなデータの取り扱いをすればよいか、中学から高校 1 年程度の数学を基点として、問題解決方法の理解とそれを応用した問題解決演習を行い、産業社会において必要な数的・論理的処理力の基礎を完全習得する。

■科目分類

社会人力育成 / ビジネス ICT

■到達目標

経営情報学部で学ぶ上での必要な数学の十分な能力が身についているか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

データを扱う技法の基礎を身につけることにより、高度な分析技能と結果の表現方法を習得する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

AP 数学では、アクティブ・ラーニングとして個人ワークを行う。授業の中で配布プリントの演習問題を実施する他、Google フォームにおいてその類題を CBT として実施することで多くの問題に当たることができる。それによりビジネスに生かす基礎的な数学の知識を習得すると共に、実際に自ら演算できるスキルを獲得する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

高校数学の知識を必要とするので、各回で取り扱う単元の事前学習（1.5 時間）を行うこと。各回で完答できなかった問題を中心に、課題の復習（1.5 時間）を行うこと。

■授業の概要

本講義は、1 年次ビジネス数学検定受講者のうち、中間テスト時点で合格した者のみが受講可能な講義であり、受講可能者は別途許可される。講義内容は、高校までの数学をベースに、経営情報学における基礎数学の学習と、その応用問題への適用を行い、数字（データ、エビデンス）に基づいた考察ができるようになるためのより実践的な問題解決方法を習得する。

■フィードバックの要領

毎回の授業内課題演習のチェック、中間・期末テストのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 N（認定）：1 年次ビジネス数学基礎受講者のうち中間試験で検定合格かつ期末試験で合格した者

評価 F（認定せず）：期末試験で合格しなかった場合

■評価方法

平常課題点 50%、期末試験 50%

■留意点

①履修は許可制となる。②試験に対してフィードバックを行う。

科目名 Study Abroad I~VIII (Study Abroad I~VIII)**サブタイトル** 志を持って海外活動をする学生のための単位認定**担当教員** 石川 晴子**対象学年** 1年以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

原則として、大学が認定した海外活動（現地またはオンラインでの研修・留学・インターンシップ）に参加した学生が、研修・留学・インターンシップ先で取得した単位（活動時間など）を多摩大学の正規の単位として読み替えるための科目である。担当教員との事前面談、審査と事前学習、事後学習、成果報告が必須である。

■科目分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

①自分たちの意見、考え方をしっかりとした形で伝え、提案できる（発信）、②相手からの発信を正確に理解し、状況に応じて的確な処理が行える（受信）、③自分が必要な情報（WEB／論文をはじめとする資料や文献など）を検索し、内容を読み取って利用できる（情報理解）、④グローバルイズムに対する正しい知識と、地球人として自分の志を実現するための社会における人間力、コミュニケーション力を海外活動を通して身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

海外の活動先に対する理解を深めると共に、物事に積極的に取り組む主体性や、目的に向かって失敗を恐れずに粘り強く挑戦している実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍できるようになる。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義／演習

【活動形態】 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

具体的な活動内容は、研修・留学・インターンシップのプログラムによって様々である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

海外（現地またはオンライン）での単位認定を伴う活動のため、担当教員との面接、説明会や研修会への参加、事前学習・事後学習が必須。上記の準備学習に要する時間は最低 10 時間とする。

■授業の概要

経営情報学部認定留学プログラム、またはグローバルスタディーズ学部認定留学プログラムに参加し、この科目の単位を取得することができる。また、大学が認定した海外（現地またはオンライン）での社会的活動（インターンシップなど）で、顕著な成果をあげた学生、海外での国際交流活動や地域の国際交流活動に参加して、教員の認定を受けた学生の単位授与にも用いられる場合がある。この科目の単位取得に関するプログラムに参加希望の学生は、T-NEXT 上に掲載される関連情報やお知らせを注意深くチェックし、指示が出たら、学生課国際交流担当者に必ずコンタクトを取り所定の手続きを行ったうえ、プログラム開始前に教員と充分に相談をし、入念な準備をする必要がある。このコンタクトがない場合はプログラムに参加することはできない。留学先教育機関での単位認定を多摩大学の単位として読み替える。または海外での活動の内容を審査することにより、それにふさわしい単位数を原則として認定する。評価は、留学先教育機関の単位認定制度に原則として準じる。または、海外活動の内容を担当教員が審査、評価する。多摩大学の学生にふさわしい志をもって海外活動に積極的に取り組んだかどうかが重視される。

■フィードバックの要領

海外活動に関する事前学習と事後報告の際に、適宜アドバイスと指導及び総括を行う。

■評価基準

評価 N（認定）：留学先の成績認定に準じ、十分な成果を出したかどうかで単位を認定する。

評価 F（認定せず）：留学先のルールを遵守せず、活動も積極的に行わず、十分な成果を出さなかった場合。

■評価方法

海外活動の実績（取得単位数・活動時間など）70%、活動前後のレポート・報告 30%

■留意点

担当教員との事前面接、審査と事前学習、事後学習、成果報告が必須である。必要に応じて多摩大学ホームページ（留学体験記）への投稿を行う。参加する社会的活動に関連したすべての書類と資料を提出する。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 アクティブ・ラーニング実践 I～VIII (Active Learning Practice I～VIII)**サブタイトル** ALプログラム**担当教員** 落合 孝彦**対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**■授業目的**

グローバル化や少子高齢化など社会の急激な変化や予測困難な時代において、生涯学び続け、主体的に考える力を持った人材は、受動的な学修経験では育むことはできない。教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生自らが主体性を発揮し、周りの環境に働きかけを行い、そのなかでコミュニケーション能力を鍛えて、チームワークを発揮し組織による問題解決に貢献出来る社会人基礎力を備えた人材に成長するためには、課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）が必要である。このアクティブ・ラーニング実践は、上記の趣旨で、教員が用意する学外や課外での体験活動などの事前学習・実践・事後学習を通じた主体的な学びのプログラムに参加し、単位取得に必要な時間の学修をし、社会人基礎力の向上があったと担当教員が認めたときに単位を付与する講義である。

■科目分類

グローバルビジネス／ビジネス ICT／地域ビジネス

■到達目標

①主体的に「事前学習」に取り組む。②「実践」の場面においては、主体性を発揮し、周りの環境に働きかけを行い、そのなかでコミュニケーション能力を鍛えて、チームワークを発揮し組織による問題解決に貢献するように努力する。③主体的な活動の中で得られたものを「事後学習」の中で、自らの志の実現のためにどう活かしていくのかを整理する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

各種プログラムへの参加を通じて、課題発見力と課題解決力を修得する。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

「アクティブ・ラーニング実践」では、アクティブ・ラーニングとして「個人・ペア・グループワーク」を行う。具体的には、「文献研究とフィールドワーク」で取り組む。この「個人・ペア・グループワーク」に主体的・能動的に参加することにより、「研究力や専門性を身に付けさせる」ことが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

受講者の能動的な学修が基本となる。事前学習・調査と事後学習は、22.5 時間以上必要である。

■授業の概要

アクティブラーニング・プログラムは、38 プログラム（2021 年実績）を展開している。分野は、海外研修・留学導入、企業研究、地域研究、キャリア、知識・教養であり、それぞれのプログラム内容や実施時期などは、各担当教員が案内や説明会を行う。

■フィードバックの要領

事後学習を通じて、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 N（認定）：アクティブラーニング・プログラムの「計画書」と「報告書」を提出すること。

評価 F（認定せず）：「計画書」と「報告書」の未提出や学修時間を確保できなかった場合は、認められない。

■評価方法

「アクティブ・ラーニング実践報告書」等に基づき能動的学修の達成時間で評価する（100%）。

■留意点

①アクティブラーニング・プログラムの説明会に参加し、どのような活動を行うのか、学修時間はどの程度になるのか、活動に要する負担は時間的な面、金銭的な面でどれくらいになるのかを確認してプログラムへ参加すること。②課外や学外でのプログラム参加に伴う費用は、大学から補助が出る場合を除き、受講者の負担となる。③事前学習、フィールドワーク、事後学習に必ず参加すること。

科目名	インターンシップ I・II (Internship I・II)		
サブタイトル	インターンシップを通して「就業体験」をする		
担当教員	初見 康行	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期
■授業目的	就業体験を通じて「仕事・働く」ということを理解する。自分に適した業界・企業・仕事を探索する。		
■科目分類	社会人力育成		
■到達目標	①就業体験を通して「仕事・働くこと」を体験する②興味のある業界・企業・仕事を発見する③自己の職業適性を見極める④インターンシップを通して社会人基礎力を向上させる		
■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項	2番目に身につけられる事項		
DP1 知識と理解	DP3 関心と意欲		
■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細	インターンシップ（就業体験）を通して職業観の育成を図ると共に、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。		
■授業形態	AL 手法		
[授業形態]	講義／演習		
[活動形態]	個人ワーク／ペアワーク／グループワーク		
	インターンシップ I・II では、アクティブラーニングとしてフィールドワーク及びキャリアカウンセリングを行う。公募型インターンシップに参加する学生は6月のWeb インターンシップ EXPOに参加すること。大学推薦型インターンシップはキャリアカウンセリングに参加すること。主体的・能動的に参加することにより、自己の職業適性を見極め、インターンシップ先を見つけることが目標である。		
■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容	事前講義に参加(9時間)。外部インターンシップイベントに参加(3時間)。キャリアカウンセリングに参加(1時間)。インターンシップ成果報告書の作成(2時間)。インターンシップ成果報告会の参加(3時間)。		
■授業の概要	【要注意】秋学期の履修登録であるが、春学期に事前講義を実施する。春学期第1講「インターンシップ事前講義」で詳細を説明するので、必ず受講しなければならない。本科目のインターンシップ実習は、公募型もしくは大学推薦型を選択し、それぞれ以下の要件を満たすことを必須とする。 1. 公募型インターンシップ自分で学外の実習先を探して応募し、2社以上かつ合計5日間以上の実習をする。 2. 大学推薦型インターンシップ本学と協定を結んだ企業のインターンシップに応募し、5日間または10日間以上の実習をする。 ※業界・企業の説明を受けるだけの「1day 仕事体験」は5日間の実習として認めない ※インターンシップ先を「事前（インターンシップに行く前）」に担当教員に報告をすること。事後報告は認めない ※本科目については、4年間で2回の履修が可能である		
■フィードバックの要領	インターンシップ成果報告会でフィードバックを行う。		
■評価基準	評価 N（認定）：事前講義、実習、成果報告書、成果報告会をすべて満たしている場合「認定=N評価」。 評価 F（認定せず）：要件を1つでも満たしていない場合「認定せず=F評価」。		
■評価方法	事前講義への参加（20%）インターンシップ実習（50%）成果報告書の提出および成果報告会への参加（30%）		
■留意点	【要注意】秋学期の履修登録科目であるが、春学期第1講で講義の詳細を説明する。履修を検討する学生は必ず参加しなければならない。		

一般科目 1年生以上

一般科目 2年生以上

一般科目 3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 キャリア・デザイン IV (Career Design IV)**サブタイトル** 自らの職業人生(キャリア)を切り拓くためのスタートラインに立つ**担当教員** 金、キャリア支援課**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■授業目的**

キャリアのデザインは、狭義のキャリア(職業・職務・職位・履歴)と、広義のキャリア(生涯・個人の生き方等)がある。在学中のキャリアを考える場合、狭義の「キャリア」がスタート段階において重要であるとの考え方に立ち、実際の就職活動に必要な点に焦点をあて講義を展開する。具体的には就職活動に必要なことを、(1)自分のこと、(2)会社のこと、(3)将来の自分(どうありたいか、どう生きたいか)に分割して解説する。次に、その就職活動に必要な準備として、4つのステップ(①自己分析～自分のこと～、②会社のこと～企業・業界研究～、③面接・筆記試験のこと～書類作成～、④マナー・礼儀作法・立居振舞のこと)に分け、就職活動に必要な情報のみを提供することに主眼を置く。なお本講義は、最新の新卒採用に関する情報提供を行うが、就職活動等直近のライイベントだけを視野に入れることなく、今後長きに亘る職業人生を巨視的に捉え、その礎となる就業力の根本的醸成に努める

■科目分類

ビジネス環境理解/社会人育成

■到達目標

「望む企業等からの内定を得るため」に必要な準備の種類と方法、具体的な行動の仕方を理解する。これを実際の就職活動に活かす。まず新規学卒者一括採用(ファーストキャリア)の意義を知り、次にセカンドキャリア(キャリアアップ転職、スキルアップ転職、復職ほか)の可能性も意識する

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

履修者にとっては様々な情報があふれる中、正しく正確で、かつ最新の情報を提供する。同時にそれらの情報を、それぞれがカスタマイズしながら自分のスタイルに合う就活ができることを目指す

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義
[活動形態] 個人ワーク

講義序盤の総論説明のあと、中盤に実践訓練として学内業界研究セミナーへの参加が必須である。この参加体験の振り返りを行いながら、中盤～終盤の各論講義でそれぞれの判断、志向でオリジナルの就活を開始できることを目指す

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義テーマに対する事前学習(1.5時間)。講義後の内容の復習・次回講義に向けた調査・分析(1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション～授業の全体像の確認・学内セミナーについて～
- 第2講 スタートアップガイダンス～具体的に必要なこと、タスク、ボリュームの説明～
- 第3講 業界研究の仕方～第6、7講を効果的にするために～
- 第4講 企業研究の仕方～第6、7講を効果的にするために～
- 第5講 「動画」を見て、学ぶ 正確な就職活動の仕方・イメージをつかむ
- 第6講 「学内業界研究セミナー」への参加(実践経験)
※2022年10月29日(土)
※予定(各自が希望する、又は指定された企業のブースに参加してください)
- 第7講 「学内業界研究セミナー」への参加(実践経験)
※2022年10月29日(土)
※予定(各自が希望する、又は指定された企業のブースに参加してください)
- 第8講 SPI模擬試験(授業内受検)
- 第9講 性格適性検査受検～自己の強味、コンピテンシー把握～(授業内受検)
- 第10講 「自己PR」の作成
- 第11講 「志望動機」の作成
- 第12講 個人ワーク ～自己PR、志望動機、学生時代に注力したことを完成～
- 第13講 「面接試験」について/その種類と対策
- 第14講 絶対に忘れてはいけない『マナー・作法について』(再確認)
- 第15講 学内「模擬面接会」の実施と申込方法について、その他重要連絡事項

■フィードバックの要領

特にフィードバックが欲しい場合は、アンケート記入か個別の相談をされたい

■評価基準

評価 N (認定): 出席状況および課題が一定の到達度に達している場合
評価 F (認定せず): 上記に満たない場合

■評価方法

①平常点: 70% ②講義内課題: 30%

■留意点

この講義は、就職委員長が担当している。講義内課題は学内業界研究セミナー参加を必須とする。他に授業内アンケートも実施する。講義運営はキャリア支援課が行うが、評価(出席状況および課題)は担当教員が行う。本講義は、就職活動対策の観点で受講された。なお、本講義以外での就職活動対策については、随時キャリア支援課の担当相談員/職員へ相談されたい。

科目名 教育課程総論 (Curriculum)**サブタイトル** 教育課程改革の動向を把握し、情報科の単元指導計画を作成する**担当教員** 杉森 知也**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育課程の意義及び編成の方法 (カリキュラム・マネジメントを含む。)

■授業目的

教育課程 (カリキュラム) の意義と、その編成方法・カリキュラム・マネジメントの重要性を理解し、また現代の日本の教育課程改革の動向とその課題について歴史的・国際的に把握した上で、その改善のために学校としてどのような対応ができるのかについて理解することができる。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

1. 教育課程編成の意義や編成の方法を理解することができる。
2. 学習指導要領の変遷から、学力観の変遷を見出すことができる。
3. カリキュラム・マネジメントの意義を、実践事例を通して理解することができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

授業を構築するための基礎的な理解を獲得するとともに、学校現場で生起する課題に実例を踏まえて学校のマネジメントの重要性を把握する。

■授業形態 AL 手法

〔授業形態〕 講義

〔活動形態〕 個人ワーク

自ら課題を見つけ、自ら調査をしてレポートを作成する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前学習の作業をおこない、メモ等を作成して持参する。また、事後学習を課す場合は、次回の授業にレポートを提出する。事前学習に 180 分、事後学習に 90 分程度を要する。

■授業の概要

- 第1講 教育課程と学習指導要領の関係
 第2講 学力低下問題と教育課程改革：キー・コンピテンシー、PISA 型学力とは何か
 第3講 学習指導要領の歴史的変遷と学力観①—戦後初期の教育実践とその批判
 第4講 学習指導要領の歴史的変遷と学力観②—系統主義からの転換
 第5講 教育課程編成の基本原則
 第6講 新学習指導要領高校情報科の目標と内容
 第7講 カリキュラム・マネジメント
 第8講 「総合的な学習の時間」の意味
 第9講 教育課程総論 第8講科目のため空欄
 第10講 教育課程総論 第8講科目のため空欄
 第11講 教育課程総論 第8講科目のため空欄
 第12講 教育課程総論 第8講科目のため空欄
 第13講 教育課程総論 第8講科目のため空欄
 第14講 教育課程総論 第8講科目のため空欄
 第15講 教育課程総論 第8講科目のため空欄

■フィードバックの要領

今回の授業またはメールにて授業内容等へのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している
 評価 A (89~80 点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している
 評価 B (79~70 点) : 講義に参加しているが、積極的な参加姿勢が十分ではない
 評価 C (69~60 点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い
 評価 F (59 点以下) : 講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

確認テスト・課題レポートで 80%、授業での積極的な姿勢 20%で総合的に評価する。

■留意点

講義部分ではできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動とするため、事前学習が必須である。また、自主的・積極的に発言することを望む。各個人はもちろん、互いに進捗状況等を報告しあう等の調整が必要である。なお履修人数等の状況によって、扱う回の入れ替えを行う場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育原理 (Educational Principle) ※2018年度以降入学生対象**サブタイトル** 教育の歴史的展開と教育の原理**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想

■授業目的

本講義は、教職に就く者として必要とされる公教育の理念と制度、教育課程の意義、教育に関する歴史及び思想についての基礎的な知識を習得し、教育の基本的原則や理論的基礎を理解することを目標とする。諸外国と日本の教育の歴史的展開と代表的な思想家の教育思想や教育実践についての基礎的な知識を習得し、歴史的事象と教育の間に関連を見出すことによって、現在の教育課題にも関連していることに気づき、教育を科学的に捉える視点を養う。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

教職に就く者として求められる教育観を養い、基本的な知識の習得をめざす。具体的には、次の4点をめざす。①公教育の理念について、歴史的経緯等を踏まえて理解する、②教育の原理や教育観、子ども観の変遷について理解する、③諸外国の教育史および代表的な思想家の教育思想や教育実践について理解する、④学校教育の目的や理念、方法など近代以降の日本の公教育制度の整備の歴史と戦後の学校教育の原理を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

教育の原理、教育観や子ども観の変遷、公教育の理念や制度を学び、歴史的事象と教育の間に関連を見出し、教育の本質を理解できる能力を養う。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] グループワーク

ALとしてグループワークを行う。グループワークでは、諸外国における市民革命・産業革命と公教育の関わりを調べた上で公教育に関する年表作りを行う。この活動では公教育導入の社会的背景を理解し、我が国の公教育導入との関わりを把握することを目標とする。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。各講で取り扱う時代について、世界史の教科書や教育学事典等で時代背景を確認しておくこと。必要な予習・復習時間は各1.5時間程度（合計3時間程度）である。

■授業の概要

- 第1講 教育の原理
- 第2講 古代ギリシア～中世ヨーロッパの教育
- 第3講 17世紀ヨーロッパの教育
- 第4講 18世紀ヨーロッパの教育
- 第5講 近代社会の成立と教育
- 第6講 近代公教育制度の年表作成
- 第7講 近代公教育制度の発達
- 第8講 19～20世紀初頭の欧米の教育思想
- 第9講 日本における公教育導入の背景
- 第10講 公教育制度の整備と近代日本の教育方法の発達
- 第11講 第二次世界大戦前後の教育
- 第12講 系統主義と経験主義
- 第13講 教育の現代的課題① 「見える学力」と「見えない学力」
- 第14講 教育の現代的課題② グローバル化と教育
- 第15講 教育の現代的課題③ 生涯学習社会

■フィードバックの要領

最終講義等で全体に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 到達目標①～④に関連づけ、自分の考察を含めて的確に説明できる。
- 評価 A (89～80点) : 到達目標①～④を個別に、自分の考察を含めて説明できる。
- 評価 B (79～70点) : 到達目標①～④のうち2つ以上の内容を説明できる。
- 評価 C (69～60点) : 到達目標①～④のうち1つ以上の内容を説明できる。
- 評価 F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末レポート 50%、期中の課題 50%。

■留意点

状況によって、講義内容や扱う回の入替えを行う場合がある。

科目名 教育実習 (Practice Teaching)**サブタイトル** 学校インターンシップ**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 4 年生**区分** 春・秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育実践に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育実習 (学校インターンシップ (学校体験活動) を含む。)

■授業目的

本講義は教育実習の前後に行う指導である。事前に、教育実習の意義、実習上の留意事項、授業の見方、授業の実施方法、実習校とのかわり方などについて講義するとともに、模擬実習を組み込んで2週間～3週間の教育実習の指導・助言を図る。実習後には、実習体験の整理の方法などについて振り返りを行う。その際に、教育実習が単に教える技術を学ぶ場だけではなく、主体的に行動し人間関係を創る総合的な体験の機会であったことを思い起こし、その体験を通じて得た自信を今後の社会人としての生活に生かせるように総括する。

■科目分類

ビジネスマネジメント/社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

教職に就く者として求められる教育実習について、講義技法と教育者としての態度を身につけ、基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

教育実習を通して、教科指導の方法や学級経営等の知識を実践の場で表現する。また教師としての高い志を持って高校生の指導にあたることを試みる。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] グループワーク/その他: 教育実習、討論等

教育実習の事前指導では、アクティブラーニングとして教育実習の意義や教科指導の方法、学級経営等について高等学校での教員経験者による講演を聴き、ディスカッションを行う。また、単元の指導計画・学習活動案に基づく模擬授業とその相互評価も実施する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

実習にあたっての事前準備として、学習指導案作成、教材研究等を行うため関連書籍の熟読を必要とする (20 時間)。授業時に提示するプレゼンテーション課題 (模擬授業) についても万全な準備をする (25 時間)。

■授業の概要

- 第1講 事前指導① 教育実習の意義と概要
- 第2講 事前学習② 学級担任の職務と教育実習生としての関わり方
- 第3講 事前学習③ 現場の声を聞く
- 第4講 事前学習④ 現代の教育環境等について考える
- 第5講 事前学習⑤ 学校観察の要点
- 第6講 事前学習⑥ 主題研究・教材研究の考え方
- 第7講 教育現場実習①
- 第8講 教育現場実習②
- 第9講 教育現場実習③
- 第10講 教育現場実習④
- 第11講 教育現場実習⑤
- 第12講 教育現場実習⑥
- 第13講 教育現場実習⑦
- 第14講 事後学習① 教育実習における学習指導の振り返り
- 第15講 事後学習② 教育実習における活動全体の振り返り

■フィードバックの要領

事前・事後指導では適宜フィードバックを行う。報告会では詳細な検討・分析を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容が完全に理解できている
- 評価 A (89~80 点) : 講義内容が概ね理解できている
- 評価 B (79~70 点) : 講義内容が理解できている
- 評価 C (69~60 点) : 講義内容について最低限の理解ができている
- 評価 F (59 点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

■評価方法

教育実習での評価 60%、その他の課題 40%

■留意点

- ①本講義は教育実習及び教員免許法で定められているその前後の1単位の事前・事後指導を行う。②事前授業は教育実習前(事前)の指導に必要な準備をする。また教育実習後(事後)に、主体的に行動し人間関係を創ってゆく総合的な体験を思い起こし、この体験を通じて得た自信を今後の社会人としての生活に生かせるように総括する。③本講義は集中授業であるため実施日は別途連絡する。
- ④課題に対してフィードバックを行う。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育心理学 (Educational Psychology)**サブタイトル** 学校教育・社会人教育における心身の発達および学習の心理学**担当教員** 加藤 みずき**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程

■授業目的

教育心理学とは、人間の「教える」「学ぶ」という営為について、心理学の観点から科学的に理解・考察する学問である。この講義の目的は、心理学の研究から得られた知見や技術を教育活動の場に応用することによって、教育という活動を社会において効率的・効果的に行えるようにすることである。

■科目分類

社会人力育成／ビジネス ICT

■到達目標

教育・発達について、心理学的な観点から科学的に理解し、一般社会における学校教育・社会教育においても本講義で学んだ知見を応用できるようにすることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

教育効果、モチベーションの増幅、心理発達支援、等を理解することにより心の理解をした上での教育を行うことが可能となる。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク

講義内容を踏まえた気づきや疑問点について、感想用紙への記入を行う。またそこで出た疑問点については、翌週の授業でフィードバックを行う。授業中に必要に応じてペアワークを実施し、相手に説明したり、意見交換を行うことを通して理解確認や理解深化を図る。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

教科書の当該部分を事前に読了し、予習課題が課された場合には事前に取り組むこと（1.5時間）。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと（1.5時間）。

■授業の概要

- 第1講 教育心理学とは何か
- 第2講 心理学における「学習」とは何か
- 第3講 観察学習・動機づけのなりたち
- 第4講 動機づけの基礎と応用
- 第5講 記憶の分類と理論
- 第6講 記憶の理論を生かす・学習方略
- 第7講 ここまでの総括・中間試験
- 第8講 メタ認知と学習観
- 第9講 発達の理論・乳幼児期の発達
- 第10講 ことば・道徳性の発達
- 第11講 社会性の発達・学級集団作り
- 第12講 読解力の発達と教育
- 第13講 青年期の発達—自己の形成
- 第14講 学習評価—誰が何のために評価するのか
- 第15講 これまでの総括・期末試験

■フィードバックの要領

感想用紙に記入された疑問点に関する補足説明を授業通信などによって行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を十分理解し、他者教育、自己成長に十分生かすことができるか。
- 評価 A (89~80 点) : 講義内容を理解し、他者教育に十分生かすことができるか。
- 評価 B (79~70 点) : 講義内容を理解し、他者教育に生かすことができるか。
- 評価 C (69~60 点) : 講義内容を理解し、他者教育に生かせるだけの基礎知識を獲得できているか。
- 評価 F (59 点以下) : 上記を満たさない場合

■評価方法

平常点: 感想用紙や授業内課題への記入 (50%) テスト: 授業期間内に実施する。(50%) テストは中間試験 (20%)・期末試験 (30%) の2回実施する予定である。

■留意点

①本講義は教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②講義中の飲食、携帯電話操作、帽子・サングラスの着用等は厳禁である。

科目名 教育制度論 (Educational System)**サブタイトル** 教育の法と制度について、比較教育学・教育社会学的な視点を含めてとらえる**担当教員** 杉森 知也**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育に関する社会的、制度的又は経営的事項（学校と地域との連携及び学校安全への対応を含む。）

■授業目的

1. 公教育をとりまく社会・行政の制度改革の動向を含めて考察する。
2. 現在の日本の教育制度・行財政について、歴史的視点と国際比較の視点の両面から読み解く。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

日本の教育行財政・制度設計および政策の動向についての基礎的な理解の上に、これを多角的・客観的に評価することができる。また、学校と地域との連携、学校安全への対応についての基礎的な知識を身につける。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

教育の制度に関する基礎的な知識をグローバルとローカルの関係性を意識して獲得する。

■授業形態 AL手法

〔授業形態〕 講義

〔活動形態〕 個人ワーク

自ら課題を見つけ、調査してレポートを作成する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前に公開される授業資料 PDF を確認し、不明な用語については web、図書館の教育学辞典等で調べて疑問をもって授業に参加すること。事前学習に 180 分、事後学習に 90 分程度を要する。

■授業の概要

- 第1講 教育の「制度」とは何か、「公教育」とは何か
- 第2講 国の教育行政組織と教育政策過程
- 第3講 国の教育法令の構成と原理
- 第4講 分権改革による国と自治体の教育行政改革
- 第5講 地方自治体の教育行政組織としくみ
- 第6講 「教育基本法」を読む
- 第7講 教科書の行政としくみ
- 第8講 教育制度発達史（～近代）
- 第9講 学校体系からみる教育の歴史比較
- 第10講 教育の機会均等保障と教育費負担問題
- 第11講 学校の組織・運営と人事管理
- 第12講 特別な教育的ニーズ
- 第13講 特別支援教育の歴史と理念
- 第14講 夜間中学校という制度の発達史
- 第15講 夜間中学校から「機会均等」の意義を考える

■フィードバックの要領

次回の授業またはメールにて授業内容等へのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している
 評価 A (89~80 点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している
 評価 B (79~70 点) : 講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない
 評価 C (69~60 点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い
 評価 F (59 点以下) : 講義が理解できない、他者と協力ができないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

授業での積極的な参加姿勢（質問等）20%、確認テスト・レポート課題 80%を総合的に評価する。

■留意点

本講義は、受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的・積極的に発言することなしには進まない。講義部分はできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動としたいので、事前学習が必須であることを自覚してほしい。なお、状況によって、扱う回の入れ替えをおこなう場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育相談 (Educational Counseling)**サブタイトル** 心理・教育的支援およびカウンセリング・コミュニケーションスキル養成**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法

■授業目的

本講義は、教育場面において相談を受ける立場となった時のその方法や技術・知識の習得と、理論的学問的な背景、実践場面での応用などについて学ぶ。実際にカウンセラーとなって業務を行うには数多くの経験と豊富な知識が必要であり、本講義だけでそれを満たすことは不可能であるが、相談を受ける立場の者として最低限必要な素養を身につけることを目的とする。教育場面とは、学校教育のみならず、社会人教育、人材教育などの場面も想定し、実社会で必要な、意味のある知識を習得する。

■科目分類

顧客理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

教育相談の理論と実践について、適切に理解し、実際の場面でも適用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

傾聴の態度を学び、コミュニケーションの基礎を体得することにより、相談を受ける知識・姿勢を学ぶ。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク／ペアワーク／グループワーク

毎回の授業において、講義後にその内容に沿った演習を行う。基本的にグループワークであるが、個人の内面に踏み込んだ心理的調査・実験なども行う。グループワークにおいては、相互の調査結果の考察や意見交換、相互理解などを行い、カウンセリングの基礎マインドを培う。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回のトピックスに関して、参考図書等の当該部分を事前に読了しておくこと（1.5 時間）。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと（1.5 時間）。

■授業の概要

- 第1講 教育相談とは何か
- 第2講 幼児・児童期の発達
- 第3講 思春期・青年期の発達
- 第4講 不適応・不登校
- 第5講 いじめ・虐待
- 第6講 学習障害・発達障害
- 第7講 学校カウンセリング
- 第8講 教育相談の意義
- 第9講 カウンセリングの基本的枠組み
- 第10講 カウンセリング・心理療法の種類と技法
- 第11講 心理テストの理論とその評価
- 第12講 心理テストの技法
- 第13講 ソーシャルスキル・ライフスキル教育
- 第14講 進路・キャリア相談
- 第15講 精神障害とその理解

■フィードバックの要領

各回の講義で課題・演習・自己分析を行い、その評価とコメントを与える。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を完全に理解し、現場での相談業務で実践できる。
- 評価 A (89～80 点) : 講義内容を十分に理解し、現場での相談業務に生かすことができる。
- 評価 B (79～70 点) : 講義内容を理解し、現場での相談業務に生かすことが期待される。
- 評価 C (69～60 点) : 最低限の講義内容を理解し、現場実践業務に携わることができる。
- 評価 F (59 点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

■評価方法

授業内課題 60%、期末テスト（定期試験期間内に実施）40%

■留意点

①本講義は教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②課題に対してフィードバックを行う。

科目名 教育方法 (ICT を活用した教育の理論及び方法含む) (Teaching Method)**サブタイトル** 情報機器を活用した効果的な授業設計の検討と実践力の養成**担当教員** 水上 晃実**対象学年** 2 年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育の方法及び技術／情報通信技術を活用した教育の理論及び方法

■授業目的

本講義では、高等学校情報科の授業において、情報に関して倫理的態度をもって安全に配慮する規範意識のもと、実践的に情報を活用できる力を指導できる教員を養成することを目的とする。具体的には、生徒に対して情報機器等を効果的に活用したコミュニケーション能力・情報の創造力・発信力・科学的思考力・判断力等を育成し、生徒自身が情報化社会に積極的かつ主体的に参画できる能力・態度を身につけ、ICT 活用指導力を総論的に修得できるよう、その方法をインストラクショナルデザインの原理を用いて学ぶ。また、教育におけるアクティブ・ラーニングの重要性を考慮して、受講者全員が ICT 活用指導力を反映させた模擬授業用の指導案を作成することを具体的な到達目標とし、指導案を作る過程の中で個人の課題を発見するとともに、受講者同士がアドバイスを送り、互いに学び合いながら実践的な教師力・授業力を養うことを最終目的とする。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

1) 教育方法の基礎的理論と実践を理解している。2) 生徒の資質・能力を育成するための教育方法を理解している。3) 学習評価の考え方を理解している。4) ICT 活用指導力を総論的に修得し、学習指導理論を踏まえた学習指導案を作成することができる。5) 情報機器を活用し、生徒の興味・関心を高めることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

自分の意思を効果的かつ分かりやすく伝える力とコミュニケーション能力を養い、情報通信技術を活用した教育の理論を使いながら、生徒の学習効果を上げる授業を展開できる技能を修得する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 グループワーク

教育方法では、アクティブラーニングとしてグループワークを行う。ICT 活用指導力を総論的に修得し、それを模擬授業の指導案に具体的に反映させ、作成した指導案をグループ内で発表し、他の受講生から質問や改善案を受け、ディスカッションしながら指導案をブラッシュアップさせる。これにより授業設計力の向上および、傾聴力を養うことが期待できる。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

教科書の該当部分を講義前に読んでくること。また、学習指導案・授業用 PPT 作成、その他、レポートや振り返り等の課題も含め、予習・復習には毎週 3 時間を要するものを課す。

■授業の概要

- 第 1 講 ガイダンスおよびイントロダクション (教育方法の基礎的理論について)
- 第 2 講 効果的な教育システムの設計について学ぶ。
- 第 3 講 生徒の資質・能力を育成するための教育方法を学ぶ。
- 第 4 講 学級・生徒・教員・教室・教材など授業を構成する基礎的な要件について学ぶ。
- 第 5 講 学習評価の考え方について学ぶ。
- 第 6 講 話法、板書等、授業を行う上での技術 (教師のスキル) について学ぶ。
- 第 7 講 情報通信ネットワークやメディアの特性・役割・情報モラルについて学ぶ。
- 第 8 講 情報モラルも含め、情報活用能力を育成するための指導法を身につける。
- 第 9 講 情報通信技術の活用の意義と理論について学ぶ。
- 第 10 講 特別支援を必要とする生徒に対する情報通信技術の活用と意義について学ぶ。
- 第 11 講 情報通信技術を効果的に活用した学習指導や校務推進の在り方を学ぶ。
- 第 12 講 遠隔・オンライン教育の意義や関連するシステムの使用方法を学ぶ。
- 第 13 講 基礎的な学習指導理論を踏まえて、実際に指導案および授業 PPT を作成する。
- 第 14 講 第十三講で作成した学習指導案および PPT の発表をする。
- 第 15 講 講義全体の振り返りと到達目標の確認および最終指導案と PPT の発表と提出。

■フィードバックの要領

学習指導案や授業用 PPT、その他の提出課題についてはコメントを記入して FB を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 意欲的で講義内容を十分に理解し、学習指導案および授業用 PPT の完成度が高い。
- 評価 A (89~80 点) : 講義内容を十分に理解し、学習指導案および授業用 PPT に関しても概ね良好である。
- 評価 B (79~70 点) : 講義内容を概ね理解はしているが、講義の到達目標までにはあと一歩の努力を要する。
- 評価 C (69~60 点) : 講義内容の理解が不十分で、提出期限に遅れた課題がある。
- 評価 F (59 点以下) : 遅刻や欠席が多く、講義内容が理解できていない。未提出課題がある。

■評価方法

学習指導案および授業用 PPT 40%、課題 30%、学期末レポート 30%。なお、欠席・遅刻に関しては正当な理由がない限り認められない。

■留意点

本講義はアクティブ・ラーニングをもとに、受講生の能動的かつ主体的な取組みを期待するものである。情報教育の理解とともに、実践的な指導能力の育成を目指す。とくに学習指導案および授業用 PPT の作成には重きを置く。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教職概論 (Teaching Profession)**サブタイトル** 自らの教職観を構築する**担当教員** 杉森 知也**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教職の意義及び教員の役割・職務内容（チーム学校運営への対応を含む。）

■授業目的

教職の意義と教員の役割について国内外の動向を含めて広く理解し、将来、教職に就くための基礎的資質を養う。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

1. 教職の意義、教員の役割と職務内容、教職の専門性などについて総合的に理解することができる。
2. 近年の学校・教員を巡る状況の変化について、世界的な動向を含めて説明することができる。
3. レポート課題を含めて将来の進路選択の機会にする。
4. 1.～3. を踏まえて自己の教職観を構築して、それを説明することができる。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

グローバルな動向を背景に、教員を巡る状況の変化について基礎的な理解を養う。

■授業形態 AL手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 個人ワーク

自ら課題を見つけ、調査した上でレポートを作成する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

ディスカッションを円滑に進めるために、授業前に指定教科書の該当箇所と参考書、インターネット等でその内容を調べて、自分なりの解釈をしておくこと。事前学習に180分、事後学習に90分程度を要する。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：教員との出会いを振り返る
 第2講 教員の職務内容とその意義
 第3講 教員の地位と身分①：教員の「地位」と身分保障
 第4講 教員の地位と身分②：教員の服務
 第5講 教員の地位と身分③：教員の待遇
 第6講 教員研修の意義と種類
 第7講 教員の免許制度①：日本の教員免許制度
 第8講 教員の免許制度②：世界の教員免許制度と日本の改革動向
 第9講 教師のやりがいとバーンアウト
 第10講 価値多様化社会の中の専門職
 第11講 新しい教師の力量
 第12講 チーム学校
 第13講 自己の教職観を表現する①：学級通信の作成課題について
 第14講 自己の教職観を表現する②：質問受付
 第15講 自己の教職観を発表する

■フィードバックの要領

次回の授業またはメールにて授業内容等へのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している。
 評価 A (89～80 点)：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している。
 評価 B (79～70 点)：講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない。
 評価 C (69～60 点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の遅滞が多い。
 評価 F (59 点以下)：講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

確認テスト・課題レポート 80%、授業の参加姿勢 20%の総合評価とする。

■留意点

記載した事前・事後学習以外にも自主的に学習し、質問を用意して授業に参加すること。活発な授業の展開には、学生の事前学習が重要であることを自覚して欲しい。調査レポートについては、提出の遅滞および必要事項を満たしていないものは採点しない。なお、状況によっては扱う回の入替え、教育実習発表会への参加等に変更することがある。

科目名 教職実践演習 (Teacher Training Practice)**サブタイトル** 学生生活と教育実習を振り返り、自己の教職観を再確認する。**担当教員** 峯岸 久枝**対象学年** 4年生**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育実践に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教職実践演習

■授業目的

学生生活（特に、教職に関すること）と教育実習の体験を丹念に省察し、その過程で自己の強み・弱みを自覚する。他者との交流により振り返り学習をし、自己の教職観を見直し、修正する。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

1. 学生時代の振り返りを通して、今後の自己成長に必要なことを見出す。
2. 個人ワークやグループディスカッションを通して、教育実習等の経験の振り返りをおこない、それぞれの経験を共有化する。なお、振り返り学習にはICT機器を活用し、自身の経験や工夫した点を相手に伝えることができる。
3. これらの活動を通して、自己の教職観を再確認・修正する。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

教育実習で学んだことや考えたことについて、ICT機器を用いてスライド等を作成し、自分の言葉でわかりやすく伝えることができる。また、自分の意見を発信する力や他者の発言を聴き入れる傾聴力を身につける。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク/その他：模擬授業

教育実習の研究授業をICT機器を用いて模擬授業形式で発表する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

教育実習の記録を詳細にとっておくことに加え、主に教職課程で得られたことを、教職履修カルテや教育実習日誌等をもとに整理しておく。事前学習にはおよそ180分、事後学習には90分を要する。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：本講の目的と概要
- 第2講 教育実習・模擬授業の振り返り
- 第3講 教育実習の振り返りおよびスライド作成をする。
- 第4講 スライド作成をもとにした発表練習と相互評価
- 第5講 教育実習発表会にてプレゼンテーションを行う
- 第6講 教育実習発表会の質問に答える（後輩に具体的に伝える）
- 第7講 特別活動の計画および学校における安全指導のロールプレイング
- 第8講 特別活動の計画および目標・評価について
- 第9講 課外学習 1
- 第10講 課外学習 2
- 第11講 課外学習 3
- 第12講 課外学習 4
- 第13講 課外学習 5
- 第14講 課外学習の振り返りおよびキャリアデザイン
- 第15講 教育実習および大学での学びを振り返るプレゼンテーション

■フィードバックの要領

レポートやプレゼンテーションに対し、個別にフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している
 評価 A (89～80点)：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している
 評価 B (79～70点)：講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない
 評価 C (69～60点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い
 評価 F (59点以下)：欠席が多い、講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

平常点50%、ICT機器を用いたプレゼンテーション50%とする。グループワークの様子（態度や発言）を観察して積極的な姿勢を評価する。成果物やパフォーマンスなどを総合的に評価する。

■留意点

本講義は、原則として3回に分けて実施する。(1)教育実習の振り返りをまとめ、資料を作成する学習（ICT機器を用いて模擬授業を行う）。(2)教育実習発表会と発表会後の下級生との交流学習で理解を深める。(3)校外学習の企画・立案・実施を行い、多岐にわたる教師の仕事を理解する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報科教育法 I (Teaching Method on Information Education I)**サブタイトル** 高等学校「情報」の指導方法研究**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教科及び教科の指導法に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）

■授業目的

本講義は、高等学校情報科の教員として多様な高校生に「情報」の本質を指導する基本的な能力を身につけることを目的とする。教科情報にかかわる理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な指導力や教師としての資質の習得を図ることを目的とする。本講義では、学習指導要領（令和4年度入学生から学年進行で実施）の改訂ポイントについて触れ、模擬授業などの実習を通じて情報科教育の研究を進め、教材研究の方法、学習指導の工夫などの授業創りの実際を体験する。また、旧学習指導要領についても紹介する（教育実習時の高等学校3年生旧学習指導要領を用いているため）。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

教職に就く者として求められる教科教育（情報）について、基本的な知識と授業実践の手法の習得をめざす。①情報教育の沿革と現状、在り方を理解する、②教科「情報」の基本的な理念、目標、内容、構成を理解する、③指導計画を作成し、それを基に模擬授業を通じた実践ができる、④他の学生の模擬授業を見て、改善点や修正点などを指摘できる、⑤指摘を受け入れて、自らの指導計画や授業などを改善・工夫ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

「情報科」教員として、学習指導要領に基づいて授業を設計し、授業内容をわかりやすく教える能力を習得する。

■授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義／演習

[活動形態] 個人ワーク／グループワーク／その他：模擬授業、授業評価

ALとしてグループワークおよび模擬授業を行う。グループワークでは、普通教科「情報」の「情報I」の学習内容について単元ごとに学習活動案を作成することで単元の学習内容と単元目標を理解することを目標とする。模擬授業では1コマの学習活動および指導課程を設計し、授業を実施できることを目標とする。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

学習指導要領を精読すること。授業内の指示に従って学習指導案を作成すること。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度（合計 3 時間程度）である。

■授業の概要

- 第1講 情報教育の沿革と現状
- 第2講 高等学校学習指導要領における情報教育の全体像
- 第3講 「情報I」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説
- 第4講 「情報社会の問題解決」の目標・内容・内容の取扱い
- 第5講 「コミュニケーションと情報デザイン」の目標・内容・内容の取扱い
- 第6講 「コンピュータとプログラミング」の目標・内容・内容の取扱い
- 第7講 「情報通信ネットワークとデータの活用」の目標・内容・内容の取扱い
- 第8講 指導過程における単元の設定と展開
- 第9講 指導計画の作成と評価
- 第10講 教材作成と評価
- 第11講 模擬授業①
- 第12講 模擬授業②
- 第13講 模擬授業③
- 第14講 模擬授業④
- 第15講 教育課程の編成

■フィードバックの要領

模擬授業実施回においてフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 到達目標①を説明でき、②～⑤全てを満たす授業の設計と実践ができる。
- 評価 A (89～80 点) : 到達目標①を説明でき、②～⑤の2つ以上を満たす授業の設計と実践ができる。
- 評価 B (79～70 点) : 到達目標①を説明でき、②～⑤の1つ以上を満たす授業の設計と実践ができる。
- 評価 C (69～60 点) : 到達目標①を十分ではないが説明でき、50 分間の授業の設計と実践ができる。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足、または 50 分間の授業の設計や実践ができない。

■評価方法

期末試験 30%、単元指導計画・学習指導案 30%、模擬授業 40%。

■留意点

①各自で単元指導計画・学習指導案および参考資料(手許資料)を作成して、他の受講生にも配付する。②基本的な知識・態度と授業実践の手法の十分な習得が欠かせない。③指定した課題についての発表・模擬授業の機会を設け、教員としての適性の有無を観察・評価する。④課題や試験等に対してフィードバックを行う。⑤履修者数によって模擬授業にあてる回数(週数)を変更する場合がある。

科目名 情報科教育法Ⅱ (Teaching Method on Information EducationⅡ)**サブタイトル** 高等学校「情報」の指導方法研究**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**教育職員免許法施行規則における科目区分**

教科及び教科の指導法に関する科目

教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

各教科の指導法 (情報機器及び教材の活用を含む。)

授業目的

本講義は、高等学校情報科の教員として多様な高校生に「情報」の本質を指導する基本的な能力を身につけることを目的とする。教科情報にかかわる理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な指導力や教師としての資質の習得を図ることを目的とする。本講義では、学習指導要領 (令和4年度入学生から学年進行で実施) の改訂ポイントについて触れ、模擬授業などの実習を通じて情報科教育の研究を進め、教材研究の方法、学習指導の工夫などの授業創りの実際を体験する。また、旧学習指導要領についても紹介する (教育実習時の高等学校3年生旧学習指導要領を用いているため)。

科目分類

社会人力育成

到達目標

教職に就く者として求められる教科教育 (情報) について、基本的な知識と授業実践の手法の習得をめざす。①情報教育の沿革と現状、在り方を理解する、②教科「情報」の基本的な理念、目標、内容、構成を理解する、③指導計画を作成し、それを基に模擬授業を通じた実践ができる、④他の学生の模擬授業を見て、改善点や修正点などを指摘できる、⑤指摘を受け入れて、自らの指導計画や授業などを改善・工夫ができる。

【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

「情報科」教員として、学習指導要領に基づいて授業を設計し、授業内容をわかりやすく教える能力を習得する。

授業形態 AL 手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/グループワーク/その他: 模擬授業、授業評価

ALとしてグループワークおよび模擬授業を行う。グループワークでは、普通教科「情報」の「情報Ⅱ」の学習内容について単元ごとに学習活動案を作成することで単元の学習内容と単元目標を理解することを目標とする。模擬授業では1コマの学習活動および指導課程を設計し、授業を実施できることを目標とする。

準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

学習指導要領を精読すること。授業内の指示に従って学習指導案を作成すること。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度 (合計 3 時間程度) である。

授業の概要

- 第1講 「情報Ⅱ」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説
- 第2講 「情報社会の進展と情報技術」の目標・内容・内容の取扱い
- 第3講 「コミュニケーションとコンテンツ」の目標・内容・内容の取扱い
- 第4講 「情報とデータサイエンス」の目標・内容・内容の取扱い
- 第5講 「情報システムとプログラミング」の目標・内容・内容の取扱い
- 第6講 年間指導計画の作成
- 第7講 学習評価
- 第8講 専門教科「情報」各科目の目標・内容・内容の取扱いの概説
- 第9講 専門教科「情報」各科目の目標・内容・内容の取扱いの概説
- 第10講 模擬授業①
- 第11講 模擬授業②
- 第12講 模擬授業③
- 第13講 模擬授業④
- 第14講 模擬授業⑤
- 第15講 教育課程の編成

フィードバックの要領

模擬授業実施回においてフィードバックを行う。

評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 到達目標①を説明でき、②～⑤全てを満たす授業の設計と実践ができる。
- 評価 A (89～80 点) : 到達目標①を説明でき、②～⑤の2つ以上を満たす授業の設計と実践ができる。
- 評価 B (79～70 点) : 到達目標①を説明でき、②～⑤の1つ以上を満たす授業の設計と実践ができる。
- 評価 C (69～60 点) : 到達目標①を十分ではないが説明でき、50 分間の授業の設計と実践ができる。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足、または 50 分間の授業の設計や実践ができない。

評価方法

期末試験 30%、単元指導計画・学習指導案 30%、模擬授業 40%。

留意点

①各自で単元指導計画・学習指導案および参考資料 (手許資料) を作成して、他の受講生にも配付する。②基本的な知識・態度と授業実践の手法の十分な習得が欠かせない。③指定した課題についての発表・模擬授業の機会を設け、教員としての適性の有無を観察・評価する。④課題や試験等に対してフィードバックを行う。⑤履修者数によって模擬授業にあてる回数 (週数) を変更する場合がある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 生徒指導・進路指導論 (Student Direction and Career Guidance)**サブタイトル** 道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目**担当教員** 峯岸 久枝**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

生徒指導の理論及び方法進路指導及びキャリア教育の理論及び方法

■授業目的

学校教育において学習指導と並んで重要な意義を持つ生徒指導は、教育相談、進路指導・キャリア教育への対応など多岐にわたり、意義と役割について学習することが必要である。また、生徒指導に関わる様々な局面において、具体的な事例や指導例をもとに教師が求められる役割は何かについて、当事者意識で考えて議論し、理解を深める。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

1. 生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義と役割について、基本的な概念を理解し、説明することができる。2. 生徒指導・進路指導・キャリア教育・教育相談等の教育活動について、教師の果たすべき役割を理解し、そのあり方を具体的に考え、説明することができる。3. 生徒指導の実際の場面を観察・視聴し、学校現場での教職員との協力や外部機関との連携など、具体的な指導方法について意見や改善点を述べるができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

生徒の置かれている環境や状況を分析し、課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、生徒指導や進路指導の場面において、「当事者意識」で教師としてどのように課題解決を図るかを考える力をつける。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

実際の教育現場の事例をもとに、教師としての立場で対応を考える。また、ペアワークやグループワークなどで意見を交換して理解を深める。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

テキストの該当部分を事前に読んでおく（事前学習 1.5 時間）。また、配布された資料をよく読み、教師の立場で考え、自分の言葉で説明できるような指導観を講義後に整理する（事後学習 1.5 時間）。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション：教育課程における生徒指導・進路指導・キャリア教育の位置づけ
- 第2講 生徒指導・進路指導・キャリア教育と各教育活動との関連や意義
- 第3講 生徒指導・教育相談・進路指導・キャリア教育における組織的な指導体制について
- 第4講 生徒指導・進路指導・キャリア教育の組織的な計画と取組について
- 第5講 学校における指導体制①：集団指導と個別指導
- 第6講 学校における指導体制②：ガイダンス機能と個別指導
- 第7講 生活習慣の確立や規範意識とキャリアデザイン
- 第8講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援①
- 第9講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援②
- 第10講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援③
- 第11講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援の実際①：体験活動の計画
- 第12講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援の実際②：問題行動の生徒指導
- 第13講 生徒指導・進路指導・キャリア教育の今後の課題①
- 第14講 生徒指導・進路指導・キャリア教育の今後の課題②
- 第15講 講義全体のまとめ：場面指導に基づいた模擬授業の実施

■フィードバックの要領

レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：積極的・意欲的に参加し、内容を十分理解している。考察を深め、的確に説明できる。

評価 A (89～80 点)：内容を理解しており、自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明できる。

評価 B (79～70 点)：講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。

評価 C (69～60 点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出の遅滞が多い。

評価 F (59 点以下)：講義が全く理解できない、他者とコミュニケーションが成立せず協議等で話せず、協力できない。

■評価方法

平常点 50%、レポート 50%とする。グループワークの様子（態度や発言）を観察して積極的な姿勢を評価し、課題の提出は指定された日時に指示された方法で提出され、その内容を点数化する。これらを総合的に評価する。

■留意点

①本講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。②教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。

科目名 特別活動・総合的な学習の時間の指導法 (Extra-Curricular Activities and Integrated studies)**サブタイトル** 学校・学級づくりと人格形成と教師の指導性**担当教員** 峯岸 久枝**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

特別活動の指導法総合的な学習の時間の指導法

■授業目的

高等学校の「特別活動」においては、人間関係形成・社会参画・自己実現の視点を持ち、学校における集団活動を通して課題解決の力をつけるための指導の方法を模索する。また「総合的な学習の時間」においては、探究的な見方・考え方を通して、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成ができるような力をつけることを目的とする。

■科目分類

社会人力育成

■到達目標

高等学校の「特別活動」においては、人間関係形成・社会参画・自己実現の視点を持ち、学校における集団活動を通して課題解決の力をつけるための指導の方法を模索する。また「総合的な学習の時間」においては、探究的な見方・考え方を通して、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成ができるような力をつけることを目標とする。(※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許)

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

生徒の置かれている環境や状況を分析して課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、学級や特別活動(学校行事など)を通してどのようにアプローチをすれば解決できるかを考え、発信する力を養う。

■授業形態 AL手法

[授業形態] 講義/演習

[活動形態] 個人ワーク/ペアワーク/グループワーク

事例をもとにした、教師と生徒の関わりについて学ぶ。また、高校生が主体的で対話的で深い学びができる方法を考える総合的な学習(探究)の時間の授業設計をペアワークやグループワークを通して行っていく。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

事前学習として、指定教科書の該当部分を読み、自身が受けてきた教育や経験したことをもとに、具体的な場面・指導がおこなわれていたかを思い出しておく。事前学習に180分、事後学習に90分を要する。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：学習指導要領における特別活動・総合的な学習の時間の位置づけ
- 第2講 教育課程における特別活動・総合的な学習の時間の位置づけ
- 第3講 特別活動・総合的な学習の時間と各教科との関連
- 第4講 学級・ホームルーム活動①：学級や学校の生活づくり・適応と成長及び健康安全
- 第5講 学級・ホームルーム活動②：今日の学級活動の課題
- 第6講 学校行事①：学習指導要領に示された儀式的、文化的、健康安全・体育的活動について
- 第7講 学校行事②：生徒会活動や部活動について
- 第8講 ボランティア活動・奉仕活動①：地域との連携を軸として
- 第9講 ボランティア活動・奉仕活動②：探究的な学習を軸として
- 第10講 特別活動・総合的な学習の時間の評価の方法
- 第11講 特別活動・総合的な学習の時間における話し合い活動の指導方法
- 第12講 特別活動・総合的な学習の時間における主体的な学びを促す方法
- 第13講 特別活動・総合的な学習の時間の具体的な授業計画①
- 第14講 特別活動・総合的な学習の時間の具体的な授業計画②
- 第15講 特別活動・総合的な学習の時間の授業を実施する

■フィードバックの要領

レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：積極的・意欲的に参加し、内容を十分理解している。考察を深め、的確に説明できる。
- 評価 A (89～80点)：内容を理解しており、自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明できる。
- 評価 B (79～70点)：講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。
- 評価 C (69～60点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出の遅滞が多い。
- 評価 F (59点以下)：講義が全く理解できない、他者とコミュニケーションが成立せず協議等で話せず、協力できない。

■評価方法

平常点50%、レポート50%とする。グループワークの様子(態度や発言)を観察して積極的な姿勢を評価し、課題の提出は指定された日時に表示された方法で提出され、その内容を点数化する。これらを総合的に評価する。

■留意点

①本講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。②教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 特別支援教育概論 (Special Support)**サブタイトル** 個別の教育的ニーズに対する支援スキル養成**担当教員** 大森 良平**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解

■授業目的

通常の学級にも在籍している発達障害や軽度知的障害をはじめとする様々な障害等により特別な支援を必要とする幼児、児童及び生徒が授業において学習活動に参加している実感・達成感をもちながら学び、生きる力を身に付けていくことができるよう、幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対して、他の教員や関係機関と連携しながら組織的に対応していくために必要な知識や支援方法を理解する。

■科目分類

社会力育成

■到達目標

①特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の障害の特性及び心身の発達を理解する。②特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する教育課程や支援の方法を理解する。③障害はないが特別の教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難とその対応を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】最も身につけられる事項 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】上記で選択された事項の詳細

特別の支援を必要とする子どもの特性及び心身の発達を理解し、対応していける能力を修得する。

■授業形態 AL 手法

【授業形態】 講義

【活動形態】 グループワーク

特別支援教育概論では、アクティブ・ラーニングとしてグループワークを行う。支援を要する子どもの具体例を提示し、合理的配慮や支援の進め方について話し合う。本活動に主体的・能動的に取り組むことにより、既習知識を応用し、グループで課題解決に向かっていくスキルを向上させることが目標である。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

「特別支援学校高等部学習指導要領解説」を読んでおく。各回に新出した用語について調べておく。講義後にレポートを書き、提出する。これらの事前事後学習は、各回3時間を要す。

■授業の概要

- 第1講 「特別支援教育」とは何か
- 第2講 視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱の子どもの教育
- 第3講 LD、ADHD、ASD などの子どもの教育
- 第4講 特別支援学校や特別支援学級での教育課程や支援の方法
- 第5講 通常学級での支援の方法と二次障害の防止
- 第6講 「通級による指導」及び「自立活動」
- 第7講 支援が必要な子どものための支援体制
- 第8講 様々な教育的ニーズ
- 第9講 第8講科目のため空欄
- 第10講 第8講科目のため空欄
- 第11講 第8講科目のため空欄
- 第12講 第8講科目のため空欄
- 第13講 第8講科目のため空欄
- 第14講 第8講科目のため空欄
- 第15講 第8講科目のため空欄

■フィードバックの要領

レポートに対して、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 内容を十分理解しており、ディスカッションに積極的に参加している。
- 評価 A (89~80 点) : 内容を理解しており、ディスカッションで発言している。
- 評価 B (79~70 点) : 講義内容について理解しているが、ディスカッションでの発言が少ない。
- 評価 C (69~60 点) : 講義内容について理解が不十分で、ディスカッションでの発言がほとんど無い。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容が理解できていない。ディスカッションでの発言が無い。

■評価方法

授業参加態度 60%、レポート 20%、発言の内容 20%とする。

■留意点

①教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②教師を目指している人だけでなく、社会は様々な特徴を持った人によって構成されていることに気付く機会にしてほしい。③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。